

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE
昭和38年6月7日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第9巻第9号 昭和39年9月1日発行(毎月1回1日発行)

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE
昭和38年6月7日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第9巻第9号 昭和39年9月1日発行(毎月1回1日発行)

裏窓

800

裏窓



9月号

定価 300円
IBM 1807

東京都中野区松が丘2の21 株式会社 久保書店 振替・東京10756番

裏窓叢書

ご案内

第一集 狂異地獄肌

飯田豊吉著 中島喜美絵

450円 送料80円

第二集 黒蛇呪縛

黒木 忍著 山田彬弘絵

400円 送料80円

第三集 地底の牢獄

藤見 郁著 鬼頭 暁絵

400円 送料80円

第四集 残酷裸女絵巻

万里小路崑著 豊田みのる絵

400円 送料80円

第五集 責め肌忍法

万里小路崑著 古正英生絵

400円 送料80円

第六集 地獄谷の女たち

塔婆十郎著 山田彬弘絵

450円 送料80円

第七集 大利根柔肌草紙

花巻京太郎著 鬼頭 暁絵

450円 送料80円

以下ぞくぞく刊行!

お手頃な値段で
いっぱい!
あまとりあ社の
たのしい読みもの
が
特選出版物!

■東京都中野区松が丘二丁目二一
株式会社 あまとりあ社
振替・東京五五四〇八

ホステス稼業うら話

夜あそびがイヤになる本

価200円 送料40円 石井淡醉著

この本読んでネオン街でモテなかったら
あなたはオトコをおやめなさい
ホステス心理のぜんぶがわかる本!

13の情事・報告書

痴 (ちたい) 態

価200円 送料40円 辻街一夫著

すさまじい愛欲の渦にもてあそばれる
男女のなまなましい生態 愛と狂気と
死の報告書!

おピンク道中記

にやりと参ろう

価230円 送料40円 広島一男著

お色気あって旅たのし 他国で出会う
女のかずかず 男ふたりの底ぬけ好色
道中記!

ふしぎな・おかしな・ホントの話

世界実話ウラのウラ

実録・よみもの拳豪伝

話のネタになるボクシング

血闘に生きた男たち

秘聞・剣士録

大森貝介著
価180円 送料40円

野田開作著
価180円 送料40円

小山竜太郎著
価230円 送料40円



紳士淑女の
おへそのうらを
ふんわりくすぐる
あまとりあ社の
特選娯楽新書判!
たくさんでております
これからもです



東京都中野区松が丘2の21

株式会社 久保書店 振替・東京10756番

裏窓・九月号・目次

表紙モデル・小笠原純子
目次カット・吉田久
とびらカット・中川彩子
落合竜二

花氷……………八巻令 (24)

月が見ていた…三鬼俊 (86)

私本男色大鑑・9…かびや・かずひこ (94)

続・海底王国の女囚…南郷京助 (174)

裏窓タウン (135)

腹切り残酷史譚・4…夏川浩一郎 (53)



絵物語 直次郎出奔…井村 錠

落合竜二

(158)

体当たりマゾヒズム論・27…水尾 究

(144)

黒竜党の最後…潮一 樹

(40)

山のホテル…村山省一

(154)

裏窓文芸評論…安東 泉

(166)

海のみえる部屋…加木れい子

勤皇党の女間者…宗方 八郎

(70)

奴隷市の娘…遠井 待夫

招かざる夜…伊豆 美

読者投稿特集
☆☆☆☆☆☆

汚辱極楽神の国…淡路周五

(60)

読者コーナー

編集後記

(214)

ゴルドンの記憶・18…阿麻哲郎

(202)

特集・激しい女(アメリカの公刊誌より)

フォト・洞窟…吉田 久

(15)

アメリカ雑誌に現われた悲運の女たち

アメリカのメンズマガジンご紹介

(111)

フォト・柵のある道…吉田 久

(215)

沖涉二・妖美画傑作展

(223)

●グラビア・オフセットページ●

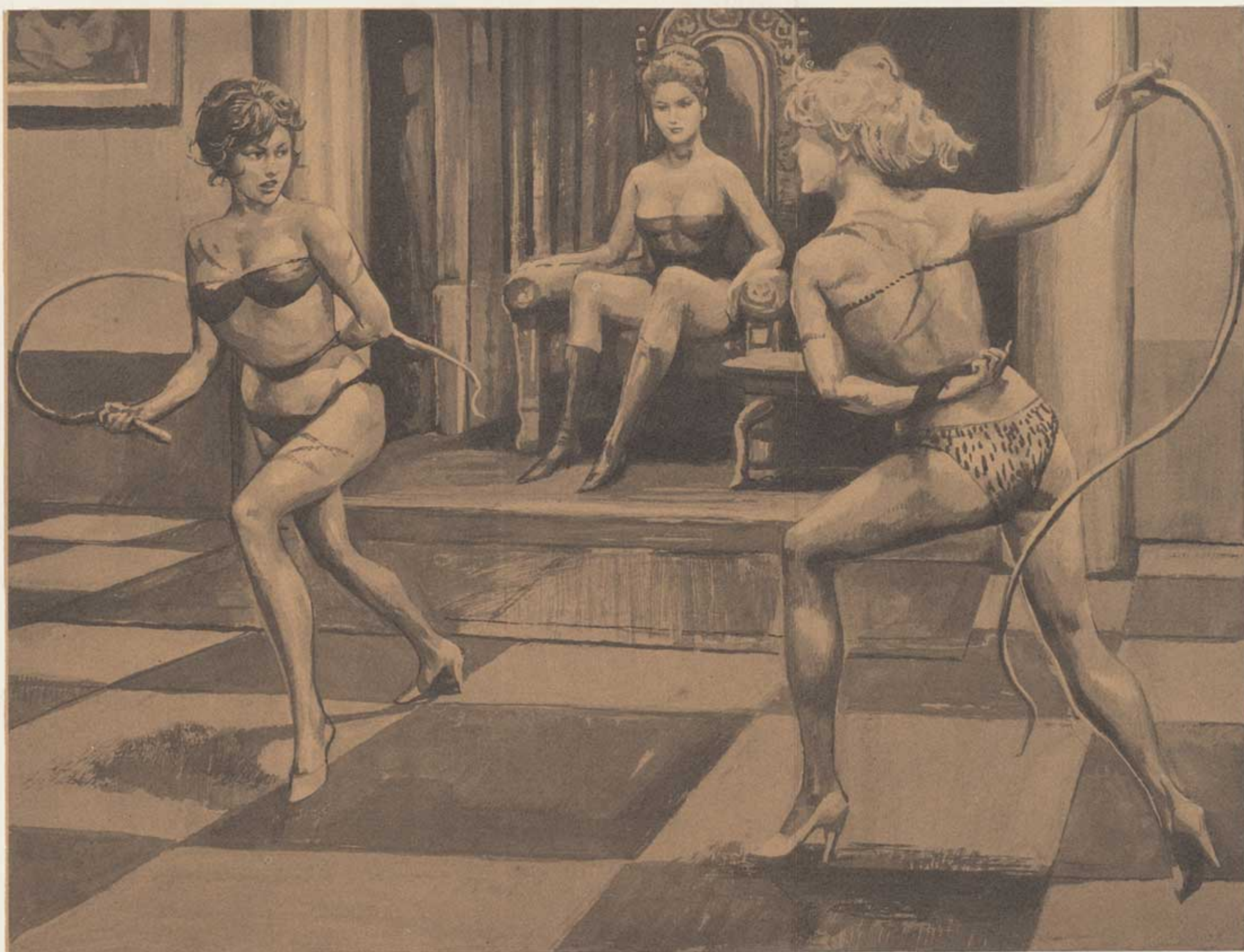
画集・女王様的一天…秋吉 密

(9)



秋吉 密・画集

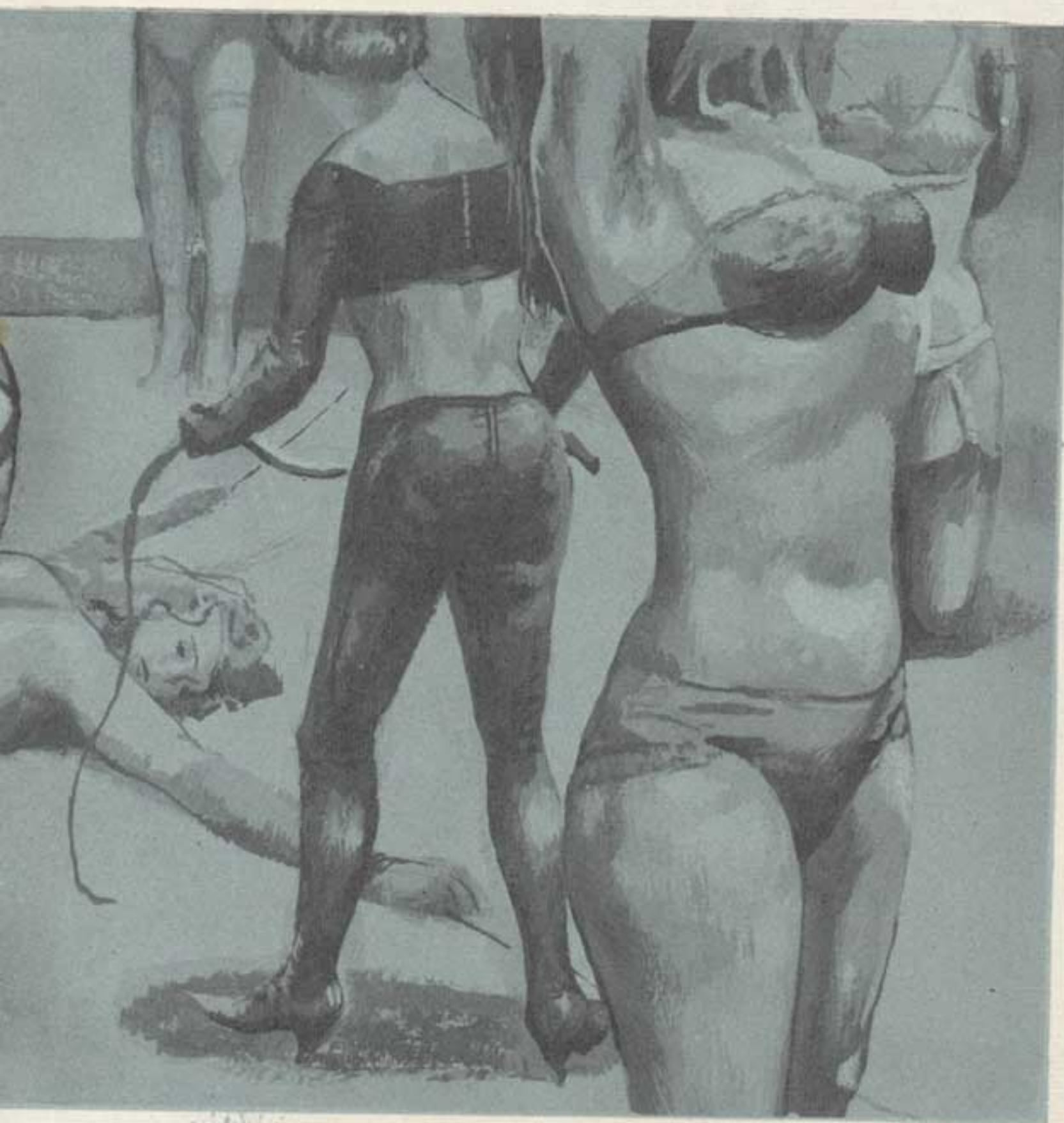
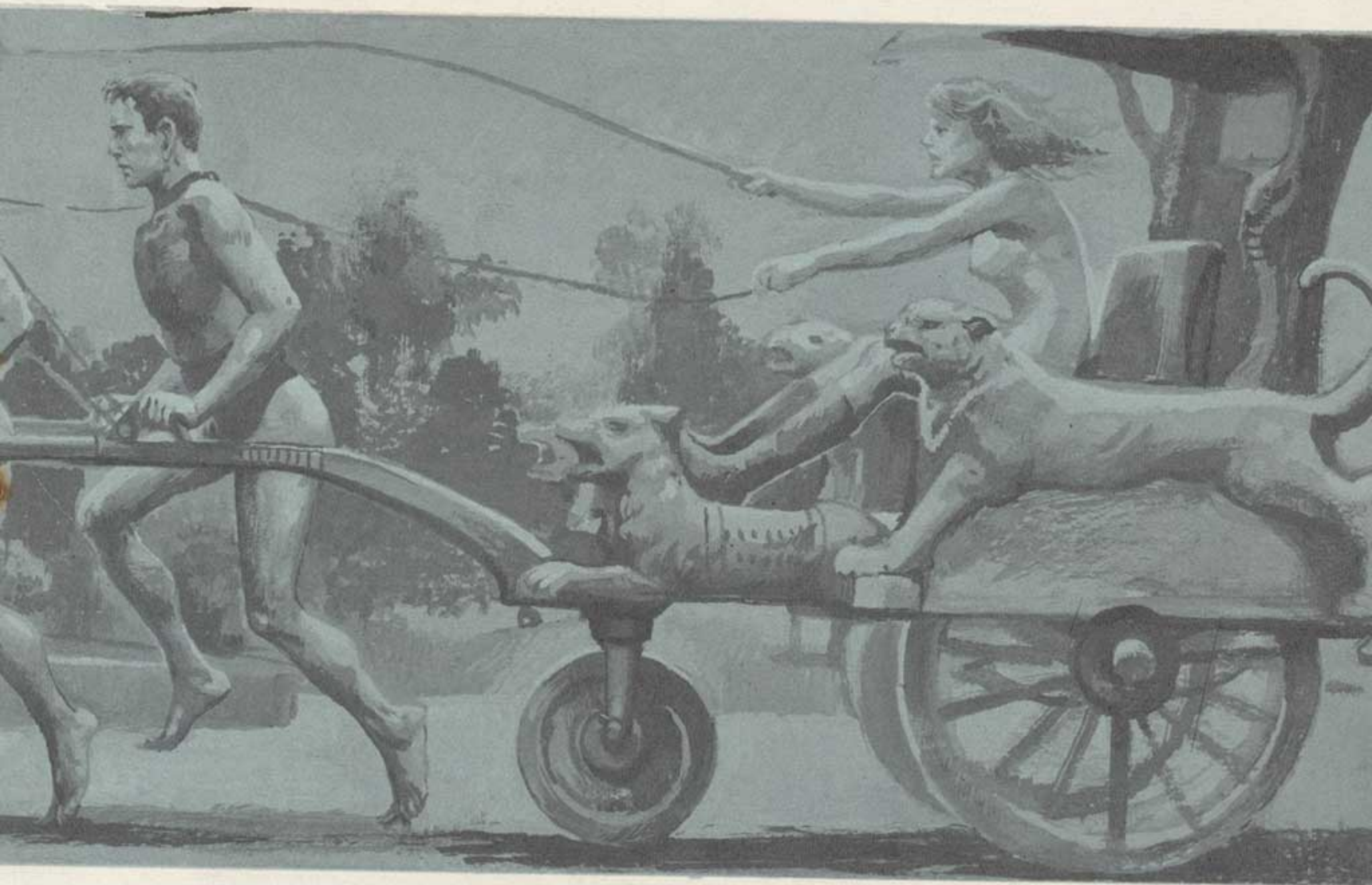
女王さまの一日



女の決闘

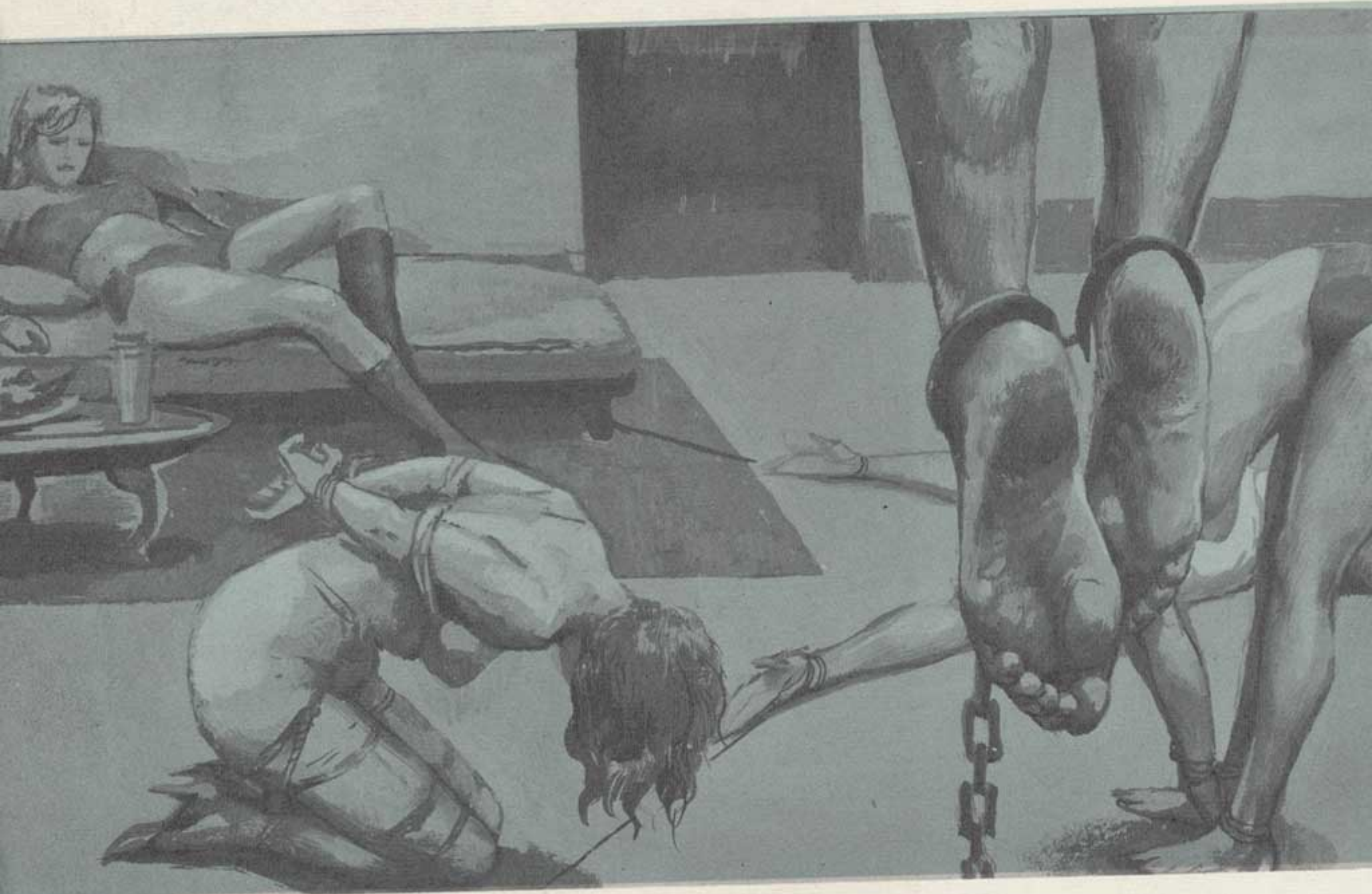
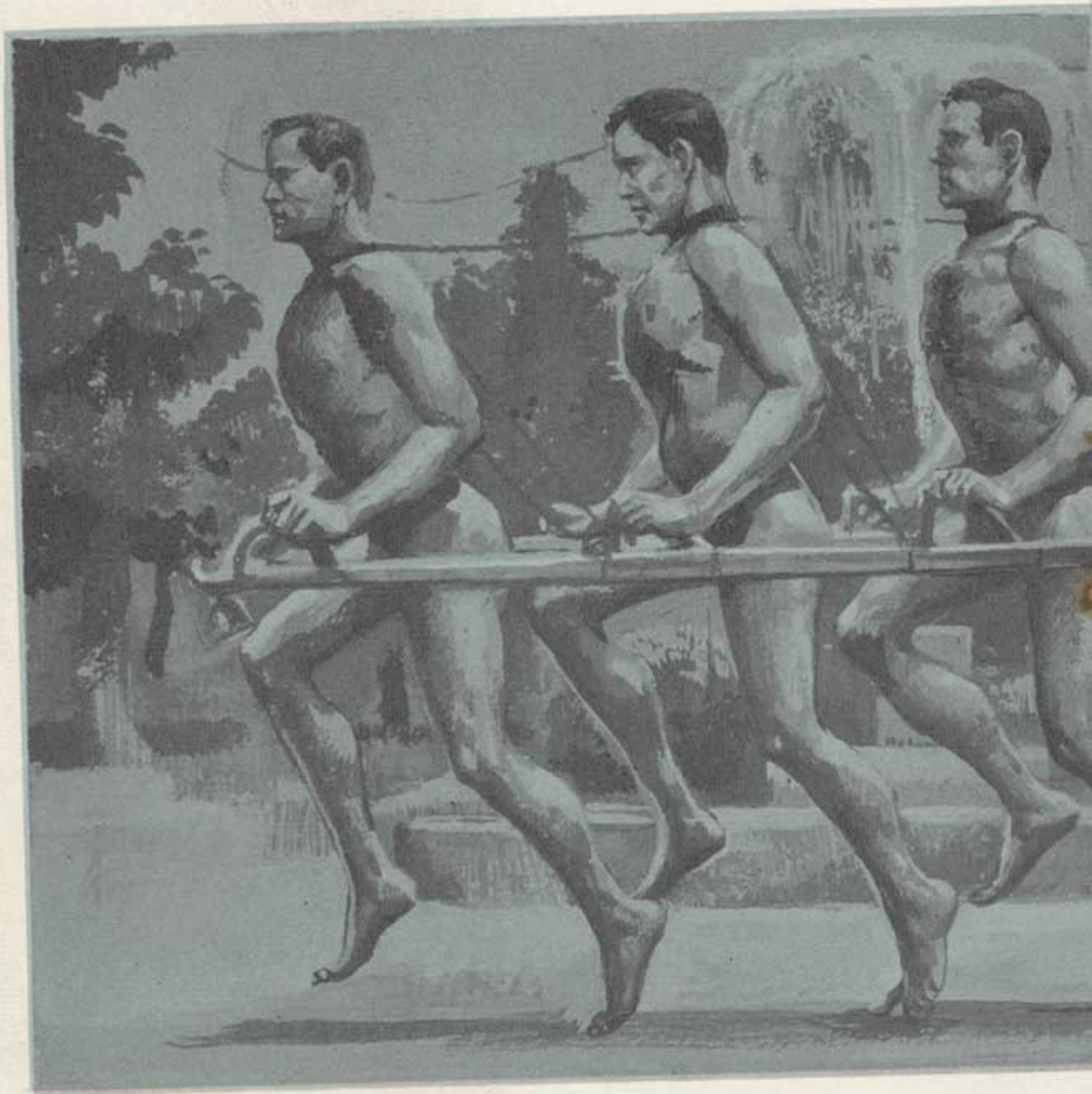
檻
の
男



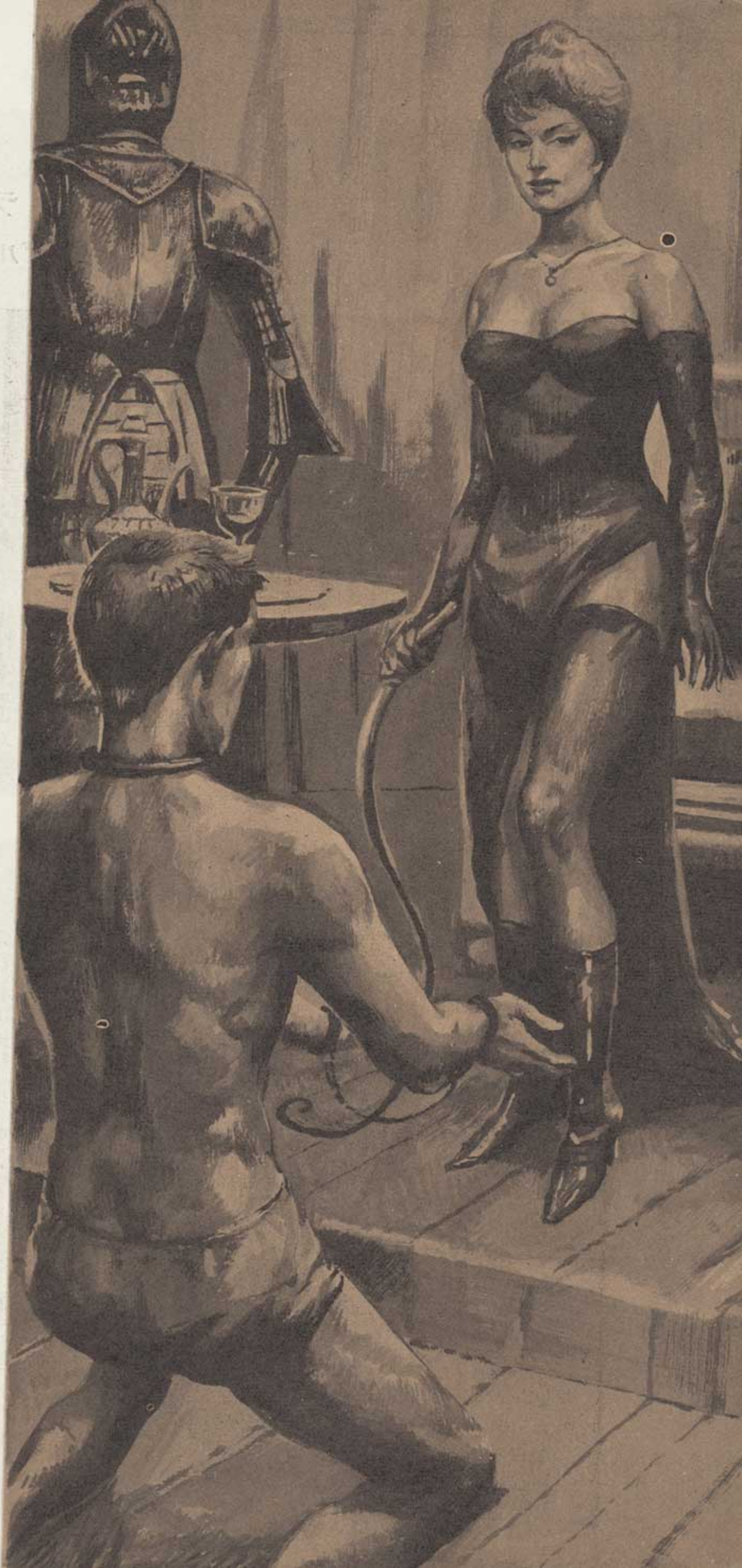


女王さまの倦怠

豪勢な車



就寝前の運動



洞窟

カメラ・吉田 久
モデル・小笠原純子

















裏窓



9 月 号

第9卷・第9号

花 氷

(はなごおり)

——または残酷な義兄



八卷 令

プロローグ

「いつまでもめめめそしていいで、ふんぎりをつけたらどうだ」

男が、机に向かって正座させた女の背中をどやしつけた。

「ね、おねがい。こんな、こんなひどいことをわたしにさせないで」

女は何度目かの哀願を繰り返す。かしこまった膝をずらして、男の足元に平伏する。

その背中には、先程まで喰い込んでいた縄の跡が、赤くあざになっている。

「何でもするという約束だったぞ」

「だって——」

「お前は、ただ言われたことをすればいいの

だ。あとのことはお前に関係ない」

「玲子はあなたにとっても妹じゃありませんか。それを、こんな——」

女は泣き声になった。

「おれは玲子が好きなんだよ。お前と玲子が眼の前に現れたとき、おれは、お前より玲子の方に食指が動いた。しかし、お前の方が御しやすそうだったから、お前を選んだ。今度はお前を餌にして玲子を釣りあげるんだ」

「ひどい。ひどい人——」

男は、泣き伏してしまった女の髪の毛を掴んで引き起こした。

「もう少し痛い目に会いたいと見えるな」

「ああ、いっそ、ひと思いに殺して——」

「ふん、手紙さえ書いたら、いやでも殺して

やるさ。じわじわとな。さあ、書け」

剥き出しの尻を蹴りあげられて、女は泣く泣く机に向かった。ペンを取った。ほっそりした手首に、赤あざがいたいたしく残っている。

女は書いた。涙がこぼれて字がにじむと、何度も書き直させられた。涙は剥き出しの、蒼ざめた乳房の上にも落ちた。

—

「暑中お見舞い申し上げます。東京は大変な暑さと思いますが、その後、お元気？」

大学の卒業をひかえて、卒論書きにフウフウいっているのでしょうか。狭苦しいアパートで、スリッパひとつになって、ねじり鉢巻き

の玲ちゃんの姿が眼に見えるようです。

こちらは、朝晩肌寒いくらい。全く汗しらずの夏を過ごしています。図書館通いが一段落ついたら、こちらへ来ませんか。高原の冷気でグツと頭が冴えて、万点の卒論ができあがること受け合いよ。それに、是非見せてあげたいものもあります。ゾクゾクするようなものの。

倉田も仕事が一段落ちついた所で、大いに歓迎するそうです。

では今日はこれで。来るときは電報を忘れないでね。

玲ちゃんへ

姉より」

玲子は手紙を読んで、即座に招待に応じる気になった。東京の暑気は殺人的だったし、卒論の下調べもあらかたついている。実際、ひとつかみでも冷氣のある所なら、たとえ痴漢の群れの中へでも、喜んで出かけて行きたい気持ちだった。

「K高原か、いいだろうなあ」

落葉松林のすそをしめやかに濡らす朝霧、露に洗われた下草の緑、その陰からひそやかに語りかける露草の可憐な青の色、牛乳屋の鳴らすベルの音、そして紫色に煙る浅間山。

義兄の倉田は、今度はじめてK高原に別荘を建てたので、玲子には、初めての訪問になる。空想は空想を生んで、玲子は可愛らしく盛り上った乳房の谷間を流れ落ちる汗の玉を拭いながら、足はもう高原の露の冷たさを踏んでいた。

「小説家って、そんなに金もうかるものなのかしら。お姉さん、うまいことしちゃったわ」

別荘住まいの姉に、ちょっと嫉妬の感情がわく。

まだ玲子が高校生だった頃のことだが、倉田がしげしげと二人のアパートを訪ねて来た時の事を思い出した。いかにも売り出しの作家らしい、ラフな中にも洗練された身のこなし方、機知に富んだ会話のうまさに、玲子も淡い思慕の念をわきたてられたものだった。それは、姉の夫あるいは恋人に対する、妹のありきたりの感情だったのかも知れない。しかし、その淡い気持ちをくすぐるように、倉田が玲子にも何くれとなく好意を見せた。その思い出が、一人居の奔放さで、結婚した姉をさしおいて、自分と倉田とを並べて考えさせるのだった。

「ちょっと若過ぎると思われたのね。それにお姉さんたら、義兄さん好みの、雨に悩む秋

海棠のような美人だから、とくしたのだわ」
実生活では愛妻家、紳士で通っている倉田が、好んで残酷な物語りを書き、その中ではきまったように窈窕とした美女をひどい目にあわせているのが思い出された。

それを読むと、玲子などは身ぶるいする位なのだが、それでいて、意識の底を波立たせられて、妙な不安を感じる。そんな小説を書く倉田と姉の生活が、嫉妬めいた感情と一緒に、玲子を高ぶらせるのだった。

「それにしても、ぞくぞくすることって何かしら。今からぞくぞくしてくるみたい」

玲子は裸の脛をポリポリ掻きながら、返事を書き始めた。

二

大分思い切って荷物をへらしたつもりだったが、たけれど、女の思い切りの悪さで、着更えやら参考書やらで、大きなスーツケース一杯の荷物になってしまった。満員の汽車で結構うんざりしていたのに、駅に降りて見ると、時間を知らせておいたにもかかわらず、誰も迎えにさえ来ていない。

夕日が落ちて、藍色の薄暮が迫っている高原一帯を、ひととき高くそびえた浅間山が、まるで威嚇するかのよう、代赭色の肩をそ

びやかしているのが、妙に玲子の氣に喰わなかった。だから、ようやくハイヤーから重いスーツケースを引きずり降ろして、義兄の山莊の前に立ったときには、玲子の御機嫌は、つい山莊の背後にまで伸びている浅間山の山裾以上に急傾斜していた。取り柄は、重いトランクを持ち扱っても汗をかかない涼しさだけだった。

落葉松林を切り開いて建てられた山莊は、風の落ちた薄闇の中に、ひっそりと静まり返っていた。

「まるで、お喋話にでてくる魔女の小屋みたい」

喧噪に慣れた都会人には、自然の静けさの威圧するような深みが、おそろしくさえ感じられるのである。ポツンと灯った明りさえもいまわしいことに、人を招いているような氣がする。玲子の押したベルに応じて、義兄が顔をのぞかせたとき、玲子は、ほとんどそれが信じられない位だった。かき鼻黒衣の老婆が現れて、邪惡な笑みを浮かべるのを半ば信じ込んでいたのである。

「ああ、いらっしゃい」

氣のない言い方に、玲子は完全に腹を立てた。ところが、平常ならこんなすげない応待をされれば、たちまち口をついて出る筈の軽

口やら皮肉やらが、今に限って、声帯にへばりついてしまつて、声にならないのである。「おじゃまします」

玲子は、せいっぱい無愛想な顔を取りつくろつて、義兄の鼻先をすり抜けて中に入った。

天井の低いバンガロー風な居間にも姉の姿はなかった。

石組みもいかめしい暖炉の上で、時代おくれのフクロウ時計が、固く光る眼を、ギョロリ、ギョロリ、と動かしている。

「お姉さんは？」

「うむ、ちょっと用事で隣まで出かけた」

この山の中では、隣までといっても、かなりの距離だろう。

「迎えに行かなくて、悪かったね」

小説家は疲れたような頬に無理に笑みを浮かべて、何となく立ったままの玲子の肩に手を置こうとした。玲子は後じさりした拍子にソファの上に倒れ込んだ。

「疲れちゃった」

二人はバツの悪い顔を何となくそむけていた。

「夕食まだなんだろう。用意しよう」

「お姉さんが帰ってからでいいわ」

「いや、康子は少しおそくなるかも知れない

んだ」

そそくさと台所の方に立つて行く黒いポロシャツの義兄を見送つて、玲子は溜息をついた。

どこか妙な所がある。別に歓迎の大きなお返しをしてくれというわけではないが、ひとを呼んだのなら、それなりのもてなし方がある筈だ。どんな急用があるのか知れないが、こんなやり方は、いつもの姉らしくない。それに義兄も義兄だ。妙に態度がきこちない。いつもの闊達さがまるでない。都会を離れて生活しているために、山男の無愛想が乗り移ったわけでもあるまい。その上に、どこかうしろめたい、何か隠しことをしているような顔つきだ。

そう思つて見るせいか、この山莊全体に、どこか他人に踏み込んでもらつては困るような、秘密めかした雰囲気がある。手紙の「そくぞくするようなこと」というのは、まさかこんなことじゃないだろう。

玲子はスポーツシャツから剥き出しの腕を抱えて、あたりを見廻した。

フクロウは相変らず眼をギョロつかせている。玲子はそれに向かつて、大きなアカンベエをして見せた。

「お前も同類なんだね、きつと」

それに答えるように、妙に陰にこもった声で、フクロウが八時を告げたのに、玲子は、正直度胆を抜かれてしまった。

二人だけの夕食はわびしいものだった。ひなびた造りの山荘には不似合いな電気器具がズラリと並んで白いエナメルを輝かせている。台所の雰囲気は、うそ寒さを一層かき立てた。東京の様子、勉強の進み具合、ここの印象など、義兄の方ではなにくれと気をつかつて話しかけてくるのだが、玲子が黙り勝ちなので、会話はと切れ勝ちになった。

「どうしたの。今日はいつもの玲ちゃんらしくないじゃないの」

「ちょっと疲れたのよ。汽車が大変な混み方だったから」

まさか、この家の雰囲気は気に入らないとも言えない。

「もう少し葡萄酒をやったら」

「ええ、いただくわ。でも、お姉さん、大分おそいようね。何の御用なの」

康子のことを言い出されると、義兄の顔が曇り、妙に話しぶるのに、玲子は再び隠しごとを感じ取った。

倉田は、しばらく返事をせずに、手にしたオンザロックのグラスをまわしていた。うつむき加減の太い眉から秀でた鼻梁のあたりに

深い憂愁の翳が刻み込まれていて、それがわけもなく玲子の胸をときめかした。酒の酔いがまわったのかも知れない、と玲子はみずからをばげました。

「ちょっと、これを見てくれないか」

不意に倉田が立ち上った。小さな山荘が傾いてしまうのではないかとあやぶまれる程巨大な冷蔵庫がそこにある。倉田はその扉を開くと、中から妙なものを取り出して、テーブルの上に置いた。

場所が場所、時が時だったので、はじめはガラス細工かと思った。しかし、その周辺から立ち昇って、かすかに頬を打ってくる冷気から、玲子は、それが氷から刻み出した彫刻であることを知った。冷蔵庫に入れられていた理由もそれでわかる。

かなり大きな白鳥の彫刻だった。

まさに水面を飛びたとうとしている所なのだろう。優雅な頸を前に伸ばし、広い翼を一杯に張って、水を蹴っている。透明な氷が灯を屈折し反射して、羽ばたきの音、水面のざわめき、緊張に高ぶる白鳥の心臓の鼓動までが伝わって来るようだ。しかし、なぜか玲子には、この白鳥は永久に水面を離れ得ない運命にあるとしか見えなかった。

「どなたがお作りになったの」

眼をあげて玲子は訊いた。

「康子だよ」

「まあ、お姉さんが」

姉が、いつこんな技術を修得したのか。

倉田は、ほっそりとさしのべられた白鳥の頸を愛撫するように人差し指でなぜながら、問わず語りに話し始めた。

「康子はここに来て退屈していた。僕が原稿に追われて、部屋に籠りつきりだったから無理もない。それで、ひまつぶしに、こんなものを習いはじめた。夏場になると、この辺はにわかには別荘人種やハイカーでこった返す。それを目当ての商店やレストランも店開きする。Mというレストランは、中でも高級な客筋相手だね、夏だけ東京の本店からコックたちを呼び寄せるのだ。そのボーイに氷の彫刻の専門家がいて、それに習ったのだ」

白鳥が溶け始めていた。輝く肌の上を、溶けた氷が虹を描きながら追い落ちてゆく。玲子は、義兄がこんなものを持ち出して来て、何の話を始めようとするのか見当がつかないままに、その虹を見つめている。

「ボーイといっても三十過ぎの男だ。客商売だから、人扱いは慣れたものだ。非番の日に来ては、手を取るようにして康子を指導した」

手を取るように、と言ったとき、倉田の言葉が奇妙にゆがんだのを、玲子は聞き落さなかった。それは、何かの予感のように彼女の胸に不吉な波紋を投げた。

「康子にせがまれて、わざわざ製氷装置まで取り寄せた。誰の入れ知恵か知らないが、この家の裏に湧く地下水が最も不純物の含有が少なく、製氷した場合の透明度が高いというのだ。事実、ここで作った彫刻なり花氷は、他で見るとより輝きが透徹していて、清冽な谷川の流れをそのまま氷らせたようなおもむきがあった。」

僕の欲目かも知れないが、康子の腕は素晴らしいかった。なまじつかなボーイの職人芸をはるかに抜いて、芸術の域にまで達したと思った。たった一夜の、ほれ、こうやって外に出しておけば、一時間と形を保てない、はかない芸術の域にね」

倉田の声には自嘲の響きがある。白鳥は、先程までの張りを失って、翼の先端が溶け落ちてしまっていた。

「僕は、はじめ、康子が楽しみを見つけたのを手離して嬉んでいた。一緒にここに来ていながら、出歩いてもやれないのをかわいそうに思っていた矢先だったからね。僕は午後からはほとんど二階の書斎に籠りつきりだ。こ

んなことになったのは、あるいは僕のこの習慣が悪かったのかも知れない。僕はあまりにも康子を信頼し過ぎていた。たかがボーイ風情に、たとえ、かりそめにでも心を寄せるなどとは考えられなかったのだ。僕の自尊心と愛情が、そんな考えが入り込む余地を与えなかったのだ」

ミシッ——と腹にしみ通るような音をたてて、白鳥の片翼が倉田の手でもぎ取られた。それを倉田は床にたたきつけた。細かく砕け散った破片が、床いっぱい、ダイヤのように冷たく輝いた。

玲子はすくんでしまって、眼があげられなかった。芝居がかった倉田の動作をうんぬんする余裕など、勿論ない。今はじめて耳にする姉の不貞をかばうより先に、その肉親である我が身を責められているような錯覚さえおぼえるのだ。

「或る日、予定の原稿が思ったよりはかどつたので、こっそり康子の仕事ぶりを見てやろうと、足をしのばせて階下に降りた。裏に特別に建てた冷房装置付きの部屋が仕事部屋になっていた。そこに忍んで行った僕は——」
もう一方の、翼も無残に折り取られた白鳥は、細長い頸だけを伸ばしてあえいでいた。玲子は耳を覆いたかった。

「あれが氷の取りもつ仲なのかね。スエーターにスラックスを着込んだ康子が、背中を大きな氷柱に押しつけられるようにして、ボーイに接吻されているのだ。スエーターの襟は大きくかき上げられて、肩から乳房の上までなまなましくあらわになっていた。その肌が部屋の冷気で鳥肌立っているのだ。それも知らないように、康子の手は、しっかりと男の背を抱いていた」

「もう、おっしゃらないでっ」

倉田が意地悪く耳にささやきかけてくる恨み言を振りはらうように、玲子は激しく首を振った。信じられない。信じられるものか。

その眼の前で白鳥の頸がたたき折られた。ぶざまな氷塊と化した残りの部分を、倉田は両手で持ち上げると、力一杯、冷蔵庫の扉にたたきつけた。虹が部屋いっぱいに砕け飛んだ。玲子は悲鳴をあげた。

我に返ったとき、玲子は両腕を掴まれて、引き寄せられていた。

「わかるか。僕のこの気持ちかわかるか。僕はレストランのボーイ風情に見かえられたのだ。僕は康子を愛していた。だから康子の言うことは何でもきいてやったのだ。大がかりな製氷装置、この山の中で冷房付きの部屋、それに慇懃な家庭教師。それがみな僕に仇を

なしたのだ。え、どうだ、この気持ち、この口惜しさがわかるか」

抱きすくめてくる義兄の腕の中で、玲子は蛇に魅入られた小鳥のようにもがいた。もがきながら、姉の不身持ちの罪滅ぼしという、殉教的な甘さが、ともすれば玲子の体をしびれさせた。

「僕は玲ちゃんが前から好きだったんだ」妻を寝取られた男は、身近かに抱き寄せた義妹の耳に、誘惑の言葉を囁きかけた。

「いけません、はなして——」

甘い誘いが、かえって玲子の感情に水をかける作用をした。玲子は男の腕を必死の思いで突きつけた。

「お姉さんは——お姉さんを、どうしたんです」

思わず口に出してから、玲子は自分の問いの持つ意味に気付いて、まっ青になった。倉田は燃えるような眼で玲子を見据えた。

「言いたくない。君を、不幸にしたいくないんだ」

「ごまかさないうで、はっきり言って下さい。お使いに行つたなんて、嘘でしょう？」

玲子は、ついつてくる恐怖に、がたがたふるえながら叫んだ。

「本当に知りたいの。後悔しないかい」

「もったいぶらないでッ」

攻勢に出ることだけが、この際身を守る最上の策のように思えた。

「早くおっしゃったらどうなの」

倉田はうつむいて、床に散乱している氷の破片を、バリバリ踏み砕いた。

「殺してしまつたよ」

ひらき直つた落着きが、その言葉にはあつた。

「よ、よくも姉さんを殺しておきながら、妹のあたしに、そんなことが言えたものね。悪魔、人でなし」

玲子のせい一杯の悪態も、傲然と突立つた倉田の分厚い胸に、ピンピンはね返された。

「聞いた以上は覚悟はできているだろうね」

倉田は、ものすごい笑いを浮かべた。玲子は涙に濡れた眼を恐怖に引き吊らせて、後ずさつた。千年の眠りを醒まされた巨人ゴーレムのように、倉田が近づいてくる。玲子は、ともすれば足がなえて、そこにひさまづきそうになる。

「あ、あたしを——ど、どうしようというの——」

「君の決心ひとつだ。僕の愛を受け入れて共犯者になるか、それとも、あくまで拒んで、康子の後を追うか。もっとも、康子の後を追

うことになつても、その前に君を楽しむ時間は、たっぷりあるがね」

玲子は次第にくずおれてゆく意識の中で、そうだ、これが手紙にあつたゾクゾクすることなんだ、みんな冗談だ、と必死に叫んでいた。

三

玲子は鉛のような失神から醒めた。不幸の予感される、みじめな眼醒めだった。

「ああ、やっぱり——」

体が固い椅子に縛りつけられているのを見て、玲子は泣きたくなつた。いましめをゆさぶって見る気力さえ湧いてこなかった。

第一、ゆさぶって見ようにも、足まで椅子に縛りつけられているのだ。

玲子は、縄が乳房を締めつけてくる異常な感覚にあえぎながら、おずおずと室内を見廻した。

殺風景な部屋だった。窓もなければ家具もない剥き出しの室内に、天井にとどくばかりの冷房装置が、いぶし銀の肌を白熱灯に曝して、我がもの顔にのさばっている。姉の仕事部屋らしいことは、これで判つた。壁際の棚には、のみや金槌のたぐいや、のこぎり、氷ばさみなどが、主のいないのをかこつように

ころがっている。

「この部屋なんだわ」と玲子は、何かひどく悪いことでもしているかのように、うしろめたい気持ちで、つぶやいた。「お姉さまが良人の眼を盗んで情事にふけていたというのは……」

それにしても、義兄はいいたい、ここに自分を連れ込んで、どうしようというのだろうか

ここまで考えて、玲子はギョツとなった。

今まで、さして気にもとめなかった、部屋の中央の大きな角柱が、急におそろしい意味を持ち始めたのである。

縦横一米足らず、高さ二米ばかりの、カンバスで覆われた巨大な角柱。それは立てられているので、今まで柱とばかり思っていたのだが、柱ではなくて、箱なのではないか。細長い箱を立ててあるのではないか。そして、その中には――？

玲子は、全身総毛立った。悪寒が後から後から津波のように襲って、冷汗がじつとりとにじみ出る。いましめの厳しさが、わずかに彼女を支えているのだった。

「いやよ、いや……ああ、いや」

うわごとのようにつぶやきながら玲子は身を悶え続けた。やがて、それはすすり泣きに

変っていった。

扉のかけで、その様子を観察していた倉田は、にやりとほくそ笑むと、部屋に入った。

「どうした。ひとりぼっちで置き去りにされたので、淋しくて泣いているのかい」

髪を乱してあえいでいる玲子の顔をのぞき込むように言う。

「お、おねがい。早く――早くここから出してっ」

「何を言うんだ。ちょっと殺風景かも知れないが、ここはお姉さんの思い出の多い部屋じゃないか。僕は、毎日少なくとも一時間は、ここに閉じ籠って、今は亡き愛妻康子の思い出を暖めているのだぜ。君も泣いてばかりいないで、お姉さんが楽しく過ごした、この密室の日々の事でも考えることだ」

「悪魔っ。あなたは悪魔よ、人殺しよ、そして、その上に、そ、そこに立ててあるのは、お、お姉さんの――お棺じゃないの。それをそれを……」

玲子は涙をほとばしらせて、噛みつくように叫んだ。

「凶星だよ」

倉田は大げさに驚いた表情を作った。

「肉親の霊は、やはり通じ合うものと見えるね。それじゃ、御開帳とゆくか」

銅像の除幕式よろしく、サッとカンバスを取り払った。

「ああっ」

思わず、眼をつぶろうとするおり、カンバスの陰から、ちらとのぞいたものが、玲子の視線をとらえた。恐怖が極度の驚愕に取ってかわった。凍りついたように、眼の前に現れたものに視線を奪われた。

「どうだ、これで僕の言う意味がわかったろう。これがあるからこそ、僕はこの部屋で、康子の思い出を、いつまでもあらたにできるのだ。主のいない部屋なんて、無意味だからね」

それは、巨大な氷の柱だった。ただの氷の柱ではない。一人の人間を――一糸まとわぬ全裸の女を封じ込めた、いわば人間の花氷だったのだ。

玲子は返す言葉を失って、ただふるえている。その妖しいまでの美しさは、巨大な氷柱の放射する冷氣とあいまって、見る者の視線を凍らせずにはおかないのだ。

何という深く澄みきった氷の色だろう。

金剛石の硬さと冷ややかさ、水晶の透明さを持った、この氷塊は、内に閉じこめた肉体の肌の色をかすかににじみ出させて、濡れ輝いている。それはあたかも、みずからその

冷ややかな腕の中に抱きしめ、とりこにした肉体の美しさに、酔いしれているかのようだった。

そして、全裸の肉体を、おしげもなく氷の抱擁にゆだねて凝固している康子の美しさ。双の乳房は、頂点の紅を上に向けて盛り上がり、満ち張った腰は、今にも官能の欲びにうねり始めんばかり。やや開き気味に爪先立って、伸びやかな脚は、一瞬の陶醉に向かって緊張している。

だが、これら肉体の均齊の美を一気に破壊し、すべてを死神の手に握まれた者の苦悶のしるしに化してしまうのは、康子の表情だった。そして、そこにこの氷柱を作りあげた人間の悪魔的な意図が隠されていたのだった。

康子の表情は、あくまでも美しかった。

どのような技術がそれを可能したのか、軽く開けられた唇は、爽やかな紅を含み、頬には桜色の火照りさえうかがえるのに、その眼差しは半ば伏せられて、長く開いた睫毛の陰から、動きを失った瞳が、言い知れぬ悔恨と憂悶、屈辱、そして諦念を語りかけてくるのだ。海藻のように乱れ漂うたまま凝固した長い髪が、狂おしい心の悶えをそのままに伝えてくる。

あの肉体の美と欲び、この心の悲慘、この

グロテスクな対照が悪魔の手になるものでなくて何であろう。

しかし、悪に魅入られた芸術家は、この上に、更に自己の勝利を刻印することを忘れなかった。康子のたおやかな両の腕は、後ろ手に鎖でいましめられ、その鎖の端は下に伸びて、足首にはめられた鉄輪につながっているのだ。

こうして、康子は鎖と氷の二重のいましめの中に閉じこめられ、更に、あわれなむくろを大地にゆだねる自由さえ奪われて、永遠の俘囚として玲子の前にいるのだった。

「みごとなものだろう。氷の芸術家、遂にみずから氷の芸術と化す、というわけだ。康子も本望だろうさ」

倉田は氷柱を愛撫していた。

「僕がこれまでに書いた小説なんか、これにくらべれば、一文の値打ちもない。やはり、根底に愛があるのとないのとは、これ程までに作品の質に影響するものだ」

自分の作りあげた作品の素晴らしさに、あらためて惚れなおしたというような表情である。

玲子は返す言葉もない。芸術品といえるまでに完璧に表現された悪意には、人を沈黙させる力があるのか。玲子自身、すでに凍って

いた。

倉田は言った。

「手紙のぞくぞくすることというのは、これだったのさ。あの手紙は、無理に僕が書かせたのだが、そのときには、康子は自分がそのぞくぞくの原因になることを知らされていたんだ。泣き叫んで許しを乞うのを、鞭でひっぱたいて、いやおうなしに書かせたんだ。いわば、あれは康子の遺書なのだ。そのすぐあとで真っ裸に剥いて鎖で縛りあげ、冷凍槽の中へ追い込んでやったのだからね」

玲子は頬をまっ青にして、まばたきも忘れた眼を宙に据えていた。涙が静かにあふれては、頬の上に凍りついた。

「水槽の水は首までしかない。それなのに、康子は溺れ死にする者のように、少しでも水面から伸び上がろうと、狂ったように底を蹴って、泣きわめいていた。」

ほら、この誇らしげに突き出した胸、平たく緊張した腹、悩ましくうねらせているような腰、快楽に痙攣しているような、ピンと張った脚、これはみんな、実は死を前にした苦悶のあとに過ぎないんだ。人間の体なんて、死の間際にも、快楽の絶頂にも、同じような表情しかできないんだな。それがまた、僕の望む所でもあったのだからね」

倉田は得意げに創作の苦心を語り続ける。

「霜柱というのは見たことがあるだろう。水が氷になる時には、まず、水槽の表面に真角に、あの霜柱ができてゆくんだ。はじめは、まばらに泡が凍りついたように見えるが、次第に数を増し、密度を増し温度が降るにつれて、太く、長く、まるでイソギンチャクの触手が餌を求めて蠕動するように、康子の体めがけて、四方八方から伸びてゆく。」

やがて、水温がある温度以下に降ると、それらの密集した霜柱の群が、一斉に、境い目を失って、一体になる。水槽に接した部分が一体になっても、先端は、少しでも他を抜きんでようとするかのように、針の頭のような鋭い結晶を、康子の体に向かって、成長させ続けているのだ。ちょうど、わずかに温もりを保っている康子の体めがけて先着を争っているみたいだね。そして、先頭のやつが康子の肌に取りつくときに、康子が完全に体温を失うときなのだ」

銀色に輝く、無数の氷の結晶が、ピシピシとかすかな音をたてながら、生きもののよう

に康子の体をとらえようと腕を伸ばしてゆく有様が眼に浮かんだ。

「温度が低くなると、水は重く濃んで、飴のように、ねっとりしてくる。その中で、康子

の体は、へばりついてくる水の重さに逆らうように、ときどき緩慢な悶えを繰り返していた。泣き叫ぶ声もかれ果てて、吊り上った眼を、丁度今の君のように、宙に据えていた。唇だけが、まだ何かを訴えるように動いていた。そして、本当に眠るように、長い睫毛がハタリと伏せられた時、それが康子の死だった。観念しきったようにさしのべられた頸の周囲には、氷が張りつめて、丁度獄門になった首のようだった——」

「もう、いわないで——」

玲子は、かほそい声で、ときれときれに訴えた。

「これからが苦心した所なんだ。そう言わずに聞いてくれよ」

倉田は、玲子の冷え切って硬直した肩をゆさぶって、悪魔がのり移ったような真剣さで話を続けるのだった。

「下がすっかり凍りついてしまってから、氷の上にのったかった恰好の康子の首に、死化粧を丹念にほどこしてやった。表情も、僕の意図に合うように調えた。康子の顔は一面に霜をおいて硬化していたから、ヘア・ドライヤーで暖めて霜を取り、軟かくしてから仕事をしなければならなかった。」

それがすんでから、静かに、湯を注ぎ込ん

だ。顔全体沈んでしまうまで。こうしておいて、もう一度温度を下げると、全体が継ぎ目のない一体の氷になるのだ。こうして、首から下は康子の自演、上は僕の演出による完璧な作品ができあがったのだ」

倉田は、氷柱の周囲を歩き廻って、飽きずに氷の俘囚となった妻の姿に見とれている。「愛する者を永久に自分のものとしてとどめておくのに、これ以上良い方法があるとは思えない」

いまにも氷に頼ずりせんばかりの表情だった。氷の透明な輝きをうつして、瞳が硬質の輝きを帯びている。

「僕は、過去の愛のかたみを冷たい氷の中に閉じ込め、現在と未来の愛を、暖かい君の肉体の中に求めたいのだ」

倉田は急に熱のこもった眼を、玲子に向けて来た。玲子はうろたえた。

「さあ、答えてくれ。僕の熱い腕の中で、その凍りつきそうな心を融かしてもらいたくはないのか、それとも、姉と一緒に、そのまま氷の中に閉じ籠りたいのか」

本気なのか、芝居にすぎないのか、そんなことを判断するゆとりは、玲子にはない。ただ、激しく頭を左右に振るだけだった。

「僕は君まで殺したくはないのだ。この冷た

い氷は体に毒を注ぎ込む。僕は暖かい慰めが欲しいのだ。玲子、きみは、この僕を好きじゃなかったのか」

「やめてっ、やめてちょうだい」

玲子は絶叫した。

そして、この追いつめられた小羊は、唯ひとつだけ残された逃げ道——失神へと、のめるように落ち込んで行った。

四

霧の奥から陽がさしたように、瞼の裏が急に明かるくなった。遠くで、誰かが名を呼んでいる——

玲ちゃん、玲ちゃん、玲ちゃんたら——

ああ、お姉さんの声だわ——

玲子は、牛乳のように重く澱んだ、白いものの立ちこめる中に、姉の姿を求めた。

不意に現実が怒濤のように襲いかかって、眼の前の白いものを洗い流した。

そうだ、お姉さんは——

玲子は胸を突かれて、眼りから醒めた。

「よく眠ったわね。もう九時よ」

優しい笑顔がのぞき込んでいる。

「お、お姉さん——」

「どうしたの、おそろしい顔をして。まるで幽霊でも見たみたい」

「お姉さん、お姉さん——」

玲子は眼の前の生きた姉が幻でないことを確かめるように、何度も大声で叫んだ。それから、わっと泣き出した。

「あらあら、どうしたというの、赤ん坊みたいに。ゆうべは、外せない御用ができて、玲ちゃんをお迎えに行けなかったのは悪かったと思っっているのよ。でも、倉田がお相手をしてくれたのでしょう。そんなに駄々をこねることはないわ」

玲子は、母親を見つけた迷子のように、姉の体に取りすがって、ただわあわあ泣いた。

姉の康子は、しゃくりあげている妹の、すっかり大人っぽくなったまろい肩を、いとしげに見降ろしていた。

「さあさあ、涙を拭いて。いったいどうしたというの。寢床が変わったので、悪い夢でも見たのね」

夢——そうだ、夢かも知れない。

現に死んだ筈の姉が、こうやって生きているのだから。玲子はシャツの袖で涙を拭いた。

「あたし、どうしたのかしら」

シャツもスラックスも着たままで、姉のもののらしいベッドで眠っていたのだ。

「倉田の話ではね、お台所で食事の仕度をして、もどって見たら、居間のソファの上で居眠

りをしていたそうよ。で、そのままあたしのベッドに寝かしつけたのですって。暑いのに満員の汽車にすしづめになって来たので、参ってしまったのね。あたしが帰って来て見るとみっともない寝相で眠りこけていたわよ」ととても信じられないことだった。

「お義兄さんは？」

「ゆうべ遅くまでお仕事だったから、まだやすんでいらっしゃるわ」

窓からは、あくまでも爽やかな朝の光が、

あふれるばかりにさし込んでいる。

「さあ、お起きなさい。せっかくここに来ていながら、朝の一番いい時間を寝て過ごすことはないわ」

ベッドを降りて腰を伸ばすと、骨がポキポキ鳴った。思わず手首に眼をやった。千切れる程に喰い込んでいた筈の縄目の跡かたもない。すると、やっぱりあれは夢だったのか。

義兄に対する妄想が織りなした、妖しい夢に過ぎなかったのか、夢と思うと、ちょっとおもしろいような気になってくる。

「ぞくぞくすることって、何なの？」

着更えをしながら訊いた。

「階下へ行ったら見せてあげるわ」

そう言って、いたずらっぽく笑うと、姉は部屋を出て行った。その軽やかなワンピース

の後姿を、玲子は無意識に眼で追っていた。あの布の下に隠された美しい肉体を、昨夜はあれ程強烈な印象で見た筈なのに、朝のあふれる光のもとでは、その印象は幻のようにかすんでしまつて、もどつて来そうもない。しあわせな若妻の、満ち足りた肉体の動きが、ワンピースの裾をゆらめかせているだけだった。しかし、それはそれで、やはり美しいと思つた。

「お姉さん」

玲子は、思わず呼びかけた。

「なあに」

康子は戸口で振り返つた。澄んだ瞳がほほえんでいる。

「ううん、何でもないの。お姉さん、しあわせそうね」

「変な子」

姉の姿が廊下に消えた。

朝食は、例の食堂でとつた。倉田のすわつていた所に、康子がすわっている。巨大な冷蔵庫も見覚えのある場所に白く輝いている。

玲子の眼は、いやでもその扉の一点に吸いつけられた。そこは、何か重いものをぶつけたように、エナメルが欠け落ちてゐる。しかし、あれが夢だったとすれば、その疵は何か別の理由で出来たのかも知れない。だが、姉

の言葉によると、玲子は居間からベッドに運ばれたという。とすれば、台所も冷蔵庫も現実には見ていないことになる。現実に見ていないものを、そっくりそのまま夢に見るということが、起り得るだろうか。玲子は、またわからなくなった。

「あの冷蔵庫の中にあるものを当てて見ましょうか」

玲子は思い切つて言つて見た。

「だしぬけに、妙なことを言いだすのね。でも、当てたつて、あげられないことよ」

「氷でつくつた白鳥。どう、ズバリでしょ」

「あーら、当たつたわ。さては、倉田にきいたのね。あれ程秘密にしておくように言つておいたのに」

玲子は自分の予想が當つて、かえつて頬から血の引く思いだった。

康子は、そんな玲子に頓着なく、立つて冷蔵庫を開けた。

「ぞくぞくするものつて、これなのよ。当てられちゃ、効果半減だけれど」

取り出されたのは、白鳥とはとても思われない、驚鳥が首を締められてゐるといった方がふさわしい、稚拙な氷細工だった。だが、玲子にとっては、この、夢の白鳥との相違が大きな救いに感じられた。

「お上手ね」

「ありがとう。暇つぶしに始めて見たのよ。でも普通の彫刻の方がよかつたわ。ああでもない、こうでもない、ノミを手にとって思案しているうちに、溶けちゃうんですもの」

二人は声をあげて笑つた。猪首の白鳥は、テーブルの上に朝の光を一杯にあびて、キラキラ輝いてゐた。

「お義兄さんは、今どんなものを書いていらつしやるの」

「あい変らずの残酷物語よ。『残酷な兄』とかいう題だそうよ。ストーリーというのはね——」

玲子は聞かなくても判るような気がした。しかし、黙つて聞くことにした。

聞きながら、テーブルの上に組んだ、ほっそりと美しい姉の手首に、うっすらと赤いあざが浮かんでいるのを、見るともなく見ていた。

エピローグ

「おねがい、玲ちゃんの居る間だけはゆるして」

と女が哀願した。

「玲ちゃんが居るからこそ、おもしろいんじゃないか。ゆうべの、お前の燃え方はすこか

「裏窓」を毎月確実にお手に入れるために

直接購読会員募集



- ▼三カ月会員： 九〇〇円
- ▼六カ月会員： 一、八〇〇円
- ▼一カ年会員： 三、六〇〇円



■いずれも、店頭発売前に直接お送りいたします。送料は、当社で負担します。

■〇月号から三カ月分、とか、〇月号から六カ月分、というふうにはじめの号を、はつきりお書きください。

■住所氏名を正確に、はつきりとお書きください。

■直接購読会員には、写真の無料サービスをいたします。

三カ月～三枚 六カ月～六枚
一カ年～十二枚（手札型）

東京都中野区松が丘2丁目21番

あまとりあ社

「裏窓営業部」

ったぞ」

男は縄をしごきながら、からかう。女は、もう返す言葉もなく、男のなすがままに、細いうなじを、がっくりと折る。

「ひどいひと。玲ちゃんがあんなことをされてどんな気持ちになったか、少しは考えてもらんになって」

「なあに、玲ちゃんは君みたいなくじなしじゃないさ。指にささったトゲみたいなもので、あとはつばきをつけておけば、なおってしまふよ」

さも愉快でたまらないといった調子でしゃべりながら、器用に女の素肌に縄をかけてゆく。急所々々を締めあげられることに、女は小さな悲鳴をあげた。

「あれはどうなさるの」

「大枚の金を出して作らせたものだ、壊してしまうのは勿体ない。本当の君を氷づけにするまでは、あのままにしておくよ。さあ、立つんだ。今夜は、未来の自分のあわれな氷づけの姿を前に、たっぷり泣かせてやる」

「ああ、それだけは――」

哀願しながら、女はもう男の暴力を受け入れる甘さに身悶えていた。

■ イタリア映画「ショック」をみて

馬鹿げた世界



森下高茂

この映画は、各誌の批評欄でも、新聞の批評でも決して悪い評判は得ていない。そしてこの映画の主要な題材はサド・マゾヒズムであるという事が広告でも批評でもしばしば言及されている。

当然、私達は好意的な先入観をもってこの作品に対するわけであるが、しかしながら、まことに残念なことに、大部分の画面は私たちを失望させるに十分であるばかりか、その一部分に至っては、いささかの反感をもって迎えざるを得ないのである。

まず第一に、映画は世の中にいかに馬鹿げた事が多いかということを、いくつかの実証をもって説明する。いかに宣伝というものが馬鹿げたものであるかを手を代え、品を変えて映画は説明する。たとえば、ゴム製のスパゲッティの上に、顔料と油で作ったソースをかけて写真製版し、それを印刷すると実物そっくりに見えるというような例を、いかにも面白げに説明するのである。このこととどういう関係があるのか知らないが、「人間にはマゾヒズムというものがあって、それは子供のころから萌芽を見せている」という解説が入り、つづいて画面に現われるのは、二、三人の、他の子供に石をぶっつけられている一人の子供の場面である。

これが、一体どうしてマゾヒズムと関係があるのか、私にはわからなかった。なんとすれば、マゾヒズムというものの大前提となるのは、被虐が性的に肯定的に参与することであって、被虐行為自身がマゾヒズムではないのである。

それに、肯定的にうけ入れるかどうかは一にかかって本人の内心の感覚の問題であるから、マゾヒズムの萌芽を画面で説明しようという試み自身が、大変、困難なことといわなければならぬのである。この子供の場面は「小児的破壊欲」の実例にはなっても、マゾヒズムには関係ないのである。

そして「小児的破壊欲」と私が控え目に呼ぶそのものこそ、まさしく、暴力団のチンピラの出入りであり、無防禦の教授連を警棒で殴打した機動隊の行為であり、無謀な高率税を課して権力に酔う税吏であり、金に物言わせて女性を口説く一見紳士風の男達である。

これらは「正常」と映画が重ねて説明し、「私達」としばしば言う、その側に属しており「馬鹿げた」と彼の言う世界には属していないのである。

つづいて、最初にして最後のわずか数秒の印象的なマゾヒストむきの場面が、突然、画面にひらける。

「鞭はマゾヒストにとって、極めて重大な意味を持つ」

という説明は、その限りにおいて正しい。一人の「着飾」った婦人が、或る店に入つてゆく。

「WHIPS」(鞭店)と、その店の看板には読める。店の中には、十本程の各種の鞭(乗馬鞭)が並んでおり、その横には、明きらかに乗馬用ではない、やわらかい上質の革で出来た、少しヒールの高い仕立てのよい長靴が置いてある。馬具類が、すこしばかり、遠景に見える。婦人は、冷酷な表情で一本の鞭を取り上げ、目の高さでそれをしなわせてみる。エロティシズムといささかの関係もない(婦人の下半身はタイトスカートであつて、普通のものである)むしろ、通常すぎる程通常の衣裳。あたりまえの行為、ありきたりの動作だけの羅列である。

だが、私たちは注目しなければなるまい。このエロティシズムを拒否した現象が、他のどんな場面よりも、エロティックにも、マゾヒスティックにも印象が強いという事実に対してである。

しかし、一方で、私ははつきりと見た。この場面は決していわゆる実写ではなく、すこしまゾヒズムについての知識をもって、物品

の配列を変えたり、それむきの演出をもつて作られたものだ、ということ。

とくに、彼女が見むきもしなかった長靴はまさしく、それが乗馬用でないことを示していた。このやわらかい上質の皮革は、わずかに五分間でも、鞍との接触にも耐えることは出来ないのであろう。この、黒光りする長靴はただ人間馬のさらにやわらかい皮膚に対してのみ適応する種類のものである。この少しく高いヒールは、女性騎手の前で、その鞭におびえながら四つんばいになって匍いまわる人間馬の眼を楽しませるためにのみ有効であらう。

また、無表情のようである、その実、きわめて残忍な感じを表現しているこの女性のタイプは、普通に街頭で見かける種類のいずれにも属していないのである。この種のタイプが出現するのは、マゾヒストの関心であつて、決して街頭ではなく、ましてや通常性交の場としての臥床ではない。そう考えてみると、この短かい場面は、この映画の中で最も細かく考慮された場面であるといえよう。そこには、空想に耐えうる素材の羅列がある。そうして、我々は、この素材から侵入してゆくのである。もう一つの世界へ、感覚の世界へと。私達にとって、最も豪華な、ゴブラン織り

のような世界へと。

私達の欲望が深ければ深い程、その沈潜の限度は深くかつ広い。或る者は弓なりに鞭をしなわせる冷酷な女性の姿から、自らの背に鳴るその鞭を思うかも知れない。或る者は、その鞭がうなり、風を切る音をきくかも知れぬ。また或る者は、その女が画面には見えぬ下半身に、馬にまたがるときと同じような、内股に皮を張った乗馬ズボンをはき、輝くほどにみがきぬかれた上等の乗馬靴をはき、その高いかかとは、銀色の鋭い拍車がチロチロと音を立てているのを見るかもしれぬ。

さらにまた、或る者は、その女が自分の愛人であり、或る夜、お互いに思ひのほどを告白した、夜露に濡れたベンチで語らいから始まり、皮を裂き、肉を破るその鞭の下で、世にも恥ずかしい姿態を要求される自分自身が汚辱にまみれながらせまり来る欲情の波の中に見失なつてゆき、さらにその後、幾分の羞恥をもつてお互いに「おやすみ」をいうその終りまで、一編の物語りを見るのかも知れない。

有効な素材とはそんなものである。

その場面につづく、同性愛者の酒場の風景夢の判断などは、倒錯的な欲求の幾分をも満足させるものでもない。

特に、同性愛者をそつと別の世界に遊ばせるべきだというような首尾一貫しない解説が知得出来る程には、それらの世界は美しく描かれていない。老残の女装愛好者、奇怪な男装をした女性、それらは、同性愛者にとって不快感をもって迎えられるであろうほどに汚らしい。

そして、解説の中に、

「もしも私達が、彼等を、差別したりしようとするならば、彼等は、欲望を満足させるためには、また、その怒りをしずめるためには、国家の秘密さえを洩らすかも知れないのです」

という一節をきくとき、私達は、近代的合理主義のマスクを冠った「サレムの魔女」の伝説を思い出すのである。怖れは、火の発見の時と同じく、人々を打ちひしぐかのようにでさえある。

もし、怖れが、正常であると自称する人々に対して、要求をいれさせる唯一の方法であるならば、全倒錯者は期せずして団結することによって全世界の通常世界の機能を停止させることも出来そうである。もし、私達が、私達なりの道德律を持たないとすればである怖れは常に無知になって、行動となる。

順序が逆になるが、この前に、ガレリイ・

サディストという奇妙な見世物が紹介されるそれは、一般人の好奇心をあおるために出来あがった見世物である。ここには中世の拷問具が陳列され、一日一万円そこそこの金で雇われた男女が、或いは車責めを、或いは鉄格子の中に入れられて吊られる刑を、又、頬打ちを、実演して見せる。もちろん、露出的願望を伴ったマゾヒストなら、こうして毎日数十人の未知の男女の前で裸にされ、鞭打たれたり、鉄の棘の恐怖に苦しんだりしてみせることは興味のある体験であろう。

しかし、問題はその側にあるのではなく、金銭を払って、檻の中に入れられた若い女にくさったタマゴやトマトをぶつけて喜び、若い男が背中をいくつもの結び目をもった皮鞭で打たれるのか見てよろこぶ人々の側にある。

彼等の悪質で安価な好奇心は「ギロチンの実験」の場面で決定的に暴露される。彼等の何人かは金を払って首斬り刃の下でスリルをたのしむのである。このギロチンの刃の下での実験は、質的に前記の車責めや鞭打ち刑の実験台とは全く違う。その一番の相違は、ギロチンは何等の羞恥も、みっともない態度を見せずにすむということである。彼等は泣き叫び、許しを乞う必要がない。また暴虐な支

配の下に身を置く必要がない。そして、死の恐怖を思うことは、実はサド・マゾヒズムとは何の関係もないのである。

私たちは思い出さねばならぬ。フランス大革命当時、ギョチーズ（ギロチンの原名）は同名の人物によって、苦痛すくなく、迅速な死刑執行の用具として考案されたのである。苦痛すくなく、そして確実な死、それは、サド・マゾヒズムとは無縁のものである。

生の確信と、適度の苦痛、これがサド・マゾヒズムを形成する最も重要な因子である。マルキ・ド・サドは、殺人を書いたという、然り、まさしく、彼の著作の中で殺人は数多い。

しかしそれは書いたものであって実行したのではない、この点はまさしく無条件に重大である。だが、人はいうかもしれない。「サドは、自分でも人を殺している」と。

だが、あえて、私は確信をもって答えよう。「サドをして実際の殺人を犯させたのは、不慮のあやまちか、彼の中に住む正常性の残滓か、あるいはまた彼の中なる精神異常の部分の救であって、それは、後日、人がサディズムと名付けたところの加虐性性愛傾向の故では決してない」と。

そしてまた、私達は興味ある事実を想起せずにはいられない、それは、苦痛すくなく、か

つ迅速な処刑、という差についてである。

私たちの世紀は、もう一つの歴然とした実例を持っている。それは、一九三七年から四五年に至る間、ドイツで盛んに利用された方法である「ガス室処刑」といわれるところの大量処刑の方法は実に同じ目的のために考案され、利用されたのである。そして、だれもその発明者を、その処刑に立会い、肯定的に是認した人々をすべてサディストであるとは考えないのである。

「ガス室は執行者にとって、目的を入浴という形で欺くために容易であった」という、ルドルフ・ヘスや、アイヒマンの証言は、執行者側が決して殺人に性的欲望を関連した興味をもっていなかったこと示している。

もし彼等がサディストであつたら、彼等は目的を欺くことをしなかったであろう。なんとなれば、それはサディストが必須のものとなさえる怖れを与えることになるからである。

こうして、ギロチン刑は、サド・マゾヒズムと再び無縁である。だから、それに打ち興ずる人々の心を原来するものは、高い金を払って得た、奇妙な体験を好奇心の満足とである。

映画は後半一転してエロティシズムに関する

る場面を好奇心をもって描きはじめる。

血だらけになって鉄条網の中を匍いつづける女、鉄格子を曲げて脱出する女。これらどこにサド・マゾヒズムの匂いを持っているというのか。

映画は、サド・マゾヒズムというものが、一定の行為や現象について不可分のものではなく、それは、それをうけとめる側の心の中の問題であるということを忘れていく。むしろ難をもって打たれながら、この映画のカットを作るために鉄条網の中をはいまわらねばならない女性は、サド・マゾヒストになんらかの印象をさたえるであろう。それは、脱走する女にしても然りである。

だから、と、私は結論的にいいたい、このサド・マゾヒズムを掘り下げたという映画に関連して、一番サド・マゾヒズムの匂いを発散しているのは、いかなる画面でもなく、この映画を作るために、冷酷な表情で靴を買う女を演じなくてはならなかった女優（或いは演ずることの出来た女優）カメラの前で、タマゴかぶつけられても身をよじる女の役をやらされた女優、靴打たれる男の役をやってみせなければならなかった俳優、それらの人々の中に於てである。

たとえばかのサディスティックな女優の役

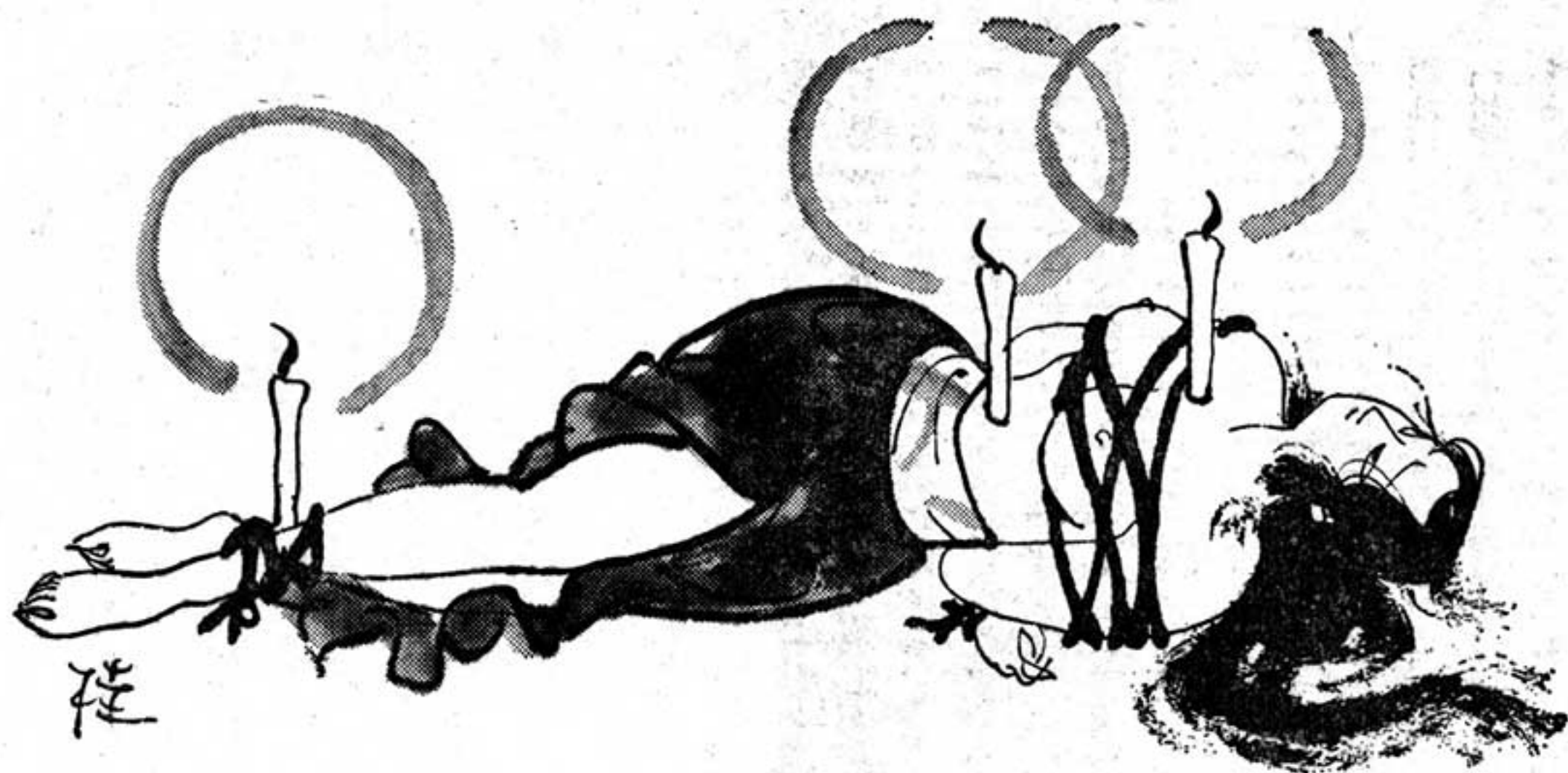
をやらされたのが、全くサディズムに興味のない女優であるとしたら、それは男性サディストや女性マゾヒストむきのシチュエーションだし、その逆に、もし、彼女が本来鞭を持つてカメラの前に立ってみたいほどのフラゲロマニア、又はサディスティンであつたとしたら、それはマゾヒストむきのシチュエーションなのである。

「馬鹿げた世界」それは、むしろ、こうした映画を作る側、買う側、そして好奇心をもつて観にゆく大多数の観客の側にこそ、歴然と存在しているように思えるのである。



黒竜党の最後

樹 一 潮
絵 史・桂 東



帰去来

伊予の国、岩間の島に傲然とそそりたつ館がある。

館は海を望む丘の頂きにあり、周囲には塀をめぐらし、銃眼をうがった城塞同様の構造で、島の入江には黒い帆を備えた二隻の船が錨を下ろしていた。

この館こそ十五年前より、瀬戸の内海はおろか、遠く異国の海まで荒しまわり、死神の群れと異名を得た黒竜党の本拠なのである。

いま、日光に映える穏やかな海面を、一艘の伝馬が島の北側に向って櫓音を軋ませていた。舟を巧みに繰っている男の左腕は失われている。それでも右手は力強く櫓を押してい

た。黒竜党の館の裏側にあたる断崖に舟を寄せる意企らしい。

伝馬の舳先にはひとりの若い女が乗っていた。蒼い月光を浴びて、妖しいほどに美しい少女である。豊かな黒髪を束ねて、無難作に男の小袖を身に着けている姿が、娘の美しさを更に冴えわたらせていた。

「大助、あれが竜崎玄鉄の館か」

と、娘は鋭い声で訊ねた。竜崎玄鉄とは黒竜党の首領である。

「そうです。真弓さま。玄鉄は二年前にこの島に館を建てたとの事。十三年前、岩間の党は奴等のためにこの世から消えたのです」

大助は憎悪のこもった眼を、黒々と見える館に据えた。

「真弓は一族の仇を必ず討つてみせる」

十三年前、岩間の島には村上水軍に属する岩間の党がいた。党首海之介の妻千春の類いまれな美貌に邪惡な野心を抱いた竜崎玄鉄は奇計を弄して岩間の党を襲った。千春と数人の女を掠って、部落を焼き払った黒竜党は、更に奸謀をもって岩間の党を覆滅せしめた。生き残った海之介の娘真弓はがんぜない五才の幼児であった。

それから苦難の年月を過したふたりは岩間島に戻ってきたのである。

伝馬は断崖の裂けめから、拡がっている入江にすべりこんでいた。この辺りには、黒竜党を恐れた僅かな漁民が息を潜めて住みついている。その中に唯一の岩間の党の生き残りが真弓の帰りを待っていた。舟が砂を噛んで止ると、大助は水の中に下りて荷籠をかついだ。真弓は素早く浜辺に駆けあがっている。

月光の下に数棟の小屋がうずくまるように影を落している。

「よう戻られたの、真弓さま」

岩陰からひとりの老爺がよろめくように現われた。

「岩間の党の生き残り彦兵衛ですじゃ。お待ちしておりましたぞい」

「彦爺、迎えにきてくれたな。ありがたい。」

案内してもらおう」

と、大助が声を弾ませた。

「こちらじゃ」

彦爺は矍鑠たる体をふたりの先に進めた。浜伝いに細い道を登る。繁茂している草をかき分けて、松林を抜けると平坦な地にでる。そこに真新しい木の香を放つ一棟の小屋があった。

「真弓さま、粗末じゃが、この爺が作った館じゃ」

と、彦兵衛が皺だらけの顔をふたりに振り向けて笑った。

この貧弱な小屋の背後に急な斜面が木々の茂りに掩われてそびえている。ちょうど黒竜党の館の裏側にあたるのだ。山に道を閉ざされて海路をたどるほかに道はない。しかも、断崖からの入江は発見し難く、潜む場所としてはまず万全であった。

彦兵衛は小屋にふたりを招じ入れると炉に火を点じた。

「千春さまに生き写しじゃ。ようこれまでになられたものよ」

嘆息する彦兵衛を、真弓は凝視しながら答えた。

「私が炎の中から助けられて今日まで育ってきたのは大助のお陰です」

炎と燃えさかった火の色を真弓は忘れてはいない。幼かった眼に、はつきりと映った岩間の部落の惨烈な最後が、鮮明な記憶となつて残っている。しかも、大助にとってそれは更に苛酷な映像であった。竜崎玄鉄の剃りあげた坊主頭、魁偉な容貌が寸刻も脳裡から消えぬ。千春を守ろうとして、必死に抵抗した大助の左腕を、無慈悲に斬り下ろした太刀の痛みが甦えつつくるのだ、真弓を抱えての苦労も大助にとって悲惨だった。

「彦爺、この島が奴等に襲われた時、海鷹丸の不在を知らせた裏切者がいたのだ、そやつは時化に合つて流れついた七郎次と言う漁師だ。憶えてはおらぬか」

大助の言葉に彦兵衛は空を探ぐるように眼を動かした。

「うむ、確かに岩間の浜に流れ着いた漁師がいた。命の礼とよう働きおつたがの」

「奴なのだ。七郎次は玄鉄と共にやってきたのだ。俺の前にな」

「まず七郎次から恨みを晴らす」

と、真弓は復讐の叫びをあげた。

「だが、この島中に黒竜党の眼が光っておりまずでな。手勢は百を越えて、舟は二艘、油断はできませんぬのじゃ」

彦兵衛は枯れ枝を投げ入れながら言った。

夜気は冷たく体を包む。海も静かに眠っているのか波の音も聞えぬ。

「味方になる者が得られようか」と、真弓が訊いた。

「屈強な男はおりませぬわい。戦う気力のある者はすでに殺されておりますのじゃ」

三人の間に重く沈黙がよどんだ。徒手空拳の彼等に、竜崎玄鉄を敵として勝ち得る奇策を求めねばならなかった。

責め稽古

真昼の静けさが穏やかであった。

粗朶で葺いた屋根から、したたり落ちる光が、きらめくような模様を描いて、真弓と大助のふたりを浮きあがらせている。いま、小屋の中には奇態な光景がくり広げられようとしていた。

粗板を張った床に、真弓が身をさらけだして、大助の前に座ると両手を後へ廻したのである。

ぬめやかな真弓の肌はかすかに紅潮している。ふつくりと木椀を伏せたような乳房、くびれた胴からなめらかな腰。しなやかに伸びた両脚。輝くばかりの美しさは男の息を吞ませずにはおかぬ。

大助は右手と口を使って、ためらいもなく

縄を巻き絞っていく。縛る大助も縛られる真弓も、冷めた感情を喪った面である。いったい何の理由と目的があつて、真弓は身をさらし縛められるのであろう。

「真弓さま、これしきの縄目で呻いてはなりませんぞ」

と、大助は胸に喰いこむ縄の衝撃に小さな呻きを洩らす真弓に厳しく言った。

「竜崎玄鉄は若く美しい女を裸にして責め苛いなむ事に悦びを感じる男との事。奴の責めや縄目は甘くはありますまい」

縛りあげた真弓を、凝視しながら大助は続けた。

「真弓さまなら玄鉄も満足するでしょう。それを利用するのです。まず奴の責めに屈伏せぬ心と体になり、玄鉄の胸を掻き乱し、そして命を断つ。これが真弓さまの務めです。そのためには鬼になりなされ」

昨夜、練られた意外な奇策である。

真弓の母である千春も、玄鉄の強烈な拷苦に悶え呻いた。これまで幾十人の若く美しい女が、玄鉄の手に泣いたであろうか。しかも飽いた女は南蛮船に売られ異人の玩弄物と化するものであった。

真弓を黒竜党の館に潜入させれば、必ず玄鉄はその美貌に眼を止めるであろう。復讐の

ために、女としての武器を使うのである。そこで、まず玄鉄の拷問に耐え得る訓練から始めるのだ。

「真弓さま、先ず海老責めといきましょう」

と、大助はかすかに震える声で言った。

「足をあぐらに組みなされ」

大助の命令が非情に真弓の耳を打つ。粗板の床に後手に縛めた身を硬くしている真弓を調教しようとする大助の眼に昂ぶった光があつた。復讐に総てを賭けた男の執念以外の感情が滲んでいた。

「大助、海老責めはいやじゃ」

若い真弓に、自ら足をあぐらに組めと命じるのは確かに苛酷であった。

「心を鬼になされ。おのれは女ではないと思うのです」

右手に握んでいる新たな縄の束を口にくわえると、大助は真弓の前に膝を折った。

「いや、許して。もういやじゃ」

泣き声に近い哀願をほとばしらせる真弓の足首に大助の指がからみついた。

「これ位で悲鳴をあげてはなりません。玄鉄に耐えて耐えぬくのです」

熱っぽい言葉が大助の唇から流れる。片手しかない大助は懸命に縄を捌くのだった。抵抗する真弓のほっそりとした足首は、いつの

間にか組み合されて縄が巻きつけられた。

「許して、大助。もうやめて」

哀願の言葉を自然に口にする真弓なのだ。両足首を縛った縄尻がうなじに廻った。ざらざらとした縄の感触が、おのが姿の惨めさを伝える。大助は力をこめて縄尻を絞った。

「ああ——」

首筋の縄が締めまり背骨が彎曲する。空に浮いた両足首が顔の前にあった。顎をつきだして、体中をさいなむ圧迫感に真弓は耐えかねた。

「く、くるしい」

悲鳴をあげる真弓を大助が見据えた。

ふところから手拭を掴みだすと、真弓のあえいでいる唇を押しひらいて、布片をぐいぐいと押しこむ。手拭はまるめられて、かなりの大きさである。それを口腔一杯に詰めこまれては呻き声すら立てられぬ。

「う、ううっ」

真弓の呻きが断続して小屋の中に響くのであった。

狙う女

真弓と大助の訓練は二カ月にわたって続けられていた。

真弓の受縛に対する耐久力は増していた。

終日縛められても耐えぬくほどになったのである。考えつかれる拷問と緊縛法が、真弓の体に試みられるのであった。

今宵も真弓は、粗板を張った床に仰臥させられていた。縛めは後手、伸びた両足も括り合わされて、さながら白い肉の棒と化している。しかも、蠟燭が立てられ、ゆらゆらと炎をゆらめかせているのだ。蠟燭責めに耐えぬこうとしている真弓。

真弓の口からは呻きも洩れない。猿轡を噛まされているのだ。大助の定めた時間を、呻き声ひとつ洩らさずに耐えねばならぬのだ。額には脂汗が滲みだし、乱れた黒髪がべったりと貼りついている。

と、大助は眼をあげた。近寄ってくるかすかな足音を聞きつけたのである。

蠟燭を吹き消して、夜具代りの簾をかぶせると、墨闇の底に身を低めた。僅かにくすぶっている枯れ枝が赤く光っているだけだ。大助は脇差を掴んだ。

「大助、わしじゃ。いま戻ったぞ」

彦兵衛の声であった。

「彦爺か、待ってくれ。すぐ戸をあける」

大助は脇差を離して戸をあける。彦兵衛が老いた顔を輝かせている。

「真弓さまの姿が見えぬの」

「ここにいろ」

大助はかぶせた簾を引き剥ぐ。そこに横たわっている真弓に彦兵衛の眼が傷まし気な感情をこめた。

「辛い事じゃのう」

彦兵衛は呟いて、真弓の縛めをほどいた。手足の自由を取り戻した真弓は、自ら猿轡を外すと、さすがに息をええがせて、小袖を肩にはおった。

「心配はいらぬ。黒竜党を狙う私達に尋常の手段では勝てませぬ」

真弓はすでに羞恥の情を喪っているかに見える。それでも、小袖の襟を押えた手に、縄の跡がくっきりと残って、異様なほどの艶めかしさに満ちていた。

「黒竜党を探ってきたのですじゃ」

と、彦兵衛は危険を冒してきた報告を始めた。

「七郎次は黒竜丸の船長、女房と娘とを持っておるそうですわい。玄鉄の館近くに黒竜党の配下の住居がござってな。昔、我等が部落のあった所ですじゃ。口惜しい事には、七郎次の家は海之介さまの館跡なのじゃ」

「まず七郎次を血祭にあげるのです」

「どうなさる、真弓さま」

大助がさすがに驚いて口をはさんだ。



「七郎次の娘を掠うのです。それを餌にして七郎次をここへ誘いこむ。応じなければ娘の命を断てばよい。それも罪の報いです。彦兵衛、娘の名は」

「小鈴とか、十七才とか耳にしましたわい」

大助は真弓を見守った。意表をついた奇策を秘めた真弓。十三年にわたる岩間一族の恨みを晴らすために、ひとつの武器に化さしめようと育てた大助にとって、今宵の真弓はその成果をはっきりと示めたのだ。大助は真弓の戦法におのれを賭けようと決意した。

「彦爺、明晩の天気はどうなる」

「うむ、荒れるはずじゃ。季節に似合わずに生暖かい。風も不気味に死んでおる。この岩間ではな、このような後には必ず雨と風がくるのじゃ」

大助はうなずいた。

「明日の晩、雨と風になれば黒竜党の本拠へ忍びこもう。時化ならば奴等の眼もゆるむに違いない。力を借してくれるな。彦爺」

「わしも岩間の党で鳴らした彦兵衛よ。ひと働きしようわい」

皺だらけの顔が戦意を漲ぎらせていた。

翌日——彦兵衛の予想通り、空は早朝から

雲に掩われていた。

昼をすぎると、雲は海面に低く垂れさがって、雨滴がしたたり落ちると、風は次第に強さを増していった。狙っていた通りの悪天候である。海は泡立って蒸気で煙っている。

夕刻、大助と彦兵衛は小屋に真弓を残して出発した。万が一にもあえない最後を遂げた時を考慮して真弓は残った。

ふたりを乗せた伝馬は、断崖にさえぎられて、意外なほどに静かな入江から、裂けめをくぐって荒れた外海へでる。老いたリと言えども、彦兵衛の舟を繰る力はさすがだった。吹きつける風に、すつくと体を立てて、力強く櫓を押す。時化た海を進むのは至難の技であった。

「彦爺、しっかり頼むぞ」

「任せておけ、心配無用」

と、彦兵衛の声が風を貫ぬいて答える。

漆黒の闇に岩間島の影が滲んでいる。見張りの眼も遠くまでは届くまい。玄鉄の館も戸を閉ざして、僅かな光も洩れていない。黒竜丸の姿はなかった。どこかに出かけているのだらう。伝馬は残っている一艘の舷側すれすれに、入江の奥に向って進む。そこは砂浜になつて、舟を着けるには絶好の場所なのだ。しかも、黒竜党の本拠の真只中である。悪天

候でなければ、たちまち発見されてしまうであらう。

「見張りの影は見えぬ。舟を着けるぞ」

伝馬は打ち寄せる波にあおられて、どっと砂浜に追いあげられた。脇差と縄束を腰にした大助に続いて彦兵衛の体も躍った。雨と風の中で海賊達は眠っていた。

捕えた餌

黒竜党の住居が雨を浴びていた。

かつては岩間の一族が暮していた部落である。それも、いまは仇敵の本拠と化しているのが無念であった。横なぐりに吹きしぶく雨の中を、風と共に走り抜けながら、大助と彦兵衛の胸は燃えていた。

石垣を築いて、道路より高い場所に、冠木門を設けた家がある。濡れた木札に七郎次と言う字が読めた。主の七郎次は黒竜丸と共に不在で都合がよい。

「抜かるな、彦爺」

声を放って大助は全身をまるめて戸に激突していた。二度目の体当りで屋内に転がりこむ。雨がざっと鳴って吹きこんだ。踏み入ったふたりの眼に、わずかなほあかりが映る。水滴をしたたかせて、ぬっと立った大助と彦兵衛に、悲鳴を凍らせてふたりの女が抱き合

った。

ひとりは七郎次の女房であらう。女の盛りはすぎているがどこかの白拍子を妻としたのだらう、まだ華やいだ面影は残っていた。ひとりは娘の小鈴だ。海賊の血をひいているとは思えぬ美少女であった。寝衣に包まれた肢体は、新鮮な果実に似てすがすがしい甘い匂いに満ちていた。

「七郎次の女房、娘は我等が預る。この事を他言したら娘は必ず死ぬぞ。七郎次だけに伝えろ」

大助の言葉に女房はきしるような悲鳴をあげた。面倒と見て大助は脇差の鎧に力をこめて女房の脾腹にめりこませていた。濁った呻きを洩らして崩れる女房にかまわず、大助と彦兵衛は小鈴に躍りかかっていた。

「た、たすけて」

救いを求める声を大助の掌がふさぐと、彦兵衛の強靱な臂力が小鈴のしなやかな両手を捻じあげていた。

彦兵衛は大助の腰から縄を取ると小鈴の手に巻きつけていった。縄はびっしりと濡れて、ぐいぐいと締まっていくのだ。息の詰りそうな縄目に、小鈴は失神寸前であった。

「縛ったら猿轡だ」

大助は膝で小鈴の頭を押えつけて、彦兵衛

の塩水が浸みこんだ手拭を器用にまるめた。

「う、ううっ」

唇をひらかせて歯を割り布を押しこむと、彦兵衛が悶絶している女房の腰から、扱帯を解くと小鈴の口をしっかりと縛った。

「急ごう、娘は俺がかつく」

大助は小鈴の体をふたつに折ると肩にかつきあげた。

ふたたび、凄まじい風雨の中を転がるように走る。敵の真只中である。発見されれば生きては帰れぬ。悪天候に助けられて、誰れの眼にも見つからず伝馬に戻れた。胴の間に小鈴を投げだし、大助と彦兵衛は伝馬を波に押しだす。

「今度は俺がこぐ」

大助は片腕の力だけで、伝馬を波にすべらせた。追い風を利用して船脚は早い。胴の間は波をかぶって水びたしだ。小鈴の全身はぐっしり濡れて、縄はさらに深々と喰いこんでくる。苦しい。烈しく揺れる伝馬の中で、あえいでいる小鈴。その傍で彦兵衛は必死に水をかいだしていた。

ようやく断崖の裂けめにたどり着けた時、執念が生んだ奇跡としか思えなかった。

そのころ、真弓はまんじりともせずふたりの帰還を待っていた。波と風の音に耳を澄

ませながら薪木をくべる。冷えたふたりを暖めるためである。

めらめらと燃え立つ炎を凝視する真弓の眼に、幼い日の惨劇がはつきりと甥えってくるのであった。余りにも惨烈な光景は、記憶の裏に刻明に残っている。真弓が火を噴きあげる屋内から、大助に救いだされた時には、浜辺は真紅の光に彩られていた。煙と悲鳴と呻きと血の匂いが交錯していた。

真弓は薪木の一本を掴み、新たに火の中に突っこみながら呟いた。

「玄鉄、いつかはこのように館を焼いてみせる。覚悟するがいい」

唇を硬く閉ざし、不倶戴天の敵に対する憎悪を、漲ぎらせた美貌は凄艶であった。

と、小屋の戸が合図通りに二度鳴った。

「大助と彦兵衛か」

答えて戸をあける真弓の前に、ぐしょ濡れになり、ぼたぼたと水滴をしたたらせたふたりが倒れるように入ってきた。彦兵衛が背負った小鈴をごろりと転がす。真弓がちらりと視線を走らせた。

「これが七郎次の娘か」

「そうですわい。ひどい時化でな。やっとの事で戻れましたのじゃ」
「すぐ体を暖めなさい」

真弓はふたりに言って、戸をしっかり閉ざすと小鈴の足もとに立った。

寝衣はびったりと密着して、なよやかな体の線をくっきりと描きだしていた。濡れた黒髪がうなじにべったりと貼りつき、磨かれた黒燿石のように光っている。頬に喰いこんだ猿轡の扱帯の色が不釣合に華やかであった。

大助と彦兵衛は裸になり、体をぬぐって火に手を差しのべている。小鈴の方は寒さと恐怖にがたがたと震えていた。

「お前も裸にしてあげる。寒いだろうね」

真弓は冷やかに声を投げると扱帯をはずして、小鈴の唇の間から詰められた布を引きだす。

「たすけて、たすけて下さいませ」

「お前は寒さに震えている。体を暖めてあげると言うのです」

真弓は大助の脇差を抜いて、水を吸いこみ固くなった後手首の縄を斬る。大助と彦兵衛は無言で真弓を見守っていた。

縄がゆるめられても、小鈴の両腕は感覚を失って動かぬ。真弓は手を伸して、小鈴のくびれた胴に巻きついていいる扱帯を斬った。そして両襟を無難作に押し広げたのだ。

「ああ、い、いやっ」

叫ぶ小鈴の頬に真弓の平手が烈しく鳴る。

自分と変らぬ年頃の娘から、加えられようとしている屈辱に、小鈴は息も凍るほどの恐しさを感じた。冷酷な双眸が美しい面立に、無気味に冴えわたっているものであった。

燃える肌

小鈴は寒さと羞恥に震え続けた。

すでに寝衣も肌衣もはぎとられ、むかれた上半身の白さと、下半身を包んでいる真紅の腰布が鮮やかだ。

炉の端に引き据えられて、炎にあかあかと照らしだされるのだ。湿った腰布からゆらゆらと湯気が立ち昇る。改めて後手に縛り直されて、縄は深々と柔肌に喰いこんで痛い。いったい、どうしてこのような目に合わされるのであろう。

「お前さま方はなぜ私を捕えるのです」

小鈴は氣力を振り絞って声をあげた。

「私の父は黒竜丸の長です。私を離さないとお前さま方は皆殺しにされる。縄を解いて帰して下さい」

真弓が小鈴の黒髪をぐっと引き絞った。眉が吊りあがり、小鈴の顔が仰向く。

「よくお聞き、十三年前、私達はこの岩間島で平和に暮していた。お前の父が黒竜党である事を偽って住みつき、手引きをしてこの島

を襲わせたのです。私の両親も部落の者も全部殺された。その恨みをこれからお前達に晴らしてやるのです」

真弓の執念に燃えた眼に射すくめられて小鈴は息を呑んだ。

「私は十三年と言う歳月を苦しめられた。七郎次の娘であるお前も苦しまねばならぬ」

「真弓さま、その娘をご随意になされ」

「大助、私はこの娘を七郎次の眼前で責めてみたい」

真弓は指にからませた小鈴の頭髮を更に強く引いた。毛根の抜け落ちるほどの痛みに小鈴は悲鳴をあげた。

「ひいーっ」

「黒竜丸はいつ戻るのです。素直に白状するがいい」

「し、しりませぬ」

小鈴の返辞に真弓は眉宇を寄せた。

「彦兵衛、手伝っておくれ。少々手荒いが我慢するがいい。この娘の両脚を揃えて縛るのです。縛ったら後手と足首を括りつけるのですよ」

「へい、承知ですわい」

あらくれた海の男の手である。娘のかほそい抵抗を無難作にはねのけ、大きな掌で掴んだ足首から小鈴の体を半転させてしまう。

「あれ、いやっ。離して」

まるで薪木でもたばねるように、小鈴の両足首と後手首をつなぐのであった。

「仰向けにするのです」

彦兵衛に命じて、今度は大助に言った。

「蠟燭を三本ほど火を点けて、大助」

どうやら、真弓は蠟燭責めをするつもりらしい。おのれ自身でもっとも苦しかった蠟燭責めを小鈴に課すのだ。

「黒竜丸がいつ戻るか答える気にならぬか」

真弓は火を点された蠟燭を持って問うた。

「そのような事は知りませぬ」

筑紫の港へ行った黒竜丸の帰還は知っている。だが、口にするのは余りにも無念だ。

「本当にお前が知っているか、知らないのかこれから調べればすぐに判る。これから、お前の体に蠟燭を立てます。人間の燭台を作るのです」

小鈴は息を詰めて瞼を塞いだ。

熱さに身を虫のようにうごめかせる小鈴。蠟燭を立てると、真弓は残った一本を持って小鈴を覗きこんだ。

「あ、あつい、許して、許して下さいませ」

「私の問いに答えれば許してあげる。黒竜丸はいつ帰るのです」

「そ、それは、知りませぬ」

かすかな微笑を浮べて、真弓は持っていた蠟燭を傾むけた。

「ひ、ひいーっ。ああーっ」

凄絶な悲鳴が小鈴の唇から噴きあがった。

「黒竜丸はいつ帰ってくるのです」

真弓は冷酷な声を響かせた。美少女が美少女を責め苛いなむ異様な光景。

「ふ、ふねは、二日の後に帰ります」

耐えきれなくなったのか、きれぎれに呟くと小鈴は大きく息をあえがせた。にんまりと微笑した真弓は、唇をすぼめて蠟燭をゆっくりと吹き消すのであった。

狩られた敵

時化のために一日遅れて、岩間島に戻った黒竜丸の舳先から、錨が鈍い水音を立てて投げこまれた。

積荷を総て売り渡して得た巨額の黄金を、玄鉄の館に運びこめば七郎次の仕事も終る。関白秀吉の野望に依る朝鮮侵攻が開始されて以来、多量の軍需物資の買付が続いている。黒竜丸の商売も繁忙をきわめていた。

七郎次もすっかり貫録ができています。いまは黒竜丸の副首領としての位置にあり、実際に水軍を指揮しているのは七郎次であった。「お頭、こんなものがありましたぜ。あの伝

馬が射ちこんだのかも知れねえ」

配下のひとりが奇妙な顔で、七郎次の前に一本の矢文を届けてきた。ひらいて、何気なく読み始めた七郎次の表情が、蒼ざめていくのが見えた。

「おい、金をすぐ陸へ揚げろ。俺も船を下りる」

命じておいて、七郎次は他の視線を警戒しながら、改めて矢文に眼を落した。

『七郎次に告ぐ。』

汝に積年の遺恨あり。本日、酉の上刻、汝は唯ひとりにて岩間の鼻の沖に来るべし。汝が娘小鈴は我等が掌中にあり。生殺は我が意の尽なる事を忘失すべからず。他言、または配下を以って小鈴を索さんとすれば、小鈴を惨殺しその首を汝に供すべし。約定通り現われたる時、小鈴を渡すものなり」

呪文の多き文字が並んでいた。さすがの七郎次も動揺している。小鈴が本当に正体不明の敵手にあるのか、確めるために駆け戻った七郎次に、これも狼狽している女房が事態の重大さを告げた。矢文の通り小鈴は何者かに羅致されていたのである。

酉の上刻。海は薔薇色に染まり、黄金色に彩られていた雲片が、墨色に変わろうとする頃七郎次は矢文の指示通り、ひとりで伝馬を繰

り岩間の鼻に向っていた。

小鈴を人質に奪られては、黒竜党を集めての強引な策も弄せぬ。海賊商売に明け暮れた七郎次だが、娘だけは可愛がっていた。

日輪が海に没し、残照で空が僅かに赤くなり始めると、一艘の伝馬が漕ぎ寄ってきた。七郎次が先ず声を放った。

「矢文を見てきたぞ。俺に恨みがあるのはうぬか」

「海賊も娘の生命は欲しいのだな。その太刀を俺に渡せ。小鈴が無事に帰してもらいたいならな」

「うぬ等、小鈴をどこに隠しているのだ」

「心配はいらぬ。これから案内してやる。さあ、太刀を俺の方に投げろ」

やむなく、腰の太刀をはずして、片腕しかない相手に投げた。

「うぬは何者だ。黒竜党を敵として勝てる心算か。うぬ等の五体を斬り刻んでくれる」

「黙って従ってもらおう。小鈴の生きている姿を見なければな」

冷やかな大助の声が七郎次の耳朶を打つ。例の断崖から入江に向い、浜に伝馬を着けると、大助は脇差の尖先を七郎次の脾腹にびったりと突きつけた。

「歩け」

命じられて、七郎次は意の尽になるおのれに歯を噛んで足を運ぶ。伸びた草を分けて、松林を通って小屋にたどりつく。

ぎいっと戸が軋んで、大助と七郎次を呑みこむ。

薄暗い小屋には、三本の蠟燭がゆらりと炎を揺らせていた。その赤い光を浴びて、立ちすくんだ七郎次は醜怪なほどに顔を歪めた。

小屋の梁から、ぶらりと垂れている白い肉塊があった。腰布をまとっただけの裸身を、後手に縛められて吊り下げられている娘。つまさは粗板の床から三寸ほどあがっているのだ。必死の思いで指を伸ばせば辛うじて届く高さである。この方法は生贄をじわじわと苦しめる狙いを持っていた。

がっくりとうなだれた顔は見えない。

「これが小鈴です。よく見るがいい」

真弓が髪を掴んで顔を仰向けた。頬をくびらせて猿轡が噛まされている。

「く、くそっ」

我を忘れて躍りかかろうとする七郎次の脾腹を刀尖がぐいと押す。

「動くな。娘を殺されたいのか」

大助の言葉が止めを刺すように響いた。

「彦兵衛、七郎次を縛りあげよ」

と、真弓が命じた。男の小袖をまとい、た



つつけ袴を着けた美少女の面立ちが、七郎次の遠い記憶の中に沈んでいるように思えた。脇差のために抵抗のしようもない七郎次は、容赦ない縄目の屈辱を受けねばならぬ。

「うぬ等はこの俺に何の恨みがあるのだ」
わめく七郎次の前に美少女が立った。

「十三年前を忘れてはおるまい。私はお前の奸計で滅された岩間の党首海之介の娘」

ぎよつとして七郎次は眼を睜った。

確かに憶えている。七郎次が黒竜党の副首領の位置にのぼる原因は、あの時の功績であった。漂流民をよそおい、玄鉄輩下の黒竜党を手引きした七郎次である。

「我等一党の恨みはお前から晴らしていく」
「馬鹿な、うぬ等の二、三人で黒竜党が滅ぶとでも思っているのか。明日にでも島狩りをされて、うぬ等は地獄行きだぞ」

「その前にお前は死ぬ」

悪魔の祭壇に座した死神であった。

「死ぬまでに苦しめてやる。お前は どうせ死ぬ身、苦しめても仕方がない。その代り、私達の受けた苦痛を小鈴が負うのです。お前の眼前で小鈴をのたうたせてやる」

「卑怯だぞ。約束を違える気か。小鈴には罪はない」

「黒竜党が卑怯でないと言うのですか。岩間

の部落には罪もない者が大勢いた。それを皆殺しにしたのはお前達ではないか」

「頼む。俺を殺すだけにしろ。小鈴を許してくれい」

真弓は静かに首を振った。

氷のように凝固した残酷な微笑。美しいだけに凄壮な翳を刷いて、七郎次の言葉を拒絶するのであった。

生けにえの苦鳴

真弓は自分に注がれている七郎次の視線から、恐怖と憎悪を受け取ると、復讐の快感に酔った。

「彦兵衛、蠟燭をこちらへ」と、命じた。

小鈴の白い裸身がだらりと伸びて、喰い入る縄目を僅かでもゆるめようと、懸命につきまさを床に向って動かす。指が充血して桜色に染まっているのが乏しい光の底に見えた。真弓の意企を知った大助が、探ぐるような眼を動かしている七郎次に言った。

「あの蠟燭をな、小鈴の足の下に立てる。指を炎になめられてはたまるまい」

「や、やめろ。やるのなら俺にやれ」

彦兵衛の手から、蠟燭を受け取ると、真弓はにんまりと微笑した。

「う、うう——」

小鈴の苦鳴が猿轡の奥で軋るように音を立てた。

足もとに立てられた蠟燭の炎が、つまさをあぶったのだ。熱さに足を縮める小鈴。蠟燭の長さはたつぷりとある。炎になめられまいとすれば両足を曲げねばならぬ。宙吊りにされて、足を曲げ続ける事は凄惨な苦痛を招く。胸を締めつけている縄は、更に深く喰いこみ、後に廻されている腕はめりめりと鳴るようだ。

「く、くくっ、くっ」

小鈴の咽喉が苦痛を耐えようとする呻きにふくれあがる。

「俺を早く殺せ。娘を許してくれ」

縛された全身をゆすって七郎次が絶叫するのだ。過去、残酷な海賊として生きてきた七郎次も、おのが眼前で娘を責められては耐えられなかった。岩間の女達を掠奪し、思うさまの淫虐を加えて、南蛮船に売り渡した記憶が、はつきりと甦えってくるのが恐しい。

「く、くうっ」

小鈴の呻きが七郎次の耳に惨烈に響く。

両足を長く曲げてはいられぬ。耐えきれなくなつて、つまさを下ろすと、そこには蠟燭の炎が待っている。虫のように跳ねる小鈴である。そのために体は揺れて、縄が息を絶

えさせるほどに苦しい。呼吸をしようにも、口腔一杯に布が詰めこまれ、猿轡で掩われているのだ。荒いあえぎに鼻腔をふくらませるのみであった。

「小鈴は苦しいのです。死ぬかも知れぬ」

と、真弓は冷たく言った。

「七郎次、お前はひと思いに殺してあげる。その代り小鈴はまだまだ苦しまねばならぬ」
脂汗を滲ませて小鈴の肌はぬらぬらと光っていた。蠟燭責めの限界であった。これ以上続けると悶絶するであろう。真弓は足もとの蠟燭を、おのが手に握った。

「真弓さま、今度はどうなさる」

彦兵衛がしゃがれた声を絞った。

復讐に憑かれた真弓に、魔神を感じる彦兵衛であった。幼い頃を知っている彦兵衛だけに真弓の変貌は、むしろ悲しかった。ひと筋に黒龍党への憎悪に生きてきた真弓と大助。彦兵衛は慄然たるものを憶えながら、真弓の命令を待つ気持になった。

「小鈴を下ろして床に横たえて両足を縛るのです。大助は水を運んでおくれ」

「小鈴をどうするのだ。うぬ等は外道かつ」

七郎次がわめき続ける。

粗板のざらざらした感触を背に受けて、小鈴は床に仰臥させられていた。のばされた両

足は膝と足首を括られて、一本の柔かな棒と化していた。

「猿轡を取ってあげる」

真弓は猿轡の結び目を解いた。くつきりと赤い跡が頬に残っている。疲れはてて、ゆるんだ唇をひらいて、真弓はずるずると詰めこまれた布片を引きだす。ぐっしりと濡れた布が、小鈴の屈辱感をあおった。

大助はふたつの手桶を小鈴の頭の傍に並べた。ふたつとも一斗を越す水が入っている。真弓は柄杓でまず一方の水を汲んだ。

合図を受けた大助は小鈴の顎をがっきと握んだ。

「この水を飲むのです」

あけられた口に真弓は水を注いだ。

「く、くっ——」

咽喉を鳴らした小鈴の眼が苦悶したのだ。涙が噴きあがってこめかみに垂れた。水は塩水だったのである。苦いほどの辛さ。口腔から咽喉の粘膜を刺激する塩の味。飲むまいとしても、容赦なく注ぎこまれる水は、小鈴の体内に吸われていくのだ。

柄杓でたつぷり五杯の塩水を飲ませた真弓は小鈴の反応を見守る。七郎次の狂ったような視線も小鈴に集まっていた。

「み、みずを、ま、まみずをのませて」

咽喉から鼻の奥まで、ただれるような痛みだ。いりつけるような乾きに小鈴は哀願するのであった。狙った通りの成果に、真弓は悪魔的な微笑を浮べた。別の手桶から水を汲む。ふたたび大助が小鈴の顎を砕けるほどに、指を喰いこませた。

「ぐ、ぐっ、ぐっ」

清水は次々と小鈴の口に注ぎこまれる。

交互に真弓は海水と清水を小鈴に飲ませるのだ。海水を流しこまれ、やむなく清水をせがむ小鈴を、たくみに利用しているのだった。おびただしい量の水を飲まされ、小鈴の白いみぞおちはぷっくりとふくらんでいる。「ゆ、ゆるして、も、もう、飲めませぬ」

真弓は七郎次に顔を向けた。

「お前の娘はもう水を飲めぬ様子」

「やめろ、やめてくれ」

「あのままでは苦しいのです。楽にしてあげよう。彦兵衛、水を吐かせておやり」

と、彦兵衛に命じたのである。

小鈴の裸身をまたいだ彦兵衛の、節くれ立った黒い掌が、ぬめやかな肌にあてられた。ふくらんでいるみぞおちを、掌でぎゅっと押しあげた。溺者に水を吐かせる方法である。「げえっ」

凄まじい苦痛に小鈴はのけぞった。膨脹し



きっている胃の腑から、水は押しあげられて逆流するのだ。

鼻と口から奔流のように噴きだす水。息がつまる。

驚くほど多量の水が、あふれてたのであった。

「ぐ、ぐっ、ぐう」

白く柔らかな肌を、彦兵衛の武骨な手が揉みほぐすにつれて、小鈴のみぞおちのふくらみは減っていく。

「もう一度水を飲ませてあげる。そして、また吐きだすのです」

「お許しを、もう駄目」

小鈴はかすれた声を絞るのであった。

復讐の炎

七郎次はかっと双眸を睨いて真弓を凝視した。血が潮やけた顔に這いのぼって、赤黒く皮膚を光らせている。凄惨な表情であった。

「俺を、俺を殺せ。早く殺すのだ」

真弓は冷然と首を振った。

「まだ命は奪らぬ。もっと小鈴の悲鳴を聞きたい」

「うぬ等、黒竜党の恐しさを忘れるな」

真弓をにらみ据えて、絶叫を放った七郎次は、がっとう歯を噛み合せた。どす黒く粘った

血が唇からだらりと垂れると、七郎次は頭をがつくりと落して体を傾むけた。舌を噛み切ったのである。眼前で責め苛いなまれる娘の苦悶のさまを見るに耐えられなかったのであつた。

「死んだ」

覗きこんだ大助が真弓を見あげた。

「さすがに、悪党、みごとに果てた」

真弓はいささかも表情を変えない。大助や彦兵衛は自らの驚愕を恥じるように顔を見合せた。

「お前の父親の死にさまを見るがいい」

小鈴の咽喉から泣き声が噴いた。縛られたまま、逆流した水に濡れた頬に、涙を伝わらせていた。真弓の面上に鋭い影がよぎった。

「大助、脇差を――」

真弓の語勢の強さに大助は脇差を渡していった。凝された刀尖に小鈴は嗚咽を忘れた。殺されると思ったのだ。唇をわなわたと震わせている。

「殺しはせぬ。父親の供養に尼におなり」

言いさま、小鈴の黒髪を掴むと、脇差の刃を喰いこませたのである。

「ああっ、いや、やめて」

ぶつつりとひとつかみが斬り取られた。真弓は無慈悲に刃を動かす。ざくつと音を立て

ては、濡れた髪が斬り落されて、粗板の上に海藻のようにくねった。小鈴は頭を必死に振って逃れようとする。

「お願いでございます。それだけは許して」

哀願も寄せつけぬ真弓の苛酷さを、大助と彦兵衛は沈んだ表情で凝然と見詰めていた。

やがて小鈴の頭髪は一寸ほどの長さを残しているだけであつた。頭の惨めな軽さに小鈴は悲鳴をあげた。

「彦兵衛、早く剃刀を」

鋭い声に気押された彦兵衛は、剃刀をあわてて差出す。真弓は水をたつぷりと小鈴の頭に浴せた。

「ひいーっ」

絶叫を軋ませる小鈴の胸に、腰を下ろすと両膝でがつちりと顔をはさむと、真弓はゆっくりと剃刀を動かし始めた。ぞり、ぞりと女にとつて、おぞましい音が拡がり、蒼白い地肌が浮きあがる。

「あ、あっ」

真弓は巧みに剃刀を使った。みるみるうちに、小鈴の頭は剃りあげられていくのであつた。それは妖しい美しさに満ちた光景である。青々とした坊主頭にされた小鈴は、どこか美少年の面影を感じさせた。

「お前はこれで尼になった。父親に念仏を唱

えておやり」

真弓は小鈴の胸から、立ちあがると、ぶつつりと縄目を斬ってやった。

「お、おにっ」

と、小鈴が真弓に向って泣き叫ぶ。両手で頭を掩うと、つるりとした感触が、羞恥と屈辱とを心の底まで浸みこませる。よろよろと起きあがった小鈴の腰から、残っていた布をはぎ取る真弓。

真弓はかん高い笑い声を響かせると、横たわっている七郎次の屍をまたいで小屋の外へ歩を運んでいた。閉ざした戸の内側で男達の野卑な声が、小鈴の悲鳴と交錯するのを背に聞いて、真弓は夜の天を仰いだ。

「私は鬼となった。復讐の炎に包まれた真弓と言う娘を、玄鉄に思い知らせてやるまで、私はさらに鬼となる事を誓います」

眼前に黒くそそり立っている山の彼方に、竜崎玄鉄の館がそびえている光景を、脳裡にえがいて真弓は全身の血をたぎらすのであつた。



腹切り残酷史譚・4

夏川浩一郎

鬼頭暁・絵

はらわたを投げつける勇士達

割腹して腸をつかみ出すばかりか、これを投げつけるなどというのは、後世では無念腹と呼び忌み嫌われたが、中世においてかなりの例がある。そして本当に無念の情を示す場合と単に勇気の極限を示す場合がある。

最も有名で、最も古いものは太平記巻七の「吉野の城軍の事」に見える村上義光の切腹だろう。戦前の国語教科書などに良く出ていたもので、その当時の少年は、こんなものに深い感銘を受けたものである。

護良親王のこもった吉野城が北条方に攻められ落城が迫った時、義光は親王の身代りとな

なって自刃せんと計る。そして親王が落ち行く後姿をやぐらの上から見送った彼は、今はいまだとやぐらの板を切り落して敵の頭上に姿をあらわし、

「我こそは天照大神の子孫、神武天皇より九十五代の帝、後醍醐天皇の第二皇子なるぞ。今逆臣のために亡ぼされ恨みをあの世ではらさんため自殺する。なんじ等は近く武運がつきて腹を切る運命となろうが、今わが自害する様を良く見ておいて手本にせよ」

と叫んで鎧ぬぎすて上半身裸体となり、白く美しい膚に刀をつき立て、左のわき腹から右のわき腹まで真一文字にかき切り、あふれ出る腹わたをつかんでやぐらの板にたたきつ

け、刀を口にくわえて突っ伏した。

この辺の書きぶりは、腹を切る義光の方が攻撃的で、見ている敵の方が敗けているみたいだ。この場合腹わたを投げつけることによって、親王の無念腹と見せ、身代り切腹の演出効果をねらったものと考えられる。義光の膚の白かったことも貴公子の切腹にふさわしかったであろう。とにかく目ざましい切腹でこんなカッコいい腹切りなら、やって見たいと思う人も多いのではないか。

同じく太平記巻三十三「新田左兵衛佐義興自害の事」に見える義貞の庶子義興の自刃も悲壮なものである。彼は敵の計略にはまり、多摩川の下流矢口ノ渡を舟で渡る時、舟底に穴をあけられる。そして腰の辺りまで浸水して来た時、家来の井弾正という者が義興の体を高く抱きあげたので、彼は岸にならんでいる敵勢に向って七生までもたたらんと叫びつつ、腹二文字に掻切ったところを弾正が露出した腹わたを引きちぎって河の中にガバと投げ込んだ。

その後、十四人の従者が舟の中で思い思いに自刃し、三人は着物を引き裂いて裸になり泳いで敵中に突入し斬り死にした。これは無念腹の例であるが、切腹した本人でなく他の者が腹わたを投げたという点が変わっている。

応仁略記には、一色大膳大夫の切腹が見える。彼は鎧をぬぎ捨ててやぐらに上がり、敵軍勢に向って名のりをあげ、腹十文字に切り開き、腹わたを巻き出して四方の敵に投げつけ、その後陣屋に火をかけさせてから、刀を口に含んでうつ伏せになって倒れた。

天正十年、甲州の高遠城の落城のさい、武田勝頼の弟、仁科信盛は若年ながら、天主において群る敵兵と死闘した後、見事十文字に立ち腹切って腹わたをからかみに投げつけて果てた。

中世戦乱時代にはこのような例がかなり多いが、中には腹わたを天井に投げつけたという物すごいものもある。

井上花剣坊という人の「武士道切腹史」には、佐々成政と冷泉隆豊の二例をあげているが出典不明である。隆豊の方は、天文二十年（一五五一）大内義隆が陶晴賢に背かれ長州大寧寺で自刃した時に供腹を切った。幕末から明治にかけて活躍した浮世絵師、大蘇芳年の無残絵の中に、冷泉隆豊切腹之図という作品があるそうで、江戸川乱歩氏は随筆「残虐への郷愁」で次ぎのように述べている。

「腹部の切り口から溢れ出る血は百尋のすさまじさ。もう半分地獄を覗いている顔の大写し、顔面は鼠色がかった薄緑、目はまっ赤

に充血して、唇と舌とは紫色だ」とは、どんなものか一見したいものである。

三好別記の中には、寺にこもって仏前で割腹し、腹わたを天井に投げつけた話がのっている。

江戸時代に入って、元禄十三年の十二月に深堀仇討または長崎喧嘩と呼ばれる事件が起った。

「武士道とは死ぬことと見つけたり」で有

名な葉隠（はぐくれ）の中に「十二月廿日長崎において高木彦右衛門中間と深堀三右衛門志波原武右衛門喧嘩、同夜彦右衛門家来共打ち返し、夜明けに深堀の侍十九人まかり越し彦右衛門以下数人打ち取り候事」とある。

泥がはねかかったのが争いのもとで、深堀志波原の両名がはずかしめを受けたので、その恥をそそぐため次の夜明けに相手の屋敷に討ち入って主従数人を切り殺したというのだ



から、今から見るとバカバカしいようだが、
当時はそれが武士の意地だったのである。

目的を達した後、深堀は重傷のためその場で切腹し、志波原は門を出て付近の橋の真中に立ちはだかり「われは志波原武右衛門と申す者なり、夜討に寄せて彦右衛門を打ち取り、家来どもを切り捨て、本懐を遂げたれば、只今、腹切って諸人の見参に入れん」と、呼ばわり、はだ押しぬいで左の脇腹に刀を突き立て矢声をかけて引回すところを友人が介錯した。

戦前、雑誌にのっていた深堀仇討始末という小説では、志波原は「今後武士を侮り無礼をはたらく者へのみせしめ、まことの武士の腹わたの美しさを思い知れ」と叫んで、腹かっさばいて腹わたをつかみ出して橋の擬宝珠に叩きつけた。その後何度洗ってもその血の跡がまざまざと残って消えず、見る人身の毛もよだつ思いをしたと書いてあった。

ここで葉陰について少し書いて置く。この書は鍋島藩中のいろいろな記事や挿話、それ等についての感想などをのべたもので、およそ血なまぐさい話ばかりであるが、随所に見える痛快な警句は捨てがたい面白味がある。その中で、深堀仇討と比較して赤穂義士の討入をこっぴどく批判している。



つまり浅野浪人の仇討はあまりに日がたちすぎてゐる。もしその間に吉良が病死でもすれば無為に終ってしまったのではないか。上方の者は分別があつて賢いから、人にほめられるようなやり方は上手だが、深堀仇討のように翌朝すぐに討入るような無分別なまねは出来ないのだろうと皮肉っている。また浅野浪人が討入後、泉岳寺で腹を切らなかつたのも落度である、と批判している。

これは筆者も同感で、主君の仇を討って敵の首を墓前にそなえたら、あとは心置きなくその場で全員割腹すべきであつた。そうしなかつたのは、中には命の助かるのを望んでゐた者もいたと思われても仕方のない行動であつた。一同はなればなれになつて腹もロクに切らずに首を切られる位なら、あの時皆で感激の中に切腹してゐた方が、忠臣蔵の栄光も一段と輝いただろうに惜しいものである。

明治元年の堺事件に関係した土佐藩士十一名の腹切りも凄いのだつた。次ぎに引用するのは鷗外作「堺事件」の箕浦猪之吉の切腹である。

たちまち雷のような声が響き渡つた。「フランス人共聴け。己はうぬらの為には死なぬ、皇国の為に死ぬる。日本男子の切腹を好く見て置け」と言つたのである。

箕浦は衣服をくつろげ、短刀を逆手に取って、左の脇腹へ深く突き立て、三寸切り下げ右へ引き廻して、又三寸切り上げた。刃が深く入ったので、創口は広く開いた。箕浦は短刀を棄てて、右手を創に挿し込んで、大綱を掴んで引き出しつつ、フランス人を睨み付けた。

馬場が刀を抜いて項を一刀切ったが、浅かった。「馬場君どうした。静かに遣れ」と箕浦が叫んだ。馬場の二の太刀は頸椎を断って、かっと音がした。箕浦は又大声を放って、「まだ死なんぞ、もっと切れ」と叫んだ。此声は今までより大きく、三丁位響いたのである。

初めから箕浦の挙動を見ていたフランス公使は、次第に驚駭と畏怖とに襲われた。そして座席に安んぜなくなっていたのに、この意外に大きい声を、意外な時に聞いた公使は、とうとう立ち上がって、手足の措所に迷った。馬場は三度目にようよう箕浦の首を墜した。

かくして次々と割腹する者十一人、最後の柳瀬常七は一たん左から右へ引き回した刀を再び右から左へ引き戻したので、腸が創口からグサグサとあふれ出た。

この切腹を実見したと言う正木という人の

手記には次のように書いてある。

それが終ると、箕浦さんは腹をくつろげて左から右へ、グッと大きく刀を動かした。忽ちドカッと青いような赤いような臓腑がひざから畳へ流れ出した。それに屈せず、箕浦さんは、血に染った手でいきなり自分の腹わたをつかむと、検使の外国人の方に向って、何か叫びながらそれを投げつけたのであった。

鵬外の方は大綱をつかみ出したと書いているが、大綱というのは腹中の内臓の前をおおって垂れている膜のことである。腸をつかんで投げつけると言っても、七、八メートルも続いている長い管で、かたんに引きちぎるわけにもいくまい。大綱ならば、そう言うことも可能だと思われる。さすが文学のみならず医学の方も大家の鵬外だけに、リアルな描写と思われる。

それにしても、今まで見て来たような昔の武士の腹わたを投げつけた実況はどんなものだったか。あるいは汗臓のようなものでも引きちぎって投げたものかも知れぬ。医学的な解釈が欲しいものだ。

衆道血達摩物語

腹を切って、腹の中に貴重品を押込んで、

貴重品を守るといふ話もかなりある。前に述べた佐藤忠信の場合も、意味は少しちがうが名刀を腹の中に押し込んで死んだ。

創作と思われるが、有名なのは「細川血達摩」である。これは細川の家臣、大川友右衛門と伊南数馬の男色にからまる物語で、友右衛門が美少年の数馬に恋慕し密通をとげたことが殿の御耳に入った。数馬は殿の小姓でもちろん寵愛を受けていた者だから、二人とも直ちにお手討になるところを、格別の思し召しで、ゆるされた。友右衛門はこの恩に報いるため、後日細川家が火災をこうむった時、猛火をおかして宝蔵に突入し、重代の宝物である御朱印を取り出し、割腹して腹中にこれを収めて焼失を免れることができた。

このような血だるま説話は江戸時代の人々のザンコク趣味に迎えられて、小説や演劇に色々と応用された。腹の中に入れるものは、御朱印、系図、名刀、名画（だるまの絵）等さまざまであるが、主人公はほとんど衆道に関係があるのは面白い。

葉がくれの中にも「相馬殿の系図をチケンマロカシと云い、日本一の系図なり」とありふだんあまり目立たない武士が、火災の折相馬家の系図を腹の中に入れて焼死に、それより血系図と呼ぶようになったことを記してい

る。従って、この種の実例が何れかにあったことと思われるのである。そしてこの実例がいろいろの血だるま説話を生んだものである。

皮剥ぎ切腹の話

大平記卷十三「足利殿東国下向の事、附時行滅亡の事」に、次ぎのような奇怪な記事がある。

今僅に三百余騎になりければ、諏訪三河守を始めとして、宗徒の大名四十三人、大御堂の内に走入り、同じく皆自害して、名を滅亡の跡にぞ留めける。其死骸を見るに、皆面の皮を剥ぎていずれをそれと見分ざれば、相模次郎時行も、定めて此内にぞあるらんと、聞く人あわれを催しけり。

これは、北条氏滅亡の翌年七月、高時の遺子次郎時行が信州に兵を起し、父祖の地鎌倉に浸入した時のことである。連戦連勝して鎌倉に入った彼の軍も、わずか二十日後には大敗を喫して自刃の運命となった。

そして鎌倉の長勝寺院の床にならんで切腹した四十三人の死がいは皆顔の皮が剥ぎとられてあり、どれが誰やら見分けがつかなかったが、時行も定めしこの中に割腹しているものと思われ、その盛りの短かさに聞く人みな

哀れに思ったというのだ。

聞くだにすさまじい話だが、何んぞ知らん時行その人はその死人の中には無く、身を似て逃れ去っていたのである。つまり死がいの顔の皮がはいであったのは、時行自刃とみせかけて無事逃れるための手段であったと解釈されるのである。

腹を切る者一人々々が、主君の無事をいって自分の顔の皮をはぎ落したのか、或は皮はぎ専門の者が、切腹死体を次々とはいで行ったのか、何れにしても気味の悪い話だ。

自殺に当って顔の皮を剥ぐということは、その当時は、ときおり行われたらしい。と言うのは、同じく太平記卷五「大塔宮熊野落の事」に、護良親王が敵に追及され自害を決意した時、従者に向い「自分が自害したならば皮を剥いで耳鼻を切り落して、誰の首とも分らぬようにして捨てよ」と命じている。

昔は貴人が戦死すると首を取られて、敵将の実見にそなえる風習だったから、その恥じを逃れるため、従者が首をかくすのに苦心した。そのために考案されたのがこの方法で、皮を剥いでしまえば判別出来ないし、たとえ着衣その他で誰と分っても、皮のない首では実見に供える訳にも行かぬから、そのまま棄てられて、さらし首は免れただろう。

護良親王の場合は、更に自分の死が味方の士気を衰えさせるのをおそれたのである。時行の場合は、自刃と見せかけることにより、逃亡に利用したのだ。

皮剥ぎ切腹を身代り切腹に応用した例が、直木三十五作「源九郎義経」の中にある。平治の乱で敗れた源義朝の身代りとなって佐渡式部大輔重成が切腹するくだりである。矢種を射つくすまで戦った後、

重成は、馬を乗り出して、矢を射つくすと共に「よく見い、只今義朝が自害致すぞ、我が手にかたりなどと、後日に、功を論ずるな」太刀を抜くと、その刃で、顔の皮を摺り剥ぎ、眉毛もなく――満面、血染めにしておいて「武士の最後とは、かかるものじゃ、よく見ておいて、語り草に致せ」と、叫ぶと、馬上で、その刀を取り直して腹へ突き立てた。そして右へ切り裂いてから、胸へ刃を突込んで、臍の辺まで、一気に――噴出する血、惨む血、流れる血。馬の鞍から、雪の上まで雨のように、たた――と落すと、どっと雪の上に落込んでしまった。

暫く、誰も近づく者がなかった。一人の侍が、「流石、聞えた豪の大将じゃ」と呟くと「戻ろう」と里人達は雪明りの中では



あるが、余りの凄惨さに、口を利けずにな
って、引っ返した。

村上義光の場合、単に腹を切っただけなの
で、間もなく身代りであることが知れ、追手
が出たのにくらべ、完全無欠な身代り切腹で
馬上の切腹だから凄惨さも無類である。皮を
剥ぐ方法は、額に切り口をこしらえて置いて
そこをつかんで下の方に剥いで行く、と何か
の本で読んだことがある。

二度腹を切った男

「死のう団」割腹事件が起ったのは、昭和十
二年二月十七日の正午すぎのこと。日蓮宗の
一派、血盟桜草団と称する団体の青年四名が
警視庁、宮城前、外務次官邸前、国会議事堂
前でそれぞれ割腹した。しかし何れも白昼、
都の真中で行われたので、直ちに病院にかつ
ぎ込まれて命は助かった。

その中の一人、青木桜花という二十二才の
青年は、警視庁の表玄関ホールにすわって腹
をくつろげ「死のう」と叫んで、白さやの短
刀で腹真一文字にかき切った。相当深く切っ
たので大腸露出の重傷だったが、直ちに手当
を加えたので死ねなかった。
傷をぬい合せる時、腹を切った男だとい
うので麻酔もかけなかったものか「痛い痛い。
こんなに痛いのなら死んだ方がましだ」と口
走ったのはケツ作だが、実感として受け取れ
る。

「死のう団」の腹切り事件は一応おさまった
が、この事件の中心人物である江川桜堂とい
う青年は結核を病んでおり、翌年の三月二十
日死亡した。その前日、彼の身代りになろう
と女団員一人が服毒自殺、桜堂の死の直後
には前記の青木桜花が割腹自殺を遂げた。更に
五日後には、またまた女団員二名が服毒自殺
した。つまり三人は殉死した訳で、昭和の時
代には全く珍らしいことである。

青木桜花の場合は、まさしく追腹であるが
二度も割腹したというのは、一千年に及ぶ日
本切腹史上にも、他に例があるまいと思われ
る。第一回の割腹も腸が露出するほど立派に
切っているが、昔ならこの位切れば手当のし
ようが無いから、ハイそれまでよ、医学の発

達した今日だからこそ助かったのである。

とにかく、こんなに痛い切腹を経験しながら、二度も腹を切るというのは全くすごい。二度目の割腹はどのようなものだったろう。もちろん介錯もないから、かなり深く切つて腸をつかみ出したかも知れぬ。かつて切腹した時の横一文字の物すごい傷あとをなでながら、再び、刀を腹に突立てようとする時の彼の心境はどうだろう。盟主に殉じて今度こそ立派に割腹自殺を果すことができるという喜びで一杯だったろうか。

一回目と二回目の切腹を比較できたら面白いと思われる。とにかくこの二十三才の青年は、二度割腹した事と、恐らく最後の追腹を切った事で、歴史に残るべき人物だ。

悲惨を極める錯乱の切腹

戦後は三面記事にあらわれる切腹事件もめつきり少なくなった。現代人、特に戦後の日本人にとって死後の名誉などということは問題外なので、困難な腹切りを敢てするのは、余程の物好き、多少とも精神に異常を来した者と言うことになる。異常と言え、精神錯乱状態の切腹は悲惨なものが多い。

切腹はこのようにすたれてしまったが、日本人の記憶に切腹が存在する限り、今後も時

たま試みる者があると思う。そして実際に腹を切る者は少なくなっても、日本人の心には依然として切腹賛美がなくならない。白虎隊の人氣はますます盛んだが、彼等が腹を切つたからこそもてはやされるので、もしも服毒や飛び込み自殺では問題にならないことは明らかである。飯盛山の白虎隊士の墓に行つて見ると腹を切った十九人の墓石は一まわり大きくて正面に並び、戦死した者の墓石は小さくて脇の方に並んでいる。忠義の心に変りあるまいが、これだけの差がつけられている。

自殺という事は決して賞讃したり奨励したりするわけにはいかぬが、人間、時として死なねばならぬこともある。そんな場合、一つ勇氣のある人は日本人の伝統に従つて腹を切るのも良いのではないかと思う。

△あとがき▽ 短かくまとめるつもりで書き出したら、あれもこれもと欲が出て、意外に冗長散漫なものになってしまった。内容文章ともに意に満たない点が多いが、書き直すのも大変なのでこのままにした。

諸者諸賢の御批判をいただければ幸いである。なお本稿は、切腹研究家、中康弘通氏のお力添えによるところ大なので、ここに深く感謝して筆を置く。(一九六三年七月記)

愛読者のみなさまへおねがい

私ども三誌では、この数年間の世情にかんがみ、かねてから編集面の自粛刷新を計ってまいりました。

元来、私どもの雑誌は、けっして単なる性雑誌ではなく、特殊な専門誌を自負して発行してきたのですが、青少年保護育成に関する論議が、とみに高まりつつある現今の情勢に対処すべく、いっそうの自主規制を、このたび申し合わせました。

愛読者の各位におかれましては、いろいろとご不満もございましたが、なにとぞ、事情おくみとりの上今後ともご愛読のほど、ここに、改めてお願い申しあげます。

「奇譚クラブ」 発行所・天星社
「風俗奇譚」発行所・文献資料刊行会
「裏窓」 発行所・あまとりあ社

汚辱極楽神の国

淡路周五

お食事中あるいはお食事の前後には
絶対にお読みにならないでください



恭子がピアノを弾いていると、不意に背後に男が二人立った。

「あれえ。誰か来てえ。お母さん」

と叫んだが、何の答も無い。

男の一人は恭子の首のまわりに野犬狩りの時使う針金の輪を引っ掛けて一寸締める恰好をしてみせ、

「命が惜しかったらお嬢さん。余りあばれない事だね」

ブラウスを脱ぎ、スカートを床の上へずり落とし、シュミーズを脱ぐと、もう何一つ身を掩うものは無いのだった。あの位裸を人前に曝すのを嫌がる女性の服装としては大層裸に

なり易く出来ている。

「こうして不動の姿勢をとらせてみると不動の姿勢は意外な程、女体には残酷なポーズである事がよく判りますね。乳房の隆起もこれでは、ただ突き出している房に過ぎず、体の線も全然出ず、エロチックな雰囲気を醸散させる筈の臀部の隆起も、ただ無恰好に突き出ているとしか見えませんかね。

女は首をかしげたり、腰をひねったり、脚の一方を前に出したりして、しなを作るのが自然なのに、不動の姿勢となると、どの女にも多かれ少なかれある容貌の傷や、左右の不均衡を隠せないという事もあります。更に

重要な点は、男より女の方が、四つ足動物から進化した度合が浅くて、四つ這っている方が楽だからという事です。男は外で獲物を取って来ますから二本足で立つ事が多かったけれど、女は洞穴の中に寝そべって威張っていたから進化が後れたというわけです。女の大きな臀や太い脚は一寸見ても判るように、二本脚で立つのに適していません。男は四つ這うと頭部が大き過ぎて無恰好ですが、女は頭が小さくよく似合います」

恭子の首に掛けられた針金は真直ぐ上に延びて、天井に打ち込まれた滑車を通して男の手に達し、男が引っ張ると、彼女の首が締まる仕組みになっている。

「世の中には虐められて快感を感じる女もあるらしいけれど、俺としては女が快感を表してくれたんでは虐めていて面白くない。そこでこの、大衆を見下してお高くとまっているピアノリストに白羽の矢を立てたってわけだ。健康で健全で、ヒューマニズムに溢れていて誠意と努力があれば必ずこの世で愛され、成功すると確信しているこの馬鹿女に徹底的に挫折感を味あわせてやるんだ」

「どうだね、お嬢さん。貴女の学校では幾ら悪い事してもこんな屈辱的な目に遭わされる事は無いだろう。女生徒の中には、口で冷

やかされた位でも自殺する者が居るそうじゃないか。貴女もそろそろ線路にでも跳び込みたくなつたろう。それにしても針金が締まってくる背伸びするのはどういうわけだね。七面鳥みたいに赤くなったり青くなったりしやがって」

そこへ恭子の級友達が入って来た。

「やあ、恭子さん。大層深刻な顔してどうしたのよ。この男の人達は大学の学生さんで、私達の友達よ。一寸悪戯好きでね。一寸ギャングごっこをやってみたんでしょ。それにしても貴女はひどく真に受けて早々と裸になっちゃったものね。余程体に自信がおりなのね」

友達の前で素裸で不動の姿勢をさせられて、いるなんて極りの悪い事なので、未子の言葉に乗って、つい体を楽にしようとすると、忽ち針金を締め上げられたので、忽ち真赤になりながら不動の姿勢にかえった。不動の姿勢は教練ばかりでなく、SM基本の姿勢なり、というわけだ。

男の一人は、首を鷄みたいに締め上げられて、けえけえ喘ぎながら地面を蹴っている恭子の頬をびしびし平手打ちにし、恭子の眼から思わず涙がこぼれ落ちた。

未子と安子は、きやあきやあ抱き合って喜

び乍ら、

「恭子ってユーモアを解しないのね。冗談でぶつ真似をしただけなのに、本気にして泣いてるわ。おかしいったらありやしない」

首が締ってくるにつれて女の体というものは動物的になり、便意を催して来る。

その手首を後手に縛り、仰向けに突き倒して、背中を床につけ、腰の処で体を二つに折り、脚が上体の上に掩いかぶさるようにして背中の下に組まれた腕で臀を高く突き上げるようにし、爪先が床に触れるようにする。女は男の予想に反して、臀部は曝け出してもむしろ顔を隠したが、このポーズだと脚で顔を隠せるので、まんざら嫌なポーズでは無さそうだ。

この恰好で、不自由な腕を動かして肘を突いて、更に脚を揺らしてその反動を使えば、顔の向いている方向に進むのだ。

「ねえお嬢さん。私はむしろ女性の地位を向上させる為にこんな憎まれ役を買って出たんですよ。女性の向上を阻むものの最大のもは女性の羞恥心ですよ。引っ込み思案で発表しないし、人前でほろを出すまいとするから何時迄も間違が直して貰えないのです。そういう点から考えてみますと、この恰好は羞恥心を克服する練習には打ってつけのものだと

思いますね。何といっても女の一番隠すべき場所を一番見え易い所へ曝したポーズですし臀部をこうして高く突き上げると、そうなくとも大きい臀部の大きさが強調される事になるわけです。女の最もぶざまなポーズだと云ってもいいと思いますね」

「さてそのポーズで便所の汲取口まで這って頂きましょう、お嬢さん」

このポーズは胸を大へん圧迫するので、全然動かないでいても苦しいのに、これで這うとなると、無理に曲げている背骨や肘が痛んで来る。四間進むのに、五分で行ければ早い方だ。男は恭子に蠟燭を挿し込んで立てる。体を曲げているのが苦しくなると彼女の脚先が床から離れ出すと、挿して火を灯した蠟燭の蠟が床にこぼれて、たとえ監視人の目は無くとも彼女の怠慢の証拠となるという思い付きだ。但し溶けた蠟燭の滴りは、火傷を作る程の熱さもなく、その点に加虐の主眼点はない。

恭子はせき立てられるようにして中庭に連れ出され、あおいの葉かげの便所の汲取口の木の蓋が開けられ、

「中に入るんだ」

丁度六月の初で、裸でも寒いような気候ではないが、それだけに、草のにおい、湿った

土のにおい、苔のにおい、木の蓋に着いているかびのにおい、開かれた汲取口の暗い、底知れぬ奥から吹き上げて来る酢っぱいような腐敗物の臭気が蒸せ返るばかりに鼻をついて来た。星も無い夜で、雨が降る前の様に蒸し蒸ししていた。

彼女はその汲取口の中へ足の先から入って行った。首を締められた頃から催おしていた便意を皆の前で洩らして羞づかしい目にあうより、いっそ便壺の中へ漬かる事を選んだとも云える。自分の家の汲取口であり、自分がいつも使用している便所でありながら、こんな側から便を見た事が無かったので、まるで遠いこの世の果の陋屋へ連れ込まれたような気がした。

彼女の入る時通った汲取口は、コンクリート製で、縦三十四糎、横三十糎の矩形で、厚さ二十糎、腰や肩は、斜によじって、コンクリートに肌を擦りつけるようにしないと通過しなかったのである。大体この汲取口なるものは、便を汲み取る時、肥柄杓が入る為のもので、この口を人体が通過する事があるうなどとは、製作者は夢にも思っていなかったろう。仰向くと楕円形の便器の嵌め込まれている便所の床、(床は恭子の頭上に天井の様にのしかかっているわけだが)の裏側が見え

る。もう三代も前建てられた家なのに、便所の床の裏側の木は新築の家のように白いので一寸不思議な感じである。

さて、恭子は壺に脚を突っ込んだといって、もともとこの便所は恭子に全身を浸して貰う為に作られているわけではないので、中央の壺は深さ五十七糎、内径が、口のところで三十四糎、円周百二十六糎の普通のかめに過ぎないので、彼女が両脚入れて立つと、腿のへんから上は上に出てしまい、肩から上は便所の床の楕円形の孔を突き抜けて、便器の上へ首が覗いてしまう。便器に跨って便をするだけの人には、便壺は限りもなく底の方の深い、地獄の淵に見えるかもしれないが、いざ漬かってみると、こんなに浅い、底の知れたしろものだったのである。壺に脚を突っ込んだままで、便の溜りの上に腰を下そうとすると、便所の敷地の広さは一辺九十糎の正方形に過ぎないので、腰が壁につかえて、中腰より低くはなれない。前の方も、肩がつかえて、便の中へ上体を浸す事がどうしても出来ないものである。そこで今度は壺から脚を抜いて、体を腰の所から二つに折り、尻から壺に入っていくと、便の水面も上昇するし、やっ

と首まで浸す事が出来た。壺は地面より二十糎程低く埋められて居り、壺の縁からセメン

トがぬられて、セメントの斜面はすり鉢状になり、便所の壁際まで及んでいる。この斜面の部分にも一杯に便が溢れて、セメントの上に突いた、恭子の肘を掩い隠している。便の表面から便所の床までは六十糎位しかなく、上から覗く時は遠く見えるが、便壺の中から仰ぐと、すぐそこに迫って見える。

便の表面と云っても一樣に黄褐色というわけではない。上方にある便器の孔の位置から見て、丁度尻の来る位置から便が次々と注ぎ込まれ、尻の来る位置は大体一定しているため、一ヶ所にだけ集中的に便が注ぎ込まれ、その為壺の中央部稍々後寄りの所が一番便が盛り上って、新しく、鮮黄色をしていて、まだ排泄者の体温が残っているような感じさえする。

こうして一ヶ所に集中的に投入される便の為、便は底へ押し沈められ、便壺の底まで達すると、今度は壺の壁に沿うて押し上げられて来る。だから同じ便壺の表面でも、中央部は卵の黄味の如く鮮黄で、それを取り巻く周囲は全然古い便で、黒ねずみ色である。特にきんかくしの真下より前の方は、新鮮な便が行く事が最も少いので、黒い便の表面に、かびが生えて、桃色から橙色をしている。腐ったソーセージの様な色もあれば、歯科医の棚

に並んでいる歯ぐきの模型のような色のもある。苔の様に緑色の部分もあるし、悪酔した人間の嘔吐の様な白っぽいものもある。

便が新しい壺の中心部は、便がなま暖かいが一寸壺の縁に近くなると、便所付近の湿った土の様に冷く、海水浴場で、暖い水と冷い水の出会った箇所へ来た時の様な気味悪い肌触りである。更に不潔な感じを掻き立てるのは壺の表面を掩ううづ高い塵紙の山である。一枚一枚糞を包んでものである塵紙の上に更に便が溜り、その上に又汚れた塵紙が溜り、という風にして、壺全体がべとべとに濡れた布団か濡雑巾の様で、その中に体を、沼に杭を打ち込んだように埋めている恭子は、糞まみれの肌着を何十枚も着た様に重たい感じがする。その塵紙の堆積の上を蛆虫がうようよ這いまわって、蚕がひっきりなしに桑の葉を食う様に、一心に便の上に生じるかびの類を食っているのである。今迄気付かなかったが、てらてら光りながら動いているのはことごとく蛆虫の背中なのだ。それが便の上にぽつぽつ孔を残して便の中にもぐったり又浮かび出たりして、ほうふらのやるような運動をやっているのである。

しかし又、考え方を換えれば、便は確に汚いが、嗅覚はすぐ麻痺するし、肌触りも壺の

中でじっと動かずにいれば、堪え難い程ではない。そもそも大便是大して臭気は無いのだ。屁のような強い臭気は、メルカプタン(RSH)とか硫化水素(H₂S)とか硫黄化合物のもだが、排泄後三十分もすれば発散して無くなってしまう。あとは御飯が腐るように便が腐るので、酔っぱい臭気がするだけである。

肌触りの方も、人体の中で、接触による気味悪さを一番敏感に感ずるのは、指先と蹠で人間は足で踏んでぬるぬるしたり、指で触つてずるずるしたりする物に出逢えば、本能的に、もう体の他の部分が接触しない内に逃げ出してしまふので、手足の先以外は接触感には鈍感なのだ。だから逆に、手足が気味悪く感じるものに対して、一寸無理をすれば、全身その気味悪いものに浸して、温泉にでも漬かったように平然として居れるというわけである。だから、指で触るのものはばかられるようなものを舌にのせる事さえ可能なのだ。「實際女の傲慢さを矯正するには、便を食わせるのが一番ですよ」

と男は云う。女は一寸教養がついたり社会的地位が上ったりすると、やたらに清潔好みのようなふりをするのが、大体、洗濯、病人の世話、清掃、汚物の処理は女の役目で、その為に女は汚物に対して感覚が余り鋭敏でな

いように、神様によって作られているのだ。活花や刺繍の好きなセーラ服の乙女がしばしば歯も磨かず、風呂にも入らず、汚れた綿を挟んで歩いて平気でいる。だから一寸清潔ぶってめかし込んだ女でも、一寸脅迫してやれば、他愛なく糞を口へ押し込むのだ。

今や便意の高まって来た恭子は、青くなったり赤くなったりしながら、体をゆすり出し「出した便はすっかり又、口の中から胃の中へ食べてしまいますから、とにかく一応、体の外へ排泄させて下さい」

と頼まざるを得ないのだ。壺が浅いし、口が狭い為、恭子の肛門は便溜より上に突き出たままである。そこへ唇を近づけて、出て来る便をべっとり舌に載せるのだ。

何時の間にやら恭子のリサイクルを聴きに集るよりもっと多くの見物が押しかけていて、汲取口から内部を覗きこむようにしながら、「げえーっ」「がぁーっ」

と吐く真似をしてからかっている。

とにかくこれは、口一杯に頬張って食べようとしたって無理で、どうせ便は食べよい筈は無いから、薬でも飲む要領で、少し口に入れて、一気に呑み込む事だ。便をこれから食べるのだ、などという事は忘れて、何かアイスクリームか何かの事を思い浮かべながら、

さつと口にはうり込んで、ぐいとのみこむのだ。ちゃんとした食物でさえ、魚のはらわたや、臭気の強い野菜や、足で踏みつぶされた蒸し芋や御飯や、人が一度口に入れてから吐いた魚の肉は食べにくいものだから、便の食べにくさは想像に余りある。

便がバターの塊のように、真黄色で、夾雑物の無いものならまだしも、何かぶつぶつして、米粒が十分に消化しないで出て来たような処があるかと思うと、人参なんか食べもしないのに、出た便には人参の碎けた様な粒々が混っているように見える所もあり、胡麻のように黒い粒々や、豆腐のかけらのような白い刻んだような破片、などがぎっしり握り固められたような感じで、しかも、その全体が、腸の内部を連想させる様な、芋虫型なのだ。

恭子は、しかし今や、娼婦の様に、与えられるものは、何でも受け入れる気分になっていた。ピアノ一筋に生きて来て温室育ちで、この世の悪に染まった事の無い恭子は、ピアノを禁じられて、便壺の中へ漬けられたまま蛆虫や、種々の寄生虫に体中喰い荒されて殺されてしまう運命なのだと知らされた時、体に毒だからといって拒絶する理由もないように思えて来た。

次々と自分の肛門から押し出される蒸し肉の様な便を、口へ受けては、ぐいぐいと呑みこみ始めたのである。見物人達は、彼女が名演奏をやったのけた時よりもっと興奮し、彼女の、この、思っても見なかった潜在能力にやんやと拍手喝采を送るのであった。

便は腐敗した食物よりはずっと無害で、食べよい。便は、消化し尽した食物のかすだけで出来ているのだから、さつま芋の繊維や豆のおからを食べるのとかわりはない。便は少くとも尻から出た時には腐ってもいないわけで、消化液によって化学変化を受けたに過ぎないのだから、気味悪がる人間は科学的ではないのだ。便を不潔に感じさせる要因である黄色い色も、胃腸肝腸すい臓の、ペプシン、トリプシンなどによって、蛋白が分解されて出来たウロトロピンの色の過ぎないのだ。

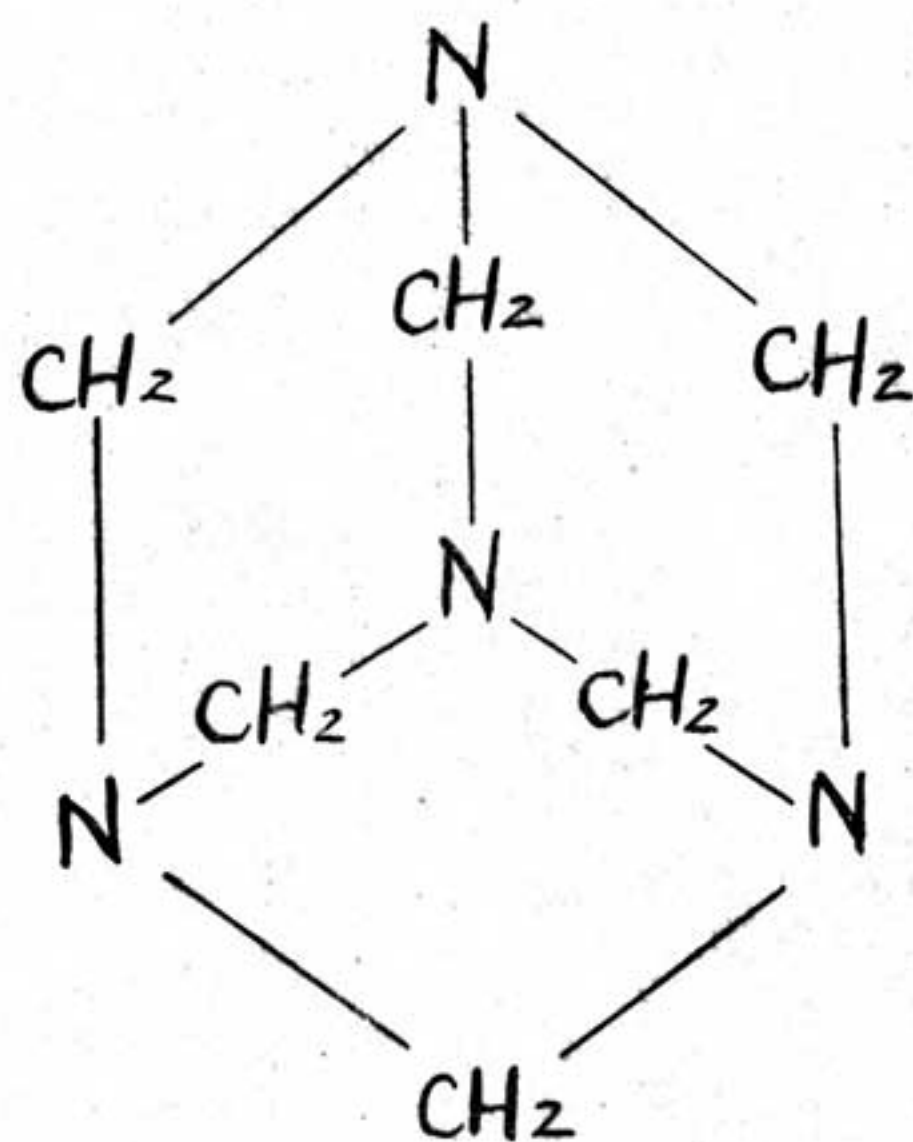
レントゲンで胃をしらべる時のむバリウム液程の飲みにくさもない。一寸喉の入口の辺を通過する時、熊の胃のように苦い所がある位の事で、臭気も味もありはしない。この苦いのは、肝臓の消化液が便の中に混って出ている為である。舌は部分によって、甘さを感じる箇所、辛さを感じる所と各々分れているように、苦さを感じる所は、喉の入口の辺にあるのであろう。

「もっと口の中でよく噛んで味あわなきや、まるで嫌いなものを呑み込んでいるように見えるぢやないか」

と云いながら、男達もまんざらではない御満足の態だ。

「なあに、もともと男が女を美化しすぎているのが変なのさ。男の心を奪う女の大きな臀部も、江戸時代には隠した様に、醜悪さと紙一重ではないでしようか。女の容貌だって、大半の女の顔は、発達を阻害されたような小さい頭蓋骨が、欲深さと目先の利欲だけで凝り固まり、ヒステリーじみた狭い額と、馬鹿な為一層えこじに取り澄ました、つんとした顎をしているのに、それを夫の財力や地位のバックで支えられて、装身具でカムフラージュして、上品そうにほろかくしをしてみせているに過ぎないのではないでしようか。女の横着な臆病な動きは服装の為に、上品、典雅と見え、高慢と浅智慧と、ふてくされた無口は、上品、優美、深みがあるともみえるのでしろう。」

女が大便を排泄するのは当然の事だし、排泄する為に顔を真赫にして、肛門の筋肉が、便の出る前兆でブザーの様に鳴るのも、むしろ女にふさわしい行為です。その排泄された黄褐色の臭気ふんぶんたる、むせ返るような



ウロトロピン

物体が、この取り澄ました、すんなりとしたお嬢さんの体内で生成され、体内に存在していた事をまだ信じられない人の為に、又、もう一度口から体へ戻して頂いて、確に女の体内にこの汚物が存在し得るものであり、何ら調和しにくいものでない事を示したわけです」

さて恭子の方は、男の長演説をよそに、喉元まで突き上げてくる、便のげっぷをこらえて、又胃袋まで押し戻すのに苦労していた。便の不愉快さはむしろ呑み込んでしまっただけから次第に發揮されてくる。便の塊の中には沢山の気泡が含まれていて、胃の中でこの気泡がやたらにふえ、マッチをすった時の様な臭いのげっぷとなって、ラムネの泡状の便の粘

汁が食道を逆流して喉元に噴出して来る。食物のげっぷなら口の中まで出ても、又飲み込む事が出来るが、便のげっぷとなると、便を飲む込むのがやっとだったのだから、口に出たげっぷをもう一度飲み込める自信がない。だから、げっぷを喉までで押さえようとして必死になっているのだ。

「御飯は白いので、これが植物であり草である事を忘れていますが、こうして大便になって黄褐色に化して、堆肥のようなにおいを立て始めますと、米も、馬の食うかいばや草と大差のない成分である事が判ります。便といっても、見方を変えればよもぎ団子と余り変わりはない感じですよ。お嬢さんもピアノなんか

弾いてミューズの女神であるかのように見せて人の眼をたぶらかさないで、本性のまま、草原に四つ這って、めえめえ、とても啼いていた方がお似合ではないですか。そうやって露出したお嬢さんの赤味の出た臀部を見てみると、山羊か猿の尻を連想してしまっていますね。その豊富なメラニン色素をお顔の方の口許へでもぐると困んで移植されたら如何ですか」

「まあ恭子さん。ずい分気持よさそう。泥の中の蓮の花って感じね」

と、傍のボーイフレンドの大学生に媚びる為に未子が同性の恭子を嘲笑している。

夜も便所の中で眠らねばならない。最初は横になると後頭部まで便に漬かり、頭髪が、タオルの様に便を吸い上げて、根こそぎ糞まみれになるし、蛆が顔の上を一面に這い回るだろうし、蚊や蠅も遠慮会釈なく襲いかかり唇や髪や耳や鼻孔や瞼に卵を産みつけるだろうし、掌は仮に縛られてないとしても糞まみれなので蚊を殺すことも出来ず、寝ずに起きていようとしたが、疲労には勝てず、花崗岩に頭をのせて、とうとう豚の様に意地汚く寝てしまった。

便の気味悪さは、中に漬かるにしても、口に入れるにしても、鋭さの無いのが特徴であ

る。鞭で打たれる時の様な苦痛があるわけではなく、教授用大珠盤の上に坐らされた時の様に、もうこれ以上一秒も我慢出来ないという限界があるわけでもない。口に入れて呑み込むにしても、ひまし油や熊の胃のように飲みにくい訳ではなく、肌ざわりの気味悪さといつても硫酸を敏感な所に塗られた様な激痛は無い。それなのに何ともかとも云えぬ嫌な気持なのである。健康に悪いとか、病気になるかもしれないから恐いというだけのものではない。ただ臭気を嗅いでいるだけで、その腐敗した雰囲気は自分の精神状態まで染まってくる。顔廢的になって来るといふわけである。

よく世の中には、虐待に堪え、何くそと齒をくいしばって、妨害をはね返し、初志を貫徹するというのがあつた、今の恭子についてそれを云えば、いくら汚物責めにされても、けろりと忘れて、再びピアノの練習にうちこむか、或は、恭子の為を思つて恭子の高慢な性根を叩き直す為に男達がいろいろ心尽しをしていてくれるのなら、感謝の言葉をのべ、涙を流して両手を突いてお詫びをするかである。

しかし、便壺の中の雰囲気は、そんな純真なものを嘲笑し、張りつめた心をぐにぐに

や、なまくらにしてしまうものがある。腹を立てていても、根性の腐った人に出会うと、怒りをぶちまける気にもならない様に、又、よい音楽や精神訓話などを聞いて、悲壯な、真面目な悔悟した気持になつていても、だらしない恰好をして横に脛を出して坐っている中年女のしまりの無い姿を見ると、自分のいきり立っていたのが馬鹿馬鹿しくなつて来る様に、便のにおいをかぎ、便の色を見る時、いよいよ心を決して便を食べようとしていた気が崩れてしまうのだ。それが便の食べにくさの一つの理由でもある。兵營で命も棄てる気持になつていたのが、面会に来た女共の嬌声で阿呆らしく感じられてくる様なものだ。

便は氷詰の魚の肉や、甘酒にした御飯粒の様にふわふわして力が無く歯ごたえが無いのも腐った感じを与える。いわゆる生命力といったものが一切抜け去つた、藻抜の殻と云つた感じである。菌糸類を固めた様だ。

便の醜さは、ひどく人間臭が強く悪の雰囲気の様子に人間的だ。例えば自分の便を、誰かを虐める為にしる、人に食べさせるのは嫌だと思ふ。便には自分の独特の体臭、しかも人に知られたくない自分の悪い面を象徴する様な臭気がしみついているので、それを人の鼻先に突き出す気にはなれないわけだ。

便の外側に魚の小骨がくっついてゐる。数時間前に食べた魚の肉がこの便塊に形に変えたのだという事を如実に物語っている骨だ。自分の胃腸が苦勞して魚をこの便の形にこね上げた苦勞も手にとるよう感じられる。先刻の魚の肉の変つたものなのだ、と思うと、ひどく食べにくく感じられてくる。

こんな風に人間的だからこそ、非人間的な悲壯な決意を崩してしまうのだともいえる。ところで行動の自由な人なら、嫌なにおいを嗅いだら、ああ嫌だと顔をそむけて逃げ出してしまえるだろうし、不愉快なものは見さえせねばいいわけだが、今恭子は無理矢理それを見るように強いられるのだ。

世の人は、誰でも一日に何度か便所に行くし、便が出なければ命取りでさえあるし、どんな便が出るかという事は健康のバロメーターでさえあるのだが、それなのに、排便後、便壺の中を覗く人が無い。世の人はビジネスライクに、便意を催したら便所へ行つて用を済まし、気にもとめていない。便所とはそれ位の存在意義を持った持っていない所だが、便意を催した時、そんな人を、便所へ行かせないで堪え続けさせたらどうだろうか。便意の高まりと共に、もはや便意以外の事は何一つ考えられなくなつてしまふだろう。

こうして、健全な精神と健康な身体の持主の恭子を無理矢理に便の腐敗的な雰囲気の中へ押し沈めようとしているのだ。

何しろ河井恭子と云えば、出世コースをばく進して来た女で、一寸やそつとでは顔廃気分になりそうにはないので、余程の荒療治が必要なのだ。

「一体いつまで此処に入っていないくてはならないんですか？」

「他の事なら何でもしますから、此処から出して頂けませんか」

「一体何の必要があって私をこんな処へ監禁なさるんですか」

訊きたい事はいくらでもあるけれども、女の分際で、男の人に向って自分の方から話しかける事は、高慢な事になり、こんなにお仕置をされているのに少しも心が改っていない事になるので、ますます出しては貰えなくなってしまう。

便を汚いと感じなくなったら、出して貰える、としても、

「もう便を汚く思わなくなりましたから出して下さい」

と云う事は云えない訳である。汚く感じないのなら出たがるのは変だから。

とにかくこうして一切言葉を封じられて豚

の知能にまでなり下って女らしくなる様に強制されるというのは、たまらなく辛い事である。女を虐めるシーンではよく猿轡が嵌められるが、これは声を立てられては人に聞かれてまづいからではなく、一切の質問を封じられて、一体いつ宥されるのか、どういう風に振舞ったら宥されるのかも判らず、ただ絶対服従を強いられる処が、虐める側にとっても流飲が下るからである。合理主義教育を受け何でも発言し、討論する癖のついた近代女性にとって、何一つ反問もせずただ服従し続ける事は、なかなかいい鍛錬になる事だろう。「貴女が苦痛を忍ぶ事によって、こんなに大勢の人が救われる」

と云う様な事情でもあれば、彼女の様な純情娘には案外しのび易いのだが、何の必要も理由もなく、ただ彼女の才能を、何の心の準備期間もなく俄かにこの世から葬り去ろうとされ、彼女が心も体も腐敗してゆくのを誰一人知らずにいるという事は、一度有名になりかけていた才媛にとっては気の狂いそうな青天のへきれきに違いないのだ。

余り長く便壺に監禁しておいたのでは、垢もたまり、髪も光艶が無くなり、ほつれたり生え際が見苦しくなってきたりし、しらみが湧き、肉も落ち、表情にも女らしい愛嬌や張

りが無くなって、監禁しておく面白さが無くなってしまふ。

憐憫からではなく、そういう理由でやっと宥されて、隣のボックスの小便壺の方へ移り体中に付着した大便や塵紙を洗い落す事を許された。恭子が便所の台石の花崗岩に肘をかけて、体を浮かしかけると、恭子の体が肥柄杓の役をして、便壺の中が大きく掻き廻され、わっと新しい臭気があたり一杯に立ちこめた。小便壺の方へは、境の花崗岩を跨ぐとすぐであるが、臭気の点だけで云えば、小便の方が遥かに閉口である。

葉緑素の様な、葉を搾った汁の様な臭気がアンモニア臭と混ざって、鼻の粘膜を刺戟し、卒倒しそうである。小便は直接に植物にかけると雑草さえ枯れる位であり、余り長く浸っていると皮膚がただれて、体中湿疹が出来始める。又、体中に着いた大便を洗い落すのは、便壺に目を瞑って跳び込む時以上の気味悪さである。跳び込む時には便を見る必要は無く、又、一つ一つ大便塊を意識しはしないが、洗い落す時は、一つ一ついやでも観察し、一々指でこすりつぶすようにして落さなくてはならない。大便は余り粘着力は無く、さつま芋の繊維を嚙んで吐き出した様なものに過ぎないくせに、一度付着すると、な

かなか落ちず、落そうと思って擦っていると何かしら皮膚に擦り込んでいたのではないかしらという気さえして来るのである。又、体中残らず擦るという事は難く背中に目がどこかぬので注意していると、案外肘の辺や、ふくらはぎの辺のかけに、べっとり便がついたまま残っていたりするのだ、便塊の着いていない処にも便のぬるぬるした粘液が着いていて、洗うと黒い様な汁になって落ちる。すえた御飯がぬるぬるして来るあの成分だ。

小便には小便独特の臭がある。海の水がよどんで腐った様なにおいである。入江の隅などで、貝殻や果物や皮や野菜のしなびたのが棄てられて、水がよどんで赤茶色になったあたりが、太陽の光で暖められて、瓦斯まで発生しだし、なま暖くなっている感じである。死んだ魚のはらわたや、腐った貝の肉や、ねづみや猫の死骸が一緒くたになって、一斉に腐臭を發しだしたその海の中で、首まで漬かって体を温めている感じある。

しかし小便は強いアンモニア性だから殺菌力があり、水道の水で洗うより、大便の洗滌には適しているのである。

ところでこの便壺の経験は、思わずほくそ笑みたくなる程の効果を河井恭子の上にもたらした。あの位天真らんまんとして明るかつ

た彼女の微笑が二度と見られなくなり、声を出す事もめったになくなった。彼女の頬骨のへんには、いつも、便の臭気をかいているような引き吊った表情が残り、人の顔を真直には見られなくなった。彼女が便壺に入っていた時嘲笑した声は、テープレコーダーのいたずらだった事も彼女には判るはずがない。公開の場で大衆のどよめきにあうと、自分が嘲笑されているように思われてしまうのだ。

「河井恭子も結局他愛ない平凡な女に過ぎなかったようだね」

と、例の男の一方が云った。

「あたり前さ。一寸金があつて運がよくて、他の者が工場で砲弾を作ったり、上官にぶんなぐられている間に、女の特権で、吞氣そうにピアノのレッスンなんかやっていたお蔭で一寸のし上っただけさ。これで化けの皮がはげていい気味というもんだ」

そして傍に不動の姿勢で立っている恭子の方を向いて、

「どうですか？ 又ピアニストとして返り咲きたいでしょうね？」

その声音の中には、若し「ええ」とでも答えたなら、今度こそ足音を縛って倒さに便壺の中へ頭から漬けられ、溺死もさせられかねない様な無気味な響きが感ぜられた。先日迄の

恭子は、それこそ明朗一点張りで、人の言葉に言外の意味や皮肉があるなどと云うような事は考えてみない娘だったのだが、この数日の体験で大分勉強していた。

「いいえ、私、ピアノなんて女として、はしたない職業はもうこれきり止めたいのです。お便所に愉しく棲み、大小便をおいしく食べられる様な、謙虚な女になる修業を続けさせて下さいまし」

「本当に心の底からそう思うんだね」「はい」

この世の歓楽を全然知らずに育った田舎の旧家の令嬢の様にしおらしくなっている。

勿論、彼女がああショックから恢復しないように、今でもちよいちよい彼女の邸に侵入しては、彼女に、便壺に入らせたり、便を食べさせたりしているのである。彼女の両親はそんな事情は知る筈もなく、二人の大学生の一方を彼女の夫にしようとまで考えているのである。突如としてピアノを止めてしまった愛嬢の無二の慰さめ友達だと信頼しきっているのである。男達は両親の前でさえ、平気で恭子に、恭子の便を勧めるのである。それは、臭気を抜いてあり上手に加工してあるので、パースティ・ケーキに見えるのだから、両親は、愛嬢が心の中でどんなに煩悶しながら、

その便塊を一さじ一さじ呑み込んでいるか知る由も無い。

いや今では普通の食事さえ、恭子には、醬油をかけた便塊や、尻を拭いた後の塵紙のあちこち沈んでいる小便に見えるのである。トマトケチャップでも痔の血に見え、失神しそうになるし、入浴しても、臍で便塊をぬるりと踏んづけたような気がしたり、背中のあたる風呂釜の縁が便が一杯こびりついてぬるぬるしているように思えたり、湯気が小便のにおいがしたりするのである。新聞を見ていて悲鳴をあげるの、見ると赤いちらしが入っている。便所に棄てられて、アンモニアのせいで赤変した新聞紙を連想したのである。

この小説全体を、彼女の得意のドイツ語に訳して暗記させ、男達が訪問した時十分頭を下げて土下座しなかったりして、一寸でも反抗的な事があると、これを暗誦させるのである。彼女の両親には意味は判らないので、愛嬢がドイツ留学当時の愉しい思出を大学生と話し合っているのだと思っているらしい。

女は発育の遅れた四足動物で、立って歩くより、四つ這う方がふさわしいとか、女の進歩向上の為には、羞恥心の克服が第一で、それには素裸になって、自分の糞を食べるが、一番よい薬だとは、女を墮落させる最悪の毒

は、おしゃれとピアノ教育だ、とか、女は花のようで、肥やしをかける程美しくなる、という様な一節が来る度に、

「もう一度今の所を」

と復誦させられて、彼女が口惜し泣きをし、でも、両親は、娘が歐洲で好きな人でもあつて、それを思い出して泣いているのだらうと思っているのである。

恭子は男達二人の意のままに、便を見てもまだ唾液が分泌して来ない事を、自分がまだ十分に女らしくなっていない為だと思つていたのである。

どうしてもピアノの弾きたくてたまらなくなると、便を一杯満したバケツを一ケ宛両手にさげて校庭の隅の便所の横に一晚中立たされる罰を自分で進んで申し出て受けるのである。こうやって指が少しでも動かなくなればピアノを忘れて女らしくなれるかと思つていらしい。女の浅智慧というものだ。

しかしその二人の大学生にとつても恭子の真の気持は信じられないらしく、河井恭子の演奏会に實際高い入場料を払って入って、ステージの上で彼女を見ると、これが自分達の前で便壺の中へずるずる漬かつて呻いていた女とは到底信じられなくなって来た。

「なあに、同じやるなら勇敢にやろうじゃな

いか」

と云う訳で、ステージに駆け上ると演奏している恭子の横っ面を野球のバッドでぶんなぐり、その黒いドレスを引き裂いて、ストリップにしてしまった。しかし恭子は舞台の上に両手を突いてあやまり、

「私の演奏がうまくなかったので、フアンの方がお怒りになったのです。どうか皆さん、この二人の方を咎めないで下さい」

と場内の客を静めるのだった。二人の大学生はやはり予期通り幾らスポットライトの下で喝采されていても、恭子と自分達の縁は忘れられてはいない、すっかり得意になり、恭子のピアノの代りに、恭子の泣き声がどんなにピアノ以上に胸に訴えるか聴衆に示す為、恭子を泣かそうとして恭子の頭髪をつかんで場内の通路をずるずる曳きずって走り始めた。



★ 特集 ★

読者原稿に描写された

クライマックス場面集



海のみえる部屋

加木れい子

豊田みのる・絵

海は、いつも光っていた。

波のきらめきは、その部屋に花粉のような光りの粉をばらまいていた。

水平線の遠くまで、海のみえるサンルームだった。光りは潮のにおいをふくんでいた。

ふいに足音がきこえ、だれもない静かなこの部屋に、二人の人間がかけこんできた。

二人は手を握りあい、息をはずませ、頬を赤く上気させていた。

「ね、ね、ね？」と、デニスが、ジュリアの顔をのぞきこむようにしていった。「やっぱ

り、あれは、きみのママだったろ？」

娘は、すこしも悲しそうな顔をせず、まだ息をはずませていった。

「そうだわ。あたしのママだわ。だけど、やっぱりおどろいたわ。あなたのパパと、いつ

あんなに仲がよくなっていたのかしら……」

「ねえ……」と、デニスがいった。「きみもあんなふう……きみのママみたいに、されてみたことはないかい？」

「みたいわ」

と、ジュリアはあどけなくこたえた。海の

ほうを向いてこたえたので、青いジュリアのひとみに、海の青さが混じりあった。

——海のみえる部屋に、ジュリアはスリッパとパンティだけの姿で、柱へうしろ手に縛りつけられていた。

ジュリアの素肌に、海からの光線が青っほくふりそそいだ。

うしろ手に柱を抱くようにして縛られたジュリアは、胸の愛らしいふくらみの上下にも縄をかけられ、肉づきのいいふとももと、足首もそろえて柱に縛りつけられていた。

若々しい肢態が、海からの光りをはねかえしている。やわらかく、白い肌。

むきだしの二の腕に、縄目はふかいくほみをつくっていた。うしろにまわされた手首はくいこむ縄目のために血がとまり、指さきはしびれてしまっていた。

——こんなにまでするつもりはなかった。デニスは、まぶしいものをみる目つきで、

なかばほうぜんと、ジュリアを眺めていた。

「あたしのママ、きれいだったわ」

「ぼくのパパだって、たくましかった」

「あたしも、ママみたいに、きれいになりた
い」

「ぼくも、パパみたいに、たくましくなりた
い」

「それじゃ、もっともっと、あたしをいじめ
てちょうだい。あたし、デニスが好きよ」

——ジュリアは天井から手首を吊られてい
た。ブランコをはずしたあとの鉤に、縄をひ
つかけたのだった。

鉤からはずされた室内ブランコは、骨を抜
かれた獣のように、部屋の片隅に生命を失っ
ていた。ブランコのかわりに、まぶしい生命

が息づいていた。

ジュリアは、かろうじてつまさき立ちでき
る程度に吊られているので、からだは一本の
棒のようになり、脇腹は張りさけそうになっ
ていた。

スリッパは投げすてられ、ブラジャーとパ
ンティだけになっていた。さすがに、羞恥と
軽い苦痛が、ジュリアの愛らしい顔をゆがめ
ていた。高く吊られた両腕が、白くすべすべ
した二本の柱だった。熱い血を秘めた柱。

なめらかな肌に、腋のしたのかげが、対象
的な美しさをそよがせていた。つまさき立ち
になっているため、ジュリアのすっきりとの
びた脚は極度に緊張し、ふくらはぎが固くし
まり、横に浅いくぼみがみえている。

突然、ジュリアの背後に、鋭く空を切る音
がした。背中肉が、ひき裂かれるようなシ
ョックをおぼえた。悲鳴とともにジュリアの
からだは、つまさきを中心に、くると回転
した。

白い背中に、うす赤い一筋が浮かびでた。
鞭はゆっくりと、しかし途絶えることなく
白い肌を染めていった。

肩のつけねあたりからはじまり、細いウエ
スト、おさないながらも女らしい特徴をはっ
きりと、まろやかな張りをみせている腰、さ
らにふとももの裏側にまで、鞭の雨はふりそ
そいだ。

鞭あとの重ならないように、巧みに打って
いるため、傷つきやすい肌でも破れるような
ことはなかったが、デニスがその額に汗を浮
かべるころ、ジュリアの背面は燃えたように
なった。

ジュリアは疲れ、手首の縄にぶらさがるよ
うなポーズになっていた。彼女のからだから
も汗がながれ、あらゆる体毛が、びったりと
肌にはりついてしまった。

ちいさな乳房がはげしく上下し、バラのよ
うなくちびるから、あらあらしい息が吐かれ
た。髪の毛が、金色の波のようにゆれ、汗ば
んでいた。



ジュリアの表情には、刺激のつよい嵐がすぎ去ったあとの、あどけない虚無感がただよっていた。透明なやだれが一筋、ジュリアのくちびるの端からながれ、あごのさきに光っていた。デニスが、顔を近づけ、それをなめた。ジュリアの苦痛を、いたわるようなしぐさだった。

海は、たそがれはじめていた。藍色の水平線が、灰色にかすみはじめた。逆に、空の雲はあざやかな赤色に焼け、その熱いような赤さが、ガラス張りのこの部屋のすみずみまで淡く反映した。

「だいじょうぶかい。痛かった？」

おどおどと、デニスがきいた。

「痛いことは、痛かったけど、だいじょうぶよ。おもしろいわ。とってもおもしろいわ」

ジュリアがこたえた。

「おもしろい？」

デニスは、不可解な表情でききかえす。

「打たれる瞬間はもちろん痛いけど、そのときいっしょに、なにか、こう、からだのなかに、ひとことでは言えないなにかが走るの。縛られてるから、よけいよ。どう、私の背中腫れてる？」

「ううん。赤い筋がついてるだけ。深海魚の模様のようなだ」

デニスは、ジュリアの両手首を吊っている縄をゆるめた。

ジュリアは、手首の縄目を胸にかかえるようにして、ゆかに身を横たえていた。まるで盛りあがったおしりを、海からの夕焼けが、うす赤く染めた。

「ほどこうか？」

心配顔で、デニスがいった。

「いいわ、このままで。なんだか、とっても気もちがいいの。夢のなかにいるみたいよ。もっとなにかしたいわ」

「するって、どんなこと？」

「そうねえ……。浣腸ごっこなんて、どうかしら？」

「かんちょう？……」

「ええ。浣腸しておいてから、しばらく我慢させるの。さあ、化粧室へいきましょ」

ジュリアは、不自由な両手をゆかにつけ、腰をふらつかせながら、立ちあがった。

「そうだわ。うしろ手に縛ったほうがいいわよ。そして、あなたは、その縄じりを持って私をうしろから追いたてるの。そう、私は、悪いことをした女なの。デニスにお仕置きされるのよ」

ジュリアの前手縛りは解かれ、改めてうしろ手に縛りあげられた。ジュリアは自分から両手首を背中にもわして、デニスの縄をうけた。白い十本の指が、愛らしく折りまげられている。デニスは、もう疲れていた。だが、ジュリアの情熱のとりこになったように、こ



の奇妙な遊戯をつづけた。

デニス、縄じりをとった。しかし、このゲームをリードしているのは、あきらかに、ジュリアのほうだった。

白いタイル張りの清潔な化粧室。むろん、隣りあってバスルームもあった。

ジュリアは自分から白い陶器の上に身をのせ、そして横たえた。

「私のハンドバッグの中に、道具がぜんぶはいつてるの。とってちょうだい」

ジュリアは命じた。

デニスは、おそるおそるジュリアのバッグをひらいて、そのちいさな、透明の器具をとりました。妖婦のように青い目を光らせ、

「さあ、はやく」

と、ジュリアがいった。デニスは、こわこわ背後にまわった。

「こわがることはないのよ。えんりよすることもないの」

いいながら、さすがに、ジュリアの顔は羞恥のために赤くなった。デニスの顔は、もっと赤くなっていた。

つめたい液体が、体内にそそぎこまれた。

ジュリアはふるえ、小刻みに歯を鳴らす。背中に縛りつけられている両手の指が、かたくかたく握りしめられていた。

——ジュリアとデニスは、また海のみえる部屋にもどっていた。

天井から垂れさがっている縄が、ジュリアのうしろ手の縄目につながれ、彼女を中腰の

ポーズにしていた。

立つでもなく坐るでもない中腰は、いちばん不安定で、いちばん疲れるものだ。

デニスのガールフレンドのなかで、ジュリアがいちばん美しくスタイルがいい。だが、こんな中腰の姿勢では、とてもスタイルを誇ることができる。みじめなポーズだ。

全身の筋肉が硬直した。

浣腸の効果が現われはじめたのだ。

中腰のおしりをななめ上へ突きだし、ジュリアはふるえながら、うめき声をあげた。

「あ、あ、あ、だめだわ、デニス。も、もういけないわ。ゆるして、おねがいよ、もう、縄を解いて。やっぱり恥ずかしいわ。とても恥ずかしいわ。がまんできないわ。むこうへ行つて。みてはいや、みてはいやよ！」

海は、夜になっていた。

波が、なにかの歌のように、遠く、悲しげなうなり声をあげていた。

「暗くなったね」

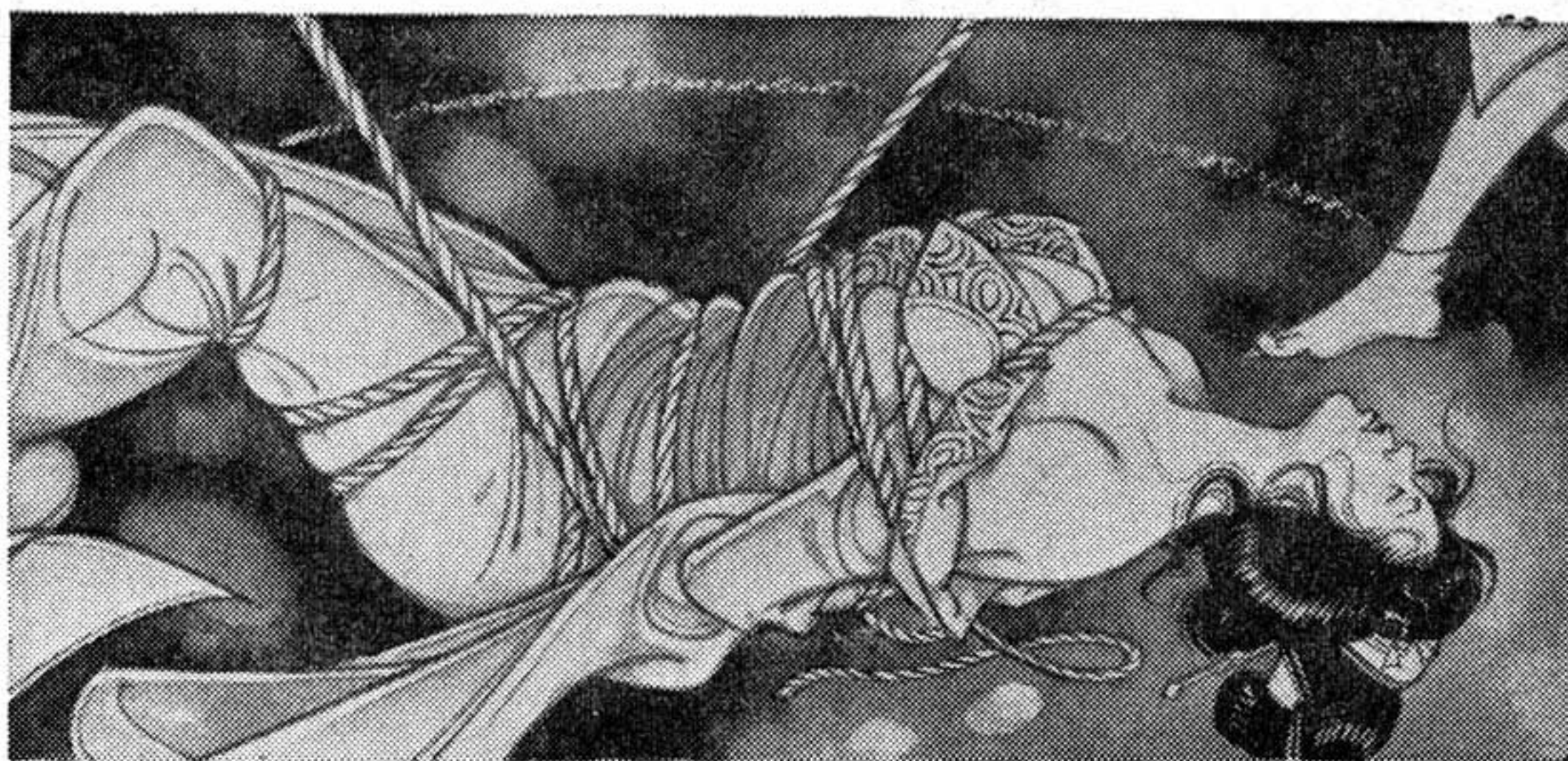
デニスは、化粧室の電燈のスイッチに手をかけた。

「いや、あかりをつけては、だめよ」

と、ジュリアがいった。

暗い室内に、ジュリアのまるいからだだけが、白く浮かびあがっていた。





勤王党の女間者

宗方 八郎

古正英生・絵

弓削藩次席家老笹山外記は、舶来物に埋まった奥座敷に、雪江をひきすえた。

「お前、勤王方の間者であろう。どうじゃ、白状せい」

この座敷には、南蛮もののじゅうたんが敷かれてある。ごりごりした厚地の、いかにも金目の品であった。周囲には、バラの花の縫い取りがある。そしてこれも舶来の円卓には血の色の酒をついだギャマンのコップが置かれていた。

雪江はかたく唇を噛み、無言だった。凄愴味を感じさせるほど、色の白い女である。

半年前、女中として外記の屋敷へ奉公に上がった。外記は、べつの意味でも、この女には目をつけていた。

雪江は、うすものの長襦袢ひとつで、真紅のしごきをしめていた。細縄でうしろ手にひしひしと縛りあげられている。細い縄の一本

一本が、腕から胸にくいこんでいた。

うつむいて、白いうなじを垂れたうしろ姿は、八ッ口からふくよかな腕の肉をあらわにみせていて、濃艶そのもののように外記の目にはうつる。

——これほどの美しい女だとは、いままで思わなかった！

外記は、心中で感嘆した。じっとみつめてみると、目の奥が熱くなってくるようななまめかしさである。

外記は、皮の紐のようなもので、雪江の背の肉を、ピシリと打った。

「白状しろ。昨日、当屋敷の台所で商いをしておった旅の小間物売りは、先刻、街道口において、家臣の者に捕えさせたぞ。石を抱かせたら、勤王方の密偵であることを、たちまち白状しおった」

雪江の眉が、かすかにけいれんした。



うそだ、そんなはずはない、池内さまに限って、口を割るような……とは思いつつ、この屋敷の主人、笹山外記の酷薄な性格を知っている雪江は、はやくも半信半疑になっている。

「痛い目をみぬうちに白状しろ。お前は、勤王方の間者であろうがな」

また、ピシリと雪江の背中が鳴った。

「存じませぬ」

うめきながらも、しっかりと雪江はこたえた。同志のひとりが白状してしまったら、なおさら自分が口を割ることはできぬ。

「ふむ、強情だな。やむを得ん。拷問にかけ

るぞ」

本音を吐いたな、と雪江は思った。

それが、この家老の道楽のひとつだった。

自分の屋敷の中に、本格的な牢と、吟味部屋を作っているのだ。

「辻村、ここへこい。この女を吟味所へ曳いていくのだ」

外記は、腹臣の部下を呼んだ。

辻村又七——この侍の性癖も、外記に酷似していた。

うす暗い吟味部屋のなかに、雪江はひきすえられた。腰がゆか板の湿気を吸って、ぞつとするほどの不安な感覚だった。やはり女で

ある。恐怖が皮膚に刻みこんできた。

「定法どおり、まず、笞打ちからはじめる」

改まった声で、外記がいった。

弓削藩次席家老は、江戸幕府の拷問法が気に入っていた。特別な罪人がでると、自分の屋敷へ曳いてきて、そこで好きなように取り調べた。

雪江の腕から、細引きが取りのぞかれた。

かわりに、大綱で手足を縛られた。

左右の手足から、胴、腹、背、肩まで、順にきびしく締めあげ、最後に縄先を前後にひきわけ、辻村と外記とが二人がかりで引きつめた。

雪江は、一分一厘もからだをうごかすことができなくなった。息を吸うのもくるしい。縛りあげられてから、三秒、四秒とたちちに、苦痛はしだいにひどくなっていく。

気の弱い女囚なら、大綱で縛られただけで泥を吐くといわれているのだ。そうでなくても苦痛のために号泣するものが多いというのに、齒をがっつきりとかんで、雪江は声をもらさなかった。

辻村が、箠尻で、ピシリ、ピシリと雪江の背中を打ちだした。箠尻というのは、拷問杖のことであって、長さは一尺九寸ほど。真竹を割ったのを二本合わせて、麻苧でつつみ、

これを観世撚りで捲きつめ、手にもつところだけ、白革をまいたものである。

気は強くても肌のやわらかい雪江は、五、六度でもう皮肉が破れた。すると、辻村は、砂をつかんで傷にふりかけ、血どめして、またその上をたたく。

ピシリ、ピシリ、と答と肉との相鳴る音が屋敷奥の暗い部屋のなかに、痛ましくひびいた。

二十数回目に、雪江は気を失った。

「さすがは女間者、しぶといな。では、つぎに、石抱きとするか」

と、外記がいった。

石抱きは、そろばん板と称する三角形のギザギザのある台の上にしりをまくってすわらせ、膝の上に石を五枚のせて、その石ごと柱に縛りつける拷問の型である。

五枚で白状しなければ、十枚にも至るが、石があごにあたるころには、多くは口より泡を吐き、鼻水をたらし、血を吐くのがふつうであった。

それでも白状しないと、役人がそばから、「えい、えい」と、かけ声もろとも石をうごかすので、目方は十三貫、長さ三尺、厚さ三寸という伊豆石が、五枚重ねのまま、膝から腿の肉へくいこむ。骨もくだけるほどの苦痛

であった。

さすがの雪江も、そろばん台をみたとき、顔色を失った。柱にうしろ手に縛りつけられ白い腿の上に、大きな伊豆石が、一枚、二枚とのったとき、雪江は口から泡をふいて気絶した。

気絶してしまつては、口を割らせることはできない。

そこで外記は、最後の手段として、箱責めを思いついた。これは、うしろ手に縛りあげた罪人を箱のなかへ腹這いの形におしこめ、箱の外には、しりだけを出させる。そうしておいて、答で存分にしりを打ちすえるのである。

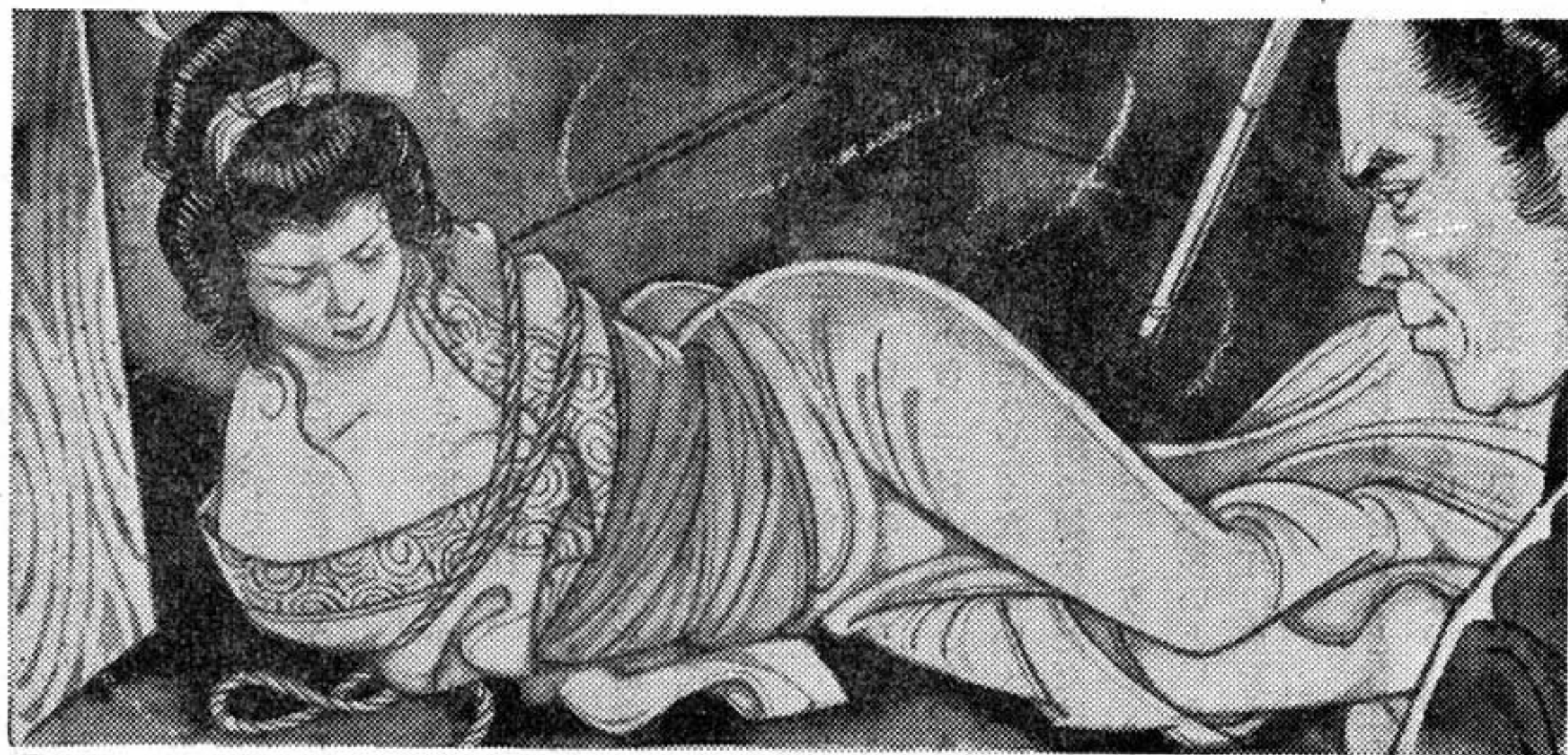
ことに女の囚人にとっては、心理的な羞恥の苦痛をもあたえる、苛酷な方法であった。

「みろ、雪江。よくみるのだ。この箱の中へお前をいれるのだ」

外記は、蛇のような微笑をうかべて、雪江にいった。

木箱の横面に、まるい穴があいている。罪人のしりをはめこむ穴であった。

ひと目みるなり、雪江はまっ青になって猛烈にもがいた。辻村がその抵抗をしずめるために、縄じりを強く自分にひき寄せ、雪江の肌をめった打ちにした。





雪江は大きく身をのけぞらせて反転した。

白いからだは弓のようにしなってもがきくねった。髪がくずれ、白い肩に乱れてかかった。乳房が縄を噛み、強い力で縛った二の腕は、筋肉のなかに没していた。

「しずかにやれ。あせらずともよい。じわじわとやるのだ」

みかねて、外記がいった。

辻村の手が、雪江の黒髪を、むんずとつかんだ。ぎゅうぎゅうとねじった。

「さあ、この箱の中へはいるのだ」

雪江のからだは、うつ伏せにされて箱の中に押しこまれた。押しこまれたというより、

髪をつかまれて、ねじこまれたのだ。

肩と腕のあたりを、ピシリと笞が打った。

「そうではない、しりをこっちに向けろ！」

まるい穴から、白い部分が箱の外へ出た。

みごとに白い肉の円丘だった。

この瞬間から、雪江はうめき声をもらしはじめた。うめきとも、泣き声ともつかぬ、けもののような声だった。

両膝をまげた苦しい姿勢のまま、雪江は身うごきもならなかった。膝頭が自分の乳房を圧迫した。左右の腕はぎゅちりと背中に縛りあげられたままである。しりをはめこまれて下半身は折れまがったまま固定されている。

その苦痛のほかに、箱の外から出ている自分のあらわな部分へ男二人の目がそそがれているという意識があった。

うめき声は、しだいに高くなっていった。

「打て。しりを打て。よいか、あわてるな、そつと打て」

外記が、暗い愉悦を秘めた声音で命令をあたえた。べろりと、唇をなめた。

「ははッ」

とこたえ、待ちかねたように辻村は笞をふりあげた。笞は風を切った。

そのまるい部分に、ピシリッと鳴った。白い柔軟な肉塊に、笞のあとがしみついた。肉塊はけいれんして、うううッという悲鳴があった。妙になまめかしい光景だった。

「どうじゃ、雪江、まだ白状せぬか。どうしても白状せぬとあらば、この場へあの小間物屋をひきだそう。あの男に、同志の女の、このあられもない姿をみせてやろう。どうだ」

外記の声は、地獄の底から吐きかける悪鬼の息のように、雪江の耳にひびいた。

あ、あ、あーッという、せつなげな声があった。

「そ、それだけは、お、おゆるしを！」

小間物屋に化けた池内春吾こそ、雪江の恋人なのだ……。

奴隸市の娘

遠井待夫

鬼頭暁・絵

愛らしい顔の、しかし、溢れだすような肉体美をもった黒人娘が十三人、セリ売り台の上に乗せられた。

白人たちの非情な視線が、そのセリ台を、ぎらぎらと凝視する。白人たちの中には、まだ若い娘もいて、それらの娘は、好奇にみちた目で、哀れな黒い奴隸の同性をみあげていた。

黒い娘たちは、なみだにぬれた目をとじ、腰まわりをわずかにおおっただけの自分の身を恥じるのだった。彼女たちの容姿は、それぞれたくましい美しさに溢れていた。一樣に大柄で、胸や腰の張りは、すばらしいポリウムだった。

ただ、肌の色が黒いというだけで、彼女たちは悲惨な運命につき落とされたのだ。

——一八二〇年代のアメリカ。

彼らは、白人に飼われた黒い動物にすぎな

かった。そのころ、逃亡奴隸取締法が制定され、彼らに対する待遇は、いよいよ嚴重に、苛酷になっていた。

いまセリ売り台にのせられている女たちはみんな黒い運命を諦観しているようだった。この市場を縄張りとしているのは、アンという白人女の奴隸商人だった。奴隸たちに負けない大きなたくましいからだを持った、二十七、八才の白人女である。この奴隸商人のくちびるには、毒々しい色の口紅がぬられていた。

ひゅう……びしッ！

とアンの革鞭が、いちばん左端に立っている黒人娘のしりに鳴った。

「もっと間隔をおいて並ぶんだよ。そんなに重なっていちや、お客さまの目によく見えな

いじゃないか！」
アンは、革靴のかかとで、その娘の足を蹴

った。

「お前らのからだを、すみからすみまでお客さまに見て頂くんのだよ。きょう売れないやつは、河下の農場へ叩き売るからね！」

黒人娘たちは、首輪の名札や、手枷、足枷の鎖をじゃらつかせて、飼い馴らされた馬のように移動した。

この頃は綿の生産過剰で、河下のダッド農場では、奴隸が最も虐待されていた。

奴隸たちにとって「河下のダッド農場」ということばは、なによりもおそろしい恐怖のひびきを持っていた。

「みなさま、本日ここへ並べましたのは、最上の黒人娘でございます。いつものように、セリ売りをいたします。どうぞ、充分に下見をして下さい。きょうのは上玉ばかりでございますよ！」

白人女が、赤いくちびるをねじまげるようにしてわめいた。

客たちは、セリ売り台の下から、目をつけた奴隸娘に、それぞれ動作を命じていた。

首をふらせたり、足をあげさせたりして、からだつきを観るのである。四肢の関節に故障がないかを調べたりする。

白人女性のひとりが、傘の先端で奴隸娘の乳を突ついていた。

「これは乳母によさそうだわ」

白人紳士のひとり、ステッキで奴隷娘の前を突つきながら、彼女の口をひらかせ、齒の丈夫さを点検している。

セリ売り台をかこむ群衆のなかに、D・ホワイトという五十二才の紳士がいた。彼は、バージニアの大地主であった。

道楽の多い紳士で、気軽にヨーロッパへ出かけては、パリあたりの白人娼婦と遊び戯れるのを趣味としていた。アメリカへ帰ると、新鮮な奴隷女を買い漁り、労働用ではない役目につかせて楽しんでいた。

D・ホワイトは、彼の遊び仲間のフランス人に、よくこんなことをいった。

「やつぱり、アメリカがいちばんいいな。黒人女が、いくらでも安く、自由に買えるからね。奴隷娘は、肌の色は黒いが、命令には忠実だし、愛嬌はあるし、第一、肉感が上等なんだ。男のいうことを、なんでも従順にきく娘なんて、ほかにはいない。まったくすばらしいんだ。きみも、たまにはアメリカへやってきたまえ」

するとそのフランス人の画家は、いかにもうらやましそうな顔で、うなずくのだった。ホワイトはいま、葉巻をくわえながら、群衆の外から、ゆっくりと十三人の奴隷娘を



ながめていた。

「ふうむ」

ホワイトはうなり、葉巻を強く噛んだ。

台上の左から五人目に、彼の視線が注がれている。

それは、とくに大柄な娘だった。若干混血を思わせる肌の感じで、しりと脚部の豊満な美しさが印象的だった。

すばらしくゆたかに盛りあがった胸の、ふたつの頂点についた乳首は、固そうにツンと上をむいてとがっていた。

彼女の目は、ふかい愁いをふくんでいるよ

うだった。視線を下にむけて、自分の両手と両足を束縛している枷具と鉄鎖をみつめていた。

ホワイトは、彼女の首にかけられている木の名札をみた。

「ペプシー。十六才。混血半分」

と書かれてある。

ホワイトは群衆をかきわけて、セリ売り台の下へいった。ペプシーのふくらはぎを、下から手でさわった。まぎれもなく、十六才の弾力である。吸いつくようなやわらかさだった。

革鞭を持った白人女が、台の上から目ざとく、ホワイトをみつけた。裕福そうなホワイトの人品をみて、すぐに声をかけた。

「旦那、これは掘り出し物ですよ。鼻すじはとおってるし、かわいい顔でしょ。第一、この大きな乳房をごらん下さい。いいえ、さわったっていいんですよ」

商売馴れた女商人は、この客の求めている奴隷が、労働用ではないことを、すばやく見ぬいて赤いくちびるをねじまげてわめいた。

「まだこいつは若いですからね、旦那のお仕込みで、どんなにでもなりますよ、どんなにもね、へへへへ。こいつの姉も取り扱いましたが、おとなしくて器用で従順で、評判がよかったですよ。保証つきですよ、旦那。いい奴隷になりますよ！」

女商人は愛想笑いをしながら、革鞭でペプシーのしりを思いきり強く叩いた。

ホワイトはだまったまま、ペプシーの足を指ではじいていた。

女商人は、いらだってしゃべりつづける。

「なんなら、この裏にテント張りの控え室がありますからね、そこへつれこんでよくお調べ下さいな。ぜったいお買いどくですよ、このペプシーは！」

「そうだな、もっとよく調べてみないと、金



はだせんな」

ホワイトは、ようやく口をきいた。

「はい、かしこまりました！」

女商人は、たちまちペプシーを台の上からおろした。そして、裏手のテント張りの中へおしこんだ。

「さあ、旦那、どうぞ、ごゆっくり！」

ホワイトを上客とみて、女商人はしきりに愛嬌をふりまく。

控え室の中で、ホワイトはペプシーに声をかけた。

「お前は、ほんとうに十六かね？」

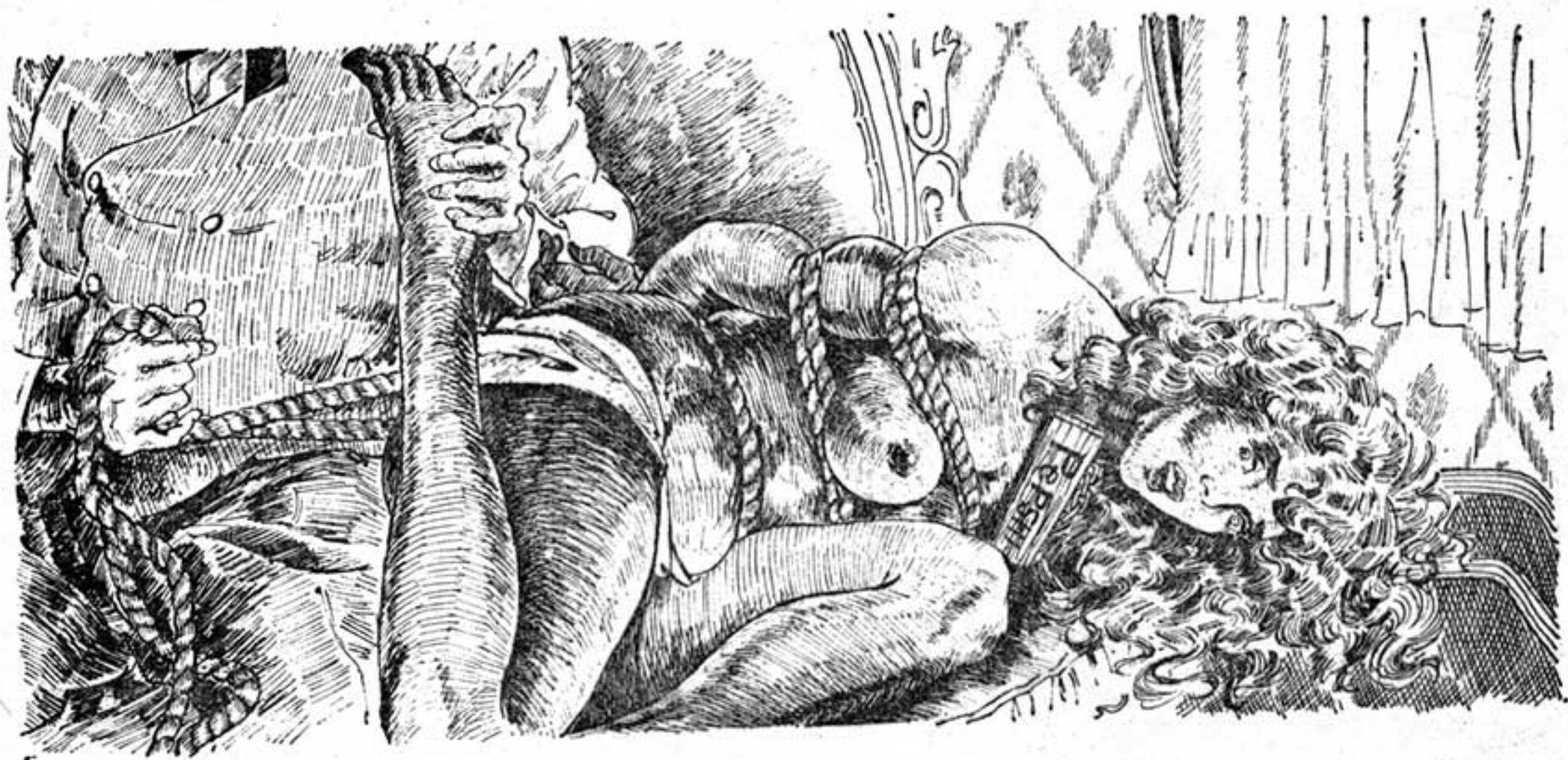
「はい」

ペプシーは、おびえながらこたえた。テント張りの壁には、牛の鞭が掛けられていた。その鞭の先には、黒くなった血がこびりついている。

「なにもおびえることはない」

と、ホワイトはやさしくいった。そして、腰布をはずすように命じた。

ホワイトは、ペプシーの肌のすべてを綿密に点検した。哀れな奴隷娘は、齒をくいしばって、その入念な点検を受けていた。テントの外では、奴隷を売る商人の声が連続してひ



びいていた。ペプシーの耳に、その声はうつろにひびいた。

「気にいったよ、ペプシー」

ホワイトの指が、ようやくはなれた。ペプシーの目から、なみだがながれていた。

「腰布をお巻き、ペプシー」

満足した声音だった。奴隷は茫然としていた。自分のあたらしい運命の予感が、この若い奴隷の胸に波うっていた。

いよいよ競売がはじまった。ホワイトは、ペプシーを千四百ドルで落札した。

「ありがとうございます、またどうぞ、旦那。その娘はぜったいにお買いどくですよ」

女商人は、最後の愛嬌をふりまいた。

ペプシーの首輪から名札がはずされた。粗末なホームスパンが、そのからだに着せられた。靴はむろんのこと、あたえられない。はだしである。二人はあるきはじめた。

逃亡をおそれて、手枷と足枷はそのままである。

「町はずれに、私の馬車が用意してある。そこまであるけば、馬車にのせてやるからな」
ホワイトは、ペプシーの首輪についた鎖をひっぱりながらいった。

通行人がふりかえって眺める中を、ペプシーは犬のように鎖をひっぱられながら引かれ

ていく。

四頭立てのりっぱな馬車が、町の入り口のところにとまっていた。

馬車にのると、ホワイトはペプシーの手枷と足枷を解いた。しかしそれはペプシーの四肢を解放するものではなかった。目的は逆であった。

「私はお前が気にいった。だから、逃げられては困るのだ。こんな手枷や足枷では、まだまだ不十分だ。私の邸に着くまで、私はお前を、こうして嚴重に束縛しておかねば気がすまないのだ」

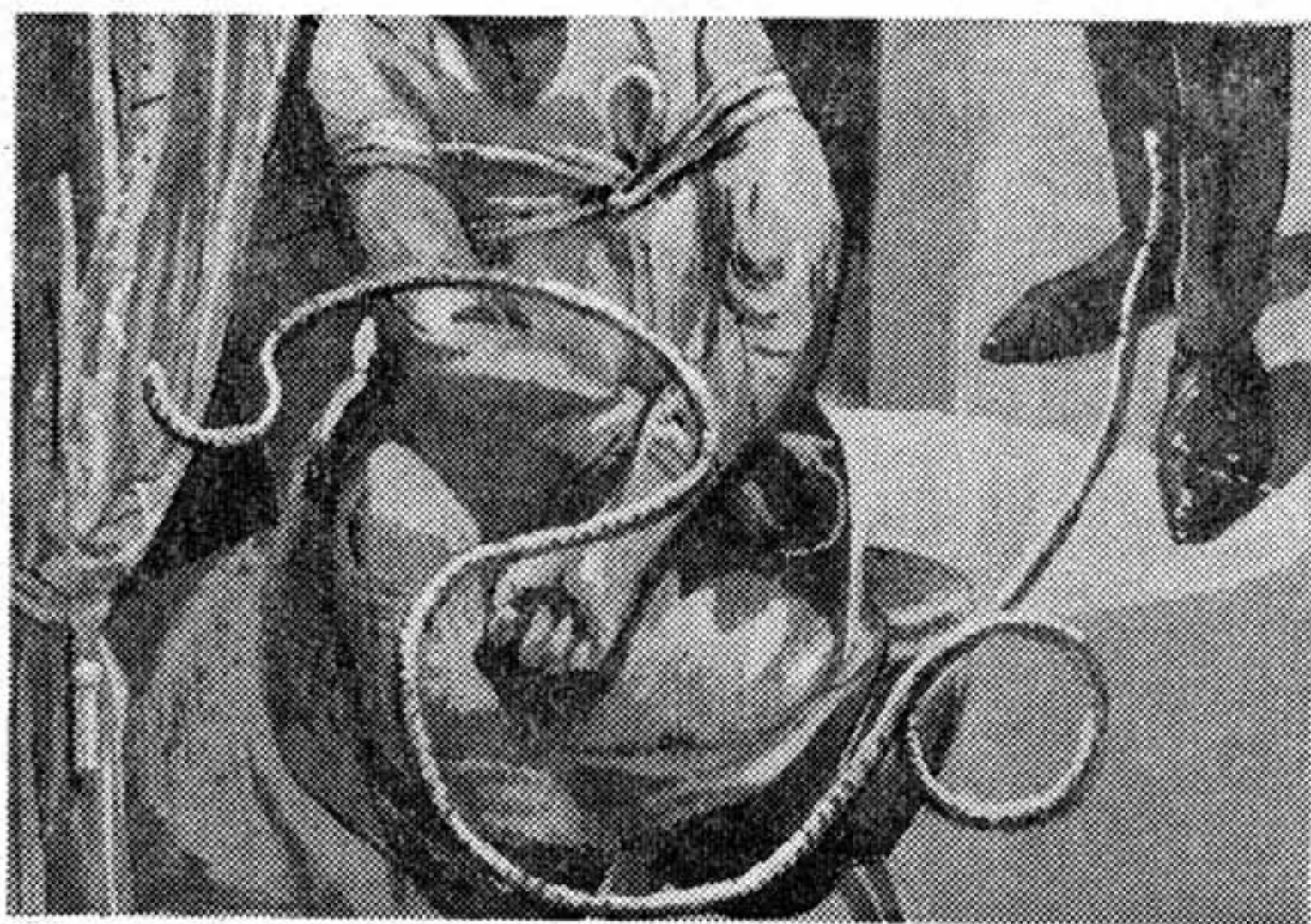
ふとくて長い縄が、ペプシーのからだに巻きついた。両腕が背中にもわされ、縄が両手首からぎりぎりからみつき、女奴隷はいやもおうもなく縛りあげられた。

わずかな抵抗を示したが、ペプシーはすぐにあきらめた。奴隷の運命はきまっているのだ。しかし、ホワイトの手は、ただ縛って固定しておくだけではおさまらなかった。

さまざまな責めを加えたのである。馬車の旅は長かった。そして、田舎道に行く四頭立て馬車の揺れは、ホワイトの目的に適していた。こらえてもこらえようのない悲鳴が、断絶して馬車の中からきこえた。哀れな奴隷女の悲惨な一生の序曲のように。

招かざる夜

伊豆 美
秋吉巒・絵



マリ子が十六歳で家をとび出したのは、東京で生活を享樂するためだった。それはお金に不自由しないで流行に先がけた身なりなどというばくぜんとしたのではなく、もっと徹底した欲望にもとづいていたのである。しかもその欲望を実現するには体当たりでゆくしか他に方法はなかった。十六歳の田舎町の娘にしては恵まれた肉体と美貌の持主である自分をよく知っていたし、二号という囲い者になってもいい、肉体をかけることで欲望を実現する自信を持っていた。東京に出る直前に、およそ愛の対象とはならない男と最初の情事をすませ、その情事の代償に得た金を旅費に加えている。こういう形で処女を失ったことに後悔はなかった。行為のあとにバラ色の虹がかかり、その虹を渡る自分の将来は、はじめての行為の羞恥や肉体の痛みも問題にはならず、かえって男についての不安がなく

なり、前途の門出とさえなったのである。

それから二年とたたないうちに、マリ子は自分の夢を実現した。三階建ての豪華なアパートに住んでいる。一階はガレージであり、住人たちのほとんどがホステスや二号という金ヅルに恵まれた女たちである。

マリ子も車がほしいと思い、いま教習所に通っている。免許をとれば車を買ってもらおう約束がパトロンとの間にできている。彼女のパトロンは六十すぎの実業家上がりで、情事にかけては、若アユのようなマリ子の肉体も執拗なかれの手ほどきで、翌日はさすがに全身の狂いを覚えるほど達者である。

アパートの近くには、うっそうとした木立の茂みを控えている。窓の明りが一つ一つ消えてゆく、ある夜ふけであった。

「パパ？」とドアを内側に引いたマリ子は、ぎよっとした。

ベッドに入る前で、白いスカーフで髪をアップし、うすもののガウンをはおっていた。肉づきのよい肢体がすけて見える。とくに胸や腰部のふくらみに男をそそる匂いを放っている。

男がぶえんりよにふみ込んできたのを、さえぎる間もなくマリ子は啞然となった。男の年令は、はでなアロハシャツにサングラスを

かけているのでわからない。

「あんた、だれよ？」

「心当たりないね？」

「何よ、出て行ってよ！」

「そう大きな口をきいてはいけない」

「人を呼ぶわよ」

男は少しも動じない。ニンマリと口元にうす笑いを浮かべ、長身をやや猫背にして立っている。招かれた客のように落ちつき、部屋の中を見まわしながら彼女の生活の装飾品、テレビ、ステレオ、電話その他小娘には豪華すぎる家具の一つ一つを目で点検している。男の片手にさげた袋が、マリ子の気になる。「これは、これは、見たところごりっぱな住まいですなあ。バスもあるようだし、旦那をあやつる腕も大したものでしょう。家出娘だったお人だが……」

「……？」

マリ子は、またぎょっとした。ドアを背にしたまま動けない。自分の素姓について関知している男の口ぶりが気味わるい。

「出てゆかないなら、人を呼ぶわよ」

「ああ、お呼びしなさい。しかしこの時刻では、だれも起きてはききません。それにこのアパートは墓地の近くだし、人通りもないからね」

「……」

「どうしました？ あたしの言うことにまがいはないでしょう」

と、またサングラスの下でニンマリ笑う。

いんぎんというか、ふてぶてしいというか、そんな男の得体の知れない態度に、マリ子はしだいに気押されてくる。

「パパでなくても、今夜はパパ以上に、いじめて上げましょう。あんたにはそういう心のすきが見えていますね」

と目のはしにマリ子をとらえ、かたわらのソファに腰をおろしてしまった。そしてテーブルから外国タバコを取り上げ、ゆっくりとライターで火をつける。

見守っているマリ子の顔が、ひきつるようによがむ。傍若無人なふるまい。マリ子の意を介さない態度で、ソファに身をあずけたまま首だけをまわし、つぎの間にベッドがあるのをレースのカーテン越しにたしかめる。その男の前を、マリ子は怒りをぶちまけるつんとした歩みで、電話の方に近づいた。ダイヤルに指を入れ、受話器を耳に当てようとする後ろから、男はうむを言わせずもぎ取った。

「何するのよ！」

「おっと、はやまっちゃいけない。まだ何もしてはいないし、これからというところです

よ。落ちつきなさい」

と啞えタバコで言う。

「あ！ 痛い。はなしてよ！」

「さわぐんじゃありません。今にもっと痛い目に合わせて上げます。さあおすわり」

とマリ子の片腕をぐいと背にねじ上げ、片方の手で彼女のあごを下から突き上げ、叫びも動きも封じ込めてしまった。そしてソファの上にすわらせる。

「おとなしくしてなさい。命など取ろうというのではない」

と言いながら持参してきた袋から、二本の固い麻縄を取りだすと、短い方でマリ子を手を後手にまわし、やわらかい両手首をくくった。

「叫び声は困るからね。これを拝借しよう。ちようどいい」

と、マリ子の頭から白いスカーフ、白絹の切れをとると、さるぐつわにかませた。そのさい、マリ子はかなり抵抗したが両手首は後ろでくくられているし、言いくるめるような男の仕草に彼女の女性的本能が、抵抗を弱めてゆくのである。しかし白絹のさるぐつわをきゅうつと両口元に喰い入るほど強くしめ、うなじで固く結ばれたとき「うっ！」とうめき声をのどの奥で発した。

「思ったよりきき分けがいいね。感心感心」

とサングラスの男は呟き、もう一本の長い
固い麻縄で、マリ子のまるまるしたはずみの
あるやわらかいからだを、ソファにしばりつ
ける。こうして自分のからだに固い縄で固定
されてゆくうち、マリ子の心は夢を見ている
ような陶酔に吸いこまれそうになった。

「さあ、これでよし。いまは痛くてもだんだ
んに痛さを忘れ、からだじゅうが、かっかと
はてってくるからね」

マリ子のからだを両足をのぞいてソファに
ゆわえつけてしまうと、こんどは彼女の前に
大きな三面鏡を持ちだしてきた。化粧すると
き腰かけるイスも持ってきて、その上に男は

腰かけた。ちょうどマリ子と三面鏡とを同時
に眺める位置である。

「さあ顔を上げてごらん。映るだろう」

と言いながら新しいタバコをつける。その
タバコはマリ子がパトロンのために用意した
ものであり、彼女も吸ったりするのである。
三面鏡は小柄なマリ子の全身を映す。左右に
開かれた鏡に映る自分のあわれな姿を思うと
さすがに顔が上げられなかった。

「どうしたのだね。いつも化粧するときに覗
いているんじゃないかね。今夜は縄をたすき
がけに胸にかけられ、さるぐつわされている
んだよ。じっくり眺めてごらん」



とサングラスの男は、ことば使いをしい
にやさしくしてゆく。しかしそのやさしいこ
とば使いは、一つ一つがマリ子の羞恥を刺し
止めていくトゲがついている。うすもののガ
ウンの下で、たすきがけにされた麻縄の下で
急にふくらみ盛り上がった両の乳房が、マリ
子の呼吸のように大きく息づいている。ひざ
がしから下はガウンからはみだし、肉づき
のよいももを固く合わせながら、マリ子は手
首や胸の縄目をかみしめうつむいている。

それはワナにかかった牝鹿のようであり、
パトロンの手練手管で計り知れない痴態を演
じさせられるときとは、まったく打って変わ
ったいじらしい姿でもある。

「ではお話をはじめよう。いいかね、口と両
手の自由は全部ふさいだ。しかし耳は自由に
聞けるわけだからね。そうだムードをだすた
めに深夜音楽を聴きながらはじめよう」

とサングラスの男は、マリ子がパトロンか
ら贈られたステレオのスイッチをひねった。
甘いムード・ミュージックが適量な音でマリ
子の耳にひびいてくる。しかし絹地のさるぐ
つわがうなじできめつけられているので、し
だいにあごまでしびれ、ううう！ とマリ子
は苦しうにあえぐ。

「さあはじめよう。その前にだれもきやしな

いけどドアのカギを忘れていたね。あたしが掛けてこよう」

と、また立ち上がった。こうしてマリ子がしだいに苦しくなるのを楽しんでいる。墓地の近く、人通りもなければアパートの中では互に他の生活を干渉しないし、そのうえ深夜だから、マリ子は厚い壁に囲まれた密室にとじ込められたも同じである。そう思うと急にマリ子の両眼から大粒の涙が二すじ頬をつたひ、うつむいているひざの上に落ちた。それに気づいたサングラスの男は、

「おや、泣いているのかね。泣いてはいけないよ。さあ涙をふいて上げよう」

そう言って、うすもののガウンの裾でマリ子の頬や目を、あごに手をかけ顔を上向かせながらふいてやる。すっかり観念しまったのか、マリ子は男のなすがままにして、くくっとしやくりあげるだけだ。男の話は、そんなマリ子がとうてい耳に入れられない意味を、一つ一つ、つづけてゆく。

「ううううう」と、話の途中で、なんどもマリ子はしびれてくる口の中でうめいた。

「よしよし、いま話したとおりに、これからいじめて上げるよ。そのまえに、もう少し話しておいてからだよ」

「ううううう！」

「いいかね、両足だけが自由になっているのは、あとから動けなくなるんだよ。さあ鏡をみてごらん、だんだん顔や首すじなどの色が変わるだろ。赤くほてっているようだね」

と新しいタバコを深く吸い目をほそめる。

「今夜一晩はベッドで夢を見るのはあきらめるんだね。この袋の中には薬局でいろいろ買物してきた器具や粉石鹸や薬も入っている。今夜一晩がかりで使うものだよ。そろそろはじめようかね」

「ううううう！」

マリ子の目から、あとからあとから涙がこぼれ、男がふいてもふいても止めようがないほど出てくる。さるぐつわの白いスカーフも涙でぐっしりしている。

袋の中に用意されている物が何か、また目の前に大きく左右に開かれている愛用の鏡にこれから、どういう自分の姿が映るのか分からない。しかしマリ子は、ひと言も口をきくことは許されないうままソファにからだを固定されている。サングラスの男から、つぎつぎに手を加えられて、どのようなはずかしい姿を自分がさらし、狂いだしてゆくか、その制御の自信がない。そう思うとマリ子は苦しいうめきを上げ、思わず耳たぶが熱くなり胸の動悸が激しく燃えるのを覚えた。

そんな思いをかけめぐっているとき、マリ子は下腹がしだいにふくらみ、重くなるのを感じだした。男が入ってくる前にバスを使い湯上がりに、いつものくせでミキサーで作った生ジュースをコップに二杯も飲んでいる。

「おや？ お腰のほうが妙に動いているね。ああ、そうかい。ふふふふ。ベッドに入る前に用足しようと考えていたんだね。いいよ、いいよ。朝までがまんするんだよ。うんと、うんとがまんして。もらしてはだめだよ。一ばんおしまいにさせて上げるからね。……」

あたしのような闖入者はね、とつせんにやってくるものだ。それを受けいれたい欲望を心の底にしまっている娘は、世間には、たんといふんだ。たいていは願っても勇気がないし口にもだせない。しかし、マリ子さんと言ったね、旦那からきいたよ。あんたは幸せだよ。さあ、これからゆっくりいじめて上げるからね。このほうは旦那も素人なんでね、今夜は生まれ変わるマリ子を夢にえがいて眠れずにいよう。では明朝、旦那が見えるまでに生まれ変わっておこうね。ふふふふ……」

と近づいてくる手から、けんめいに逃れようとして、幼女がいよいよやをするように必死に首をふるマリ子。別の運命に陥れようとする招かざる夜が迫ってきた。……

月が見ていた



俊 三鬼

ひどい土砂降りである。

闇に沈んだ町通りに、銀箭のような雨足が
夜眼にも白いしぶきをはね上げている。

固く表戸を閉した商家の軒先に、先刻から
雨宿りをしている若い二人連れがあった。尻
からげをした男の方は、しきりと何か気を揉
む様子で、頬被りをした頭を雨の中にさし出
しては、通りの上下を窺っている。その背後
の暗い中に、裾をからげた女の素足が、ほの
白く浮かんでいた。白い手拭で顔を包んでい
るが、すらりとして、小股の切れ上った様子
の女である。

「ちくしょう、いまましい雨だ」

男は何度目かの悪態を、我がもの顔に降り
しきる雨に向かって、吐き出した。

すがりつくような、女の手が体のどこかに
絶えず触れてくるのに気はしきりとあせるの
だが、相手が雨とあつては手のほどこしよう
もない。冷たいものが、雨の雫と一緒に、男
の背筋を、ツーツと這い降りていく。

男は、下谷に大店を張っている呉服屋の手
代で、喜助といった。かねて主家の一人娘の
お園といい仲になっていたのが、お園に京橋
の間屋から婿養子を迎える話が持ち上がり、
それが嫌さに馳け落ちの腹をきめ、手を取り
あつてここまで来たものの、大雨に降り籠め
られて立往生を強いられるのだった。

今からなら家に駆け戻って、人に知られな
いままに口を拭って他日を期することができ
るかも知れない。それとも、もう家人に感づ
かれて、追手を差し向けられているだろうか
そんな迷いが男の背筋を冷やすのである。

雨はいぜんとして止みそうもない。
やきもきと通りの前後を透かし見ていた喜
加が、突然、

「おう、あれは駕籠だな」

と、救われたような声をあげた。

暗い家並みの向こうに提灯らしい灯りがぼ
つんと見えて、それが、篠つくような雨の中
を次第に近づいて来る。

「お嬢さま、駕籠が来たようです。助かりま
した」

腕に触れていた女の指先に、力が籠った。

やがて、妙に頼りない足どりで、空駕籠が
はねをあげながらやって来た。

「もし、駕籠屋さん」

暗闇から不意に声を掛けられて、駕籠屋は
ぎょっとして立ち止まった。

「だ、誰だ？」

「ここです、駕籠屋さん」

と、喜助は軒から通りに出た。駕籠屋は、
やっとな提灯の灯りで喜助の姿を認めたが、頬
被りに驚いたらしい。

「な、何だ、おめえ？」

「駕籠屋さんでしょう？ いいところに来て
くれました。ひとり乗せてもらいたいんで」
と、喜助は軒の方を振り返った。
「どこまで行きなされるのだね」

下帯ひとつに腹巻きの先棒が、振り鉢巻の猪首を突き出して、喜助を透かし見ながらたずねた。

「高井戸まで行きたいのですが、やってくれますかえ」

「高井戸？ そりゃ遠い。夜が明けて、午にならア」

「なおも、喜助と、軒下に佇むほの白い女の姿をじろしろ見ている。」

「本当は甲州まで行きたいのだが、先のこととは別の算段をします。ひどい降りなので、雨宿りしているところに、お前さん方が通りかかったのです。駕籠屋さん、この女を乗せてやって下さい。わたしは歩いて行きます」

喜助の言い方は、自然と哀願の調子になった。

「どうする、相棒」

「仕方がねえな。やろうか」と、同じ下帯ひとつの相棒が、顔に吹きつける雨の雫をつるりと撫でて、気のない返事をした。

「女連れじゃ難儀に違えねえ。それじゃ、乗ってくんな」

喜助は礼をいって、お園をさし招いた。泥をはね上げながら、素足で小走りに駆け寄るお園に、駕籠屋の眼が光った。

「客人」と先棒が言った。

「おめえさん、どこの人か知らねえが、雨の道行きも楽じゃありませんな」

「え、道行き？」

喜助はぎよつとなった。

「かくしても無駄だ。この夜ふけに、しかも雨の晩、若えもの同士が手を取り合って甲州までのそうというのは、誰が見たって駆け落ち者だ」

「そ、それは……」

「なあに、びっくりするにや及ばねえ。こつちも商売だ。酒代をはずんでもらえば、誰かれの区別はねえ」

「駕籠屋さん」と喜助は哀願した。

「金ならここに持っています。約束通り、高井戸までやって下されば、お礼をしますよ」

「聞いたか、相棒」

先棒の眼が光った。

「酒代は頂けるそうだけ。行こうか」

お園は駕籠の中に身を入れていた。

「勘平さんはあとから来なさるってよ」

駕籠は歩み出した。が、足の運びから腰の坐りが、いかにも頼りない。

「駕籠屋さん、大丈夫ですか」

駕籠の横についている喜助は、危っかしい息杖の使い方に気を揉んだ。

「なあに、心配しなさんな。雨だから思うよ

うに走れねえのだ」

言いわけをして、駕籠屋はのろのろと進んで行った。

町家が絶えて寺が多くなった。長い塀や、空地が続く。竹藪に雨の音が鳴っていた。

「相棒、ここで休もうぜ」

不意に声をかけると、息杖をとめて、駕籠を地に降ろした。

「もし」

喜助は狼狽して言った。

「そう早く休まれちゃ困ります。何とか早く……」

「そうはゆかねえ」と、雨の雫で胸毛を光らせた先棒が、喜助の前に、ぬっと立った。

「やい、うぬは駆け落ち者だろう」

「え？」

「どこかの店のねずみが、主家の女房か娘を連れ出したというところが、俺の辻占だ。やい、この辻占は当りだろうが」

「違う、違う。わっちどもは、そんなのじゃねえ」

喜助は、悪い予感が当たった思いで、駕籠の傍に走り寄ろうとした。

「えい、何をしやがる」

駕籠屋が喜助の胸倉を掴んだ。

「駆け落ち者は重罪だ。やい、酒代ぐれえじ

や引込まねえぞ」

「ああ、もし、それじゃ、どれくらいで？」

思わず慄え声になった。

「どれくれえもへったくれもねえ。あり錢を全部ここへ出せ」

「えっ」

駕籠屋は胸倉を掴んでいた手を伸ばして、喜助の懷に手を突込んできた。喜助はその手を突き放して、短かい道中差しを抜いた。夢中でしたことだった。それを見て、駕籠屋は飛び離れた。

「しゃら臭え真似をしやがる。与太郎、女を逃がさねえよう氣をつけろ」

与太郎と呼ばれた相棒が、女のところに着いた。垂れをはね上げて、お園を引きずり出そうとする。お園の悲鳴を聞いて逆上した喜助は、その男に体ごとぶつかって行った。相手が刃先をかわして、喜助に組みついて来た二人はそのまま、泥の中に転がった。背後からもう一人の男が、のしかかって来た。

三人はしばらくの間、一塊の泥になって揉みあっていた。雨に打たれて輝きを増した抜身が、時折、荒々しい息づかいと罵声を切り裂くように光った。

不意に、背中から羽交い締めを組みついていた男が喜助の体を離れた。力を盛り返して

喜助は組み敷いている男に刃を向けた。手首を掴まれているので、刀がなかなか思うように動かせない。

その時、助けを求めるお園の悲鳴が、雨の音を引き裂いて聞えて来た。

「お、お嬢さまッ」

叫んだが、後を振り向く余裕はない。必殺の力をこめて、掴んだ刀の上に体重をかけた。「ぐえッ」

体の下で、相手の体が棒のようにそり返った。手首を掴んでいた力が抜け落ちた。そのまま静かになる。

喜助は急に恐怖に襲われて、はねのくように立ち上った。

「お嬢さま」

呼んだが返事がない。走り廻って探したが人影は無かった。駕籠だけが横倒しになっている。お園の姿はどこにもなかった。

先棒が相棒を見殺しにして、女を連れて逃げたのだった。

「お嬢さまア」

動転して泣き声になった。土砂降りの雨が喜助の鼻と口の中に流れ込み、ぶら下げた抜身の血糊を洗っていた。

懷の財布がそっくり抜き取られているのに気がついたのは、大分たってからのことだっ

た。

二

喜助からお園と財布を奪って逃げた駕籠昇きは、その夜浅草の溜を脱走した無宿者で、名を市助といった。途中雨宿りしている駕籠屋を襲い、駕籠屋になりすました。駕籠昇きなら、人眼にたつ囚衣を脱いで下帯ひとつになっただけでも、誰も怪しむ者はない。市助はそんな事によく頭の働く悪党だった。

相棒の与太郎というのは、溜で知り合って脱走の手助けをさせただけで、いったん娑婆に出てしまえば用のない男だった。だから、駆け落ち者を乗せて、懷に財布がふくらんでいると見ると、それを奪い、与太郎を見捨てた。女は行きがけの駄賃である。

その市助が氣を失ったお園を引きずり込んだのは、街道すじのとある破れ寺だった。さすがの雨も、ようやくあがって、古綿を千切ったような速い雲足の間から、冴えた月が見えかくれしはじめていた。洗われた草の葉が銀色に光り、風が渡るたびに、頭上を蔽う立木の茂みから、名残りの雫が夕立ちのように降った。

「とんだ雨だったわえ。おお、冷てえ」

市助は夏草を押し分けて寺の裏に廻ると、

軒の傾いた庫裡の縁にお園を放り出した。

夏とはいえ雨上がりの冷氣は肌にしみる。

体を拭こうにも乾いたものは何ひとつなかった。市助は寺の中を探し廻ったあげく、本堂の柱から海藻のように垂れ下っていた幔幕を引っぱがして、それで体を拭いた。

「大事なタマだ、風邪を引かしちゃならねえ」

独り言に言いながら、眼を光らせて、濡れた浴衣がびったり張りついた女の腰のあたりを見降ろした。抱きかかえると、濡れた着物をとおして、なまなましいぬくもりが掌に伝わってくる。

そのうちに、お園が、うんと呻いて身動きした。

「おっと、お眼さめかい」

市助はニヤリとした。

「お、お前はだれッ」

月の光に浮き上った髭面は、お園には地獄の鬼とも見えたらう。

「駕籠屋よ。もう忘れたかえ」

髭面が笑った。こんな事には場数をふんだ落着きようである。

「喜助さんは……つ、連の男をどうしたの」

「知らねえな。俺には、かわりのねえことよ。それより、おめえ、早く着物を脱いで体を拭かねえと、風邪を引くぜ」

「寄らないでッ」

お園は襟元をかき合わせて、膝でいざった張りついた浴衣の下に、胸のふくらみのあえぎがあらわに見える。市助の笑いが髭面に拡がった。お園は夢中で立ち上ると、パツと逃げ出した。

「しゃらくせえ」

市助は猿臂を伸ばして、重く引きずる裾を掴んだ。

「生きのいいお嬢さまだ。気に入ったぜ」

「は、離してッ誰かッ——助けて」

お園は細腕を逆手に振りあげられて、腐れ畳の上を引きずられた。

市助は、お園の細い手首を背中で重ね合わせる、帯締めを取って縛った。

「かわいそうだが、口の方もくくらしてもらうぜ」

お園のかぶっていた手拭が猿轡になった。

頭を振るごとに、水を含んで重い島田が崩れて、みるのように、かほそい項にもつれかかった。

「風邪を引かねえように、体を拭いてやろうと言っているんじゃねえか」

市助は、あぐらの中に羽交い締めにした獲物のぬくもりと、くすぐったいような身悶えを楽しんでいる。女の吐く荒い息が、黴臭い

あたりの空気を吹きはらって、甘い花の香のように、市助の鼻をくすぐる。

腰のまるみにびったり張りついた浴衣が、女のもがくたびに色っぽいうごめき方をするのに、長い牢屋暮しで、かつえ切っている市助の咽喉を、更に干上がらせた。

若い女の、白くむちむちした体を見て、喰いつきたい程の気持ちなのだが、今のところは、強いてそれを押えつけている。楽しみはゆっくりと味わおうという肚もあるにはあるが、とっさの場で、相手の懐から財布をかすめることを忘れなかった男だ。女をとことんまで責めあげて、自分から離れられない体にしてしまった上で、詮議の厳しいこれからの旅に、何かと利用しようという冷静な計算も働いている。甲州街道を選んだのも、浅草溜を抜ければ中仙道の手当ては厳しいが、他はそれ程でもないのを知った上でのことである。道は少しでも急いだ方が良くに決まっている。しかし、女を観念させてかからないと、荷厄介でならないから、ここに足を止めた。夜明けまでに、まだ一刻はある。それまでに女を料理する自信はあった。

市助は、ゆっくりと、白い背中を見せたままのお園の所に戻った。やさしい肩をふるわせて、すすり泣いている。

「さあ、体を拭いてやろうぜ」

市助は、さっき自分の体を拭いた埃っぽい幕の切れ端を手にとった。

「許して、お許し下さいまし」

猿轡を外したお園は、胸をおさえたまま、必死の思いで市助の大きな体をふり仰いだ。

「三助に背中を流させるつもりで、気楽にしていな」

「そ、そんな……」

膝で体をすさるのに、

「生娘づらしやがって、さんざいい男になぶらせた体じゃねえか。俺じゃ男が不足かい」

市助はすごんで見せた。そこに投げ捨ててある腰紐を、わざとゆっくり拾い上げた。

「俺は思ったことはやる男でな」

「いやですッ、ああ……」

「ヘッ、駆け落ち女が助けを呼ぶたあ、笑わせやがる」

お園の体がガクリとなった。その手首を取って背中に振りあげ、しっかりとくくった。縮こまろうとする足を引き伸ばして抱え込み、手首のあまりを引き絞って、足首も縛った。お園は手首と足首を一緒にして逆さ海老に縛り上げられた恰好で、畳の上に放り出された。そんな恰好で、お園の体はすくい上げられた海老のように何度かはねた。

「いい加減に観念しねえか。大家のお嬢さまは往生際をきれいにするものだ」

と言いながら、市助はお園の傍にしゃがんだ。

「ああ、おっかさ……」

お園は破れ畳に頭を押しつけて鳴咽した。

「真綿ぐるみの肌だ、そう粗末にしねえものだ」

市助は髭面をたるませて、にじり寄る。

「どれ、きれいに拭いてやろう」

むっちりとした肉のついた、弾力のある肌である。市助は雑巾がけでもするように、荒っぽく拭いていった。

軒からさし込む蒼い月の光の中で、放恣にさらけ出されたお園が、激しく喘いでいる。

お園は、先刻から全身を襲ってくるたまらないかゆみに、気もそらになっていた。雨に打たれて冷え切った肌をゴシゴシこすられたせいなのだろう。燃えるような火照りの方々に、羽虫がたかっているような、むしろにこそばゆい個所ができ、そこからやりきれない痒さが全身に拡がってゆく。

「かゆけりゃ、掻いてやるぜ」
と言われても、それなら、と応じられるお園ではない。恥ずかしさで我を忘れる程の言葉

葉を浴びせられて、一瞬体を凍らせても、ま

たやがて、たまらない痒みに、知らず知らずの中に体をくねらせている。それが男の眼を楽しませているということに、お園は気付く筈はなかった。

「おらあ、おめえに惚れたぜ」

だしぬけに、市助が言った。しみじみとした声である。

「はじめのうちは、適当に慰んで、宿場女郎にでもたたき売り、路銀の足しにするつもりでいたんだが。おめえ程の別嬪は、そうザラにいるもんでねえやな。それに、裸に剥いて見て、ますます他人に渡したくなかった。おめえだって、駆け落ちを覚悟で家を出た体だ、今更おめおめ家へ帰れめえ。相手の色男は与太郎を斬っているか、逆に斬られているかだ。どっちみち、まともに世間を歩けねえ身になっている。これから分別をつけて、俺と一緒にならねえか」

嘘ではなかった。こんないい女となら世帯を持つてもいいという気になっている。奪った金を元手にして、どこか人眼に立たない所に腰を降すのにいい潮時だ。女がうんと言えどそれに越したことはないが、いやと言ったら、腕づくでも、うんと言わせるつもりだ。腕づくで、うんと言わせるのも悪くはない。そんな時は、とことんまで責めあげて、女を

骨抜きにしてしまうのだ。そうなれば、女は来るなど言ってもついてくる。市助は女を痛めるのが嫌いな方ではなかった。

「どうだえ、いやか、おうか」

市助は女の体をゆさぶるようにして、問いつめた。女の白い細い顔に、高い鼻が形よく仰向いている。恰好のよい小さな唇が震えているのが可愛かった。両の眼は伏せて、長い睫毛が、やや蒼ざめた頬に翳を落して、こまかく震えている。

それが、パッと開いて、うるんだ瞳が必死の思いをこめて、市助の間延びした顔に哀顔した。

「このまま、家に帰して下さい。家の者は、きつと許してくれます。そうしたら、おとつあんにお願ひして、お前さんの欲しいだけのお金は出してあげます。お願い……」

言い終らせずに、市助の節くれだった手がお園の頬に飛んだ。

「下手に出りや、いい気になりやがって。おいらの望みは、おめえの体よ。こうなりや、無理にでもうんと言わして見せるぜ」

さっき、我にもなく見せてしまった優しさが、市助の羞恥を掻き立てた。それが彼を狂暴にした。悲鳴をあげるお園を引きずって縁側に出ると、その柱に押し立てて、柱を後

ろに抱かせて縛りつけた。

「き、喜助さん……」

口の中で言つて、お園は乱れた頭を、がっくり折った。

大理石のようなぬめらかな白い腿に、しばらく鳴りをひそめていた藪蚊が、血を吸いに来た。

三

五年の後、市助は、甲州身延から更に三里あまり山間に分け入った下部の湯で、宿屋の亭主におさまっていた。

南下する富士川と分れて、山峡の奔流を遡った所にある寂しい湯治場だが、宿屋は二軒あった。その一軒の大門屋というのは、三十年も前から続いた稼業なのだが、持ち主の年寄りが宿屋稼業をいやになって、買い手さえあればいつでも譲る気になっていたのを、丁度この土地に流れて来た市助が聞いて、居抜きで買い取ったのである。山奥の古い家だから、大した金はかからなかった。金は、喜助から奪った財布から出たのである。

下部の湯は秋が美しい。溪流の兩岸に、紅葉がとりどりの色合いを競って重なり合っている。大門屋は崖の縁に立っているから、二階からは流れを越えた向いの山の紅い色どり

が、ことに美しく見晴らされる。

丁度、長雨が上った所で、洗われた木々の葉越しに、その夜の月は物凄くほだ冴えかえって、水嵩を増した流れを照らしていた。岩にせかれて奔騰する独流の轟きが、ひいやりとした山の気配と一緒に、耳にとどいてくる。「今夜は滅法きれいだぜ。雨上がりのお月さまみてえに、肌が冴えてらあな」

市助は手酌で盃をなめながら、眼の前に引き据えた女の姿に眼を細めている。

女はお園だった。緋の長襦袢一枚の体を、後ろ手に縛りあげられている。

「いやですよ、お前さん」

そう言つて男を流し目で見る姿態に、この五年間知らずしらずに身についた媚びがにじみ出ている。はだけさせられた長襦袢の胸からこぼれ出ている胸乳のまるみにも、その頂点の色どりにも、それは現れていた。あの夜無理強いに体で納得させられて女房になったとはいえ、五年という年輪は、いやおうなしに女の体を変えてしまうのである。今では市助も、自分の力でこれまでに作り変えた女に心底惚れ込んでいた。

「その障子を閉めて下さいよ。湯あがりの後で、すぐこれじゃ、風邪を引いちゃう」

お園はすねたように言う。櫛巻きにした洗

い髪がつやつやしている。長襦袢の襟からのぞく、抜けるように白い頸筋から肩先に、匂うような色気がこぼれる。

「風邪を引くといやあ、思い出すぜ」

と、市助はすっかり宿屋の亭主らしく角の取れた相好を崩した。

「あの晩も、雨上がりの月夜だったなあ」

「よしとおくれ。その話はしないにしてあるじゃないか」

すっかりまるみのついた腰のあたりから、羞恥がお園の体を包んだ。黒瞳の勝った、切れ長なまなじりに、薄い紅がさした。

「ちいと手荒い馴れ初めだったが、結句、この方が良かったんじゃないか」

市助は声をひそめた。いまだに溜抜け者のおびえが抜けきれていない。名前も、ここでは嘉助と名乗っていた。

お園は、やにさがっている市助から視線をそらして、眼を閉じた。五年たった今でも、あの時の血を吐くような思いが、なまなましくよみがえってくる。今もこうやって縛られているので、その思い出は一層実感を持った。「なあ、お園」と市助は、膳を片わきに寄せて、にじり寄った。

「そんなお前の顔を見ていると、まだ、この俺を恨んでいるような気がしてならねえ」

「思い出させたのは、お前さんの方じゃないか」

「それは俺が悪かったが、今だけのことじゃねえ。こうやって縛りあげて眼の前に置いておいても、お前が遠くにいるような妙な気分がしてならねえんだ」

「いまさら、どこに行く所があるものかね」

又はしまったと、お園はそっぽを向く。

「現に、こうしてお前さんの言いなりに、おとなしく縛られているじゃあないか」

「そ、そのものの言いが、はがゆいのだ」

市助は往年の粗野をすっかり失って、とんだ三枚目に成り下っている。

「今日も、二階のあの野郎と、乳操り合っていたじゃねえか」

「乳操り合っていただって？」

お園の表情が蒼ざめた。

「妙な言いがかりは止しておくれ、ただ廊下で立ち話していただけないか」

「その立ち話というのが怪しいと言っているのだ」

「宿のおかみが客に声を掛けられて、黙って素通りできるものかね」

「奴は、俺と違って、色白の優男だ。油断はできねえ」

市助は、顴骨の出た浅黒い顔を、お園のそ

むけている顔の前に突き出して、鼻を鳴らした。

「ほんとにどうかしているよ、今夜は」

お園は顔を離そうとして体の重心を失ない後ろに倒れた。

「白状しろ、あの色男と何の話をした」

市助は、みずから求めた嫉妬に燃え立っていた。

「痛いよ、いたいったら。いいかげんにしておくれ」

お園は小さい悲鳴をあげて、暴れた。脇腹を膝でこじられる痛みが憎悪の火を灯した。

歯を喰いしばって、呻きを殺した。あの夜の記憶が、火花のように飛び交った。

半刻後、市助は良い気持ちに汗ばんだ体を流しに、手拭を肩にして、湯小屋へ降りて行った。

小屋の天窓から、明るい月光が降って、湯が乳漿のように光っている。市助は、持ってきた灯りを吹き消して、その光の中に体を沈めた。風に吹かれて入りこんだ赤い紅葉が二三枚、湯の隅にかたまっただけだった。

溪流の音に耳をなぶらせ、快よい疲労を暖められて、うとうとしていると、

「御亭主」

耳元で囁く声がした。

眼を開けて、市助はぎょっとした。先刻、そのことでお園を責めた、当の男が、そこに立っていたのである。

「折入ってお話したい事があるのですが、そこまで御足労願えませんか」

いかにも秘密めかしたもののいいだったが、言葉つかいも丁寧で、悪意を抱いているような顔でもないのに、市助は安心した。あの痴話を、この男が知っている筈はないのだ。

「なんですかね」

男は、あたりを見廻して、更に市助の方に口を寄せた。

「与太郎のことなんで」

「な、なんだと」

「しい。他人に聞かれちゃ、お互にまずい。

岩の鼻まで来てください」

市助は一も二もなく応諾した。なぜこの男が与太郎と自分との仲を知っているのか、問いただす余裕はなかった。

岩の鼻というのは、奥の谷の中腹に突出した岩塊のことで、そこに立つと、下部の溪谷が一望のもとに見渡される。そういうところから、いつとはなしに、湯治客の必ず訪れる名所のようになり、つづら折れの、あぶなっかしい道が、いつとはなしについてしまっていた。

「お前さんは与太郎の何だね」

市助は声を高くした。月が傾いたために、足元の谷はくろくろと翳り、その底からどうどうと轟く流れの響きが湧き上って来る。蒼く張りつめたような夜空にかかった月を眺めてそこに立っていると、宙空に浮かんでいるような頼りない気持ちになる。

相手が返事をしないのは、聞えなかったのかと思つて、市助は同じ問を繰返した。

「あの晩も、雨があがってから、いい月夜になりましたねえ」

男は月を仰いで、ぶすりとつぶやいた。

「お、おめえは、いったい誰だ」

体の震えは、湯上がり冷え込みのせいばかりではなかった。

「見覚えがありませんかね」

男は、月の光の中で、市助の方に振り返つて見せた。市助は当惑した。どれだけ見つめても、心当たりのない顔なのだ。

「与太郎は死にましたよ」

蒼白い頬をゆがめて、男は言った。

「あっちが刺したのです。あの土砂降りの中でね」

「て、てめえは……」

市助は眼をむいた。思わず、二三步後ずさった。

「ど、どうしてここへ？」

男の顔が物凄く笑いを頬に刻んだ。

「お前さんの女房の手引きよ」

「何だと？」

市助がよろめくところに男の腕が伸びて、どんと突いた。市助の瞳の中で、相手の泣いたような顔が、クルリと宙がえりをした。そのまま市助は、声もたてずに、谷底に墜落して行つた。

お園は、さっきから、しきりと手首についた痣を気にしている。今夜に限って、それが意地悪く消えしぶっているように思えてならない。しつように耳にまつわりついてくる奔流の轟きが、心の高ぶりと共鳴りを起しているようで、気が落ち着かない。

さらに、と障子が開いた。黒い影が、すつと部屋に入つて、背中で音もたてずに障子をたてきつた。

二人は行燈の灯影を間にして、向き合った。

「喜助さん」

「お嬢さま」

昔の名を呼び合った。五年の歳月が、二人の間で、消えた。

その日死すべし

かびや・かずひこ

東 桂 史・絵

美舌をふくむ揚枝のころ

大阪えびす橋筋に「元祖浮世揚枝」と看板を掲げて、野郎歌舞伎の役者の定紋をつけた揚枝をあきなう店がある。

なかなかの繁昌ぶりだが、そこに集まる客のころを思ってみると、若衆役者をひいきしているが、その役者と枕のかたらいはおよびがたいので、せめてその紋を打ったようにで口中を磨き、ひそかに恋するあいての匂やかな舌をくわえる心地になろうとでもいうらしい。

売り若衆とはいっても、おおかたの者にとっては、若衆を買い遊ぶことは、いろいろの上からいって、たやすくはできがたかったからである。

ある年のこと、この家の主人夫婦に、かねてから望んでいた男の児が生まれた。周之助と名付けられ、おかいこくるみでだいに育てられた。

子どもは成長するとともに、天成の美貌は一層磨かれて、鬢つきのようす、くびすじのはえぎわまで、かなしいばかりにうつくしい。

周之助十三歳のころには、店にくる客の

なかにも、はやくもかれに目をつけている者があるようすである。

いまのうちにいっそ役者にしよう——夫婦はそう思いきめて、その年の春、かねて懇意にしている京都の大和屋甚兵衛座の太夫元に頼み、周之助は戸川早之丞という芸名で、その座の若衆方として抱えられることになった。

と、それから数日も経たぬころ、職人風の男が芝居小屋の野郎茶屋へ、「早之丞はんにおりいって話したいことがあるから……」と言って、訪ねて来た。

野郎茶屋には、幾人かの少年俳優が抱えられていた。その子どもたちに芸を仕込んで、十四、五歳になれば芝居へ出し、人気ができるようになると、門口に誰々の宿とその役者の名をしるし、夜は戸口の掛け行燈に名をかきつけておくのである。

早之丞は勿論、まだ、自分の名を門口に出すまでになっていなかった。

「わいは道頓堀の真齋橋筋に住んでおる人形屋の清六いう者だが、あんたはんのことにつき、気になってならんことがあるんで、それをひととおりに耳にいれておこうと思うて、やってきたんやが……」

訪ねて来た男は、早之丞の顔を見ると、
そう言った。

「どういうことでござりましょう」

「うん、それはナ、あんたはんの出生のこ
ととゆくさきについて、十三年前にわいが
耳にしたことやが、けったいなこととわら
わずに聞いてくれはるかナ？」

「はい、ぜひお話ししてください」

早之丞はひざを進めた。

「ああ、それで安心した。わいもどうして
も聞いてもらいたいんや」

寿命を告げる文珠の智恵

新六は人形屋といって、獅子笛とか、張
り貫きの虎とか、ふんどしなしの赤鬼、太
鼓を持たない雷（かみなり）等の、子ども
だましの安人形を作っている。

大阪や京都では売れない、こうした地方
向きの玩具を肩になつて、丹波の方へ商
いに行く。元日から大晦日まで働いて、よう
やく夫婦の口すぎができるくらいである。

橋ひとつ南へわたれば、道頓堀の常芝居
があるのに、それさえいちども見たことが
なく、もちろん若衆の味など、夢にすらも

知らない。

ある年の秋、新六は丹波商いにでかけた
とき、里遠い山道で行き暮れてしまった。

おりから時雨さえ降ってきた。しかたなく
子安の地藏堂まで走ってゆき、そこで一夜
を明かすことにした。

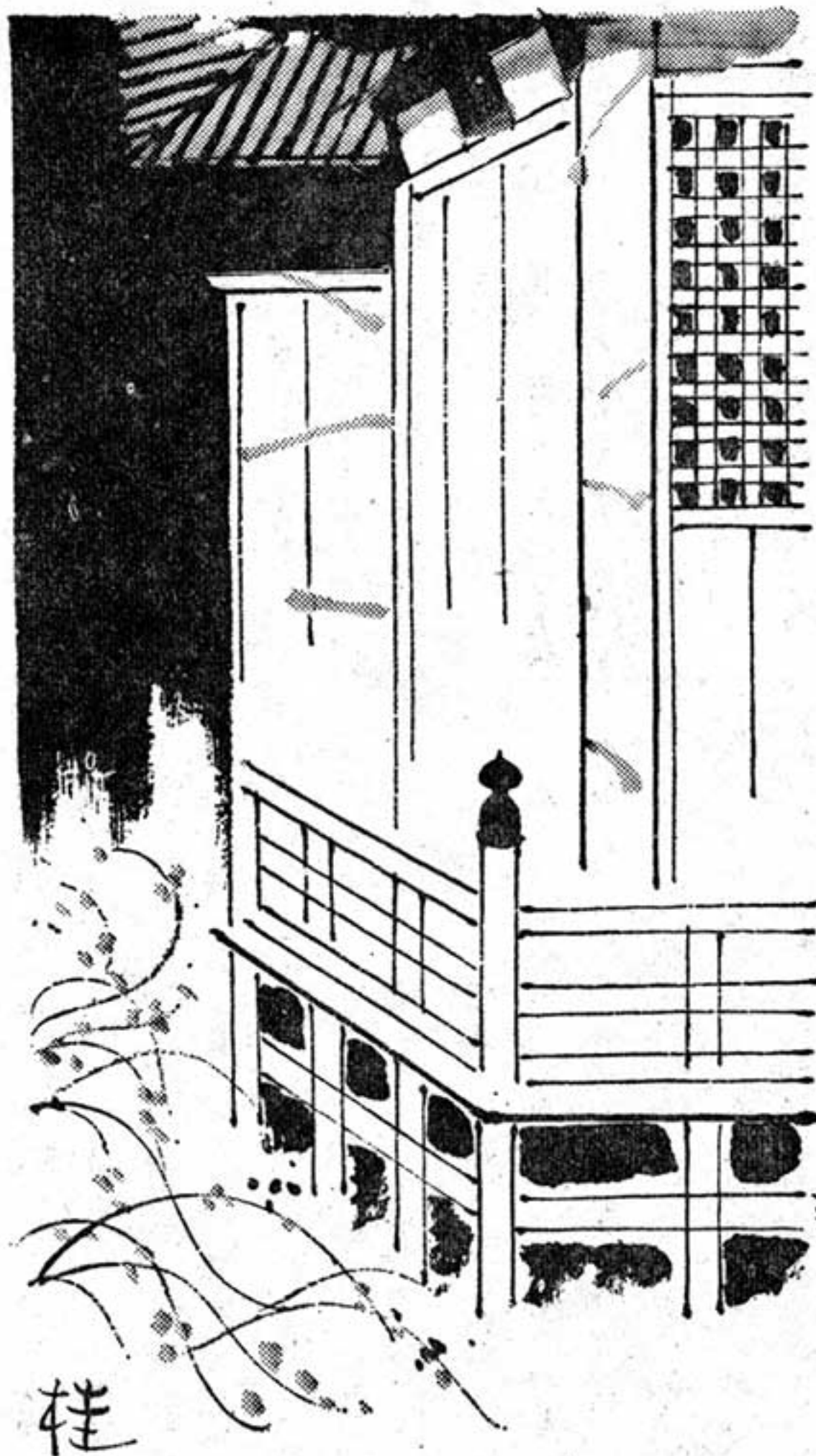
と、夜半と思われるころ、戸外の方で、
けたたましい馬の鈴の音がする。

——旅の者でもあるかナ。

と、思っていると、形は見えないが、

「お地藏！ お地藏！」

と呼ぶ声だけして、



「わしは丹後の切戸の文珠（もんじゅ）じ
や。今夜の産所へは見舞われぬのか？」と
言っている。

すると、戸帳のなかから、
「今宵は思いやらぬ泊り客があるので、わ
しは行けぬ。役々の諸神諸仏によろしく伝
えてくれ」と答える声があった。

それきり、戸外の声も内の声も途絶えた
ので、新六はその場に、うとうととまどろ
んだが、その夜の早暁、また、昨夜とおな
じ文珠の声に目に覚まされた。

「ゆうべは五畿内ばかりで、一万二千百十

六人の子が出産した」

と文珠の声は告げた後、言葉をつつて「なかにも摂津国三津寺八幡の氏子、道頓堀の揚枝屋では、願いのままの男子を安産したので、両親はお喜びのようすじゃ。だが、この子の行く末を思うと、その両親の喜びもきのどくである。この子は眉目うつくしく育って、役者となり、見物の衆に、かれこれ言われるようになるが、十八の正月二日に、死ななければならぬさだめだからじゃ」

声はそれで絶えた。

まもなく、空が白々と明けてきたので、新六は地藏堂をでて、丹波から大阪に帰ったが、もしやと思って、南隣の揚枝屋のことを家人に訊ねてみると、新六が子安の地藏堂で聞いたと日も時も変わらず、男の子の出産があったという返事である。

新六は地藏堂での一分始終を、その揚枝屋の夫婦に話してみようと思ったが、せっかく喜んでゐるのに、えんぎでもないことを言つては……と考へなおして、やめることにした。

「……それから十三年、このことはわいが胸のなかだけにおさめて、あんたはんをよ

そながらみまもってきたのやが、あんたはんはあのとき文珠さまの仰言つたとおり、うつくしゅう育ちなはるし、人にかれこれ評判されはるしで、氣になつてならんだつたところへ、こんどの、あんたはんの芝居入りや。もうとても、隠しとるががまんができのうなつて、こうしてやつてきたわけや……どうか十八という年に、くれぐれも氣いつけてくだはれナ」

新六は地藏堂で文珠が言つたということばを、信じきっているようすで、真剣な顔で語りおわつた。

その話をききながら、早之丞は、これい子供がほしいのに子供のない新六が、自分の母の出産のことを氣にかけていたところから、地藏堂での仮睡のうちに、あのような夢をみたのに違いないと解釈した。だから、自分が十八歳で死ぬうんぬんなどは、勿論信じる氣にはなれない。

が、だからといって、自分の身を案じてくれる新六の真情を、嗤うことはできない。「わざわざお知らせくだはつて、ありがとうはんどす。仰言つたことを、ずいぶん氣いつけます」

と丁寧な礼の言葉をのべた。

濡れの道には魂を奪う

早之丞は諸芸を藤田小平次に仕込まれてまもなく、舞台に出るようになった。芸は巧者で、殊に武道事を得意とした。

前途を囑望されながら、一年二年と過ぎた。風雅の道をも、かれはよく解した。春は桜の名残りを絵に描き、また、古歌のすがたを思わせる格調の高い歌を詠む。

夏には、さみだれのしめやかな夜、初音（はつね）の香を焚きかけて、ほととぎすの啼くのを待ちうけている人の氣に入った。

秋は宵のうちから月を待つて、その間に書物に心を寄せ、月出すれば灯を消して、その爽やかな光りをめでた。

冬は冬で、なじみの客のために、早送きの水仙を壺に活け、銘茶の口を切つた。

濡れの道には、殊のほか柔さしく、情深く、枕をならべてうちとけてから、人の命を奪うほどのもてなしをする。

このように、なにごとにつけても、あいてにたいする奉仕のところが深いから、たまに逢つた客でも、そのことが忘れがたく

てあとを引き、早之丞との逢瀬に追われて、ついに借金の枷（かせ）に嵌って、どうにもならなくなってしまった者がすくなくない。

早之丞十六歳の冬のはじめのことであつた。

かれが大振袖の娘形で舞台に出ているとき、狂言のなかほどで、見物席の隅から、いなか者らしいひとりの男が、舞台に跳びあがってきた。

「早之丞さま……」

と男は呼びかけると、

「わしはとるにたらぬ身じゃが、そなたを恋い慕う情はこのとおりじゃ」

言いおわるよりはやく、脇差を抜き、左の小指を床板におしあてて、切りおとすと紙に包んで、早之丞の方へ投げた。

観客はわっと湧いたが、早之丞はおちついていていた。

「わてをそれほどに思うてくだはるお志、決してあだには思ひませぬ。いまは狂言の中途ゆえ、後刻にわての宿へせひおこしくだはれまし」

言うのと、鮮血の浸みでている紙包みを拾いあげ、更におのが懐ろ紙に丁寧包んで



帯のあいだにおさめた後、前とかわらぬ態度で狂言をつづけた。その自然さは、そのことを自体も芝居のように見せた。見物席に、ふたたび歓声があがった。

早之丞は芝居をおわって宿に帰ると、自分の寝間を整え、袖に香を焚きしめて、釈迦堂の鐘が鳴るころ、すこし眠った。

ほどなく夜が明けてきて、人顔がほのかに見えるころ、きのうの男が、友らしい男とふたりずれで訪ねてきた。座敷に上げてその二人とその対座すると、早之丞はもちまえのもてなしどころから、男の嬉しがりそうなことのみを話しかけた。

男は「かたじけない」と言うのみで、そのあとはただうつむいている。それだけに、早之丞には、自分に寄せるかれの恋情の深さが手にとるように伝わってくる。そばから友達の男が、しきりに当の男の心のほどを説き明かそうとするが、それは早之丞には無用に思われた。

これほどにおのれを思慕してくれる男をただこのままに帰すことは、早之丞にはできがたかった。かれはわざと戯れのたねをしかけて、用意してある小座敷へ男を連れて行こうと手を取ったが、男は動こうとも

ともしない。

「いっそお泊りになっていてくだはれ」

とすすめと、「帰るから……」と言う。

「それでは、また逢うまでの形見に……」

と早之丞は、浅黄縐子の袷に、兼光の中脇差の御物ごしらえなのを、男に贈った。

男はしきりに名残りを惜しみながら、友達とともに帰って行った。

と、その月が明けてまもなく、友達の男がひとりで、早之丞を宿に訪ねて来た。

「あの節はそなたから、いろいろ嬉しい言葉を頂いたが、かれはあれから故郷の土佐へ帰る途中で、そなたから銭別に贈られた刀で、自害して果てた」

と友達の男は言った。

「なぜまた、あの方は自害などを……？」

「そなたのことを思いつめて末、ついに気が狂ったようになり、介抱のわれらがすきを窺って、われとわが命を断ったのじゃ。」

……それこそ、宵月をみればそなたのさし櫛を思いうかべ、水鶏（くいな）のたたく

声はそなたの出ている芝居の太鼓と聞き扇を使えばその絵文字も、そなたが考案された古歌模様かとひとりごつ……明け暮れにそなたのおもかげばかりを追いつめてい

た」

「……………」

と早之丞はもはや答えるすべを知らず、黙っている。

「それについて、そなたからの形見のうち衣裳のほうはかれの遺骸とともに埋葬したが、脇差のほうは、かれの最期の遺言では早之丞どのにあらためて自分の形見として返上してくれとのことだったので、お受けとりください」

兼光作の龍造りの中脇差を、早之丞の前にさしだした。

おけとぬかした頬に刀

自分のことを思いつめてのあまり、ひとりの男の狂氣した末に、自分の贈った刀で自害した。そのうえ、その刀が、自害者の遺言で返上された——この事あって以来、鷹揚（おうよう）な氣の早之丞も、なんとなく胸のうちがすっきりとしない。

たとえ間接にでも、自分が人を殺したと思うと、舞台に現われるところから、「いよう、早之丞さま！ 女殺し！」などという見物席の懸け声まで、気にかか

ってくるようになった。

その日、かれがせりふをとちったのも、あながち長すぎる台詞のためのみでなく、南の方のさぎきの下から、

「よう、人殺し！」

と高らかに声をかけられたことにあった。

南さじきの下の声は、早之丞が絶句すると、なおも追いかけるように、

「おきおれ！」と怒鳴った。

と、正面見物席の奥の方から、それに反撃して、

「やかましいゾ、だまれ！」

と叫ぶ声があった。

「だまらぬわい。早之丞を引っこませろ！」
棧敷下では、あくまで言い合っている。観客から「おけ」とか「ひっこめ」とか言われたことは、早之丞はこれがはじめてである。おもわず赤面して、南さじき下の方を睨むように見据えた。

怒鳴りちらしているのは、髭（ひげ）をたてているのが自慢の、仁王団助という、この界限でもてあまし者と判った。早之丞は団助がなおも騒ぎたてているのに構いなくセリフをつづけた。団助もついに諦め

たかそれっきり怒鳴る声は聞こえなくなつた。

芝居が果てて、早之丞は下男も連れず、単身で小屋を出た。

と、人通りが疎らなところに来たとき、うしろから呼びとめる者があつた。ふりむくと、団助である。

「きさま、先刻はおれを睨みおったナ」

「はい、狂言をじゃまされはりましたゆえたしかに睨みましたが……それがどうかにはれましたか」

団助のような無頼の徒から、いいがかりをつけられた場合、できるだけ下手（したて）にでるようには、親方（師匠役者）からよく注意されていたことである。が、早之丞は、むしろあいてに挑みかかった。その結果、次に来るものがどのようなものかわかっているのに、この場合に、挑みかけずにいられなかった。

一見温和そうな早之丞に、こうしたむこうみずのところがあつた。

「なんやと？……」

はたして団助は、みるみるいかりの形相となつた。

「河原こじきのくせに、客を睨んで、それ

がどうかにはれたとはなんや！」

早之丞よりはふたまわりもみまわりほども大柄な、岩のような団助の体が、早之丞にむかつてぶんと跳んだ。

さっと早之丞は身をかわした、かわしながら、帯のあいだから抜きだした扇子を構えると、またも跳びついてくる団助の顔のあたりをよこになぐつた。

扇子はあいでのあごさきを、強かに撲つた。一瞬、団助にひるんだとみえたがすぐ、いっそう猛然と跳びかかってきた。

身をつかまれたら、敵することは叶わぬ



早之丞はしきりに体をかわし、扇子をもつて敵対していたが、ついに搦まれた。

団助は早之丞をモロに押し倒すと、上のしかかつて、喉首を締めながら、ぐいぐいと地に圧しつける。その腕の力に、ぎらぎらするような嗜虐が感じられた。いくたびかおしかえそうとしたが、団助の軀はびくともしない。

——ええもう、締め殺すともどうともしるがよい。

早之丞は観念の眼を閉じた。

と、このとき、急に団助の軀が、早之丞

の上から引き剥がれるように、ぐんと浮きあがった。

「あつ、なにしゃがる！」

と団助は叫んだが、そのときには、かれの巨体はうしろにひっくりかえった。

早之丞は急いで、起きあがった。かたわらに、ものやさしげな若者が佇っている。

黒羽二重の羽織に紫ちりめんのきもの、大脇差、素足に藁草履……。

と見るや、若者の足が、起きあがろうとする団助の腰を蹴りつけた。団助がまたぶざまに転がった。

「早之丞におけと言う頼柄（ほほげた）はここか」

言いもあえず、若者は、一尺八寸抜き打ちに、団助の右のほほを薙り、返す刃を左ほほに走らせた。

「ぐえッ……」

と団助はけもののような悲鳴をあげて、両ほほをおさえたが、そこには血潮はなかった。峯打ちであった。

若者は刀を団助の喉に擬した。擬しながら、剣尖をあちこちと、動かす。そのたびに団助の軀が、爬虫類のように、こきさみにくねりまわり、びくびくとはねる。

虫も殺さぬような柔さ形の男ながら、相当の虐待ごのみらしい。さんさん団助をなぶりまわした後、若者はようやく刀を納めた。

「わしは東洞院に住むいろはの十郎右衛門と言う者だ。きょうのことがくやしかったら、いつでも遺恨を晴らしに来るがよい」

団助にむかって、そう言いすてると、若者は早之丞に目礼して、歩きだした。

念契のままに去ったひと

芝居小屋で、団助の暴言に反撃してくれたのは、この十郎左衛門というひとらしいと早之丞は感じた。

なんとしても、身の危険を救ってくれたうえ団助を懲らしめてくれたことを、早之丞は嬉しくてたまらない。

その夜、早之丞は、客の勧めをせず、東洞院の十郎右衛門の家へ忍んで行った。

もし先刻の団助がおしかけにでも来たときは、自分が身をすてても、十郎右衛門に難儀をかけまいと心を決めていた。

その心が先方にも通じてか、十郎右衛門も喜んで早之丞を迎えた。

両親にもひきあわされた。母親は若く、継母ということだった。

十郎右衛門の部屋で、ふたりは念契をかわした。

早之丞と枕をかわすと、いつまでも、あをひくとは、舞台子買はずきの男のあいだで言われていることである。まして念約を誓った仲とあれば格別で、早之丞は、他の客とはできぬようなことも、十郎右衛門に進んでして尽くすので、十郎右衛門もほかに色ぐるいをせず、早之丞にのみ心を運ぶようになった。

早之丞が気にかけていた団助は、その後いちども現われず、ふたりのあいだにはなんの障りのないままに、衆道の縁は一年ほどつづいた。

そしていつまでもつづくと思えたが……ふたりの逢瀬があまりに頻繁なため、かねてから十郎右衛門と両親とのあいだが険悪になっていたが、その年の十二月はじめころ、ついにそれが爆発したらしく、十郎右衛門は早之丞にも告げず、家を出て、行方知れずになってしまった。

早之丞は落胆し、虚脱したようになってしまった。

舞台の芸事も身にしみなくなった。まして金で買われる客のほうは、ほとんど見向きもしない。大尽の客には、親方に尻をおされるようにして、いやいやながらその座敷に顔をだすが、それも枕席となるとしたたかに振ってしまふ。もちまへの奉仕のころは、どこえかおきわすれてしまったようであつた。

客という客を振ってしまうから、早之丞のみいりは急に激減した。それをみかねたのだから、ある日、親方がおのが楽屋へ早之丞を呼んだ。

「どうしたんや？ 年の暮も近いというに……まだ十郎右衛門とやらしいおひとのと忘れられんのか？」

「いいえ、べつに……」

と早之丞はかるく首をよこに振る。

それはまんざらのうそでも、強がりでもない。一時は役者をやめて、十郎右衛門の行方をさがしとめようとまで思っていたが、日が経つにつれ、かれのことは忘れかけている。いまはそのことよりも、ただなにもかも厭になつてしまったのだ。

「では、勤めに精だしなはれ。年が明ければ、初芝居どっせ」

桂



親方がそう言うのも、むりはなかった。舞台の衣裳はすべて役者の自前だが、とくに正月芝居に着て出るものは、これは！と他人から賞められるような、豪華なものを作らなければならない。その衣裳も武道事の狂言をし、ひいき筋に随喜の涙を流させなければならぬのだ。

「……………」

と早之丞は無言である。

「しっかりせんけりや。お前もまもなく十八やないか。……胸に手をあてて、よう考えておきなはれ」

親方はそれで意見をうちきった。

——十八？ そうや、わてもついに十八になる。

早之丞は親方の楽屋を出ながら、はっと気がついた。はじめて役者の社会にはいった十三歳のとき、えびす橋の両親の家近くに住む人形屋の清六から言われたことを、思いだしたのだ。

自分は十八歳の正月の二日に、死なねばならぬさだめだということ……

——そう、わては正月早々に、死なんけりやならのや、初芝居がなんや……

最初は勿論信ぜず、そのためいままで忘

れていたそのことが、いま急に真実性をも
って自分に刀をけてきたことに、早之丞は
腹の底から笑いがこみあげてきた。

散華するも奉仕

年の瀬もいよいよ押し迫ってきた。早之
丞の男衆は、しきりに年越しの心配をして
いるが、どこからもいっこうにつけとどけ
が来ない。胸算用がすっかり外れて、てん
てこ舞いである。

そして大晦日——債鬼がつぎつぎと早之
丞の宿へ現われた。そのいずれへも、男衆
は「ご主人は留守やで……」のいってんば
りで、二番鶏の鳴く時分までごまかしてい
たが、金高の多い呉服屋にだけは効かなか
った。

「松の内にはかならず払うから……」

と男衆が頼むのもききいれず、早之丞の
地衣裳まで、金の抵当にもち帰ってしまっ
た。年が明けた。早之丞のなかまの若衆た
ちが、それぞれに盛装して、かれの宿を訪
れてきた。太夫元のところへ、いっしょに
年頭のあいさつに行こうというのである。

皆を待たせておいて、早之丞は奥に入り
初春の衣裳をだすよう男衆に命じた。おほ
まかなかれは、それを呉服屋に持ってい
かれたことを知らないのだった。

「あのお召し物は衍丈けが違うてますんで
仕立て直しにやりました」

と男衆は辛うじてその場を繕った。
が春着がないからといって、なかまに否
やを言うわけにはいかぬ。見栄が売りもの
の役者稼業というのに、早之丞は去年から
着ている小袖のまま、若衆たちと同道し
た。

その日が暮れて二日、正月芝居の初日で
ある。

ふだんは、芝居など見に行かぬような人
びとが晴れ着に着飾って、いそいそと芝居
町の方へ歩いていく。早之丞の評判をしあ
いながら、行く人もあった。そうしたさま
を、早之丞は二階の座敷からながめてい
た。

ふと、かれは、自分の宿の前をいきつ戻
りつしているひとりの男に気がついた。家
のなかのようすを窺っているふうである。

早之丞は欄干からそっとみおろした。男

は人形屋の清六だった。

——きょうの日が気がかりで、ようすを
見に来やはったに違いない。

——あのひとの言うとおりになりまし
う。……いや、そうせんければならぬこと
になっしょうたのや。

男衆が二階に上って来た。

「こやから使いの方が見えました。式三番
がすんで、いよいよ本狂言にかかるそうで
ござりますが……」

「すぐに行くと伝えてくだはれ」

と早之丞は言った。

「しかし……」

と男衆は、舞台衣裳もないと告げた。

「いいのや、ただそう言うてくれれば」

「へえ……」

男衆が去った後、早之丞は、二年前自分
を思いつめて自害した男の返上してきた、
龍造りの中脇差をとりだすと、白無垢の前
をおしひらき、絨肌（ぬめはだ）ふかく剣
尖を突きたてた。

武道事をよくした早之丞だけに、武士の
それにもまれにしか見られぬような、みこ
とな切腹さまだったと伝えられる。

★特集★激しい女

(アメリカの公刊誌より)

Exposing the city where vice is the number one tourist attraction

BIG ADVENTURE

All around me were smears
of blood, shredded fragments
of the dying and the dead

K ★ MARCH 35

The sight of pain made her
shriek with pleasure . . .



BONUS: HOW TO CASH IN ON THE HORSES

IF the circumstances had been different I would have loved watching the naked and beautiful blonde who trembled as she walked across the rough floor of the barn, and there would have been other emotions surging in me besides fear.

But not now. My mouth was like cotton and my belly full of lead as she walked, stumbling a little, to a rough-hewn post in the center of the barn. On either side of her were two towering black-suited youths wearing the venomous eagle-emblem of the Neo-Nazi party—the new Nazis sprung from the

ashes of the sadists we thought we'd stamped out in World War II—and they tied her hands around the post. She bit her lips until they bled, trying to be brave, and her thighs and buttocks and back-muscles tensed in anticipation. Her soft breasts were parted by the post she was forced to embrace, and she clung tight, quivering, waiting.

Flickering oil torches threw eerie shadows around, making the pale, high-cheekboned faces of the hundred-odd German party members look like death masks. Youths

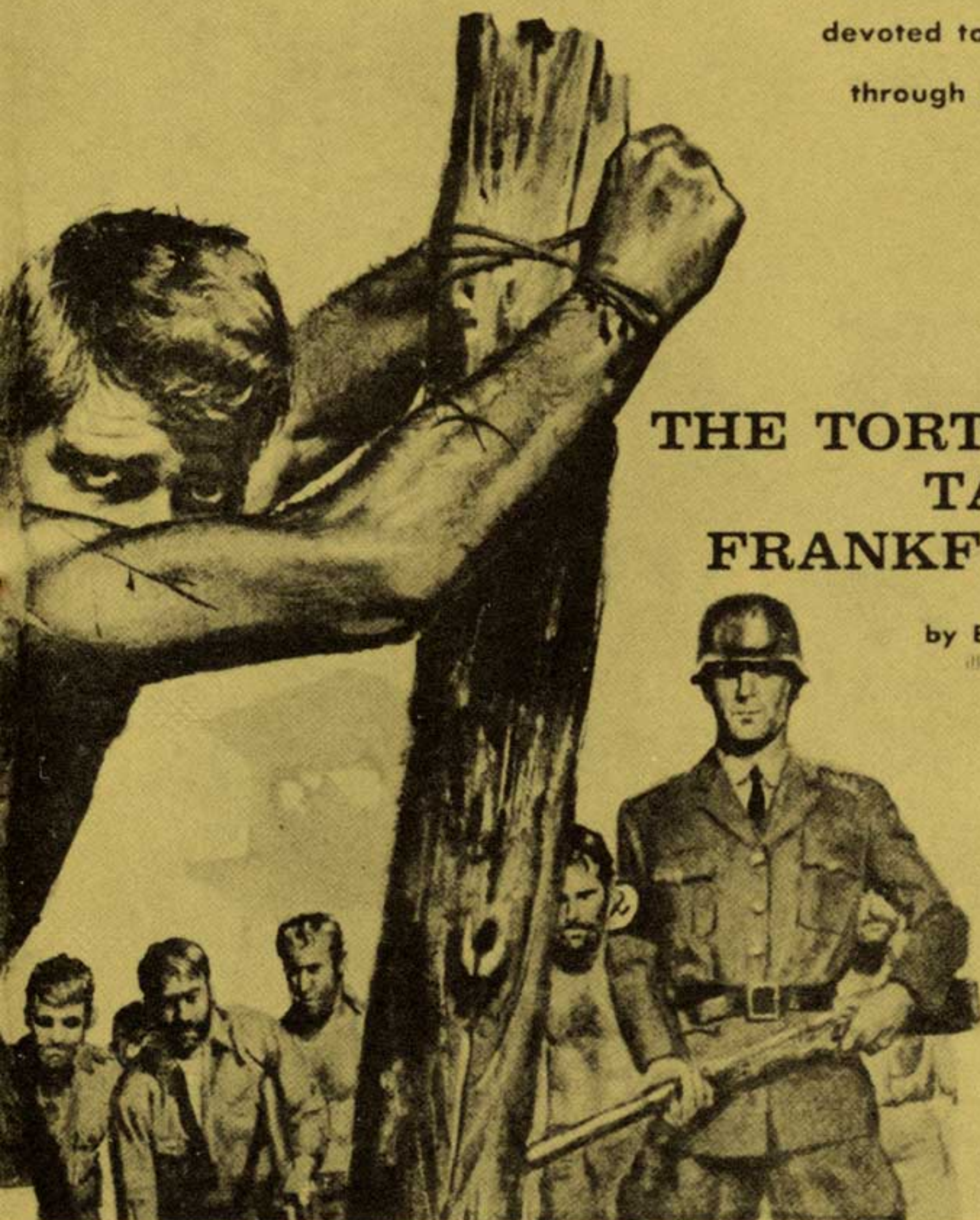
(Continued on page 58)

**They were Nazi's, pure and
simple; their entire ambition
devoted to winning power
through the use of pain!**

THE TORTURING TARTS OF FRANKFURT

by ERNEST HOENSCHEL

illustrated by MEL CRAIR



北米・フェニクス商会・特約





裏窓タウン



時代に逆行する

「言論弾圧」

今日、いわゆる「世論」というものは、民衆のあいだから、自然に、必然的に湧きあがってくるものではなく、「つくろう」という意志のもとに、それだけの組織力機関、または権力のある団体が、「つくりあげる」ものだということとは、常識とされている。

昨年夏ごろからはじまった「悪書騒動」の先鞭をつけ（といえるだろう）今回の「東京都青少年健全育成条例」のなかの「有害図書興行、広告等の知事による禁止」を招いた（といわれても仕方ないところであろう）A社の週刊誌が、こんどは最近号で、つぎのような記事を掲載している。

「フランスの発禁旋風」という見出しのもとに――。

現在、フランスでは、青少年を悪書からまもるといふ錦の御旗をふりかざして、かなり広範闊な言論弾圧がおこなわれよう

としている。

さる三月はじめ、出版社オリンピアの社主モーリス・シロディアスが一カ年の禁固刑と八万五千フラン近い罰金、向う二〇年間出版事業に係る権利を奪われるという事件が起った。

オリンピアという本屋は、英語で書かれたものを専門に扱い、同社の出版物には、いわゆるワイ本にちかいものもたしかにあるが、半面、ワイセツ的な要素はなくても、内容があまりに前衛的であるために、他の出版社が尻込みするような文学作品を、積極的に世にだすことで有名な出版社である。

イギリスの出版社が鼻もひっかけなかったサミュエル・ベケットの『ワット』や、アメリカではどの出版社も無視したウラジミール・ナボコフの『ロリータ』をはじめ、ヘンリー・ミラーやジャン・ジュネのような作家の作品は、すべてシロディアスの手を通じて日の目をみたの

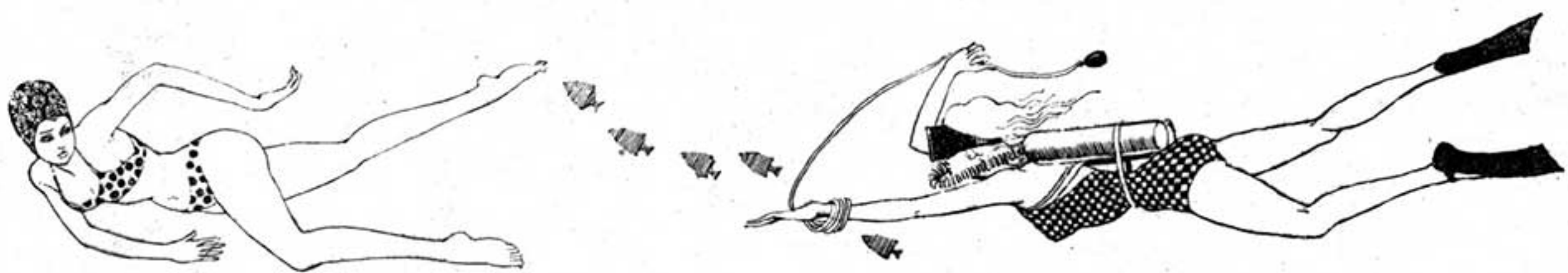
である。

このシロディアスが、出版社としては途方もなく重い刑罰を加えられたのである。シロディアスだけではない。すでに一年ほどまえには、アルジェリア関係のまじめな政治論文を出版してきたフランソワ・マスベロが、十八歳以下の未成年者には有害な本を、自店に陳列したという理由で告訴された。

その本というのは、ジョルジュ・バタイユの『エロスの涙』のような、たいへん難解で、しかも値段も高く、未成年者の手にとどく代物ではないのだ。

シロディアスやマスベロは、出版者としては小さいが、当局の検察の目は、たとえばガリマールとか、ジュリアールとかいう一流の大出版社にもおよび、これらの会社の出版物も、この一年間のうちに数点発禁処分をうけている。

もちろん出版社側もだまっていはいない、マスベロは、アカデ



ミー会員で有名な法律家のモリス・ガルソンを弁護士にたて多くの出版社の社長団による請願書をだしてたたかったし、ジロディアスの場合には、サルトル、ケッセル、ジュアン・ド・ノワなどの作家が発起人になって、文化相のマルローに請願書がおくられたが、いずれも、いまのところ敗訴におわっている。

政府側がタテにとっている法律は、戦後大量にアメリカから入ってきた猟奇色の濃いマンガから青少年をまもるために一九四九年につくられたもので、元来、こんどのような場合に発動すべきではないが、ドゴール政権確立後の一九五八年の十二月に定められた強力な、出版物規制法を援用することによって、一応法成には筋が通るようになっている。

法的には理屈が通っても、もともと現代人の常識からみて無理のあることをする以上、どうしても現実にはこっけいな矛盾

がおこるのは当然のことだ。

ほんのわずかな例をあげれば、ジュネの『花のノートル・ダム』は、フランス語の原本は大手をふって買うこともできるが、オリンピック版の英訳本は発禁で、同じように『ロリータ』の英語版の原本は発禁だが、フランス語版は出版社がちがうためにまったく無キズで、いったいフランス人のための法律なのか、英米人のための処置のなかから始末である。

また、レイモン・クノーが書いた、ある映画のシナリオは発禁になったが、当の映画はなんの故障もなく上映されているといった具合である。

なぜ政府がこんなにまで厳しく「悪書」征伐にのりだしてきたか——その理由は決して額面通りの単純なものではないようだ。当然考えられるのは、ドゴール政権の官権主義的なゆき方のひとつの反映だということである。

ドゴール夫人は、たいへん道徳的にやかましいひとで、大臣をはじめ政府の高官に、身をつしむことをつね日ごろいましめ、大臣夫人が華美な服装をすることを禁じ、離婚などにはきびしい目をひからすという、もっぱらのうわさだし、彼女がパリの英語版の出版社が出す文学書にあきれかえったという話もかねて伝わっている。

政府の内実はともあれ、こうした、いわば時代に逆行するような措置が進められてゆくと、フランスの出版社は発禁その他の刑罰をおそれて、冒険的な出版をしなくなり、ひいては世界に冠たるフランス文学の沈滞、さらに文化の低下を招来することは、明らかであろう。

もし、フローベルの『ボバリ夫人』が、こんにち新刊書としてあらわれたとしたら、おそらく、ドゴールの検閲にひっかかるだろうという説もある。ジョイスの『ユリシイズ』など

裏窓タウン



は、もってのほかだということになる。

『チャタレー夫人の恋人』をはじめ、「美風良俗」を傷つけるといわれてきた多くの現代文学の問題作をつぎつぎと公認したイギリスの社会の英知とくらべてみたとき、フランスを吹きまくっているドゴール旋風の異様さは、いっそうあざやかになってくる。

——以上であるが「裏窓」の愛読者諸氏よ、（なにをいまさら）とか（罪ほろぼしか）などと、どうかそんな皮肉なことを言わないで頂きたい。

この記事は、あきらかに「言論弾圧」を恐れるものの立場によって書かれ、ということとは、すなわち、われわれの「味方」ともいえるのだから。

（豊）

出口がかゆい

女性ドライバー

文芸春秋発行の「漫画読本」七月号は「ドライブに行こう」とい

う特集。

なかで、ドクトル・チエコが書いている「女ドラ養生訓」という軽い文章は、べつにアブ的というわけではないけど、読んでいて、なんとなくムズムズしてくるところがある。「女ドラ養生訓」というのは、つまり、女性のドライバ—の生理衛生に関する心得というような意味。

抜すいさせて頂くと——。

——ついでにもうひとつ清潔でない話ですが、出口のトコってジメジメ湿度が高いもの。そのせいでタムシだの湿疹ができて、カユくなります。運転しながらツイストみたいに腰をふってるタイプを見かけるけど、たいてい出口がカユイわけ。我慢してないで、カユイときはカユミ止めをおつけなさい。抗ヒスタミン軟膏か、ホーサン軟膏でもいいでしヨ。

女性ドライバーだけにある「月よりの使者」もいささか閉口ね。なんとかうまく面倒みないと、大失敗するときがあるもの。量が多

い時期は、とかくヒップのほうへ浸透する可能性があるから、手当は万全を期してください。外側にあててると、たいていパットが前か後へズレちゃって、すごく心配です。

だから、からだの中へ入れちゃう、タンポン式がいいってこと。

それに内装用のものは三時間ぐらいもつから、あんまりトイレへ行かなくてもすむでしよ、遠出のドライブには便利します。タンポンとパットの両方を出血の一番多いときにしておく、これは絶対安全。快適この上なしヨ。ぜひおためしください。

——てなぐあい、空想力のゆたかな人間なら、十分にSM的感興をたのしめる一文。

（八）

さすがの

淡谷のり子も……

TBSラジオで、毎週水曜日午後三時の「女性ジャーナル」の人生案内が、聴取者からの相談にたいして、淡谷のり子に電話回答



をさせているが、六月三日に次ぎのようながあった。

相談者は、三十三歳の主婦である。その夫(48)が新しい会社を設立するとともに、二十八歳の青年を秘書として雇ったが、その青年が夫と親密にしすぎるように思われる。ときには夫は、その青年秘書のアパートに泊って、家に帰らぬこともある。これは放っておいてよいものかどうか……という質問なのだ。

それにたいして、淡谷のり子の答の第一声は、

「その青年はご主人に協力するからでしょう。それでいいじゃないですか」

問(アナウンサーが代弁)「しかし、青年はご主人にあまりにべたべたしすぎるので、奥さんとしては見ていられないのだそうです。ふたりをひきはなすことはできないものか、と仰言るんです」

答「さあ……ひきはなしたら、ご主人が会社の経営上、困るんじゃないですか」

問「ふたりは同性愛のような関係じゃないのでしょうか？」

答「そう、では奥さんからご主人に訊いてごろんになったらよくないですか。その返辞の結果で、心をおきめになることですね」

問答はこれで終った。

さすがわけしりの淡谷女史も、いままでなかったらしい質問に直面して、やや途惑ったような調子であった。

尤も、淡谷のり子とかぎらず、新聞などの「人生相談」でも、この種の質問には、当を得た回答をほとんど見たことがないが……。

(かびや・かずひこ)

菊村到・作

「歌うのは夜だけ」

「文芸」七月号の巻頭長篇小説

「歌うのは夜だけ」(菊村到作)

のなかに、この小説のかなり主要な人物である二人の男の、それぞれの同性愛的な場面が描かれている。

その一つは、主人公である新聞

記者の池に語る、その戦友の弓削という男の、少年時代の回想である。

弓削は中学四年のときに、同級の一少年を愛するようになる。その少年のために、自分の人生があるような気がする——そんな熱い愛情だった。

ところが、ある夏の夜、弓削は西瓜の番小屋にいたとき、西瓜をたべにきた愛人の少年の姉から、はからずもコイッスの洗礼を受けてしまう。

姉の日記を覗いて、そのことを知った少年は、弓削を学校の裏山によびだして詰問した。少年の体が、弓削にむかって跳んだ。弓削は転倒し、ふたりはそのまま、もつれあいながら、ごろごろところがった。

そのなかで、弓削のもちものは、かれ自身の意志に反して、怒張し、そしてついにエジャクレートした。

瞬間、無意識に発した弓削の叫び声に、少年はおどろいて、弓削

裏窓タウン



の体をつきはなした。弓削は自分のズボンの下の状態を、少年に語った。

「おれがふいてやる」少年は言っ
て、弓削の体を蔽うものをはぎと
った。

△それは、一つの儀式に似てい
た。(中略)それは、最も異端の
力、異端の匂い、異端のひかりに
みちた、隠密な、官能の祭典であ
り、そこには、崇高と無頼、神聖
と淫蕩とが、濃密に噛みあいなが
ら、調子外れの聖歌を、熱っぽく
ささやくように、かなでていたV
うんぬん……とある。

無差別期の少年時代によくみら
れる、熱っぽい、しかし稚なげな
同性愛のさまが描かれている。

も一つは、主人公の池が、ある
パーティの席上ではじめて会った
宇部という著名な作曲家について
の描写である。

宇部は「なめらかな、中性的な
つややかな皮膚と、まるい、すきと
おるような声」を持つ男である。
かれは、かれを知る者のあいだ

では、「ねこ」と綽名されている。
風貌といい、表情といい、身のこ
なしといい、まさにねこの感じだ
った。

「ねこ」は池に握手をもとめ、
握ったまま、なかなかはなそうと
しない。

△その手のひらは、すべすべし
ていて、それにしめりけをふくん
でいて、その上、指の腹が微妙に
くねつて、独特のリズムで、池の
手に、圧力をくわえてくるV

△「猫」の手は絶妙なうごき方
をする。それは、他の、どのよう
な性器とのふれあいよりも、セク
シーで、技巧的で、背徳的である
ように、思われるV

△池の手は、それ自体で、充血
や硬直、分泌や痙攣をくり返す。
同じ事情は、「猫」の手のほうに
も成立し、そこに、手と手の全
き性的結合が、成就されるV

——こんなふうに、「ねこ」の
握手の表情が、一ページ余に亘っ
て、こまかに描写されている。

この「ねこ」は男色家として

も、芸能界に有名なのだが、そう
したかれの男色の傾向を、かれの
握手の表情によって語る——とい
ったような描写である。

後に、「ねこ」とその愛人であ
った若い作曲家との関係のポジシ
ョンについて、池が友人とうわさ
するところがある。そして、そん
な場合は、「ねこ」が女となるの
さ、それは自明の理だろうという
ことにおちつく。

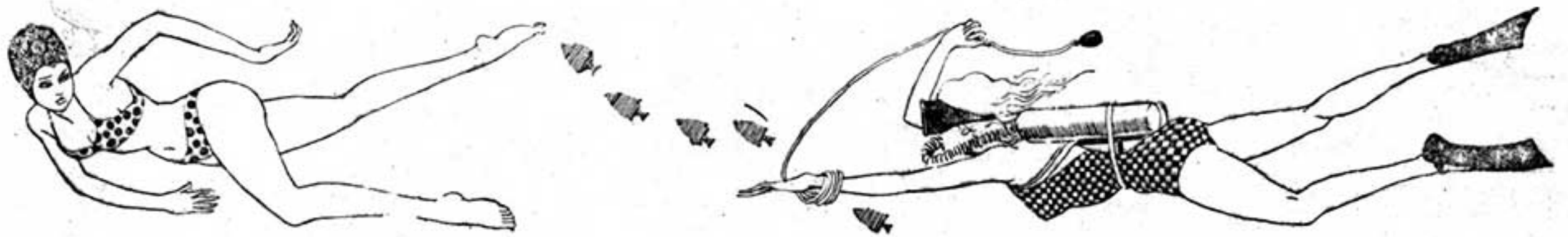
ここに言っている女うんぬん
は、受動的立場の意らしいが、じ
っさいには、ウールリングだから
といって、受動的になるとは
かぎらないのである。

同一の相手と相互的に能動・受
動する場合、年長者には受動的に
年少者には能動的になる場合、ま
たその逆の場合等々の、その人そ
れぞれの交合能度がとられている
のである。(かびや・かずひこ)

図書新聞

「時のうごき欄から」

四月二十三日、サド裁判の渋沢



龍彦、石井恭二両被告と弁護団は長文の上告趣意書を最高裁に提出した。『続悪徳の栄え』が発禁処分となった六〇年四月からすでに四年、サド裁判の大詰が近づいて来たわけだ。

周知のように、わいせつ文書販売、所持の罪で、刑法第一七五条によって起訴されたこの裁判の第一審は無罪判決を受け、それを不満として検察側は上告。第二審では原判決をくつがえして昨年十一月二十八日、有罪の判決が下されている。これに対する被告側の上告申し立てなのである。

埴谷雄高、白井健三郎、遠藤周作氏らが特別弁護人となり、弁護側証人に大岡昇平、吉本隆明、大江健三郎、中村光夫氏など多くの作家、評論家が登場した第一審の詳細な記録は、『サド裁判上下』（現代思潮社刊）におさめられている。これを読めば、法廷で何が争われたか、何がこの事件の真実なのか、手にとるように明らかになる。いわゆる文学裁判とし

てこれに先行する「チャタレイ裁判」にくらべるとき、ここには、より鋭く対立するものの立場が露呈されていた。それを一言でいえば、渋沢被告のいう、現代の魔女狩りを行なおうとするものとの対立なのである。

既成の秩序を人々の内部にまで貫徹させ、支配を全うしようとする権力が「わいせつ」の名において、もっともきびしい反権力、反秩序の思想を狩り立て、抑圧しようとして試みたのが「サド裁判」なのだ。被告側の姿勢が、つねに問題を本質的な局面でとらえようとしていたのは、そのためだ。ある意味で、この裁判は、六〇年六月、

安保闘争が終った後も一にぎりの知識人たちの手によって闘われつづけて来た、ほとんどただ一つの思想的闘いを示すものだった。そういう眼から見れば、無罪判決をいい渡した第一審の判決文自体、なお大きな問題を含んでいたともいえる。この判決は基本的に、チャタレイ有罪を宣告した最

高裁判決に依拠していたのであり、事実認定の面で続悪徳の栄えの表現は、そこにいわれている「わいせつ」にはあたらないという態度をとっていたに過ぎないからだ。いうまでもなく、問題は、チャタレイ判決そのものの、思想的芸術的表現を部分に分割し、その個々の部分を良識の代弁者として裁判所が判断するという、その態度にある。しかも、第二審は、一審の判決を破棄して、一方的に有罪の宣告を下しているのだ。

健忘症のマスコミは、いつときこの裁判を話題にしたが、たちまち忘れ去った、二審有罪の決まった日、テレビニュースは、二人の被告の顔写真を、ちょうど、凶悪犯逮捕のニュースのときと同じ扱いで、ブラウン管にのせた。そこには、事件の本質を追わず、現象だけを追い求めるマスコミの姿勢が、典型的に示されていた。事実とは、いま、二人の被告を犯罪者だと告げているその同じ権力が、やがて、マスコミそのものの表現を

裏窓タウン



規制しようとしているのだ。

それは誇張でも何でもなし。池田人づくり政策が端的にあらわしている。日本の支配層の国民に対する完全な人間管理の意図は、ますます具体化されつつある。深夜喫茶やボーリングの害が閣議で話題となったとき、池田首相は、同時にテレビ・ラジオの深夜放送の調査をも指示したという。かくして放送自主規制はさらに強化される。ペルイマンの『沈黙』は、税関で三十七秒カットされた。芸術家の表現に文字通り権力の走り使いどもがハサミを入れているのである。

東京都は青少年保護育成条例を準備している。同種の条例をすでもつ埼玉では、知事が先頭に立って「悪書」をやいた。まさに二十世紀の魔女狩りではないか。青少年を何から保護し、どう育成しようというのか。権力の側からするそういう具体的な攻撃をはね返すことが、いまほど求められていることはない。このとき、サド裁

判は象徴的な事件としてとらえられる。女は、いくら避けようとしても檻のなかだから駄目。顔も髪も

——以上は「図書新聞」五月二十三日「時のうごき」欄から。

イタリア映画

「シヨック」

この映画のスチル写真は、すでに本誌六月号において、七、八点発表されている。

製作したイタリアで上映禁止になり、同時に輸出も止められ、世界中で公開されたのは日本だけというドキュメント映画だが、内容は、それほどのものとはおもえない。

みどころは、パリのサディスト陳列館なる、一種の見世物小屋の案内シーン。

男の案内人に引率された観光客の団が、この陳列館のなかへ、そろそろとはいっていき、S M的な趣向をこらした見世物を、見物したり、自分も参加したりする。檻のなかへいれられた女めがけて、腐ったタマゴや果物をぶつけ

る。女は、いくら避けようとしても檻のなかだから駄目。顔も髪もべたべたに汚れてしまう。

この女は、高い給料で雇われているそうだが、投げつけられる腐れタマゴから、本能的に顔をねじまげて逃げようとする表情に、ちよっぴりS M味らしいものがある。

両手をうしろ手に（手首だけ）しばられて首に縄を巻かれ、絞首刑になる女。

台が蹴られて、首に縄がくいこむ瞬間、フィルムを止めて、その恐怖と苦痛の表情を固定してみせてくれるが、われわれのいうS M感覚とは、だいぶちがうもの。

いくらかマシなのは、車責めにあう女。ナレーターは、これを、「車裂き」といつていたが、べつに裂くわけではない。単なる車責めにすぎず、水のない水車責めと思えば、まちがいはない。

大きな車の上に、弓なりに身を固定された女（足は縛られているが手は自分で把手を握っている）が、ぐるぐる回転する。



下のほうに、鉄のトゲがいつぱい、植えられていて、女が、回転して腹を下にしたとき、そのトゲにすれすれになる、といった仕掛け。

囚衣みたいな青い服の裾が大きいくまくれて、下ばきとふともみがクローズアップになり、SMというより、単純エロチシズムのほうに濃厚。両腕が縛られていたら、すごい迫力になっただろうと思われる。

このサディスト陳列館では、じつは、男性マゾの仕掛けのほうがすごい。

いすに縛りつけた男を、客の女性、火のついた棒でなぶるシーン（この男も給料で雇われたという）は、見世物以上の実感があって、客席は数秒間、息をのむ。

また、壁にはめられた手錠に、バンザイ型に縛りつけられた男奴隷への、ムチ打ちシーンもある。こういう見世物に、いちばん興奮してよろこぶのは、女性の見物客だそうで、画面にも、檻のなか

の女へ嬉々としてタマゴをぶつけるオバサマの姿がうつる。

そのほか、有棘鉄条網のなかを女が肌から血をながしながら腹這いになって進む場面もあるが、これも、われわれのいうSM感覚とは、だいぶ遠いようだ。

監督は、フアブリッツィオ・ガベラ。原案のロジェ・バイランドは、前衛的な映画脚本も手がけている若手の演劇評論家だという。日本の税関検閲で、れいによって、三カ所切られたそうである。

（藤）

日活映画

「赤い殺意」

原作・藤原審爾。脚本は長谷部慶次と、監督の今村昌平。

封切り前から、ずいぶんいろいろ宣伝された映画である。

ドラマの舞台は仙台。（したがって登場人物がほとんど東北弁なので、その聞きづらいこと）

夫（西村晃）が出張旅行へ出て留守をしている人妻（春川ますみ

好演）のところへ強盗露口茂がはいる。

この強盗は心臓病に苦しむドラム叩きの青年で、薬を買う金欲しさに押し入ったわけ。

春川ますみの顔を、白いシートでぐるぐる巻きにさるぐつわ。スタンドのコードでうしろ手にしばりあげる。（手首だけ）

まくれあがった肌に、むらむらともよおして、ナニカするというのが、そもそも事件の発端。

強盗はひと晩をそこですごし、翌朝になって、しばったコードをほどいて、もういちど、ナニカするのだが、SM情緒にはとぼしく特筆すべきものはない。（映）

仏伊合作映画

「白い肌に狂う鞭」

この映画のスチル写真も、すでに本誌五月号に掲載済み。

海辺の古館に展開する怪奇映画で、原案・脚本がジュリアン・ベリイとロベール・ユーゴ。監督は、ジョン・オールド。

裏窓タウン



つらがまえだけはものすごく、
実際はあまりたいしたこともない
主人公の「サディスト」にふんず
るのが、クリストファー・リー。
主演女優が、ダリア・ラビで、
この美人がいろいろといじめられ
る。

ベッドにうつ伏した彼女の背中
に鞭がふるわれ、鞭あとが赤いみ
みずばれになってくねるシーンが
この映画のクライマックス。

白い肌に鞭あとがつぎつぎにふ
くれあがるトリックだけはみもの
だが、そのほかは単調で、べつに
縛りもない。

最後にどんでん返しがあって、
美女がいじめられるのは、みんな
彼女自身の幻覚だったという、あ
まり、パツとしないおはなし。

(映)

国映映画

「独立グラマー部隊」

昭和十九年の南支、広野のまん
なかに、ふともをさらけだした
日本の女が七、八人、ごろごろと

ころがっている。

トラックでやってきた敵軍がこ
れを発見、車からおりて女どもの
そばへ寄り集まり、あらわな肌に
目をやって、ごくりとのを鳴ら
したとたん、死んでいた女たちが
いっせいにはね起きて敵兵どもを
なぐり倒し、トラックを強奪して
逃走する——というのが、この劇
映画のトップシーン。

この日本の若い女たちは、前線
へ派遣されてきた慰安婦の団な
のだが、めざす中隊が、敵の集中
砲火を浴びて全滅している。

おまけに、いつのまにか前後左
右を敵軍に包囲されている、とい
った情況設定で映画は進行する。

扇町京子ふんする姐御株の慰安
婦が、敵軍をだますためにシナ服
をきて、仲間の女に自分を縛らせ
て、ひと芝居うとうとする。

シナ娘に化けた扇町は、うしろ
手に縛られたまま「たすけて、た
すけて」とシナ語でさけびながら
敵軍のなかへかけこんでいく。
いちどはうまく敵の将校をだま

すが、夜半、マッチを燃やして味
方へ連絡しているところを発見さ
れ、ものすごい拷問をうける。

ぎりぎり巻きにうしろ手に縛ら
れ、天幕のなかのベッドにころが
されて、将校のムチを浴びるので
ある。

ムチの音と悲鳴。身を反転させ
て、のけぞる女体の描写がたいへ
んな迫力。緊縛感も八十五点ぐら
いで、まず及第。細目の縄が、よ
く腕にくいこんでいる。

この映画には、ほかにこれとい
って見せ場もないので、まるで、
この拷問場面を目的につくられた
ようなもの。時間的にも、かなり
長く見せる。ラスト近く、こんど
は柱に縛りつけられた扇町が、将
校の手で胸のあたりをなぶられ、
悲痛な表情でみもだえる。

一方、グラマー部隊の陣地でも
敵兵を一名捕虜にしているのだが
その捕虜にだまされて、女がうし
ろ手に縛りあげられ、足も縛られ
さるぐつわをはめられる場面が、
すこしでてくる。

(映)



1

本来からいえば、言わず語らずの以心伝心というのが一番いいに決まっている。

口もきけない、何の意思表示もできない、生命のない存在——私は石になりたい、石の心で椅子になりたい、便器になりたい、くつになりたい、ビデになりチリ紙になりたい、アンネナフキンになりたい——私はチリアクタのように捨てられたい。そしてそのとき、ただ一しずく、ポトリと涙を落としてだまっていたい。

本来からいえば、なんらさしずがましいことは、こちらからは言うべきではないのだ。

奴隷にしてくれ、女王になってくれ、とすら言うべきではない。

希望の表明自体、既に僭越だ。さしでがましいことだ。希望を表明し、暗示を与え、かくあることが望ましい、ということになされる女性側の行為は、二番せんじの茶のように、もう味がない。

マゾヒストの味覚神経は、たとえ石のように身は動かぬ道具のようになり果てても、それはとぎすまされて敏感なはずだ。

女性側からの行為は全く自発的な、当人自身の発意から出るものであってほしい。こちらの希望でなされる筋のものであってはならない。

ところがそれが、時としては時間の制約から理想通りにいかない場合のほうが多い。

泣くまで待とうホトトギスというわけにはいかない。こちらから暗示を当え、教唆をし誘導する必要が生じる。しかしそれは、あくまで先方女性の、自発的意思を発芽させ、それを培養育成すること



■ 体当たりマゾヒズム論・27

ああ、

口もきけない生命もない
石になりたいぼく

水尾 究

江渕晃夫・絵



であって、決してこちら側男性の、こうありたい、こうされたいの押し付けでは意をなさぬのである。

それはただ、わがままにすぎない。少しもそこに、真に自発性の認められぬ女性Sは、決してSでなく、従って受けるMもMではなくなる。

ところがしばしば、見受けるところ、表側からの外観だけでは女性S、男性Mの体裁をとりながら、それは少しも心の伴わない、実質の主導権は男性にぎり、ああしてくれ、こうしてくれ、のさしずによる、実質は女性M、男性Sのケースが、はるかに多いのだ。

ほくが森本佳子に手紙で示唆したのは、本来からいえば不本意なことであつた。それは一種の教唆扇動に類するものであつた。

「いいですか、少しくらいの傷がつく程度ならかまいませんよ。泣いたってかまうことはいんです。よかったら、縛ってやるのもいいでしょう——とにかく、くせになりますからね」

これは、言い換えると、こうしてやってほしい、という、希望の表明であつた。ということは、表現こそ柔らかいが、一種の押しつけである。

だが、これをもう少し考えてみると、縛ったりなぐったり、という、日ごろは全く隠されて意識されないでいる、女性の本能的なS的欲望に、これは教育のために必要なことなのだ、という、大きな口実をこちらから提供することでもあつた。意識されないでいる欲望が、意識されないままに、形の上で表面化することに、道を開いてやることでもあつた。

しばしば路上などで見かけることだが、少女が、幼児をからかって泣かせている光景がある。少女は、わざと幼児をおいてけぼりに

して、さっさと先へ歩み、幼児が追いつけないで、後のほうで地団駄ふんで泣きわめくと、早くいらっしやい、と足を止めて声をかける。しばらく待って、幼児が歩いてくると、意地悪く足速に立ち去って、また振り返りながら、早くいらっしやいってば——とケン高な声をあげる。

あの少女特有の意地悪さは、そのまま女性の持つ性格の一面として、その後もついて回るのである。改めて意識されることはないがその種の性格が、男性Sに対する女性Sの、一つの根強い傾向を成立させるのである。

男性Sが陽性であるに対して、女性Sは陰性である。陰性であっていつも言い訳が必要だ。子どもに対してのしつけのためだとか、教育愛のためだとか——本人も、その言い訳を、そのまま自分自身で信じこんでいる人にうそをつく前に、自分にうそをつき信じこむのである。

ほくは、うその口実を彼女に与えようと思った。口実を与えることで、彼の自発的なSを誘発しようと思った。だが、それすら、本来からいえば、それが一種の暗示、教唆である、という意味において、不本意なことであつた。

2

自分のことばに、自分で酔う、ということがある。また、自分の書くことに、自分で誘発されて、自分で酔うということがある。

森本佳子に当てて、手紙を書くことは、それ自体が酔う、ことであつた。自分の分身である剛を道具にして、その道具を相手に、ちやんと言ひ訳のついた、そしてその実女性特有のサジズムに興奮す

るとこの、ひとりの女性をながめる興奮が、際限もないM的感興をそそりたてるのである。この空想的部分が手紙を書く行為の中に、現実面に付加されて、現実が、よりくつきりとリライトされて浮かび上がってくる。

週に二度、授業日であつた。その授業日には、ほくは用件をこしらえては、出社するとすぐに会社を飛び出した。駅近くの、荷物あずかり所から風呂敷包みを取り出すと、公衆便所にはいった。服装を変えるためであつた。二十面相ほどの変装術がほしかったが、それほど完璧さは期しがたく、従つてネクタイ、ワイシャツをとり少しくたびれた、ジャンパー姿に、姿を変える程度が関の山であつた。これで、ともかく、ほくはほくでなくなり、弟の剛になつた。着替えた背広やくつは、また風呂敷に包んで、別のところにあずけて、札をもらった。

服装が少し変わるだけで、こうも人の気持は変化するのか、先ほどの、ネクタイをつけた、いかにも勤め人的なほくの普通の意識は消え去つて、ここには、一種ヤボツタイ、バカにされて当然な、それを身の当然と考える、痴鈍な男の気持ちちが、すっかり心の中に安住してしまつていた。

池袋から練馬はすぐであつた。そして駅前の商店街の道を北に抜け、勝手知つた森本佳子のアパートの二階にあがつていった。

森本佳子は、勤厳な表情をくずさずに、ほくをにらみつけた。ほくは、テレ笑いじみた薄笑いで、頭をかきながら、彼女の前にかしこまつたが、彼女はいつそう厳しい目をしてほくをにらんだ。

彼女は本当に腹を立てているようすであつた。それは、前回、私の仕事の関係で、どうしても抜けられず、従つてよんどころなく、授業を無断でさぼつたからであつた。

ぼくは授業をさぼって、映画を見に行ったことになっていた。会社で電話がかかってきたとき、ぼくはこう答えておいた。

「剛はおうかがいしませんでしたか。それはおかしいですね。ちゃんと行くように、そう言ってお金も、手紙も、渡しておいたんですからね。おそらくズル休みして、映画でも見に行ったんでしょ」

森本佳子は、授業をスッポかされることで面目を失っていた。また、授業料は、一回一回ごとに渡されていたので、その一回分の報酬を、そのためにフイにした、という怒りがあった。

「剛！ あんた、この前の授業の時は、どこにへ行ったの」
「うん」

ぼくは、生返事に上目づかいしながら、おずおずと答えた。

「ぼく、うちにいたよ」

「うそおっしゃい」

佳子の激しい声がとんできた。

「勉強しないで、どこに行ってたの」

「ぼく——」

言いよどむように、やはり上目づかいに、

「ぼく、うちにいたよ」

「そう、あんた、先生にうそをつくのね」

佳子は椅子から立って、畳の上にすわり直してきた。厳しい空気が圧迫するように流れてきた。

「ぼく、うそつかない」

そういつて、気配に押されるようにあとずさりした。逃げることで相手を挑発した。

「あんたがどんなにうそついても、先生にはちゃんとわかってるん

だから」

「でも、ぼく、うちにいたよ」

「まだうそつくの」

いきなり平手打ちをくった。打とうか打つまいか、彼女のためらいがぼくには電気のように伝わっていた。

だが、ためらいが、そのキツカケで破れた。それは確かに、感激に価する頂点であった。その時は、森本佳子自身の、自発的な意思にあった。自発的な意欲から、彼女は怒りに任せ、無力な相手を打ちすえた。

ぼくは部屋の隅にへばりつくようにして、身をよじり、手で顔をおおうようにした。

ぼくの両頬はあつくほてり、耳の鼓膜がジンと鳴った。女とて、遠慮なしに打てば、その腕力は相当のものがあつた。彼女は彼女自身でその腕力に驚いているふうであつた。

3

「痛い、痛いよ！」

ぼくは泣き出した。本当に涙が出れば、堂に入ったものだがそれが出れないものだから、苦心する。それでも、ちよūdおびえた子のように、身をよじった。

だれも救ってくれる者はいなかった。ぼくは本当に悲しくなつて本当の涙が、じんわりと目の網膜ににじみ出てくるのを感じた。

さすがにあわれをもよおしたのか、佳子は打つ手を控えた。激しく肩で息をしていた。

「先生にうそをつくから、こんな目にあうのよ」

大人 150
小人 100
学生 120



佳子は、そんなことを言い訳がましく言った。「痛かったでしょ。ごめんなさい」とは言わなかった。もし彼女が、そんなことを言うおうでもしたら、すべて、あらゆるものがフイになる。「人をなぐるの、とっても愉快なことね。気持ちがいそいそして、いい心地よ」と言ったとしたら、これは少し飛躍して、芝居じみ、かえって効果

はマイナスか。

でも、ほくは、そんな彼女のセリフがほしかった。たとえ芝居じみていても、芝居じみたものがほしかった。

「先生にうそをつくから、こんな目にあうのよ」という彼女のセリフは、しかし言外に、非常な、そして異様な、

新しい思ってもみない刺激を受けたことを、正直に物語っていた。

「ぶたれるのがいやなら、本当のことをいうのよ」

ほくは泣きじゃくりながら、こっくりとうなずき返した。

「お勉強をさぼって、どこに行ったの」

今度は、こびるような、甘い響きがこめられていた。

「映画」

「何見たの」

「チャンバラ」

「おもしろかった」

「うん」

「お勉強とどっちがおもしろい」

「チャンバラ」

「そう、でも、お勉強だって大事でしょう」

「——」

「今度は、お勉強をさぼったりなんかしないでしよう」

ほくは子どもの正直さをテラッてみた。このままお仕舞になるのが、惜しかった。

もう一度、彼女の嗜虐心に口実を与えてみたくなった。それには子どもらしい正直さで、執着を率直に表わして、かたくなにだまっていればよかった。

「いい？　今度は、お勉強をさぼったりなんかはしないでしよう？」

ほくは返事をせず、またそれがこわさに、けん命にこらえながら下を向いていた。精いっぱい反抗の姿勢であった。

森本佳子は、ジリジリするような自分を持てあまし気味に、どうこの場の処置をつけたらよいのか、思案するふうであった。こ

のままではひっこみつかないのである。それに、生意気にも、弱者の身でもって、身のほど知らずに反抗するとは、これが第一にがまんにならないことであった。

ほくはとっさに身をひいて、なぐられぬ先に身をかばうように、腕をあげ、顔面をおおった。これは明きららかな挑発であった。

森本佳子はほくの腕を捕え、それをおろさせようとした。

「手をおろしなさい。そしてちゃんと先生のお顔を見なさい」

それでも、なおいっそう腕に力を入れ、頭をかかえこんだままだった。

バカはバカなりにかたくななものだ。バカのくせにかたくななものだ。そのエコジさが森本佳子にはコッソときた。

「強情張るなら、張ってなさい」

彼女が立ち上がったとき、ほくは期待にふるえた。何を期待するのか、押入から赤いヒモを捜し出し、キツイ目をして寄ってきた。それは期待そのものであった。森本佳子は、荒ら荒らしく、ほくの腕をねじるように、頭からもぎ離し、ヒモをかけようとした。できるだけ、ほくは暴れてのがれようとした。暴れながら、彼女に組み敷かれないと思った。組み敷くことに導き込もうと、ほどほどの抵抗を示した。

大の男を組み敷く、ということが言われる。かわい女の身でもって、大の男を自由に組み敷き、なろうことなら馬乗りにまたがって自由を奪い、手を足をくくりあげてしまう光景は、まことに得がたい景観であろう。

一女子学生が、大の男を組み敷く、その光景に酔う気持ちであった。しかし、事実にはどこかでズレが生じる。

森本佳子は、押えつけるように、暴れるほくの両腕を、上からか



かえこんだが、さすがに永い女性としての習性から、そのからだに馬乗りにもたがることだけは、できかねるようであった。だが、ほくの両手首は、赤い細ヒモで、自由がきけない程度にくくりつけられてしまった。

4

だが、くくることで、森本佳子の努力は限界であった。

いつとき、にらめっくらをするように、畳の上へたりこんだ彼女と、泣きべそをかいたほくは、だまって顔を見合わしていた。そうしてしばらく時間がたった。遂に、沈黙に抗しかねたように、ほくはうなだれ、畳の上を見つめ、しゃくりあげた。

「わかったんらしいわ。許したげるわ。今度からは、こんなへんな強情は張るもんじゃないわよ」

そうして、いったんくくった細ヒモをほどきにかかった。

森本佳子の、黒い、若い豊かな髪が、ほくの鼻の先で、甘ったるくにおった。それは、実に雅なげな、少女のオカッパの頭のおいと、同じように、汗ばんだ、挑発的なにおいがこもっていた。

興奮が薄らぎ、感情が正常にもどるにつれて、森本佳子は、いつかバツの悪くなりそうな女としての羞恥から、しいて身をそらすように、むしろ厳とした厳しい態度をくずさず、

「うそなんかつくからよ。先生だって、こんなこと、したくないんだけど、あんたがうそをついたり、強情を張ったりすると、やっばりぶったり、縛ったりしなきゃならないものね。いい、わかったんならそれでいいのよ。でも、こんなこと、帰ってからお兄さんに言うんじゃないわよ。またしかられるからね。先生もだまっておいた



げるから」

見えすいたおどしで、今日の秘事を、ひたすら外部に洩れさせまいとする、彼女の杞憂は、また女らしく、一つのユーモラスな気取りじみたものを表わしていた。

幕切れは、こうして、あっけなく終わった。

ほくには、まだ期待があった。期待がふくらんでも、もっともっと、心の底から突きくずされるような、素晴らしいショッキングなことが、なぜ起こらないのか、もし、彼女とほくと、これから共々起居を一にして、共同生活を一緒にすることにもなれば、そうした事態は、日常茶飯のように訪れるであろうことを、疑うものではなかった。

しかし、それも考えてみると、許されない一場の空想事に過ぎないことを、思い知らねばならなかった。

翌日、森本佳子から、会社で電話がかかってきた。

電話口で多くを語れないために、改めてこちらから電話をする、ということ、いったん受話器を置いた。

外のボックスから、電話を改めてかけ直した。

剛の兄として、ほくはまだ見ぬ人に対する節度と、弟が厄介をかける教師に対する礼儀をとって、丁寧に応待した。この丁寧さは、Mとは違った、また一種言いようのない、余裕からくる楽しみがあった。

森本佳子は、剛として彼女を知るほくには人違いではないかと思えるほど、甘やいだ、静かな、そしていかにも女子学生らしい、清楚な声の響きを伝えてきた。そこには、はるかに年長の男性に対しての、一種の心やすい甘えさえがあった。

「わたくし、剛さんの扱い方に関して、どうしていいかわからなくなってきたんです。ぜひ、お目にかかって、いろいろ、お教えいただきたいんです。お忙しいことはわかっています。でも、わたくしの方で、ご指定の時間にご指定の場所へ出向きます。どうしてもお目にかかりたいんです」

熱心な、実意でもって彼女は訴えていた。

わたしは返答に困った。ともかく、今まではいろいろと口実を設けては、彼女のお目にかかりたい、という鋭鋒をかわしてきた。それが、もう、かわしきれなくなったことを悟った。でなければ、彼女はきつと、前後の事情に不審をいだくに違いなかった。もしかすると、いきなり、何の前ぶれもなく、会社に訪ねてくるかもしれない。彼女なら、それをやりかねないところがあった。

ぼくは永く考える余裕もなく、しかし断乎と決して

「わかりました。とにかく、あとで速達なり、ともかくお手紙を出します。その上でお目にかかりましょう」

と言い切るなり、電話を切った。

わたしは不思議な緊張を覚えていた。今までにない緊張だった。剛とその兄、それを同時に、同じ場所で二人を演じることは不可能だった。

あるいは、剛ではなく、別人の兄として、森本佳子の前に出ることも不可能であった。いくらなんでも、一卵生双生児とかの、強弁でもってごまかし通そうとするのも、あまりにも見えすいた、こっけいな、ごまかしに過ぎなかった。それは、ごまかしとしてすら、通りそうもないことであった。

ぼくは考えた上で、やはり、決心するほかはなかった。

考えあぐねた末の手紙がこうであった。

「あなたは非常に驚かれるかもしれない。そしてまた、あるいは怒られるかもしれない、いや、きつと怒られるに違いない、わたしはその点、すまないと思い謝罪します。

剛とわたしとが、同一人であることを、あなたは本当に、全く知らなかったのでしょうか。最後までお気づきではなかったのでしょうか。わたしは、ひそかに、そのことに不安とおそれをいだいていたのですが――。

お気づきでなかったとしたら、わたしの行為は、あまりに結果として、罪深いものとなりました。考えようでは、あなたにとってこれほどの侮辱はないでしょうから。

しかし、どうか信じて下さい。世の中には、全く理に合わぬ、奇妙な妄想や欲望に、身を焼く異端の徒がいるのです。当人にとってはそれがどんなに世の常識に反した、とんでもない妄想であってもどうしようもないのです。人間とは、こういうものです。こういう人間を含めることでも、初めて人間の世の中があるものではないでしょうか。

なぜあなたをだましたか、深くお考えになられると困るのです。世によくある、女をだまして金をとるとか、いわゆるモノにするとか、そういうことではないのです。それはそれ自体が目的であってそれが手段ではないのです。つまり、剛になりきることに、これ以外の目的はないのです、あなたが剛をそうと思いこみ、心を許して、そのあまり示された行為を、ひそかに別のわたしがのぞき見して、

異常な感興に浸っていたなどとお考えにならないで下さい。わたしには、そんな余裕も、そしてそんな日常的な欲望も、どちらも全く無縁です。

剛になること、剛にしてくれること、そのことだけに、酔うだけです。これがマゾヒストと言える一群の変質者の想念と行為なのです。あえてわたしは自分で自分を変質者と言いましたが、どうぞ、気味悪く思わないでいただきたいのです。思わないでくれ、というほうが第一無理かもしれません――

手紙ですべてを書くことはできません。もし、あなたが、ともかく以上のことを表面上でもご了解していただいて、その上でなおわたしにお会いになれるお気持ちがありましたら、来る×月×日午後七時、練馬駅南口に「アール」という喫茶店でお待ちします。三十分間はあなたをお待ちします。

とんでもないお手紙で驚かせましたことをおわびします。

手紙を投函するとき、何かに祈る気持ちが動いた。

良い結果を産んでくれ、というではなく、ともかく、無事に、平静に、彼女が手紙の真意を解してくれるよう、そのための祈りであった。結果の是非は別問題であった。

当日「アール」で彼女を待つ間、しきりにわたしは、来るはずがない、と自分で何度も言い聞かしていた。もし、彼女がこのまま、現われなかったとしても、それは当然の結果といわねばならない。彼女の受けたショックが、ただ単に、ちょっとした軽いもので済んだのなら、それはそれでよいと思った。ここに再び現われなくてもわたしはそれを了として立ち去るつもりであった。

しかし、彼女のショックが、理不尽にも大きく深いものであった

ら、どうしよう。その結果として彼女が現われないのだとしたら、わたしはこのまま立ち去るわけにはいかない、いっそ一思いに、勝手知った彼女の下宿をこの足で訪問すべきであろうか。その判断にしばらく迷うかたちであった。

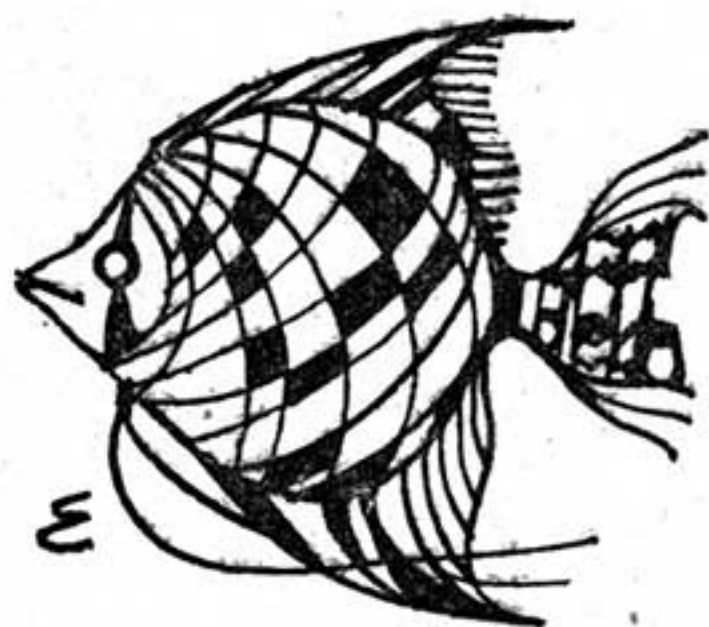
わたしは来るはずがない、と思いながら、しかし目と神経のすべでは、入口のドアのほうに集中しきっていた。ドアがあくたびに、神経は高ぶった。

なぜ告白をしてしまったのか、不意に胸焼くような後悔の念がこみあげてきた。まだまだそのつもりになれば、あそこまで告白をせずとも、何とかすんだのではなかったか。だれかに頼んで、臨時に剛の兄になってもらい、森本佳子に会ってもらえばよかったではないか。

しかし、それも勝手な後悔にすぎなかった。いったいだれにそんな代役を頼もうというのだ。所詮どこかでボロは出る、となれば、いずれはわかってしまうケースではないか。

突然ドアがあいて、彼女がはいってきた。

森本佳子は、何のためらいもなく、近づいてきて、前の椅子にすわった。目が少しのこだわりもなく笑っていた。



山のホテル



村山省一

三十すぎても独身でいるサラリーマン。酒もタバコもやらず、パチンコ、マージャンなど賭けことのたぐいも縁はない。ただ土曜日ごとに映画館へはいる。それもチャンバラか西部劇のたぐいで、文芸作品とかメロドラマは見向きもしない。こういう男がわれわれのまわりにいるとする。

かれに向かってたずねてみる。

「世の中にたいくつしないかね」

「たいくつとはなんだね？」

「じゃ、生きていてつまらなくはないのか、きみは？」

「つまらないとか、たいくつとかいうのは、いったいどういうことだね」

「つまりさ、きみのように自分の中にとじこもっていて、それで毎日が満足かね。たとえばベスト・セラーになっている本を読むとか若いびちびちした娘と寝てみるとか、酒や競馬に打ちこんでみるとか、そのほかいくらでもあるが、そういう日常的变化を求めようとは思わないかね」

「それで、どうなるというんです？」

かれの反問は、おそらくそんなところではあるまいか。そして、

「外へ働きかけようとはかりあせるから、たえずイライラするんじゃないですか。外と縁を切ってしまうば、けっこう安楽でさあ」と、つぶやくであろう。

「なるほど……」

と、逆にさとされるかもしれない。しかしかれがいうように外と縁を切ってしまうなど抽象的なことばを信じるほど、われわれは幸福ではない。いいかげんにあしらわれたというのである。そこでわれわれの貧しい心はかれを尾行したい欲望にとりつかれている。

四畳半一間のアパート暮らしで、部屋の中に飾り気はない。古道具屋から仕入れてきたと思われる赤い塗りのはげかかった丸い食卓が一つある。それで食事をし、机がわりにも使っている。一間の広さを持つ押入れには、夜具と洋服類の吊るしがあり、その他、身の回りの品々が都合よく押し込められている。

もちろんテレビなどない。また本と名のつくものは週刊誌にいたるまで、ただの一冊もない。かれの部屋にある唯一のマスコミ伝言板といえば、新聞とラジオである。その新聞はラジオの番組を知るために必要としているものであって、政治、経済、社会面などに関しては、とんと目を通さない。ラジオの番組だけを残すと、あとは折込み広告といっしょに、出勤のさいアパートのゴミ箱の中へ投げ込んでしまう、と言った調子でこの点にかけはじつに徹底している。

毎朝毎朝、サラリーマンはみんなおとなし

い。いくら混雑した電車の中でも、いくら暑
苦しい真夏でも、きちんとネクタイをしめ、
無言でスポーツ紙を読み、週刊誌を手ばなす
ことはない。これは屠殺場行きの電車ではな
いかと言うのは、詩人の負けおしみである。

かれとておとなしいサラリーマンと変わり
ない。ただ同じ電車に乗っていても少しちが
うのは、プロ野球の首位争いも大鵬の休場も
人気女優の離婚ゴシップも関心はなく、その
夜のミッドナイト・コンサートを楽しみに自
慰することだ。かれのラジオは古物屋から仕
入れたような相当に古い型であるが、スピー
カーだけは上等なものと取り替えているらし
く、音響はすばらしい。

午前九時前には、ちゃんと職場の机に向か
っており、午後五時の定刻と同時に引きあげ
てくる毎日。職場であたえられた分量だけの
ビジネスを、そつなくやっている。欠勤もな
ければ遅刻もしないし、ベルトにのせられた
部品のように少しの狂いもない。時計の針が
指す文字盤と同じ正確さで、毎日毎日自分の
いる場所を時間どおりに狂わせない。かれも
また有能なサラリーマンだ。

弱肉強食の追いつ追われつ、息がつまりそ
うな世の中には係りなく、地震、交通、試験
地獄に係りなく、物価上昇、国民皆兵泰平ム

ードに係りなく、ひたすらあたえられた分量
だけのビジネスを完了しているかれには、酒
か女か賭博かでストレス解消の必要もない。
サラリーマンは気楽な稼業ときたわいな、と
あの手この手で吐け口を求めながら毎夜毎夜
哀泣するサラリーマンの変容ぶりとも縁のな
い男である。

土曜日は半ドン。私電と国電のターミナル
駅で盛り場へ向かって下りたかれは、毎週い
ちど行くべきコースとして映画館へはいる。
冬は暖房、夏は冷房と居心地よい館内で、観
客がスクリーンに神経を集中しているさなか
に、ひとり神経をゆるめ、ときにはいびきす
らかいて居眠りしている。映画の入換え時間
は、かれにとってひと眠りの区切りとなる。
そしてつぎの上映がはじまるころ、休憩室で
のびをし立ち上がる。よほどそのときの映画
が気に入らないかぎり、途中から入った場合
でも、そのまま出てしまう。ここまではいつ
もと変わりはない。

夏の宵、外へ出るかれのうしろから、黒レ
ースであつらえたツーピースに、粒のそろつ
た真珠のネックレス、つるの太い黒縁のめが
ねをかけた婦人が声をかける。肩の高さがか
れと同じくらいあるのはハイヒールのせいだ
ろう。映画館を出たところで、こんな女との

出合いをわれわれは思い浮かべてみる。

「途中からおしまいまで、よく眠っておいで
のようでしたね」

「よくご存じで」

「今晚おひま？」

「あんたも物好きなお方と見える。ことわつ
ておきますが、ほくは……」

「ほほほほ。ご安心なさい。コール・ガール
ではありません。車を持っています。ごいっし
よにいかが？」

と誘われると、われわれの貧しい心は引き
さがるのをよしとしない。すすんで夜のドラ
イブとなってしまう。女の運転する車は舗装
された七号線を軽い出足で走ってゆく。

「あたしがキャデラック六四年型に乗ってい
るのは、見栄と言わなければ嘘かしら？」

「さあ、ほくには第十八回オリンピックが東
京で開かれようと、朝鮮のソウルで開かれよ
うと関心がないのと同じことさ」

「あら、そんなふうにとらさないでよ。それ
ともこれからお連れする所がどういう所か、
それも無関心でいられるわけ？」

「……………」

たぶんかれは黙るだろう。女はハンドルを
にぎったまま、まっすぐ前方に目を注いでい
る。横顔を見ていると、行きかう車のライト

に照らされ、めがねのつるやネックレスの真珠が光る。

「かりに、ぼくを何かに利用しようとするなら、たぶんむだでしょう。なぜなら、あなたのネックレスの真珠のように加工されてはいない」

「加工されてない？ でも、あたしがハンドルの動かしがたしで、いやでも心中ということにもなりかねないわ。正体の知れない女といっしょに。ほほほほ」

「ということは、このままではあんたの意のまま、ぼくを手中に陥れることができる、というわけだ」

「ご随意に。でも、このドライブはあなたにとって不利益になるとは思いません。先へ先へと向かうことでね」

かんぜんに郊外へ出ている。点在する農家や住宅の明りが左右に見える。車はスピードを増し、疾走している。

「土曜日の夜、とつぜんにという期待を賭けなさいな。休日の前夜は眠りを忘れ、楽しむことだわ」

「楽しむ？ 具体的に言ってほしいなあ」

「これから山のホテルへ行くわ。そこは別世界であり、あなたの到着を待っている。広い浴室、すばらしいベッド、それを利用するの

は男と女のふたりだけ。それがあなたとあたしと想像してみるのも一興だわ。そんな山のホテルで、あなたは自分がとるべき方法を、この車がホテルに着くまでに決めてよ。たとえばあなたは、あたしを奴隷のようになくさみものにする悪王となるか、逆に、あたしの前にぬかずいて奴隷の身分になるか、その選択の自由はこの車が走っている間にかかっています。もし、そのどちらをも拒否してしまおうとなさるなら、山の中腹から深い谷底に向かつて車とともに転落してしまうこととだわ。そんな状況のなかに、今のあなたとあたしは身を置いていくわけ……」

「どっちにしても、水素爆弾を落とされて死ぬよりましだと言えはいんだね」

「と、おっしゃるあなたのお気持は、死ぬより生きていたい欲望に、何より憑かれていく証拠なのね。しかもできることなら一枚一枚洋服をぬいで裸になるように、身も心も裸にしてムチ打つ悪王か、ムチ打たれる奴隷かになりたい血液が流れている人間は……」

「というように、あれかこれか、どっちかだというお説教は、けっきょく人工的すぎはしないかな。この車に乗せられてしまった以上あんたの言うこと以外に、ぼく自身の自由がうばわれているのはたしかだが」

「と、おっしゃりながらも、あたしの手中におちいつている。逃れようにも逃れられない事実と直面というわけね。ほほほほ」

「ところで、あんたは？」

「鯛でしか釣れない魚を釣っている漁師ね。女というエサなら、ところかまわず釣針にかかってくる魚には興味ないのよ。わかる？」

「わからない」

「山のホテルへ着けば、あたしの漁夫としての正体をはっきりわかるはずよ」

「ぼくは本と名のつくたくいは、いっさい読まない性分ですよ。聴覚以外にあまり信じないたちでしてね」

「けっこうだわ。広い浴室のタイルの上で、男の性の悲鳴をきくのがあたしの趣味ですよ。後ろ手錠をかけたまま、熱い熱い浴槽の中に突き落としたり、丸裸にした男の顔や下半身を足であしらうのは楽しいことだわ。経験のないあなたには信じられないことでしょが、あたしの半裸の肉体の前では、男たちは猛り、狂ってしまうわ。こうしてさんさんいじめたあげく、あたし本意に満足できる方法で肉体の満足を味わうのよ。ちょうど陸揚げされた魚たちが、大海の自由を忘れてびちびちはねているのを、股の下にしきつけ、窒息死寸前までしめつける生臭いよろこび、そ

れはあたしの若さが失われないかぎりつづくでしょう。巷で釣り上げ、料理してゆく男たちに対して、あたしの肉体のエサと富とは有り余っているのよ」

「という、ほくも鯛で釣られた男ということになるんだな。それにしても……」

「きつと平和、世の中が平和である何よりの証しだわ。映画の途中で居眠りしている男性こそ、これまでのパーセンテージから言って百パーセントよ。飼育という方法をとらないまでも、あたしの好みにびったりね。まだ山のホテルまで三十分はかかるわ。それまでにあなたのお話をうかがいましょう」

「チャイコフスキーの音楽は——」と、かれの口から出たのは、鯛で釣られたことへの照れかくしではあるまい。相手に対する銜いであり挑戦であろう。

「シンホニーにしろコンチェルトにしろ、あれは性のひびきですね。帝政ロシアにおける性のうめきとも言える。ほくの聴覚がねじれているのはたしかだが、たとえばシェークスピアのドラマ「ロミオとジュリエット」と、チャイコフスキーの序曲「ロミオとジュリエット」のちがいは、活字と音符とのちがいだけではない。また魔法使いの老婆、魔法によって湖の白鳥にされる娘、彼女に恋する王子

かれらが織りなすバレエも、愛の童話ではなく性の童話ということになる。こう考えると目を使う視覚と耳を使う聴覚とは、まるつきりちがってくる、同じテストの答案でもね」

「ヒントがほしいわ」

「ベートーベンはいかがです。有名なシンホニー五番にしたって、この曲を聴くたびに、象が大きな鼻を左右に振るイメージにかみつかれるんだ。象という奴は巨体な動物であるにもかかわらず、たいてい美女の調教師のムチ音一つ、ムチさばき一つで、大勢の観衆の面前で細い目をしょぼつかせ、スローモーションながら芸を見せている。ほくの聴覚はあきらかにクラシックの鑑賞などではなく、飛躍もはなはだしい銜いということであり、ねじればねじるほど答えは比喩的となり暗喩となつて、答案を吟味する者に、テストのワナを仕掛けてある暗示でしょう」

「こんどは、あたしのほうがわからなくなってきたわ。でもね、あと十分たらずで山のホテルよ。この先のカーブを曲がれば、いよいよホテルの灯が見えるはずだわ」

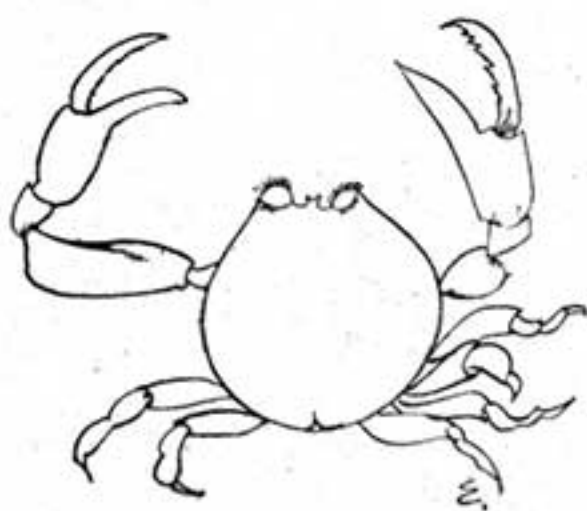
このあたりで、山のホテルについて勝手な想像を試みよう。あと十分という時間、かれは沈黙し、女はハンドルをにぎったまま、車を走らせるであろう。

そのホテルの浴室は相当に広いだろう。そして湯煙を立てている熱湯の槽は、小さなプールぐらいあろう。ナワなどは見当たらないかもしれないが、女が話した手錠、それにムチ、長い熊手のたぐいは用意されているはずだ。後ろ手錠にかけておいて、熱湯の中に突き落とし、熊手で掻きまわすこともできるだろう。それからタイル張りの上に引きずり上げ、いも虫のようにあえいでいる口に尻を押しつけることもできよう。このほか、どういう精神の遊びと肉体の欲望をみたし合うか、いま黒い稜線を疾走しているライト、その車のかれと女は、休日の前夜をかけて果たしてどちらが主となり従となるか、強盗返しという顛末も世の中にはままある。だから、

「あれが山のホテルの灯よ」

と、はずんだ女の声に、われわれも観念の世界で楽しむ欲望を幸としよう。

真夏の夜は、ただでさえ寝苦しい。……



①直次郎思案

三ノ下と呼ばれた猿まじらの新三が賭場から出てみると、庭の植込の茂みのかげで直次郎が身をひそませるように立っていた。

「こりあ片岡の旦那、またなに用で」

新三がいぶかったのは、賭場のうすあかりに映える直次郎の顔色の青さ、粹な彼に似合わず鬚の乱れ、糊のきいた単衣もしわだらけ。「からだらしがねえ。縄抜けして逃げ出してきたところよ」

自嘲するように、唇の端をゆがみてみた。

「いってえどうしなすった。俺たちやだち公だ。話によっちゃ、相談に乗りやすぜ」

新三のよく光る眼が、うかがうように直次郎を見つめる。

「ヘン、とんだちょんいちよ」

「ふふふ、それもいうならちょぼいちでさ。うかがいやしゃう」

もともと、直次郎が賭場に出入りするようになったのも、この新三の手ほどきによる。新三は直次郎のなにが気に入ったのか、手元不如意の直次郎に、賭博の最中にときどきは用立ててくれたりする。

たびたび賭場に足をはこぶうち、すっかりくずれが身についてしまった直次郎。

時代絵物語

直次郎出奔

井村 錠・文
落合 竜二・絵





②策師新三

例によって、日暮れ時ともなると、そろそろ賭場が恋しくなる。が、父の死後、直次郎の後見人である叔父の倉人老人から月々あてがわれている小遣いも、とっくの昔に賭場でかすめとられていた。

なにか、金に代えるものでもないか、と屋敷のそこかしこを物色していた直次郎、継母の部屋の床の間にひょいと目をやった。

そこには、先々代が藩主から拝領したといういわくつきの香炉が置かれていたからだ。久しく見なかったものなので、なにげなく手にしてみた。

(こいつが曲げられりゃあなあ)

直次郎とて今はれっきとした片岡家当主、思わずため息ついたとたん、つと手をすべらせてしまった。

香炉は、わずか二尺ばかりの空間をすべって、畳に重い音を音を立てた。

「げっ！」

もののはずみは恐ろしいもの、香炉は直次郎の足もとで、真つぶたつになっていた。

「しゃっ！」

その時、直次郎以上に驚愕の声をきいた。ふり返ると、そこに、叔父の倉人と継母のお

万が立っていた。――

「たかが土くれ一つのこととて腹を切れと言やがるんだ。俺が泣いてあやまっても、きくこっちゃねえ。性根がなおるまで考えろってわけでふん縛りやがった……」

「でも、うまく縄ぬけできやしたね」

「じゃねえんだ。逃がすためにわざとゆるめていやがったのよ。思うつぼさ。俺がずらかったあとで、おふくろはためえの娘に婿を迎えてめでたしめでたしって寸法さ」

「そいつあ口措しいねえ、それじゃ、意地でも帰らざるめえ」

「いんや。帰りゃあつめ腹がおちだ。俺あもう侍商売はこりこりだ。このままずらからうと思うんだが……」

薬にもすがる直次郎の、それが用件だったが、合憎と新三の方もすかんぴん。

新三の目を、きらりといやしい光がよぎった。

「ねえ旦那。旦那あそのおふくろさんや、叔父とかいう爺さんに仕返してやりてえたあ思いやせんかえ」

「仕返ししたところで、一文にもなるじゃなし」

「ところがなるんで……」

新三は闇に白い歯をみせた。

③ 白昼劇

梅雨明け、しかも昼下りの白熱した日ざしに、むれるような草むらに身を伏せながら、直次郎は目の前の出来事を白昼夢を見る思いで凝視していた。

黒い狂犬のように草むらから道に躍り出た新三が、仲間の木蔵に体当たりをくれる一瞬キラリと七口のきらめくのが見えた。

肉のぶつかる音をのこして、身をちぢめた木蔵が、声もなく地上にころがった。

思わず飛びだしそうになったが、いま出ちやまずい。直次郎はふくろうのように、草むらから目をひからせるばかり。

新三は倒れた木蔵には一べつもくれず、恐怖のために目をひきつらせ、唇をわなわなかせて突っ立っている娘に躍りかかった。

初めて、娘の咽喉から悲鳴がもれた。

目をおおうようにした娘の白い左手首を掴むと、新三はからだごとその背にのしかかり、どっと熊笹の中へ押し倒す。

娘の背へ馬乗りになった新三は、ふところからとり出した手拭いを、歯をくいしばっている娘の口をこじあけて押しこむ。舌先で必死に押し出そうとすると、もう一本の手拭いでがっちり猿ぐつわを咬ませた。



こうなってしまうと、鼻先でせせら笑うほどの余裕をみせながら、その手は素早く自分の頬かむりをはずしたとみると、娘の顔へ目かくしを覆った。娘の腕は、終始、新三の膝で堅く押さえつけられたままだ。

男の手は休みなく動いて、腰から細引きを

はずすと、片手で、直次郎の方へ合図した。はじかれたように、直次郎は小徑に飛び出た。なにか言おうとしたが、咽喉が引きつって声にならない、彼は白っぽくなりかけている木蔵を指差したまま突ったった。

「ちえっ」

舌打ちしながら、新三は顎をしゃくってみせた。その手は手馴れた調子で細引きをあやつって、恐怖のために半ば魂を失ったようにぐったりしている娘の後ろ手を縛りにかかっていた。

直次郎、義理の仲とはいえ妹のお千代が、新三の手で無残に縛りあげられていくのを見すこしているのは、あまりいい気持のものではない。それに、木蔵の方も、当て身でおとす手はずだったのに、このさまだ。

彼は立ちさりかねた。

「早く！」

小声だが、新三が叱咤した。

(どうともなりやがれ)

直次郎はようやく決心して己が屋敷の方へ馳け出していた、馳けながらふところをまさぐる。彼が掌に握りしめたのは、お千代の身柄は五十両と引き代えに預る、という新三の書いたすこ文句。

賽はなげられた。

④ 獣の宿

新三と同じ身内のなかまの家、直次郎たちの隠れ家は、町はずれの竹藪を傍らに、身をひそめるには恰好な所にあった。

泳ぎつくように直次郎が飛びこんだとき、新三は奥の間——床柱もないので縁側の障子を開け放した角柱につなぎとめたお千代の前に、冷酒をあおっていた。

「うまくいきやしたかね」

店の間に出てきた新三の目が血走っているのは、酒のせいばかりではなさそうだ。

「手ちがいはない筈だ、それよりおぬし、木蔵の方はだいじょうぶであらうな」

あらたまると、ひょいと侍言葉が出てくる。

「なあに、賭場でちよいちよい見る顔だ。ああするより仕方なかったんでさ、どうせ死んだって泣くやつもいねえ」

さすがにやりすぎたと思ったか、新三は直次郎にともなく弁解する口調になった。

「ところで、取り引きの時刻まであまだたっぷりある。ちよいと失礼して、横にならせてもらいやすぜ」

新三はごろりと横になる。そう言えば、昨夜はこの計画に一睡もしていないのである。（お千代のやつ、どうしてやがるかな）

直次郎は仕切りの襖をそっと開けて、のぞいてみた。

雨戸が立てきってあるので、そこは薄暗くむっと熱気がこもっていた。雨戸をもれる明りの中で、猿ぐつわ、ご丁寧に目隠しまでされた娘が、後ろ手に縛られた縄尻を柱につながれていた。乱れた髪をがっくり落したまま身動きもしない。それは、全を成り行きに任せてあきらめきったようにも見え、また、唐突の出来事の真相を探ろうとして、じっと

考えこんでいる風情でもある。

二の腕から、ふくらんだ胸乳を締めあげて背中にもわった縄尻が、柱までびんと張りつめているのが痛々しい。

着物の裾が乱暴に乱れて、紅い湯文字ののぞいているのが、直次郎には気になるが、むき出している足首まで、きっちり結えられたままだったのを見て胸をなでおろした。

直次郎は新三の横へ寝そべると、すぐ深い眠りに引きこまれていった。



⑤ お千代の危機

どのくらい眠ったろうか――。

畳を蹴るようなにぶい音に、直次郎ははつと目を開いた。ひどくむし暑い。行燈に灯が入っていた。

人のもみあう気配が、隣室でする。

「ちっ！」

直次郎は咄嗟に飛び起きると、しめきられた襖を激しく叩いた。

飛びこんでも行きたいが、義妹に見られては今までの苦心もふいだ、声をかけることもならなかった。

新三が顔を出すまで、彼はいたたまれぬふうに、狭い部屋のすみずみまで、いらだった視線を泳がすよりすがなかった。

「あ、旦那」

ぼつの悪そうな新三が、のっそり奥から出てくる。

噛みつきかねない直次郎に、彼は精悼なからだを小さくちぢめた。

じろり、と直次郎の視線が、新三の単衣の裾をべつする。あぶないところだった。だが、まだ疑問は残る。彼はむっとした顔で黙りこんでいた。

「すまねえ」

新三はちよつと片手で、拝むまねをしてみた。

「だが手はつけなかったぜ。けど旦那あ、おいらも男だ。ああぶりぶりした女が目の前にいちやあ、ちよいとね……」

ひとり言のように、新三はそっぽをむいたままくどい言いわけをする。

直次郎はそれに答えず、

「そろそろ時刻だぜ」

と吐けつけるように言った。

筋書きどおりだと、ここからほど近い龍宗寺の境内の指定箇所へ、倉人老人が五十両を持って来ている筈になっている。それを手にしてから、お千代を帰すことになっていた。

「おっと合点、まかせておきなせえ。へっへへ、じゃ旦那、娘さんをよろしく頼みやうぜ」

救われたように、新三は活気づいた。

「旦那え」

新三は手早く身づくろいをするのと、戸口で直次郎の方を振りかえった。

「……………」

「旦那あ、あの娘に惚れていなさるんじゃねえですかい」

片頬に皮肉な笑みを浮かべて、新三は闇の中に消えた。



⑥ 悪と悪

直次郎は奥の間に入ると、そっとお千代の背にしのび寄った。

案のじょう、お千代の足首の縄は解かれていて、お千代は裾前もあわされぬまま、縄尻をいっぱい引いて突っ伏していた。

汗が派手な単衣の上まで浸みとおろし、若い女特有の甘ずっぱい匂いが直次郎の鼻をくすぐる。

直次郎はお千代は後ろ手首の縄目を、そっ

とゆるめてみた。が、お千代はすでに気配を察していか、任せきったふうなのである。

と、直次郎はお千代の声を聞いれような気がした。

「お兄さま」

猿ぐつわのため、くぐもった声ではあったが、再び、しかし今度ははっきり聞きとれた。

「しってたのかい、お千代坊」

身のおきどころもない直次郎だが、やはり猿ぐつわや目隠しは解かずにはおれない。が後ろ手の縄はそのままにした。

「さっき、あいつが襲ってきたすぐあとで。でもどうして……」

あえぎあえぎ、しかしお千代の言葉は直次郎にはきびしい。

「かんべんしてくれ。面目もねえ」

直次郎は事の顛末を手短かに語らざるを得ない。

直次郎の話をじっと聞いていたお千代の目が、だんだんいたづらっぽく細くなったと思っていたら、遂にはくすくすしのび笑った。

「じょう談じゃねえぜお千代坊。俺あどの道づらかるか、詰め腹か。笑いごとじゃねえ」

むっとして、直次郎はなじる。

「おほ、ほほほ……」

お千代は不自由なからだをくねらすように艶に笑った。

「馬鹿ねえ、お兄さま、香炉はおじさまの粗相で割れてあったのよ」

「げっ！」

叔父と継母がぐるで、直次郎追いだしに仕組まれた罠。お千代がまたお万の遠縁にあたる出戻り娘で、ただこのたくらみに利用されていたというだけのことを初めて知った。

それを、お千代は直次郎に早く話そうとしても、彼は連日の賭場通い……、と流し目で直次郎をにらむ。



⑦ 餓狼の牙

「へへっ、首尾は上々、この重みはこたえられねえ」

ぬうっと現われた新三、手にした黒い布包みをもて遊んでいた手を止めた。目隠しも猿ぐつわも解かれた娘の横に、直次郎がぼつの



悪い顔で立っていたからだ。

「ちよっと目を離すとすぐこれだ。旦那も俺っちのこたあ言えやせんぜ。さあ、約束どおりの二十五両。善は急げだ。仕度なすった方がようがすぜ」

新三は直次郎をせき立てるように、店の間にころがっている脇差しに顎をしゃくった。

もっともだ。直次郎は二十五両をふところ

に、急いで夜道を馳ける身仕度にかかった。

「お、お兄さま！ 兄さん！」
直次郎がふり向くと、またぞろ新三がお千代を押さえこんで、猿ぐつわを噛ませようとしていた。

「新さん。その娘はでえじょうぶだ。念にやおよばねえ。俺が連れて行くぜ」

あきれた、というように、新三は直次郎に白い目を向けた。

「じょう談じゃねえ旦那。俺っちのことも考えて下せえ。今ごろ娘を連れ戻したら、はいふん縛って下せえっていうようなもんじゃねえですかい。お嬢さんはもう一日ここに居てもらって、こっそりお帰しするのが筋じゃありやせんかね」

口ではもっともらしいことを言ったが、新三は直次郎の去ったあと、たっぷりお千代をなぐさんで自分の女にしてから、あとあとま



でお千代からしほりという魂胆、新三の腹黒さが、ようやく直次郎にもわかってきた。

「そうはいかねえ。新さんにさからって悪いが、俺あどうしてもお千代を連れて帰るぜ」

直次郎はきっぱり言い切った。

「甘くみちやいけねえ、そっちがその気なら俺は腕づくでもこの女あ俺のものにするぜ」
餓狼は牙をむいた。新三は片膝を立てて身がまえる、右手をゆっくりふところに持ってゆく。

直次郎はじり、と脇差しを引き寄せた。

⑧直次郎門出

七口を胸に、からだごと突進してくる新三目がけて、直次郎は脇差しを必死に突き飛ばした。

「ぐうっ！」

息をつまらせて、中腰のまま天井の一点をにらんで動かない新三の胸から抜き身はずすと、直次郎は二突き三突き、夢中で脇差を繰りだしていた。

どう、と朽ち木の倒れるように、新三は血をほとばしらせて、動かなくなった。

（やりやがった！　とうとうやりやがった）

返り血を浴びた直次郎は、しばらく信じられない面持ちで立ちつくした。

「にっ、兄さん！」

我にかえった直次郎の目に、瞳をいっぱいに見ひらき、蒼白な顔の唇をふるわせているお千代があった。

直次郎は女がそんな目で自分を見つめるのをその時初めて見た。やさ男で、どちらかというと女受けのする男ではあったが、お千代のそれは、直次郎にとって、かつてない女を感じさせ、ふりかえって、今までにない自分を見つめる思いがした。

（新三と共謀の木蔵殺し、かどわかしにゆす

り、いままた新三殺害と、おめえもとんだ兇状持ちになりやがったもんだぜ）

やけっぱちなひとり言をおのれ自身に言いきかせると、急に、ずんと音を立てるくらい



気がする。

直次郎は血糊の浮いた脇差しを傍らに投げると、にやりとお千代に笑ってみせた。男前がいいだけに、それはお千代の見たこともない、ものすごい笑い顔だった。

直次郎はすかずかとお千代の前に寄ると、荒々しく両手で女のやわらかい二の腕を鷲掴んだ。

「に、兄さん！」

お千代は身も世もないふうに、縛られまますの身をもだえぬく。

「お千代坊。俺あ、とんでもねえ兇状持ちになっちまったぜ。ふふふ」

「にいさん……にいさんたら……」

ほどいて……と、お千代は身をよじる。男を知った女に似合わず、それは餓狼の食欲をそそるに充分可憐な風情だった。

直次郎は意に介さず言葉を続ける。

「こうなったからにやあ、あとへは引けねえ。片岡直次郎が悪の門出に、お千代坊、すまねえがお前さんからたつぷりはなむけをもらうぜ」

直次郎はぐいとお千代を畳にねじ伏せた。

「待って、兄さん待って……」

「へへっ、悪いがこの直次郎。手こめの味も知っておきてえ」

直次郎はそう言って、両腕の力をじわじわとこめていった。お千代は次第に陶醉していく唇をあえがせて言った。

「待って……、兄さん待って。灯を……、行燈の灯を消しておくれ」

鬼気せまる女の業

― 円地文子のサディズム



安東 泉

ミロのヴィナスがはるばる日本にやってきて、美術界の話題を独占した。「ミロのヴィナス」を見てきたか、というのがあいさつがわりになったりした。

女体が作りなす、あの流れるようなナイーヴな線と、どっしりしたいかにも安定した量感から受ける均衡のとれた充足感について、情熱をこめて語る者が多く居た。そして見事にひきしまった、あの目鼻立ちの均整美の確かさからくる最も具象化された美の感動について、チョウチョウナンナンする者が多くいた。しかし中には、専門家が見る専門的立場からとして、からだの部分と顔の部分とが、わずかに不均衡だとする批判的意見を持つ美術評論家も居た。とはいいいながら、ミロのヴィナスが、今までに人類が持ち得た、最高のレベルにランクさるべき、ほころかな文化史上での遺産として、これを賞賛するにだれひ

とり異議をとねえる者はいなかった。

ヴィナスの勝利は女性の勝利である。それはそこで高揚し、なお未来に開かれた、より多くの、未知未見な、そこになおひっそり息づいて隠れている永遠の女性を、そして女性をかつ永遠なるあるものとして、また永遠に不可知なるものとして、一の信仰的呪縛からのがれるすべを持たぬ、男性の無意識的焦躁感をおおる意味で、その意義は意味を深めるのである。

女性とは何ぞや、これが直接のテーマである。ストリップ劇場での、あらわな踊り子の太股と、ムンムンするような体臭の立ちこめたあの豊満の乳房と腰と臀部の狂舞、そしてミロのヴィナスと、これらは共に共通したテーマの線上に並べられる、女性探求の道標として同類項である、と、とんでもない飛躍した言い方をすると、それは芸術の美神を冒瀆

するものだ、と、諸々方々からのお叱りが殺倒することになりかねない。

生きるということは、一面において、夢を食べて生きるといふ、南米の珍獣バクのように、夢を食ふことではなからうか。明日や明後日という、未来に托す可能性への夢もある。特に男性は、女性よりはるかに夢見ることの多い種族である。それは明日への夢を夢見るだけではない。観念や思想という形而上的世界に托すはかりしれない憧憬と夢が彼らをまた生かすのである。

観念や思想に対峙して、夢の主要な部分を占めるのが女性である。人類始まって以来男性は、夢の中の女性を追い続けてきた。或る時は賛美し、或る時は痛罵し、或る時は無視し、手さぐり足さぐり、ある時はからだ全部で模索しながら、女性を追い続けた。

しかし、男性が女性との逢瀬を続ければ続

けるほど、女性の輪は輪郭茫々と霞み去るのである。

男性のからだは、明確な線で描き切れる。

ところが女性のからだを、明確な線で描き切ることができであろうか。乳房から臀部にかけての、大きなゆるいカーブを描いた曲線は、一つの概念でしかない。あの女性を象徴する曲線には、男性のままならぬあらゆるらみつらみの思いが、思いのありったけをこめて投射されているのだ。投射の反映が女体を形造るゆるいカーブの曲線となるのだ、それは一概念に過ぎない。実在のものごとくあって実在のものではない。さすればいつのまにか、茫々として、綿雲のように手のうちから消え去る。

果たして女神なのか、鬼女なのか、美女、醜女押しなべて、女性の心そのものを手のうちににぎりとして、目の前に引きさえることはおぼつかない。

幽霊は大抵女がなるものだと言場が決まっているというのは、ただに女が、執念深くあるがためというのではない。また、いつもしいたげられ、いじめられてきた女の弱い階級的立場が、そうさせるというのでもない。もっとその奥に、つかみがたい、女そのものの業のようなものが、ごく自然に、霧のように

手ざわりのない幽霊に結びつく、という、せめて幽霊としてでもなければ描き切れない、女の正体を、そこに見るがためである。

女ほど美しく女ほどみにくいものはない。無際限の広い空間に、変幻自在に、極限から極限へ振幅してやまない女の正体をつかむことはむずかしい。

不可知なるあるもの、それを称して舟橋聖一は、「女の魔」といい、円地文子は「血の道に通じる女の業」だと言った。一方は村山たか（花の生涯）と雪夫人（雪夫人絵図）を一方は白川倫（女坂）と樽尾三重子（女面）を書いた。前者は女の魔の化身であり、後者は女の業の具象化である。

「美は悪と容易に結びつく」というのは、谷崎潤一郎のかねての持論だが、奇怪さ、妖しさ、不気味さ、という、不可知なものからくる美的感動というのものもある。上田秋成や小泉八雲の美しさもそこをついたものだが、円地文子の追求する女の業の不気味さは、前者の絵物語ふうなストーリー自体の広がりの中にある妖異に比べると、むしろ一点に視点をすえて、内面独白にもぐりこんでいくその堀り下げ方に、かえっていっそう、本質的な妖異を感じるのである。妖異さが、はかりがたくつかみたい女の業と、そのまま直接につなが

るのである。それがそのまま美的感動を、一種の酩酊状態で人に伝えるのである。

その意味で《女面》ほど不気味な小説はなく、また美しい小説はない。これは読みようによつては一種のスリラーである。女の業というものの自体が、スリラー的な鬼気をはじめから断ちがたくはらむものである。

円地文子の代表作という《女坂》に《女面》であろう。人によつてはこれに短編ながら、女流文学者賞受賞作《ひもじい月日》を入れる人があるかもしれない。このことにも別に異論はないが、どちらかというと、質量共に伯仲した好一对の対照をなす、《女坂》《女面》が、円地文学にあっての代表作とすることが順当のところであろう。

《女坂》の白川倫、《女面》の樽尾三重子このふたりも、共に堂々と伯仲しあえる好対照としての女主人公として互いに遜色のないところである。

二つの作品のどちらをしいてとるかというところ、それは「その人の好み」だと、河出書房新社の「円地文子集」（解説）の中で、三島由紀夫はいう、

「《女坂》と《女面》は、いかにも好一对の作品であつて、円地文子という作家像を構成するためには、いずれも甲乙をつけがたい。

のこるのは読者の好みだけである」

しかも、読者の好みだとつつ放すほどのことではない。はつきりなぜ『女坂』のほうが好きとされていると三島由紀夫は言い切らなかったのか、少しじれたい。しかし、国民文学として、より多く一般受けするのは『女坂』よりは『女坂』のほうであろうこともうなずける。ここには、大書記官という要職にある、白川というわがままな夫に嫁して、生涯を忍従のうちに終始した白川倫の、ゆるぎない重厚な一生が、ずっしりとした読みごたえの中に盛り切られている。ここには典型的な、日本婦道ともいうべき、日本女性の典型としての生き方が、妾の須賀や、嫁の美夜とのからまりの中に三重奏唱のように響くのである。

「女の一生」というのは、それ自体がすでにドラマチックである。それ自体が悲劇的な莊重な余韻を持つものである。そのゆえに、幾人もの作家によって「女の一生」は語り継がれてきた。モーパッサンの『女の一生』しかり、有島武郎の『或る女』しかり。そしてついに所詮は二番せんじのような負目もあって『女坂』は『女の一生』や『或る女』には、及ぶべくもないのである。

白川倫を、早月葉子と同日に論じることとは無理であるとしても、せめて夫の白川を初め

とする『女坂』の男性たちが『或る女』の倉地や古藤程度にしっかりしていれば『女坂』の出来栄えはもっと上がったに違いない。ただ有島武郎の早月葉子が、家族制度に背を向けて、自由と開放を求めて奔放な生き方をしたに反し、円地文子の白川倫は、家族制度の大黒柱的なささえとしての、一家の主婦の道を、黙々と生き通したことに於いては新旧所を変えて対照的である。

江藤淳は『女坂』の印象をつづった文章の中でこう述べている。

「私がこの小説に一種名状しがたい甘美な快感を覚えるのは、私が年齢に似合わしくない封建的な男で、倫女をはじめとする女たちの苦しみと責め絵を見るようなサディスティックな喜びを感じるからであろうか。あるいはそうかもしれない。しかし実は作者自身の目が倫女とともに夫の白川行友を激しく責めながら、同時にこの専横好色の限りをつくす暴君に、エレクトラ・コンプレックスのごときものを抱いているからでもあるしなにか」

これは江藤淳にしては、全く斬新な、思いきった着眼をこらしたものと云えよう。だれもが『女坂』とは、封建的な家の犠牲になった白川倫の忍従の歴史であり、男の専横に対

する女たちの呪詛と哀歌である、という定跡としての解釈を持つ中で、「責め絵を見る快感」と、「エレクトラ・コンプレックス」を結びつけて解く独自の着眼点は、それが意表をつくものだけにおもしろい発想といわねばならない。

しかし、江藤淳の文章で刺激されて、そのことだけを目当てに『女坂』を読んだとしたら、読者はやはり失望するであろう。江藤淳の着想はおもしろいが、そしてそれが円地文子という作家なり、作品全体を通してみれば、その言い分はずいぶん的を射るものであるのだが、少なくとも『女坂』一作についてだけみるとときには、江藤淳の発言は的はずれとはいわないまでも、見事核心をついたものとはいえない。

そのことを意識して読んでも、彼がいう、「責め絵を見るがごとき快感」というのは、『女坂』にはない。あくまでも、日本の風土の中における、まっとうな婦道小説である。その意味で『女坂』は、広い基盤を持つところの国民文学として、その読み継がれる文学史的な意味での生命は、幅広く永くあるであろうことが推察される。

『女坂』とはそういう作品である。それをなぜ江藤淳はわざわざ「エレクトラ・コンプレ

ックス」をまで持ち出してきたのか。おそらくは、その文章を書いた一九六一年以前に円地文子は自伝小説『朱を奪うもの』を六回に分けて「文芸」誌上に発表している。その中で、円地文子自身が、極度に激しかった絵草紙趣味、中でも責め場というもののに対する異常なまでの傾倒と反応を告白している。おそらくは、そうしたもののから受けた先入観から江藤淳は『女坂』に対する評価の中に「責め絵的快感」というのを、ことさらに持ちこんだのではなかったのか。そんなふうに想像させられる。

『女坂』を国民文学だとすると、一方『女面』は、最も文学的な文学である。円地文子のモチーフは『女面』において初めてその正体を見せる。同性として、忍従に生きた白川倫に対し、もちろん理解と同情と、そして円地文子自身の中に生きる白川倫への共鳴と肯定とが感取されながら、しかし一方、同じ女の業として捕えられる女性としての内的資質の切実な問題としては、まだはるかに梶尾三重子のほうが、より密着した近景として、生々しい体臭と、それから立ち上る妖しい妖気をばはらむのである。「女の業は体質的に女の血からまつわりついてくるもの」と円地文子が認めるとおり、梶尾三重子の持つ業は、

その意味で、白川倫的女の業より、なお異種で異様で深いのである。

「女は魔物」という普遍的な言い方の中に、普遍的にばくぜんと感取されている女魔性がこれほど具体的なイメージとして眼前にアッブされた情景を見ることは少ない。その意味で、先ほども述べたとおり、『女面』はりっぱなスリラーである。

「この小説のキズといえば、物語が多く平凡な会話で運ばれ、殊に男同士の会話が、平板で、輝きのないことであろうが――」

と三島由紀夫は言っているが、それはこの作品の場合にはあまり気にするほどのこともない。むしろその点でつまらないのは『女坂』のほうである。ことに夫、白川行友の、ちょうど宝塚での男役のような、フヌケた暴君が出てきて、男のエゴを振り回すが、それが一向圧力として感じてこない。変に弱々しくてすごみがきかないし実在感もない。これは多く、男性を描くときに陥る女流作家の一般的な通弊だが、この弊害が多少とも同じようにありながら、それを気にするほどのこともないほどに『女面』の女はものすごく怪異で不気味だ。こういう女の不気味さは、男性作家にはまた描けない種類のものである。模糊として立ちこめた女の蜃気楼なのである。

あえていえば、梶尾三重子は最もすさまじい形の悪女である。美しい、美しい、美しいと、三度繰り返して説いても、いっこう美しく感じないように、悪女だ、悪女だ、悪女だとしつこく繰り返しても、一向悪女のイメージはそのねらいどおりには浮かばない。梶尾三重子は、その意味では決して悪女としては描かれていない。むしろ物静かで美しい、気品と教養に裏打ちされた典雅な婦人である。血なまぐさい犯罪や、みだらがましい淫乱症の女とはおよそ縁遠い存在である。ところがそのことがかえって物すごいほどの説得力となつて、そこに期せずしてひとりの悪女が浮きぼりにされた。悪女とは、別を返せば業を持った女というふうに、円地流の解釈でいつでもおそらく矛盾はすまい。

この妖しい美しさは、三重子だけではなく嫁の泰子と重なることで、いっそう深い印象を放つ。泰子は若く美しい未亡人で、夫は富士山の大なだれで死んでいる。その後もしかし泰子は、姑の三重子とひっそり静かな生活をしている。三重子は或る短歌雑誌の主宰をしている歌人で、泰子もその手伝いをしながら、かたわら大学で国文学の講義を聴講したり、夫の遺志をついで王朝時代の憑霊について研究したりなどしている。

設定からいえば、ちょうど川端康成好みの静かに引き締まった、色白でキメの細かい、上品でしなやかな美しい女性たちである。春女という、三重子の実の娘で、また泰子にとつては義姉に当たる白痴の娘まで、白磁のように美しく描かれてある。

だから最初は、そのつもりで読んでゆく。全編に横溢した王朝趣味に、川端康成的なこつと趣味が付加されて、それは育ちのよい女流作家のあまりにも趣味的な世界のように思うのである。また、三重子も康子も、そういう趣味的、手の白い女性に、——これはジョセイと発音するのではなく、ニョショウと発音することではなければならない、そういうことに最初は印象されるのである。

最初この美しい嫁と姑が、京都に遊んで、当地の能の家元である薬師寺家を訪ねるくだりがある。そこで家元の頼方から、女面の幾つかを見せられる、その女面の一つには、「前の女面よりもずっと頬のひきしまった、冷艶な女の顔があった。上瞼の切れが長く、上唇の紅は人中から口尻にかけて前の若女の面よりも遙かと複雑な凸凹を刻んでさげすむように微笑んでいた。貴族の持つ酷薄さが樹氷のように美しく凝っている顔であった」この場面には、ただそのときの描写が美し

いというだけではなく、実はあとになって読み返すとき、誠に重大な暗示と伏線が張られていたことに、あとになって気づくのである。

女面を見て、

「泰子が片手で眼を蔽った。——あのお面の顔、眩しいみたいで怖いんです」

それは、ちょうどいえば、手鏡の中に映る己が正体の顔に驚く、女狐のようなものであるが、読者は三重子や泰子を、女狐の化けた女だとはツユさら思わない。いや、気づかずにいる。だから、かえってスリラーの効果はあとで高まるのである。

暗示と伏線はもう一つある。それは梶尾三重子が、ずっと以前にひそかに書いたという『源氏物語』の六条御息所からまるところの「野々宮記」という一文である。御息所というのは、『源氏物語』の中の数多くの女性の中では、最も魅力のない、むしろ敵役的な存在で、決して印象はよくはない。嫉妬深く死んだ後々までも怨霊となって、源氏や愛人たちを執念深く悩ます悪女になつてゐる。

しかし「野々宮記」では、御息所をずいぶんとかばい立てした上で、「源氏は御息所を原型とする矜持高い女性に十分憧憬する素質を持っていることが知られる」

と説いて、御息所に似たタイプの女性として、明石の上と秋好中宮とをあげ、彼女らと源氏との交渉に及びながら、その原型としての御息所の性格に言及するのである。自分ではそうと意識しないで、意識とはまるで別個に霊が動いてあるタタリをするといったような、女性と憑霊との関係である。

「女性の巫女的な能力は、現在では全く他に萎しているように見えるが、女が男を動かす力の中にはそういうものが多分に含まれているのではないか。それは仏教の説くように女の業であり、迷妄であり、結局に於いて悪であるかも知れない。しかし、その悪は女の生理とつながっているもので、世々を生き継いでゆく血の流れでもあるのだ——六条御息所はそういう女性のシムボルである」

円地文子は三重子の書く「野々宮記」で、六条御息所に托してそう述べている。これが女面と並んでの、大きな暗示、大きな伏線となるわけである。

「三重子は、幼い子供にするように、泰子の冷たく汗ばんでいる頭髮の乱れを掻きなでやりながら——すべすべした足はそんな間にも自然に水掻きのように動いて軟かく泰子のすくめた足をかき抱くようにした。三重子の

身体にある夏の花のような甘い匂いがほんのり泰子を包むと、泰子は乳でも吸っているようなやさしい幼びた顔になった」

《女面》第二章の冒頭近くの情景である。

前の伏線がそろそろと動き始め、チロチロとかすかにキツネ火が燃え始めるのである。三重子も泰子も、単に静かで気品のある女性だというのではなく、その印象が破られていつて、何やらの気配がその奥から見え隠れし出すのである。嫁と姑の怪しいもつれの仕方がそうである。それから、何気ない仕方での三重子の告白がある。

亡くなった泰子の夫、秋生、つまり三重子の息子は、三重子の夫の子どもではなかったということである。三重子には、当時ひそかに愛していた愛人があって、秋生はその愛人との子どもであった。不義密通による子であった。秋生ばかりではない。秋生と双生児である精薄の春女も、もちろんそのわすれがたみなのだ。

泰子は初めて義母からその告白を聞く。淡々とした静かな会話で、話すほうも聞くほうも、当たり前な涼しい表情をしている。もちろん、不義密通なぞといっても、小説中の人物にあっては、これはもう、しごく当然な仕儀であって、ことさらに取り上げるほどのこと

もないのかもしれない。それだから三重子も泰子も涼しい顔で聞いたり話したりするのであろう。理屈はそうだが、この静かなふたりの会話には、なぜともしらぬ不気味な雰囲気がつわりつく。不義密通の話が、まるで人事のように、あまりに静かに話されるからであらうか。ということより、それは、三重子も泰子も、いわゆる一般的な道徳的制約に対して、心底から白痴のように無感覚であること、またそれを暗示されることからくるのではなからうか。

「一体巫女というものは霊媒的な存在から転じて売春婦でもあるのが普通です。神憑りの状態そのものが、官能を極限まで働かせる肉体的なものですから、知的な労働が性欲を減退させるのとは反対に、巫女の肉体は性それ自身に感じられるほどになるわけです。」

《伊勢物語》の中に、業平が従妹の伊勢の斎宮の御殿へ行き、斎宮と契を結ぶ件がありませんが、精進潔斎の筈の斎宮が自分の方から夜中に業平の闥を訪ねて来るというようなところにも、性行為を罪悪視していない巫女的性格が面白いと思うのです」

王朝の巫女が、そのまま乗り移って三重子から泰子へ、生きて受け継がれていっていることを知らされ始めるところからくる不気

味さなのである。

このふたりの美しい嫁姑は、全く道徳的には白紙であった。あるものは、濃い本能的な血のつながりを求めることであった。

「三重子の顔は、白く柔和なたっぷりした輪郭に包まれていて、そのことだけが記憶に残るような顔なのだ。——言いかえればあなたは、自分の現実の世界で犯している行為の嘘と真実を分明しないまま生きていられる不思議な曖昧さを内に保っている人なのだ——」三重子の顔を見つめていると、何十年も見馴れているのにも拘らず、三重子の顔立ちが白い雲の中に茫々と消えてゆくのを感じた」

三重子と泰子は、期せずして一つのたくらみの中に溶け合い、白痴娘の春女を泰子の身代わりに仕立て、そのために計略で眠り薬をつかってまで大学教授の伊吹をだまし、彼に夜ごと泰子のつもりで実はいつのまにか白痴娘とすり換わって彼に彼女をだかせるあたり、凄味は上田秋成の怪異譚並みの印象をさえ受ける。

三重子はいったい、究極のところ何をたくらんでいたのだろうか。

「奥さま。あなたさまのなさることは、明るいお陽さまの光では眩しいことなのでございますよ」と、永年仕えてきた老女のゆうはな

げくが、いったい何を彼女はしたのであるかしようとしたのか。そのことへの深まりと、六条御息所にからまる巫女的な、女性の業が王朝趣味的全編の雰囲気とうまく溶けあっているいは暗示となり伏線となつて、それが次第に重複の度を重ね色濃くなり、そのことであの女面で象徴される女人の内面の秘密が、極度な強い色彩の暗示の強調で高められるのである。

三重子と泰子とが共謀して成し遂げたたくらみとは何であつたか、ということをも、ここで明かす必要はない。それはこの作品の中ではさほど重要ではないからである。スリラーとは一種のムードだ。ムードのないスリラーには、こわさがない。それは全部が、首尾一貫して、何かを予感させる、暗示と伏線で押し通されていってよいのである。幾つもの小さな流れが、幾つも幾つも注ぎこんでは、それがついに、トウトウたる大河として海に流れ入るように、その重なり合つてゆく水の音の高まりを、徐々に高揚して人に聞かせればよい。テーマはその音なのである。川の形状を事細かに、海に流れ入った先まで、地理学的に、あるいは地質学的に説明する必要はない。その意味で、《女面》は、視覚的にではなく、感覚的に音を聞かせる小説である。

《女面》で暗示し、伏線を張つて盛り上げた「女の業」とは、具体的にどうということなのか、その解決は《女面》では果たされていない。というより、円地文子自身、はっきり意識にこれとしてつかめていないのではない。円地文子の秘密を解くカギは、かえつて別の、目立たない小品の中に隠されている。

《ひもじい月日》《二世の縁 拾遺》《耳環路》などの諸短編がそれである。この中で《ひもじい月日》は正宗白鳥が激賞し、また女流文学者賞受賞の輝やかしい栄光をになったことで有名だが、そのこととは別に、この一連の短編に共通するところは、円地文子の老残者や病者に対する嗜好についてである。《ひもじい月日》では、直吉という元女学校の教員をしていた無能な男が、今では自由のきかぬ病人として、寝たきりの生活で、一家中の厄介者になつてゐる。女房のさくに、姉嬢の勝、妹嬢の富枝、息子の幸一という顔触れである。それに先妻との間に、宏という不良息子が、一家とは別に住んでいる。

一家の間で、冗談か本気かいずれともつかぬ形で、厄介者の病人を殺すことを、話し合うくだりがある。この作品の山場になつてゐる。

《二世の縁 拾遺》では、かつては江戸文学

の研究家として一家をなした布川先生が、今ではやはり寝たきりの病人、書店からのお情の仕事でかろうじて糊口をしのいでいるという条件設定になつてゐる。布川先生のところに、かつての教え子であつたその書店の女編集者が口述筆記に通つてくる。上田秋成の口語訳である。その怪異譚の一つが、土中に埋葬された男がよみがえる話である。よみがえるからには、よほど高德の聖かと、土地の長者が下にも置かぬ扱いをするが、それが実はごくつまらぬ暗愚な男だとわかり、下男同様なことで使われることになる。生きていたときは、高德の聖であつたのかもしれないが死んで長年、土中に埋まつてゐる間に暗愚になつてしまつたのか、そのところはわからない。しかし、今はすっかり暗愚となり果てた男の話が、布川先生と重なりあうところがおもしろい。

こういうように、自由のきかぬ半ば廃人となつた男を対象として、女性が優位になつたという状況に意味がある。その状況の意味を一步押し進め別の形で提示したのが《耳環路》である。ここには手術で子どもが産めなくなつた滝子という人妻が主人公である。滝子は自分の才覚でアクセサリー店を切り回している。彼女が目をかけてゐる細工ものの職人に

次郎というのがある。腕はいいが男ばえがせず、裏町にくすぶっていはなやいだことには全く縁がない。次郎は滝子に心を燃やす。しかし、そのことをおくびにも出すことができない。出すことができず、滝子が来ると熱っぽくふるえるだけである。滝子はわざと次郎の前で、挑発的な仕草をしてみせ

「次郎が喘いだり、慄えたりするのを異様なたのしさで眺めるようになった。——次郎は飢えた犬が鎖の届かない鼻先へ、生の肉を振りちらされているように一途に渴き、身体中を探みあせて脂肪を流すのである」

こうした場面をつなぎ合わせて連続してなめると、おのずから円地文子の秘密が、かなりはつきりしたイメージでわかってくる。そのことが期せずして彼女の自伝小説（本人は自伝小説ではないと言っているが）《朱を奪うもの》の中で、正直に告白されている。早熟な少女期の彼女が、見たり聞いたりするものの中で、特に、

「異様に眩惑したのは美女の虐待される所謂責め場や殺しの場面であった。——浦里や中将姫の雪責めだの切られお富の鬨り殺し、皿屋敷のお菊の折檻場などの話を滋子は幾度もきいた。——彼女達の白い軟い手や胸に荒々しい縄目が食い込んだり、箒木や弓の折れに

打ちたたかれる度に髪が乱れ身体がちぎれるほど身悶えして悲鳴を上げる、その無残さがすべて異常な美しさに感じられなければならなかった——どれよりも滋子をゆり動かしたのは黙阿弥の紅皿欠皿の責め場だった。八落窪物語Ⅴに似た継娘苛めの話で、自分の留守に恋人と愛しあったことを知って継母が欠皿を責め苛む嗜虐性の濃厚な場面がある」

円地文子は、そういう場面の責めさいなまれる美女に、自分の身をおいてみて興奮すると書いているが、それは本当は逆のことではないか。

女をいじめて快感を感じるという、文子の中の、男性的な資質が働いて、それをそうと感ぜさせるのではなからうか。円地文子は、芯の強い、男性的な資質を十分に持った作家である。

男性の立場に立って女を見る、ということのできる数少ない女流のひとりである。その目で見るとき、女がいじめられるのを見て楽しむということが出てくるのである。その目で見て、女の業を掘り下げてゆくのである。それはあえていえばサジズムである。女の中の男の部分が彼女を動かし、サジストにする。そのサジストがひとり歩きをして、いつのまにか女の部分にも移って、女のままで、女の

身でありながら、そのままサジストになり変わってゆく、そのところが奇妙で暗示的である。

週刊文春で好評を得た通俗作品の《男の銘柄》の、里枝はそういう女である。マゾヒストのデザイナー、花輪とお互いに責めたり責められたりの遊びを繰り返すが、やはりその中では、その場面こそ少ないが、里枝が責め役で、花輪が責められていた部分のほうが、その逆の場面の場合よりはよく状況が出てくる。里枝はどう見ても、マゾヒストのタイプではなく、やはりサジストとしてびったりの女性だ。ところが、そのところが円地文子の迷いのあるところだ。彼女自身、どちらがどうなのか、よく意識してはいないようである。ただ、自身の中に、人と違った異常な血があることだけは自覚しているようである。その正体がかめないままに、あるいはただちの中に溶解させていったのだが、そしてその化身が梅尾三重子なのだが、実はその本体は彼女の中のサジズムなのだということを、いつか彼女がはつきり自覚したとき、どういう作品が産まれるか、それが楽しみである。

夜も昼も鎖が鳴る

南郷京助
山田彬弘 絵

1

潜水艦の囚徒から、基地の囚徒にうつされた光子は、踊り子としてきびしい訓練を課される身となった。

そして、そのきびしい訓練が実を結び、一人前の踊り子として認められ、広間で踊れるようになり、やがては奴隷としては最高の地位である、カポーにまでとりたてられた。

しかし、光子の心の中にひそむ優しさが、かえって仇となり、便器と等しい身分につきおとされてしまった。

そしてからだの一部に鎖を埋め込まれ、失

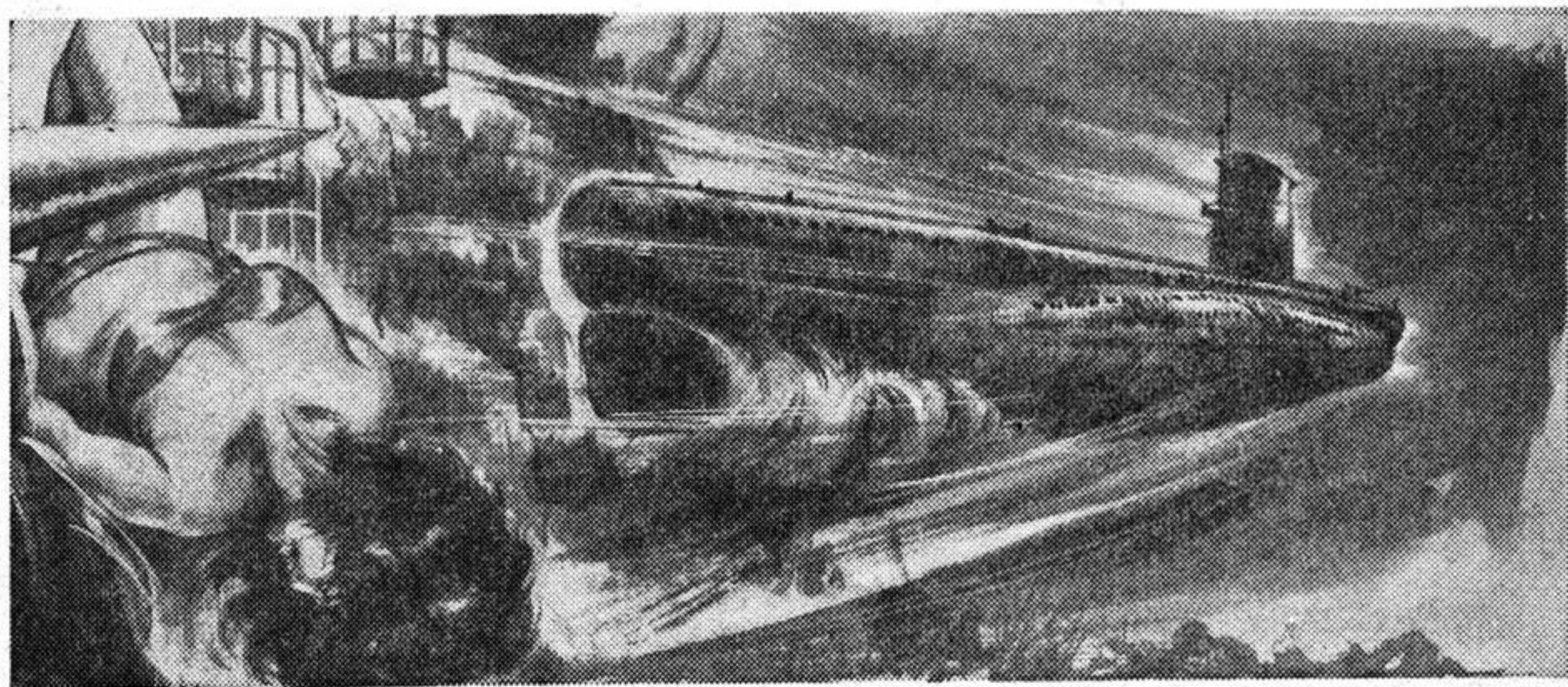
策があるたびにそれを引っばられ、耐えがたい苦痛にうめかねばならぬ身とされてしまった。

幾度もの失策の後、ついに女主人の怒りをかい、カポーに鎖をとられて總統の部屋を、ぐるぐる幾度も、おろかしい格好で歩かせられた。

屈辱と苦痛に脂汗を流す長い試練の時間の後、かの女はやっと歩行の拷問から解放され、タイルの上に膝まづかせられた。

冷たい感触は、苦痛にほてったかの女にはむしろ救いだった。

光子の脳裡には、やわらかいベッドの中に



うまり込んだ男と女が、まるで二匹の白いけものように、からまりもつれあっている姿がやきついていた。

「総統のお慈悲で今日はこれで許していただけるんだよ。よくお礼を言うんだね」

カポーはなおも鎖を握ったまま言った。

「しかし、もうここでの仕事は終わりだよ。

せっかく良い仕事を与えてもらったのに、おまえが精ださないから当然の報いだよ」

カポーは光子を立たせ、容赦もなく歩きはじめた。

曲がりくねった長い廊下の果てにエレベーターがあった。

カポーは光子をひいてそれに乗り込んだ。

一体どんなところへつれられてゆくのかわからないという不安と恐怖が、重苦しく光子が責めつづけた。

カポーの手から、逃げだいたいだという誘惑光子を絶え間なく襲いつづけた。

しかし、鎖の端はしっかり握られたままだし、両手は腰枷に、わずかの自由を残して固縛されている。

それに、そんなものをまとまって一体どこへ逃げれば良いのだろう。たとえば、一人のカポーの眼をあざむいたとしても、いずれはつかまるに決まっていた。

途方もない海底王国を、あてもなくさまよってみたところで、地上へ戻る可能性はゼロに等しかった。

エレベーターが止まった。

扉が開き、カポーは、鎖を曳いて歩きだした。廊下を二度曲ったところに、頑丈な鉄の扉があった。

カポーはボタンを押した。

小さい覗き穴が開き、中からゾツとするような眼付きの顔がのぞいた。

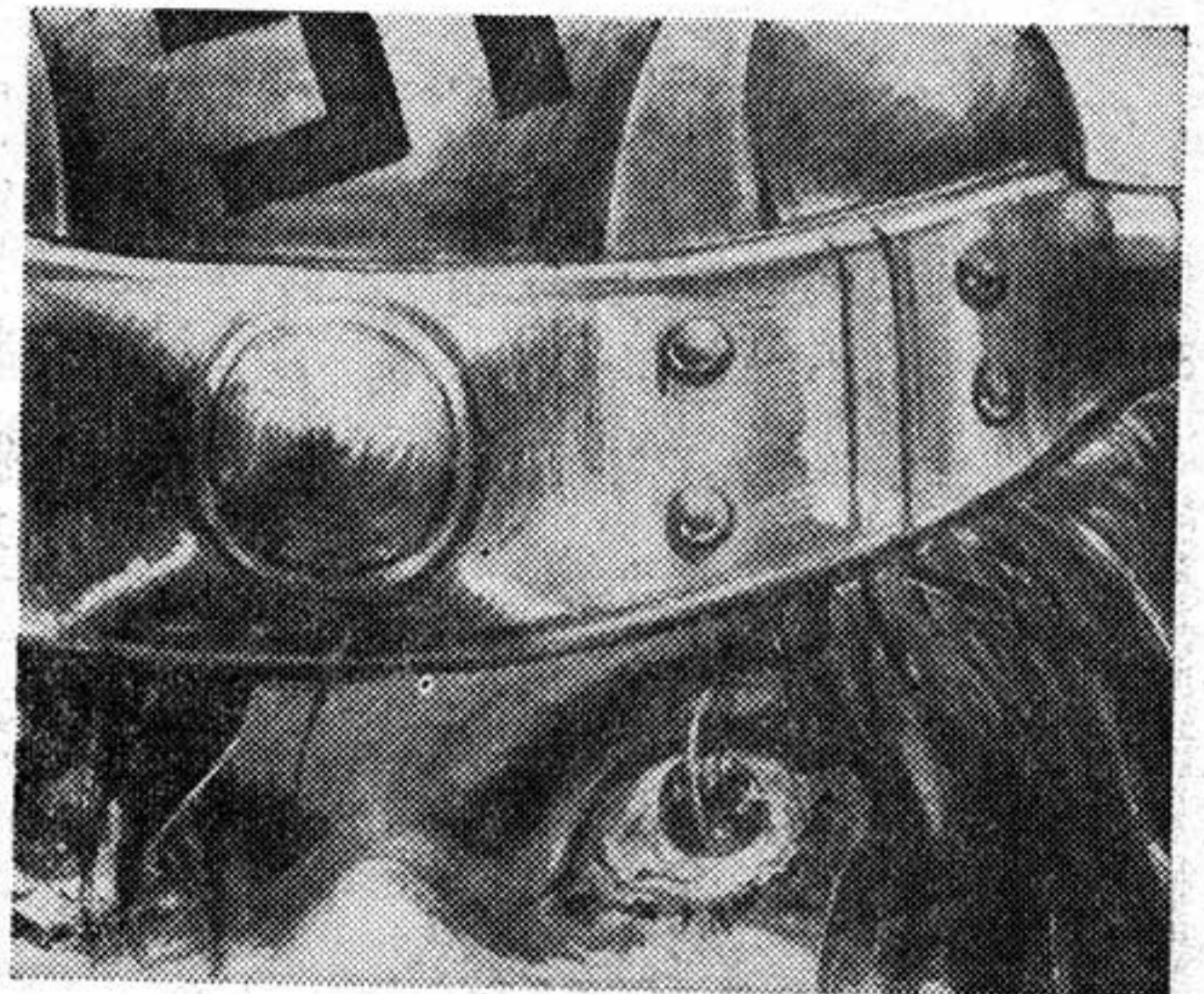
カポーが何かを言うと、扉がゆっくり開いた。中の人間も、女のカポーの服装をしていた。光子のからだだが引き渡され、かの女を連れてきたカポーは姿を消した。

鉄の扉が重々しい響きと共に閉じられた。

新しいカポーは、光子の鎖を握ったまま、意地悪い眼付きで、からだのすみずみまで眺め回した。その蛇のような眼で見られると、光子のからだは何故ともなく萎縮し、すくんでしまうのだった。

カポーはやがて、光子のからだにとりつけられている器具や、鎖や、枷具を入念に検査しはじめた。羞恥と苦痛に、光子のからだは思わずふるえだした。

長い時間かかって、やっとカポーは満足したらしく、光子を曳いて次の扉を開けた。



中へはいったとたん、光子は驚きから思わずよろよろとして、鎖にひかれて苦痛の悲鳴をあげなければならなかった。

ちょうど鳥籠のような格好をした、そしてそれよりも大きくて人間が一人辛うじて入れるほどの頑丈な檻が、ある一定の間をおいて非常にたくさん天井から太い鎖で吊り下げられていたのである。

その上、檻の中には、光子と同じ姿にされた女たちが、狭い檻の不自由さに、窮屈そうに身をかがめ、うつろな表情でこちらをうかがっていた。

カポーは、それらの間を通りこし、空いて

いる檻の一つの戸を開け、光子のからだを押
し込み、鎖を格子に固定した。

檻の戸の鍵を下ろすと、カポーはひとわたり檻の中の女の様子を見回してから、物を言わずに出てゆき、重い鉄の扉をびったり閉ざしてしまつた。

しばらくして、檻の中の女たちは何かをいっせいにしゃべりはじめた。それらは、すべて意味の通じない言葉だった。

世界各国から、手当たり次第に狩り集められ、互いの言葉を理解する余裕もなく、品物のように、簡単に檻の中へ閉じ込められたのだから、それも無理はなかった。それでも何かをしゃべっていなければ、恐怖と不安で、いたたまれない気持になった。

突然、扉が開き、蛇の眼をしたカポーが、姿をあらわした。檻の中の女たちは、恐怖にうたれてピタッと静かになった。

カポーは、何かを探がしていた。

ようやく探がしあてたらしく、壁の一部にとりつけてあるたくさんのボタンの一つを押した。

すると、檻の一つが、スルスルとかすかな音を立てながら、天井に引き込まれていった。

つづいてまた一つ。

そして、十ばかりの檻を天井に引きあげると、カポーは残っている檻の中の女を冷たい眼つきで眺めまわし、恐怖に凍りついたようになっている女の姿に満足すると、扉の奥へ姿を消した。

光子には、そのからくりの意味が分からなかった。それが、もっと安楽な生活を約束するよりも不気味な運命を暗示するものであることは、おぼろげにわかっていた。

檻の中の女たちは、ふたたび、さわがしくなった。

不安にいためつけられた時間が、いつのまにかたっていた。

天井に引きあげられていた檻が、一つスルスルと降りてきた。

激しい衝撃と共に、檻は床から一メートルくらいのところでとまった。

檻にいれられた女は、失神したようにぐったりとなっていた。無理もない、その女はどんな方法でいためつけられたのか、からだのいたるところに鞭の跡や傷をつくられ、血まみれになっていたのだから。

檻が一つずつおろされ、中の女がみんな傷つき、ぐったりとなっているのを見るにつれて、光子は自分のおちいった運命を、次第にはっきり認識するようになってきた。

いつ自分にまわってくるかわからない恐怖を待つことは、つらいことだった。

毎日毎日、牢がなんの抵抗も受けずに簡単に引きあげられ、血まみれの女が戻ってくるのを見ると、自分でなかったよろこびと安堵に胸をなでおろしながら、恐らく次ぎには自分が引き上げられるのだらうと、呼吸の苦しくなるような緊張感におそわれた。

とりわけ、両隣りに吊り下げられている檻が、急に引きあげられたりした時には、はっとして、自分のことのような驚愕におそわれたりした。

かの女は、次第次第に心の準備を整えさせられていったのである。

やがて光子にも、試練の日が訪れた。

なんの警告もなく、いきなりかの女の檻が動きだした時、光子は自分の順番がきたのだと覚るまでに時間がかかった。

やっと自分だと気づいた時には檻はもう他の檻の頭上を越していた。

カラカラというかすかな鎖の音と共に、檻が天井に吸いよせられてゆく時間を待つのはなんともいえぬいやなものだった。

所定の位置までくると、檻はピタッと停止した。

それは、十坪ほどの窓一つない殺風景な部



屋だった。

ただ一つ、總統の部屋のように外からは鏡になって見えないが、内部からは外を、はっきり見ることの出来るマジック・ガラスが壁の一部にはめ込まれていた。

その部屋の中央には、黒い水着姿のジェーンが細いしなやかな鞭を持って立っていた。檻が停るのを見とどけてから、ジェーンは傍へ寄ってきた。檻の扉を開け、鎖を格子からはずすと、光子を外へ出した。

自分をそんな身分におとす最初のきっかけをつくった女として、光子はジェーンに憎悪を感じていた。

しかし、その恐ろしい眼を見返すことは出来なかった。

「馬鹿だねえおまえは」

ジェーンは、日本語で言った。

「せっかくわたしが親切に忠告しておいてやったのに、反抗したりたてついたりするからこんな姿にされてしまうんだよ。鎖が埋め込

まれてしまっちゃあ、もう誰にも助けようがないからね、どんな名医だって、おまえを元の姿に戻すなんてことは出来ないよ。しかし今さらそんなことを言ったって仕方がない。もうこれ以上罰を受けないよう、わたしが、しっかり教えてやるから、よく覚えておかなくちやいけないよ」

ジェーンは、光子を膝まづかせた。

手にしている細い鞭で、光子の肩を打った。すると鞭の当たったところから、パチパチという音と共に、青白い火花がとび散った。

光子のからだは、おそろしい苦痛にのけぞり、身もだえた。くいしばった唇から、思わず悲鳴が洩れた。

ジェーンは、鞭についているコードを、たぐり寄せながら言った。

「お礼を忘れているじゃないか。鞭を受けたら必ずお礼を言わなくちやならないことを、もう忘れたのかい」

光子はふるえ、うめきながらやっとお礼を言った。

「ちっとも感謝の気持があらわれていないじゃないか」

ジェーンは言いながら、もう一度光子の肩に鞭を当てた。

青白い火花とうめきに似た悲鳴。

光子は精いっぱいの声でお礼を言った。

「そんな心根だから、檻に入れて吊るされたりするんだよ。お礼の言い方も忘れてしまっているじゃないか。教育をカポーに任せておくとこんなことになるんだよ。これはちつとやそつとの教育ではなおらないね。私がたんまり教えてやるから、よく覚えておくんだよ」

ジェーンは、光子を部屋の一角に連れていった。そこには垂直に立った太い棒と、そこから横に出る押し棒があった。

ジェーンは、光子の鎖を床にある器具に固定した。

「この横棒を押す仕事をさせてやろう」

ジェーンは光子の両手を腰につなぎとめている枷をはずし、横棒をにぎらせた。

それは、磨きあげられた金属で出来ており冷たい感触で光子をソツとさせた。

「いいかい」

ジェーンは、楽しそうに言った。

「わたしがスイッチをいれると、この床の器具がおまえのにぎっている棒に添って動きはじめるから、おまえはそれにつれて横棒を押さなくちゃならないよ。怠けたら器具よりおまえが遅くなり、鎖を容赦なく引っばるから気をつけなくちゃいけないよ。それで、もし鎖が引かれておまえが悲鳴をあげたりしたら

わたしはきびしく教育するからね」

ジェーンは、光子の肩を再び鞭で打った。尖光と、切りさかれるような苦痛。

光子は、辛うじて耐えた。

また、鞭がはじけた。苦痛を耐えようとする努力のおかげでお礼を忘れていたのだ。

「ありがとうございます」

光子は咽喉の奥からうめくように言った。

「小さいね。お礼はもつとはつきり言うものだよ。まあいいさ。スイッチをいれるよ」

器具が動きだした。光子は重い金属の横棒を押しはじめた。

すこしずつ器具の速度と光子の速度に差があらわれはじめた。

やがて鎖は、限度いっぱいピンと張った。

光子は腰が引き千切られるような苦痛に思わすうめき、必死に横棒を押した。引っばられていた鎖がゆるんだ。ジェーンの鞭はすかさず光子の背にはじけた。

「ありがとうございます」

やっとうめくようにお礼を言ったが、鞭の痛みのために棒を押す手が鈍った。

またしても、鎖は緊張する。

耐えがたい痛みで光子は歯を喰いしばって両手に力を入れた。しかし、やっとな鎖をゆるめたものの、うめきをくちから防ぎきれなかった。

った。

「一体何が不足なのだい」

ジェーンの声と共に、鞭が背中で火花を散らした。

「このくらいの仕事で、不平そうにうめき声をもらすなんて」

「ありがとうございます」

光子は悲鳴のような声でお礼を言った。

脂汗がじっとり吹き出てきた。それは鞭の電気をより激しく光子のからだは伝える役目を果たした。

器具は非情な速度でゆるみもなく動きつづけた。すこしでも力が鈍ったり、すこしでも足がもつただけで、適確に鎖を引っばり、光子を苦痛にうめかせた。

するとジェーンは、どんな小さな光子のうめき声をも聞き逃さないで、必ず鞭をふるうのだった。

脂汗と鞭と尖光とお礼。光子はなにもかも忘れて、重い金属の棒を押しつづけた。器具が光子のからだに埋め込まれた鎖を引いて動きつづける限りはいつまでも。

部屋の片隅から、声がした。

そこには、心地よさそうなベッドが置かれ横になった男が、蒲団に深々と埋もれ込んでいた。

光子は余裕のない一瞬にチラッとその方を見た。それは、正しくボーグだった。

再びドイツ語でその男のジェーンに何かを言った。

ジェーンはその方を見た。そして心残りげに光子の背中へ病烈な鞭の一撃を見舞った。尖光と激痛と、齒をくいしばった光子の口から洩れるお礼――

ジェーンはボーグの方へ行き、水着を脱いでベッドに上り、薄いカーテンを引いた。

もう光子の方からは、ベッドの中の様子はわからなかった。

「カーテンを引くだけ総統よりましだわ」

光子は足を踏んばり、力いっぱい棒を押しながらふとそんなことを考えた。

しかし、怠けて仕事を放うり出すことは出来なかった。カーテンの奥からジェーンの監視の眼が覗いていることは明らかだったし、器具は適確に鎖を引きつづけていたからである。

単調だが、苦痛に満ちた時が過ぎた。

光子の体は疲れに次第に弱ってきた。

鞭跡にしみる汗がたまらなく痛く、呼吸が激しくなり、眼さえかすんできた。

やっとしてジェーンがカーテンの蔭から姿をあらわした。

その顔には、けだるげな満足の疲労があらわれていた。

スイッチが切られ、残酷な程の正確さで動きつづけていた器具がやっと停止した。

緊張から解かれた光子は、精も根もつきはてたように、ぐったりとその場にうづまってしまった。

ジェーンの鞭が背中ではじけた。

「まだ休んで良いとは言ってやしないよ」

光子はあわてて膝まづいてお礼を言った。

「まあ、いいさ。きょうのおまえの仕事ぶりは、感心なものだったよ。出撃の前の艦長をたいへんよろこばしたのだからね。これで艦

長も心おきなく出撃なさるだろう。そうして

以前のおまえのようなイキのいい獲物をすくってきなさるだろう。しかし、忘れちゃいけないよ。わたしがきょう教育したことは、おまえの今後の生活に大切なことだからね。今度帰ってきたら、おまえがよく覚えてるか

どうか、もう一度ためしてやるからね」

光子の両手は再び腰枷にとりつけてある手枷に固定されてしまった。

そして、鳥籠のような檻に追い込まれ、鎖を格子に固定された。やがて、檻は下降しはじめ、光子は再び牢獄に戻された。



鳥籠の中の女たちは、降りてきた光子をほとんど感情の認められない眼付きで眺めながら、理解できない言葉で互いにかをしゃべりあっていた。

扉が開き、カポーが姿をあらわした。

カポーはホースを持ち、ピタッと静かになった女達の間を縫って光子の檻に近づいてきた。

汗と血にまみれた光子のからだは、ホースのなまあたたい水で洗われた。

その水はある快い痛みを伴って、光子をくすぐり、光子をもだえさせた。

カポーは柔らかいブラシで、光子の体のすみずみまでくまなく洗い終わると、気味悪く黙り込んだままさっさと姿を消してしまった。

光子は自分の陥った残酷な運命をなげきながら、もうどうにもならない鉄の腕にしっかりとおさえつけられている非力の自分を意識した。

それは、ある諦めとなって、かの女をなぜともない睡りに誘い込んでいった。悲惨な運命に追い込まれたかの女にとってただ一つの救いなのだった。

かの女には、なんの欲望もなかった。はなればなれになってしまった明子が一体

どうしているのか、どんな苦しい生活を送らせられているのか。家ではパパやママはどうしているのか？

そんな、ちらっと頭をかすめた疑問も、光子は深く追求したい気にはならなかった。

それよりも、ホースで洗われた後の鞭跡のうずくような、それでいて、なぜか快い痛みを、うとうとと意識しながら、すべてを忘れすべてを愉安に誘い込むねむりの中に身をゆだねたかった。

2

海底山脈の一つにつくられた、巨大な王国を支配するのが、かつてヨーロッパを血と、うめきと、呪いで埋めた、ヒットラーを總統と仰ぐナチの残党であることを知ったのも束の間、光子は反逆のカドでからだの一部に鎖を埋め込まれ、鳥籠のような頑丈な檻に閉じこめられ、牢獄の天井からたい鎖で吊り下げられなければならない身となった。

その牢獄での日課は、なんの予告もなく、鎖が天井に引きあげられ、上の部屋で待ち構えている男女の、秘められた欲望を満足させるため、いたぶられ、悲鳴をしばらく出させられることだった。

そこでは人間の手によるよりも、非情な機

械が多く利用された。

ゲルマン民族の男女が、いわゆる人間的満足を得るに及んで不要となった光子は、やっとな機械から解放され、再び檻に閉じ込められると、下の牢獄に引き下ろされた。

そこには、牢番が待っており、仕事の終わった光子の、血と脂汗で汚れたからだを、石鹼水と薬液で丁寧に洗ってくれた。

そのような日課の責め苦のあいだをぬって生命の異常や、からだの故障や損傷を最少限にいくとめるための検診が、女医の手によって定期的に行なわれた。

それは、毎日の苦痛にのたうつ光子には大きな救いであり、安息の一瞬だった。

すくなくとも、検診が行なわれているあいだは、檻が天井に引きあげられる恐怖の時間を確実にまぬがれることができるのだから。

ゴム手袋をはめた女医や、それに従うカポーの手が、光子のからだをどのような恥ずかしい格好にさせようとも、光子はそれに逆らう意思を持ちえなかった。

「休息」という赤札が牢にかけられれば、再びそれがはずされるまで、鎖は決して引きあげられず、恐怖に身のすくむ思いをしないで与えられたささやかな自由と安息を楽しむことかできるからである。

その上、休息中からだのあちこちに塗られる薬は、ヒリヒリと痛みながら奇妙にむずがゆく、光子の心にあるやるせないような快感をよびおこすのだ。

それは、苦痛によって、ゲルマン民族の男女を満足させている代償でもあるかのよう、光子のすべての楽しみを奪い去られたからだに、低い次元のよろこびを与えてくれた。「下等民族はよくこんな時に性根をあらわすものだね。まるでめす猫のように、どんないやらしい格好をさせられても、平気で咽喉をならし、されるままになっているよ」

しあわせなことに、光子にはその女医のドイツ語はわからなかった。

もしわかったら、なんとか毅然とした態度をとろうと努力して、かえって女医の反感をかい、せっかくの休息をとりあげられて、もっとひどい責め苦にのたうたねばならなかったろう。

休息が終わり、からだの傷が癒えると、再びなんの予告もなく、また抵抗の余裕もなく、檻はズルズルと無雑作に引きあげられ、上の部屋での責め苦に服さねばならないのだった。

毎日が暗い、絶望的な気持の中にすぎていった。

救いがないとわかっていても、光子は死を怖れていた。どんなみじめな状態ででもいいから生きていたい。どんなに虐げられ、いたぶられてもいいからなんとか――。

そんな光子の心にわずかにせよ楽しみを与えてくれるのは食事だった。

空腹のせいもある。しかしそれだけではない、舌尖に残るふしぎな美味が、毎日の食事に必ずついていった。

もちろんな贅沢な食事ではなかった。

こなごなに粉碎され、いったいなにが原料に用いられているのか、全然予測もつかないほどに煮られた、どろっとしたスープにすぎなかった。その心をとろかすような美味しさを、唇と舌で味あう時、光子は生きることのよろこびを感じないではいられなかった。

それは、毎日の残酷な苦難を、一瞬にしろすっかり忘れ去るほどに妖しい魅力を持っていた。

無知ほど強いものはない。光子がもし、その奴隷食の原料を知ったなら、よろこびどころか、むしろ死をさえ願ったことだろう。

知らないうちは、かの女の生きるよろこびとつらなっていることは皮肉なことである。

しかし、光子がその原料をはっきり知るのには、もっと後のことなのだ。

徒らに日が経っていった。

光子は、自分の閉じこめられている牢獄にある異変がおきているのに気づいた。

もちろんそれは、はっきり目立ったものではなかった。

強いていえば、牢獄内のうごきが、すこしずつ停止していつているのである。

がらがらという、鎖の巻かれる、いやな音が、最初のうちは気のせいかすくなくなっていくように思われた。

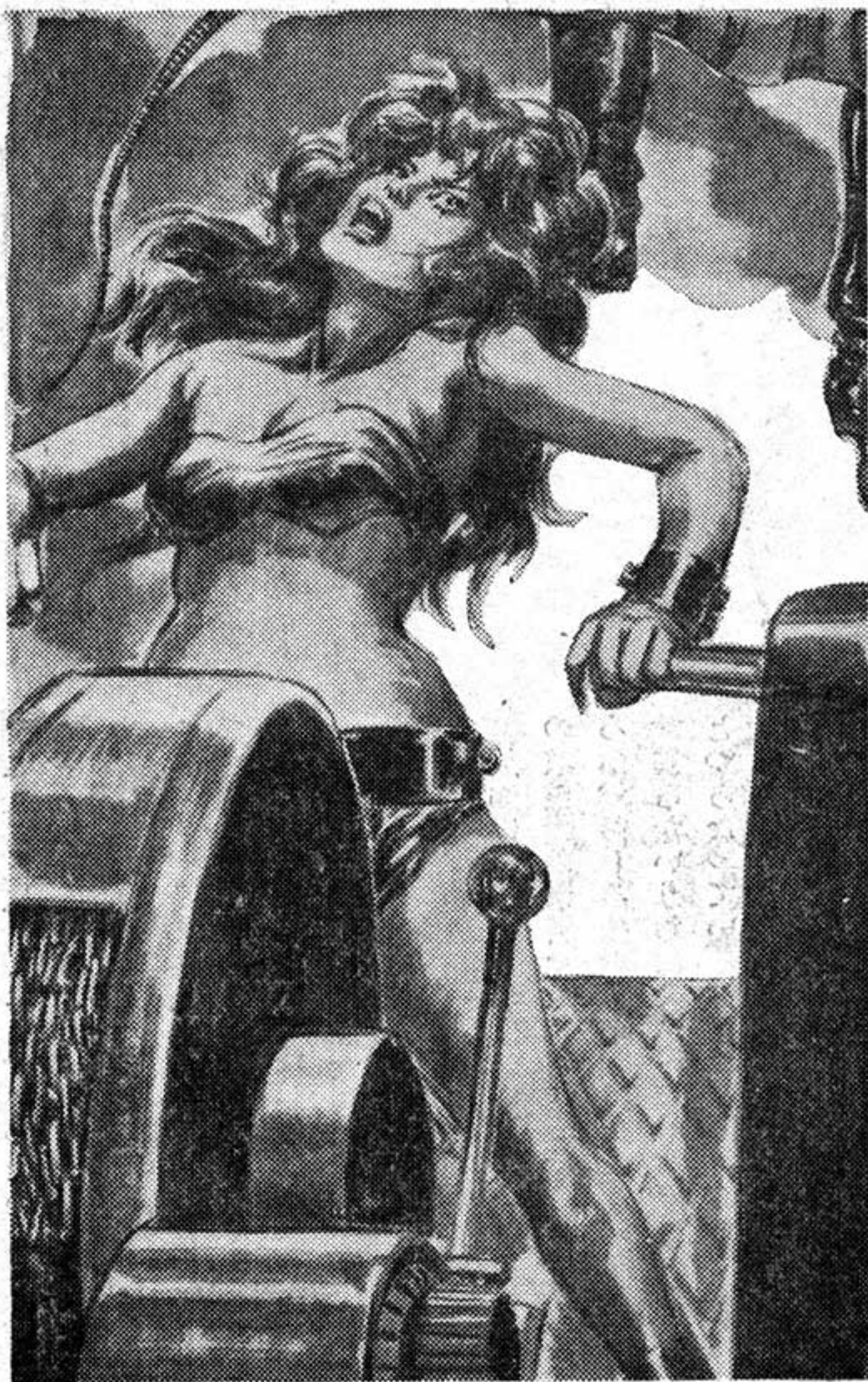
檻にいれられた女囚たちが、空中にゆれながら、哀れな、かなしそうな顔をしているのを見上げる機会が、なぜか間遠になっていった。

やがてそれもびったり停止してしまった。鎖に吊られた檻はそのままだし、中にいられている女囚たちの拘束も変わっていないし、食事のスープの味も量も変わらない。

しかし、今まで、絶え間なくがらがらと鳴りつづけていた鎖が、びたつと静かになってしまふと、光子は異様なものを感じないではいられなかった。

その静寂と動きの停止が、次の何かを予告していることは充分考えられることだった。

それが何であるかを推測することは、光子にはとても出来なかった。



女医の検診は、ますます念入りなものになり、その数も増やされた。

カポーも数が増え、檻の中の女囚の手入をより念入に行なうようになった。まるで大切な家畜の手入れをするようにして。不安と、恐怖と、一刻与えられた安息へのよろこびだけが女囚の間に溢れた。

檻の中から、お互い隣りの女囚に語りかけることは不可能なことだった。

だいいち私語は固く禁じられていたし、た

とえカポーの眼を盗んでしゃべりかけてみたところで、言葉が全然通じなかった。

そこには、海底王国の組織の巨大さをはつきり物語るように、世界中のあらゆる言葉が渦巻いていた。

また数日が経過した。

女囚たちのからだは、休息と栄養のある食事によって、次第に輝きを増し、若さにはち切れる程になってきた。

「いいからだのつやが出てきたよ。これなら

踊り子にしても別段不思議はないね。お客さまもよろこばれるだろうよ」

光子はふと耳にした日本語におどろいた。暗い迷路にさんさん迷って、孤独の恐怖に打ちのめされている時に、突然人声を聞いた時のよろこびに似ていた。

「お客さま？」

光子は、傍らを通りすぎようとするカポーに問いかけた。

「お願いです。教えて下さい。いまおっしゃったお客さまというのは、どなたなのでしょう。わたしたちの日課はなぜ休んでしまったのでしょうか」

いつてから光子は、ふりかえったカポーを見ておどろいた。

それは光子が、反逆罪で刑に服して以来、見ることの出来なくなった明子だったからである。光子は、自分のあさましいかっこうが恥ずかしくなった。

両手を腰枷に固定され、鎖を肉体の一部に埋め込まれ、立つことも出来ない狭い頑丈な檻の中に、まるでけもののように閉じ込められている自分がなさけなく、涙の出る思いだった。

光子は、明子の名を口にすることは出来なかった。

問いかけたことを後悔し、明子が自分に気づかずにくれたら、どんなにいいだろうと考えた。

しかし、どんなに姿を変えられていても、長いあいだ友達でいた明子が、光子に気づかぬはずはなかった。

最初、許可なくしゃべりはじめた女囚を、鋭い視線で睨んでいた明子は、その女囚が光子であることを知ると、素早く檻へ近づいてきた。

周囲に要領深く視線を配りながら、早口にいった。

「光子さんね。こんなところへ閉じ込められていたの？ 可哀いそうに、いままで毎日、ひどい処罰を受けていたのでしょう」

光子は、その優しい言葉に、思わず涙が出そうになった。それは潜水艦にのせられてからこのかた、一度も聞くことの出来なかった血の通った人間の言葉だった。

「明子さん。あなた立派になったわね、うらやましいわ」

光子は劣等感と共に、明子のカポールの服装をうらやましそうに眺めた。

「仕方がないわ。この鞭だって使いたくないのだけど、使わなければわたしが……」

「わかっているわ、わたしだって、あの時人

を助けようなんて思わなければ、こんなみじめな思いをしなくてよかったのだけど」

「そうね」

明子は、ため息をつきながらいった。

「でも、ここでは人を助けるなんてことをしてはいけないのよ。自分だけで精いっぱい、それがこの鉄則なのよ。だから、わたしがあなたに冷たくしても、うらまないでよ。女囚に冷たくするのが、わたしたちカポールに与えられた義務なんですもの。仕方がないわ。たとえどんなに親しい間柄でも、友情を抱いて援助することなど出来ないの」

その明子の言葉は、カポールに知り合いがあれば、すこしでも楽が出来、すこしでも苦痛から遠ざかることが出来るかも分からないという、光子のひそかな期待を打ち砕いてしまった。

「劣等民族は友情とか愛情とか、あるいは親切心などという、すこしでも人間的な感情を抱いてはいけないの。許されているのは動物的な自分を護ろうとするエゴイズムだけ、光子さん、わかって下さるわね。こんなにして光子さんとしやべっているだけでも、カポールの監視人から叱責されるのよ」

「わかっているわ」

光子は、うなだれたままいった。

「でも一つだけ教えて下さらない？ なぜわたしたちに、休息が与えられているのでしょうか？ あの鎖のさがっている天井の上の部屋で、いろんな残酷な機械で、さんさん痛めつけられ、悲鳴をあげさせられつづけてきたわたしには、これが不思議でならないの。なぜこんなに親切に、優しくしてもらえるのかしら？」

明子は、同情と憐憫のまなざしで光子を眺めた。そして、いいにくそうにしながらいった。

「お客さまがきていらっしゃるの」

「お客さまで、それは誰なの？」

「詳しいことは今しゃべっているひまがないわ。でも一つだけ、あなたにしてあげられることがあるわ。それはあなたの係りのカポールにわたしがなるのよ。むずかしいけど、なんとか努力してみるわ。そうすれば、なんとかお話しする機会があると思うの。でも今はだめなのよ。もう行かなくちゃならないわ」

明子は、わざとのように床に鞭を鳴らし、遅れた時間を取り戻そうとして、足早やに遠ざかっていった。

光子は、心の優しかった明子に、かすかに期待を抱いたことに軽い悔を覚えた。

以前なら知らず、明子だって巨大な組織に

巻き込まれてしまった単なる犠牲者にすぎないのだ。

その非情な組織のために、どのように心を歪められ、優しさを奪い去られているかわからないのである。

今の私なら——と光子は考えた。明子さんと同じことしか出来なかったに違いない。だけれだって、こんなけものよりも劣る、虫けらのような生活はしたくないに違いないのだもの——。

それから、一時間近い時間が流れた。

明子と数人のカポと女医が光子の檻に近いづいてきた。

明子は、ドイツ語で女医に何かをいい、そのうなづきを待って、光子の檻の扉を開けた。光子のからだに埋め込まれた鎖を荒々しくつかむと、まるで荷物をでも扱うようにうずくまっている光子を引きずりだした。

光子はその苦痛に、腹の底から悲鳴をしほり出した。

すこしでも鎖をゆるめようと、足と不自由な手を動かしてからだをにじらせた。

明子の引く鎖をゆるめることは出来ず、空中に吊られた檻から鎖に引きずられて、床へころがり落ちずにはいなかった。

こらえようもなく、苦痛のうめきが、光子

の咽喉から洩れた。

明子の冷酷さにたいする憤りが、狂気を誘うほどに強く、激しく脳裏に渦巻いた。

「ひどいわ」

光子はうめきながらいった。

「あなたをもう少しいい人だと思っていたのに、心のなかですっかりカポになってしまったのね」

「おたち」

明子は、そんな光子の抗議に全然耳をかす様子もなく冷たくいった。

「起てといっているのが、分からないのかい？」

鋭い鞭が、光子の太股にはじけた。

鎖が容赦もなく引かれた。

光子は口を開け、あえぎ、脂汗を流しながら、やっと立ち上がった。

「なんだい、そのだらしないかっこうは。もつと、しゃんと立てないのかい？」

しゃくるように、鎖が引かれた。

光子は、また悲鳴をあげた。

悲鳴をどうこらえようとしてもこらえられない程にきびしい苦痛だった。

肉体の一部が、骨もろとも引き千切られてゆくような思いがするのだ。

「むかし友達だからって甘えたりしちゃ承知

しないよ。甘えるどころか、友達だからこそもっときびしく訓練してもらえと思わなくちゃいけないよ。なんだい、そのうらめしそうな眼付きわ。感謝しなけりゃならないのにわたしをうらむなんてお門違いよ、うらむなら自分をうらむんだね。いくら教えてもらってもなおらない、その傲慢で不遜な自分の心をうらむがいいのだよ」

鞭が、また太股にはじけた。

「また姿勢がくずれているよ。わたくしたちの前に立つ時は、おまえたち囚人は、棒のうにしゃちこばって敬意を示すよう、いやというほど訓練されているはずなのに、まだ分かつちやいないのだね。まだ足が曲がっているよ。股だてくつついていないし、これから、わたしがうんと訓練してやるよ」

明子さんも変わってしまった——と、光子ははりさけそうな心で考えた。態度や物腰や口調はおろか、その心根までも、すっかりカポになってしまっている。そして、カポであることが誇りでもあるかのように振る舞っている。わたしなら、とてもこんなことはできない。昔の友達を鞭で打ち、悪口をいい、一番の急所である鎖を引っ張って悲鳴をしほり出させるなんて残酷なことを——。

「ふるえているね。怖いのかい？ それとも

口惜しいのかい」

明子は、冷笑を浮かべながらいった。

「おまえはさっきから、囚人のもっとも大切な義務を忘れているようだね。檻の中で安楽に暮らしているあいだに、耳にたこが出来るほど教えてもらったことを忘れてしまったのかい。それともわたしがカポードから出来ないうというのかい」

鞭がまた太股にはじけた。

光子はうめき、苦痛にからだをけいれんさせた。

「まだわからないのかい？ 仕様のないやつだね。おまえの忘れているのはお札だよ。さ

んさん教えてもらったはずの鞭のお札だよ」

光子は、あわてて小さくお札をいった。

「ちっとも感謝の気持ちがあらわれていないね。それに、遅いよ、お札というものは、すぐさまいってこそ値打ちがあるのだよ」

またしても鞭。

光子は悲鳴と共に、ありがとうございますと、屈辱と憤りに胸をかきむしられるような思いでいった。

「そう、それでやっと囚人の礼儀をわきまえたことになるのだよ。そらまた姿勢がくずれている。あまり、わたしに手間をとらせるんじゃないよ」

鞭と、悲鳴と、お札。

「まあ、いいさ。だいぶわかってきたようだからね」

明子は、すこしも冷たさをうしなわずにいった。

「今度はおすわり」

光子は、いわれるままに膝まづいた。

「わたしの、靴底をおなめ」

明子は、令嬢が女奴隷に命ずるように、無情にいった。

光子は、ためらった。

それがほかのカポードだったら耐えられる。いや、たとえ他の囚人だっていい、しかし、



友達づきあいをしていて明子の靴底をなめるなんて——光子は、傲然と眼の前に立っている明子を見上げた。

どこまでも残忍な人だろう。そんなひどい命令をしなくもよさそうなものなのに——。

いきなり、鎖が手荒く引かれた。

光子は、わめき声のような悲鳴をあげた。

「その眼付きが気に入らないね。わたしを甘く見ちゃいけないよ。わたしの靴底がなめられないというのかい？」

許しを期待することは、不可能だった。

明子の表情には、憐憫の情など露ほども認められないのだ。

光子は、顔をうつむけた。

溢れる涙と共に、明子の靴の泥をのみ込んだ。

「すっかりきれいにしなくちゃ、承知しないよ。すこしでも汚れが残っていたら鎖を持ってひきずり回してやるからね」

光子は、もう夢中だった。

ほかのカポーと同様に、いやそれ以上に明子は怖ろしい存在だった。

「おや、片方だけで済ますつもりかい？」

すっかり靴をなめて、ほっとした光子の頭上から、明子の意地悪い言葉が降ってきた。

「わたしに、片方だけきれいにした靴をはか

しておくつもりかい」

あわてて光子は、のこりの靴をなめはじめた。それは、糞便をなめさせられる以上に不愉快な、苦痛に満ちた仕事だった。

その時、女医がドイツ語で何かいった。

明子は礼をしてうなづいた。そしてなお、

なめつづけている光子にいった。

「もういいよ。このくらいで勘弁してあげよう。きょうからわたしがおまえの係りのカポーになったのだよ。さあ檻にお入り。おまえのなまいきな心に感謝の気持が芽生えるまで、わたしがしっかり訓練してやるからね」

光子は、檻に追いあげられた。

明子は、その光子の鎖を檻に固定し、扉を

荒々しく閉じると鍵をかけた。

光子の、齒をくいしばった、すさまじい憤怒の形相を無視して、さっさと女医たちと共に去っていった。

しばらくして、明子は一人戻ってきた。

「ひどいことをして、ごめんなさいね」

明子は、小声でいった。

光子は、黙っていた。

底知れない憎悪が、からだ全体を包んでいた。

もう二度としゃべってやらないし、顔も見やらない——。

光子は何をされるか分からないという不安とたたかいながら考えた。

さんさんわたしをいためつけ、ひどいめにあわせておきながら、ごめんなさいねもないものだわ——。

明子は持ってきた薬を、光子の鞭で傷ついたからだに塗りはじめた。

「ああしなきゃ、皆の目をあざむくことが出来なかったのよ。優しくしていたら信じてもらえないし、あなたからわたしを遠ざけてしまうのよ。この薬は、最初は痛いけど、とてもよく効くの」

光子の心は、容易にははぐれなかった。

明子が、また嘘をついてたぶらかそうとしているとした、考えられなかった。

しかし、薬を塗る明子の手をのがれることは出来なかった。

身を避けるには檻が狭すぎたし、手をはねのけるには、腰枷に連結された両手の拘束がきつすぎた。

明子の手はいやらしいほど親切に、光子のからだを撫で回しつづけた。

鞭跡の傷が、ある、こころよい痛みとなつて、光子の心を刺激した。

「この鎖の埋めてあるところは、よく塗ってあげてね。この薬を塗っておけば、す

こしでも苦痛が薄らぐのよ。ずいぶん痛いでしょう。この器具は手術によって、ずいぶん深いところにまで埋められてあるのよ。ほんとうに可哀いそうに。でも分かってくれるでしょう。ああしなきゃならなかったのよ。ああしなきゃ、こうして、お話をゆっくりして、いることも出来なくなるんですもの」

明子は優越感を抱いている――。

光子は心の底にわだかまる憎しみと、憤りと、疑惑が次第にもみほぐされてゆくのに抵抗して考えた。

明子は、みじめな、けもののようなわたしの姿を見て、ひそかによろこんでいるのだわ――。

「だいぶ楽になったでしょう。これから、わたしのいうことは、従順にきいて頂戴ね。そうすれば、どんなに監視の眼がきびしくても、あんなひどいことはしなくてすむのですもの。でもあの時は、ああしなければいけなかったことは分かって下さるわね」

明子は、薬を塗る手を休めずにいつづけた。その動作は光子の心をくすぐり、あるところよさを招いた。

「いま上の部屋には、お客さまがたくさん来ているのよ。そうして踊りや、いろんな余興で毎日乱痴気さわぎをしているのよ。一年に

一度のこの時のために、大切にとっておかれたものが一度に提供されるのよ。でも、いま上の部屋で、お客さまを楽しませているのは踊り子や、めす犬や、囚人でも比較的かい罪を犯した者たちばかりなのよ。だから、それは平凡なの。もちろん、わたしたちの眼から見れば、ずいぶんひどいことをやっているのだけど、快楽を求める連中には、やっぱり平凡なのね。だから、もっと強い刺激を必要とするようになると、あなたたちが使われる予定なのよ。反逆罪を犯し、死刑の求刑をされながら死をまぬがれた囚人は、あいつらの言葉をかりれば消耗品なのよ。どのように傷つけても、どのようにいためつけても、そのあげくに殺してしまっても構わないのよ。いま与えられている休息は、その時のための準備なのよ。あなたたちが健康に、はち切れそうになれば、口にするのもおそろしい計画がさらに光りを増すというわけなの。その日はもう間近かに迫っているのよ。準備は着々と整えられているわ。そんな時に、わたしがあなたをここで見つけたのは、むしろ幸運かもしれないわ。わたしも出来るだけのことをしてあなたを助けてあげるわ。わたしの知っているところでは、あと一週間もすれば、あなたたちが使われる予定なのよ。それまでに、

うんと体力をつけなければいけないわ。体力さえあれば、きっと生き残れるわ。頑張らなきゃいけないのよ」。

光子の、憎悪と憤りに引き締められた心は次第にそのしこりをほぐしてきた。

些細なことで感情を荒立てて生命をうしなうより、明子の力をかりてでも、迫ってくる死の危機をのり切るのが賢明だという考えに傾いていった。

3

光子は、明子の口から、海底王国のおどろくべき組織の実態を、すこしずつ知りはじめた。

ヨーロッパに第三帝国を築きあげようとして、みごとに挫折したヒトラーは、敗戦をその眼で確認するより前に、ベルリンに替え玉を置き、十数隻の潜水艦と共に、あらかじめひそかに建設していた大西洋下の、海底山脈の基地に逃がれた。

そこには、ナチ親衛隊のなかでも、さらに選りすぐった、最も熱狂的な忠誠をヒトラーに誓う部下が集められていた。

海底のその基地は、第二次世界大戦が終結するころには、第一段階の建設計画が完成しだれにも知られることなく、ヒトラーは王国

に君臨した。

しかも、王国の拡張計画は着々とすすめられ、原子力発電の成功と共に、運び込まれた機械類は、容易にその力を発揮しはじめた。

そうした王国の存在を知る者は、現にそこに働く要員以外になく、それを外部に洩らすうとするような者があれば、公然隠然の別なく、ごく簡単に消滅させられた。

王国の力は、急速に増大した。

かつてドイツ本土でおこなわれたのと同じ生活が、その王国でくりひろげられた。

すべての必需品が、日夜うなりつつける機械によって、半自動的につくり出された。

サイバネチックスとか、オートメーションという言葉が、世界中でもっとも早く使われたのは、その王国であつたろう。

すくなくとも、機械がつくり出す物質という面で、王国に不足するものは何もなかったといつても過言でないだろう。

しかし、ヒトラーには、二つの大きい不満があつた。

一つは、いうまでもなく、世界を支配し、隷属下におくという野望の断念であつた。

たとえ王国の力がどのようなに増大しても、そこに住むゲルマン民族の数はあまりにすくなく、新しい兵器が発明されても、とうてい

勝利はむずかしかった。

そして、へたをすれば、かつてのドイツ本土におけると同じように、王国そのものを消滅させられる危険がある。

第二の不満は、王国が海底にあるため陽光に全然めぐまれず、太陽燈によってそれを全面的にかえねばならぬ点にある。

もちろんそれで、生物がその生命を保つてゆくのに不足はなかった。

だが、食物の生産という点で、多くの不利をまぬがれることは出来なかった。

ヒトラーはもっとも賢明な解決策をみだした。

たとえ全世界の支配が不可能でも、王国における計画に、水をさす者はいないはずである。

ゲルマン民族の支配に属すべきはずの多くの民族が、不当にも快樂的な日々を送っている。

自由とか権利とか、まったく取るにも足りない劣等民族までが、だれはばかることなく主張しつづけている。

さいわい王国には十数隻の潜水艦があり、その改造や、あたらしく建造する可能な技術と機械類がある。

その潜水艦を利用して、不当に権利を主張

し楽しく幸福そうに日々を送っている劣等民族を選び出し、王国で、その本来の義務であるゲルマン民族への奉仕を教育し、思い出させるのは天の摂理である。

ヒトラーは綿密な計画をたて、次第にそれを実行に移した。

やり方は簡単である。単独で航行する小舟やヨットを襲撃し、遭難のように見せかけて乗員を救助、らちするわけである。

相手が女である場合は、できる限りゲルマン民族の快樂に奉仕させ、男である場合は、王国の拡張その他、ゲルマン民族が触れるべきでない卑しい仕事につかせればよい。

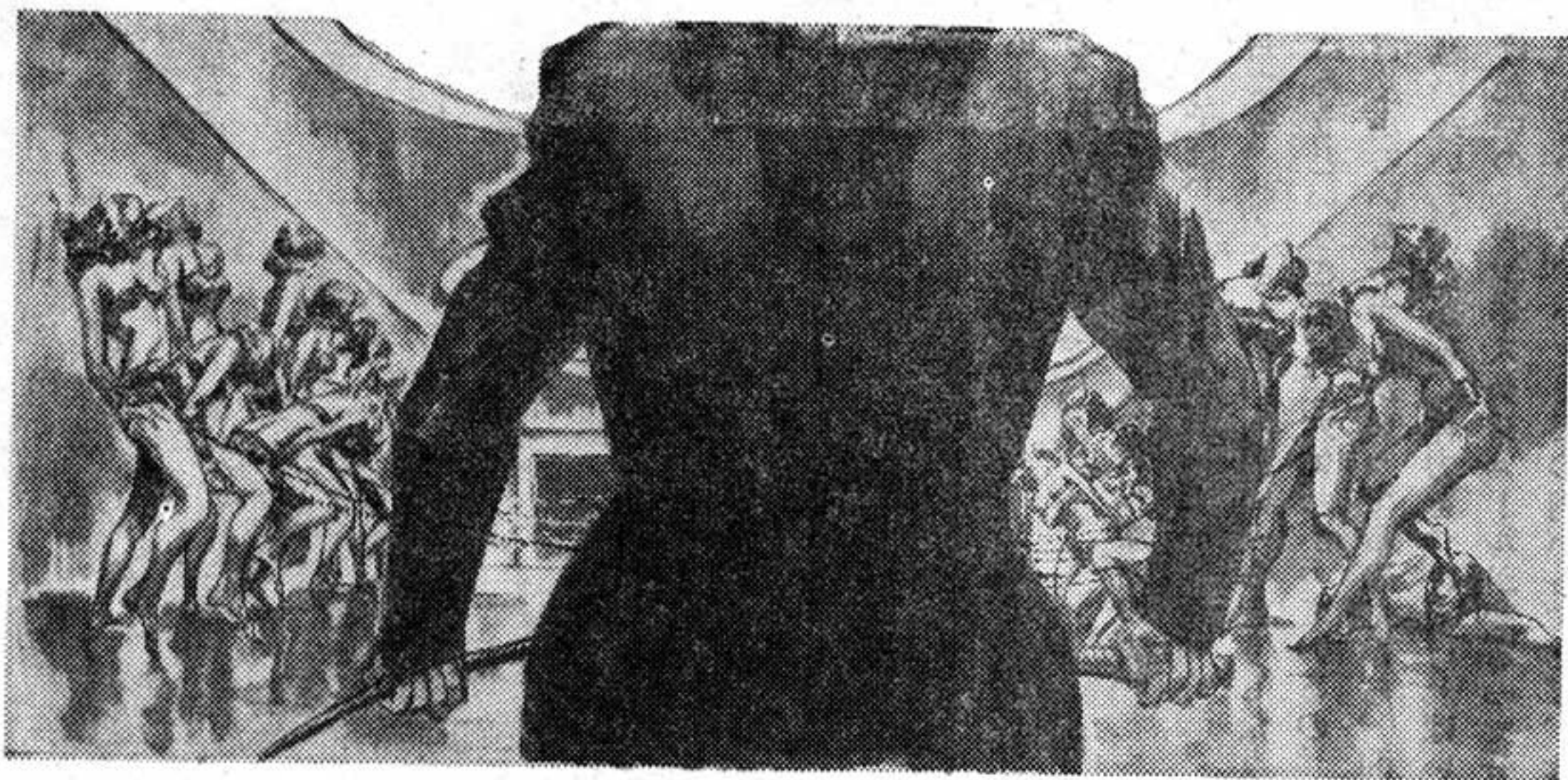
明子が伝え聞いたところによると、潜水艦で王国に連れられてきた男の囚人が、枷具や鎖に拘束され、鞭や銃の監視の下に、奥深いところできびしい労働にうめいているということである。

その数は、既に万をもって数えられるというのである。

増大する王国の人口を養う食糧を自給することは、もはや不可能となつてしまった。

ヒトラーは海底王国の秘密が外部に洩れることを怖れ、囚人にアクアラングや潜水具をつけさせ、海底の富を得ようと努めた。

しかし、それは大した収穫を約束しないば



かりか、潜水病による犠牲があまりに多すぎた。

残された唯一の解決策は地上の世界に求めることである。

ゲルマン民族は、世界各地に散らばり、その堅実な経営と勤勉さで、産をなしている者がすくなくあつた。

しかもかれらは、民族の純血をうしなわず誇りを抱きつづけている。

ヒトラーのもっとも信頼する数人の部下がひそかに地上の世界へ送られた。

かれらは、そうして各国に居住するドイツ人をこっそり訪ね歩き、ナチに対する意見をたずね、その心の中を探索した。

資産家であり、ヒトラーやナチズムに対する信頼と、熱狂的な忠誠を示す数十人のリストがつくられた。

さらに長い観察と、内偵の結果五人の人物が選ばれた。

かれらは秘密を守るという点にかけては、絶対的に信頼を寄せうる人物ばかりだった。

たとえば、どのようなむごい拷問でも、かれらの口を開かせることは出来ないだろうし、どのように巧みな誘導質問も、かれらの油断につけいることはできなかったろう。

ドイツ本土に一人、北アメリカに二人、南

アメリカに二人という状態で発見された。もっとも信頼度の高い人物に、海底王国の秘密が打ちあけられたのは、それから間もなくのことである。

かれらは、ヒトラー総統の生存を心からよろこび、積極的に王国の援助を約束した。

行く先をくらすために、幾度も倉庫を転としたさまざまな食糧は、やがて最も安全な場所から、極秘の中に王国の潜水艦に移された。

こうして、海底王国の不安は解消されたのであった。

そして、この五人の秘密機関要員は、無償の奉仕の代償として、年に一度海底王国に貴賓として招かれた。

「お客さま」とはすなわち、この五人にほかならなかった。

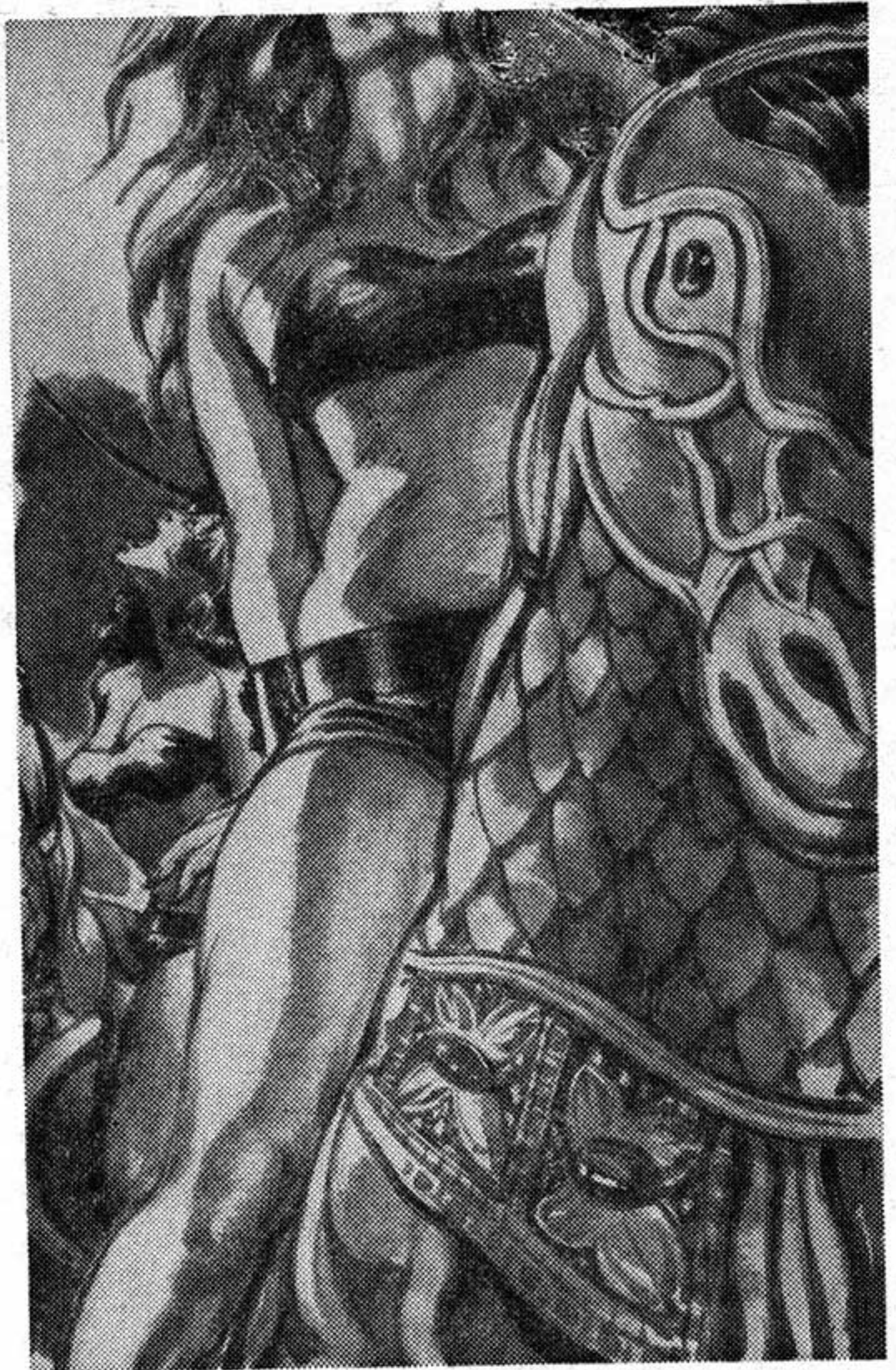
ヒトラーは、王国の繁栄に欠くことの出来ない五人の貴賓たちをもてなすため、どのような犠牲もいとわなかった。

「そうして、宴の終幕を飾るために、光子さん、あなたたちが使われる計画なのよ」

明子は、海底王国に関する知識を披れきしてから、そうつけ加えた。

「どんなことをされるのでしょうか」

光子は、逃がれない巨大な歯車にはさみ



込まれた自分を感じながら、恐怖と不安に顔をこわばらせていった。

「それは、わたしにもわからないのよ」

明子は、哀しそうな表情でいった。

「でも、たくさん囚人がいのちをうしなうだろうということは、大体わかってるの。古くからいるカポアがいつてるのだから、間違いないわ。だから、体力をつけなければいけないのよ。毎年スケジュールが変わるので分からないけど、いままでの例からすれば、体

力のない者がやっぱり一番さきに参ってしま
うらしいのよ」

光子は、明子の援助の必要を、痛切に感じ
た。

もはや、明子に猜疑の眼を向けるべき時で
はなかった。

「ともかく、食べなきゃだめよ。わたしが普
通の囚人食よりたくさん持ってきてあげるか
ら。それに薬もたくさん塗ってあげるわ」
「ありがとう。心からお礼を言うわ。あなた

を疑ったりしてごめんなさいね」

「いいのよ。わかってもらえればそれでいい
のよ」

明子は、光子の腰枷に連結された手をしっ
かり握りしめた。

「でも」と、光子はいった。

「明子さん、そんなことして大丈夫？」

「そりゃあ危険よ」

明子は深刻な表情でいった。

「わかればきつと鉄の服を着せられるわ」

「鉄の服？」

「そうよ。からだの自由をすっかり奪い去っ
てしまう鉄の服なのよ。それを着せられたら
ちょうど置き物か、装飾品のように、全然身
動きができなくなるのよ。そうして廊下や、
総統の閲見の間に置かれて、お客さまたちの
なぐさみの対象になるの」

「まあ！ そんな危険を犯してまで」

「いいのよ。気にしないでいいのよ。わから
ないようにうまくやるから」

「でもわかったらもう逢えなくなるわね」

「そうでもないわ。鉄の服の刑が終れば、き
つと鎖を埋め込まれて、ここへ連れてこられ
て、檻に吊るされることになるはずよ。だか
らまた逢えるわけよ」

「悪いわ。そんな危険を犯してまで助けても

らうなんて」

「仕様がないうじゃないの。友達が死ぬかもわからないというのに見すててはおけないわ。うまくさえやれば分りっこないのよ。最初に手荒い演技を見せたから、監視役もきつと油断していると思うわ」

どす黒い不安につつまれたまま日は容赦なく経っていった。

明子の運ぶ多量の食事と、適切な薬のおかげで、光子のからだはある逞しさをさえ備えはじめてきた。明子の存在は、光子にとって大きな救いだった。暗い、のしかかるような不安とたたかい、ともすればそれに打ちのめされそうになる時、光子は明子のことを思った。

すると、ずるずると引き込まれそうになる流砂の中から、簡単に足を引き抜くことができるような気がしてくるのだった。

こうして光子は、やりきれない、じりじりするような日々の中から、からだを鍛え、心の準備を整えていった。

やがてその時がきた。あらかじめ、明子から告げられていたとはいえ、現実には鎖が巻かれ、檻が動きだすと、光子はこわばったからだに、激しい動揺を感じないではいなかった。

女囚のいれられている檻は一斉に、同じ速度で天井へ吸い寄せられていった。

中の女囚たちは、あたらしい変化に、おどろきと恐怖の虚ろな視線で周りを見まわしていた。檻はやがて上の部屋へ到着した。他の女囚の檻は他の部屋へ到着したらしく、その部屋にはなかった。しかし待ち構えていたカポーによって檻から出され、整列させられ広間へ連れられてくると、女囚たちは再び集合させられた。

未知のものにたいする恐怖のざわめきが、その集団から波音のように洩れはじめたが、カポーのふるう鞭と叱声で、たちまち沈黙させられてしまった。

合図のドラムが鳴った。カポーは女囚たちを二人ずつ向かい合せて二列に並べた。鞭の威力が、整列の混乱を最小限にいくとめ、光子も鎖をぶら下げた苦しく不自由なかつこうで小走りに列をつくった。

わずかな鞭音と悲鳴がきこえただけで、列は容易につくられた。そうして向かいあった二列の女囚のあいだには、白い線がはっきり引かれていた。

カポーは素早く、向かいあっている女囚たちの鎖を鍵で結んでいった。

光子はやっと理解した。鎖引きが行なわれ

るのだ。

もちろん腰枷に両手は連結されているので使うわけにはゆかない。埋め込まれた個所に全力を集中して、鎖を引かなければならないのだ。相手の女囚も良い体格をしていて決して油断はならない。

明子さんは、どこへ行ってしまったのだろう——光子はふと考えた。

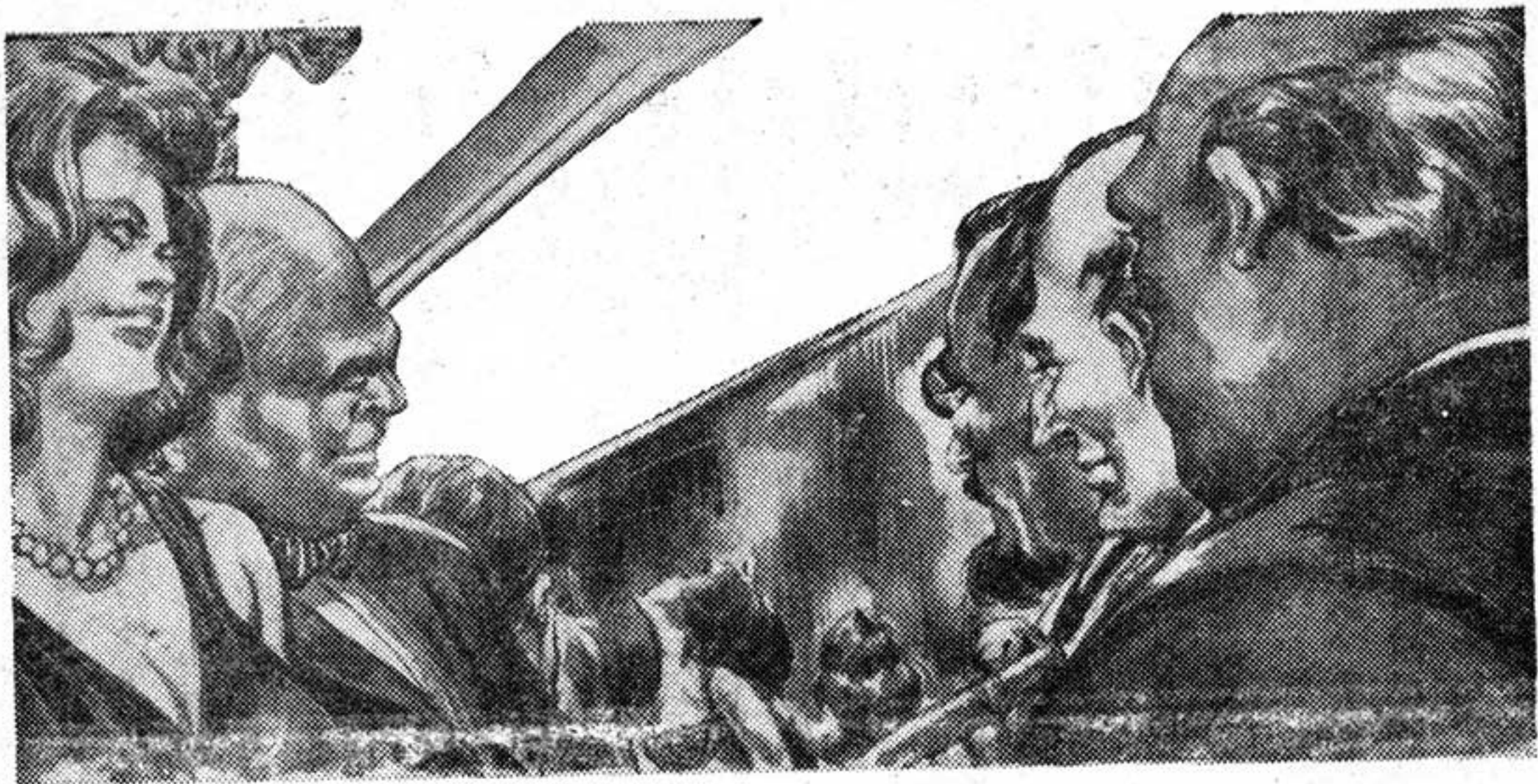
しかしその間にも、競技の準備は素早くとのえられていった。

やがてドラムが鳴り響いた。光子は肉体の一部が骨もろとも、もぎとられるような激しい痛みを感じた。互いにつながれた鎖は一直線に伸び、相手の女囚は、光子を白線内に引き込もうと、苦痛に歯をかみしめ、必死の形相で足をふんばっている。光子は思わず洩れそうになるうめき声をかみ殺しながら、やたと踏みとどまり、体重をすっかり鎖にあずけた。

気の遠くなりそうなうづきが全身をひっきり回し、脂汗がたらたらと流れた。負けても良いから、早くこの鎖をゆるめたいと幾度か思った。

しかしそのたびに、負けたら殺されるかも分らないという考えに気をとり直した。

やがて均衡は破れた。相手の女囚は苦痛と



気力の差にやぶれて、するすると光子にひきずられるままに白線を越えた。

試合は終わった。光子と相手の女囚は、へなへなとその場にうづくまってしまった。

ドラムが再び鳴り響いた。カポーはへたり込んでいる女囚たちを立たせ、勝者と敗者を選び分けた。

鎖の鍵がはずされ、敗れた女囚たちは、広間の一隅にある木馬のそばへ連れられていった。

それは遊園地の木馬を、大人が乗るように少し大きくしたようなものだった。女囚たちは、その木馬に次々と乗せられていった。

しかし光子はその様子をくわしく眺めている余裕がなかった。あたらしい試合にのぞむために、白線をはさんで、見知らぬ相手と向かいあわせられたからである。

木馬に乗せられた女囚の口から、おそろしい苦悶の叫びがきこえてきた。

木馬はちょうど遊園地のそれと同様、上下に激しく運動していた。

叫び声に気をとられて、ちらっとその有様を眺めた光子は、自分の鎖が相手の鎖と結ばれるかすかな鍵音にすぐさま注意を集中した。

今度の相手は、前のよりもはるかにたくま

しく、良い体格をしていた。髪の色は黒かったが、相手がヨーロッパ人であることは大体、想像できた。

ドラムが鳴り、鎖がおそろしい力で引っばられた。光子のからだは、僅かに引きずられた。足を踏んぱり、鎖に全力を集中した。巨大なベンチで、骨をねじ切られるような激痛が襲ってきた。

ふき出る脂汗にまじって、よだれが訳もなく流れ出た。そうして失神寸前のところで、光子は辛うじて勝利を収めた。相手は気力をうしない、するすると引きずられるままに白線を越えた。

敗れた女囚はたちまち木馬に乗せられ、勝った女囚には、再び新しい相手との試合が課せられた。

こんな苦しい思いをするくらいなら、いつそ負けてしまつて、木馬に乗せられるほうがどんなに楽か知れない、と光子は幾度も考えた。

しかし試合に負けて、より楽な仕事が待っているはずはなかった。遠くからでよくわからないが、木馬の上で女囚たちは、苦悶の叫びをあげ、泡をふいている者さえあるのだ。そうして光子は、なん度かの試合にやっとの思いで勝ち抜いてきた。もう立って、鎖を

ぶらつかせていることさえやっとの思いだった。

ずきずきする痛みが根強く残って、わずかな身動きでも、とび上るほどの苦痛を誘った。しかも勝った女囚は四人残っていた。最後の勝利までには、まだ二回の試合をしなければならぬ。

激烈な苦痛に圧倒され、光子はついに目の前にした勝利を放棄してしまった。

光子は木馬のところへ連れられてゆくあいだ、半分喪神状態で歩きつづけた。あまりの苦痛に、頭がぼんやりしてしまっていた。かの女は木馬に乘せられた。

両足が木馬のあぶみに固定され、木馬の背にぽっかりあいている穴に、かの女の鎖がさし込まれた。

鎖は木馬の胴を通り、下腹部に先端をのぞかせた。その鎖の先端にずっしりしたおもりがとりつけられた。おもり先ひかれて、光子の肉体に重苦しい痛みを与えた。

しかし他の女囚たちが、泡をふき、わめきのたうつ理由を知ったのは、木馬が上下に動きだしてからだった。

光子は、木馬が上昇する時、おもりがなん倍もの力を加えて鎖を引くのを感じ、下降する時には、そのなん十倍もの力を加えるもの

であることを知った。

とりわけ上下運動が停止した瞬間、おもりの力は、光子の肉体をねじ切ってしまうのではないかと思うほどに激烈なものとなった。

たちまち、かの女の耳から、他の女囚の苦悶のうめきやわめき声は消え去っていった。

あるのはただ苦痛のみだった。間断ない上下運動する木馬の上で、のたうち、わめき、よだれを流し、泡をふいた。

しかし機械は非情だった。どのような苦しい表情をしようと、どのように大きな叫び声をあげようと、同情の片鱗をも見せてはくれなかった。

ただ単純に、与えられた上下運動の仕事を繰り返すのみだった。

そのころ、広間の残酷な光景をマジックガラスを通して眺めていた、いわゆる五人の「お客さま」たちは、眼を輝やかせて語り合っていた。

「総統は、われわれのご奉公を決してむだにはなさらないお方だ。ここへ招待されるためになら、どんな無理なご用命にも、よろこんで応ずる気になるわい」

「そうよ。総統もお目が高い。われわれにご用命になれば、決して間違いはないのだからな」

かれらの肥満したからだの横には、細く、しなやかな美しいゲルマン民族の女が一人ずつかしづいていた。

そしてそれを助けるための女奴隷が、それぞれ五人ずつ、華やかな色のビニールの水着を着せられ、金色の枷と鎖をつけられ働いていた。

「これから一生、わしはどのような事情が発生しても、このナチ海底王国のためにご奉公する覚悟じゃわい」

「総統の天才はわれわれを安心させ、信頼させて下さる。ヨーロッパに君臨しておられた頃の総統には、未だ奇妙なためらいのようなものがありなされた。しかしこの海底王国に住まわれてからは、誰はばかるところなく総統の天才を発揮なされるようになった。ゲルマン民族優越の論理が、これ程見事に結実しようとは。これも総統の天才があつてこそ実現されるのじゃ」

男は金色の鎖をちらつかせて働いている女奴隷の一人を、寝そべりながら足蹴にした。奴隷は軽い悲鳴をあげ、鎖に足をとられて簡単に転んだ。

「失敬なやつ。わしの足につまづきおって」女奴隷はひれ伏し、ふるえながら許しをこうた。

「わたしたちの傍女に使ってやっているのが不服なのかい？」

男の傍らに寝そべり、男の愛撫を受けていたゲルマン民族の女が、美しい唇からおそろしい言葉を吐きだした。

「おまえも鎖を埋めてほしいのかい。そしてあの鎖引きの競技に加えてほしいのかい？」

それとも木馬の上で泡をふき、のたうち、身をよじらせてみたいのかい」

女奴隷は恐怖にあおさめ、ひたすらに許しを乞いつづけた。

それは他のどのような家畜にも劣らないほどに従順で、卑屈な姿だった。

「まあいいよ」

ゲルマン民族の女は傲然としていった。

「今度だけは許してあげるよ。でも今度過失を犯したら、きつとカポーに引き渡して懲戒をやるからね。おいで。この消えないインクで額に印しをつけておいてやるから」

女奴隷は額に赤い印しをつけられ、幾度もお礼を云い、お辞儀をした。

「わたしの大切な人の足を汚した罪に、今日一日鉄の靴を穿いておいで。内側に荊の植えてある鉄の靴をね」

カポーが呼ばれ、靴が運ばれてきた。女奴隷はそれを足に穿かされる時、苦悶の表情を

浮かべた。

鉄のベルトが締められ、錠が下ろされた。

「さあ、そうして皆といっしょに、同じように働くんだよ。怠けたりしちゃ承知しないからね」

女奴隷は苦痛に顔をしかめ、よろめくように働きはじめた。

「この能なしの、めす豚みたいなイギリス女を見ていると、わしはドイツ人に産れたことをこの上なく倖せに思うよ」

肥った男は言った。

「自尊心や誇りのないやつは、どだい人間ではないのだからな。わしがこんな目にあわされたら、たちどころに自殺してやるよ」

「あの薬を注射されても？」

女が媚をふくんだ眼付きで言った。

「そうだな。そいつは多少考えものだて。しかし安心しな。總統が健在なあいだは、われわれゲルマン民族がこんな目にあうということは絶対にないのだから。そんなことがおこれば、それは天の摂理にもとるといふもんじやよ」

鎖引きの競技は終幕に近づいていた。

互いにかっちりした、プロンドの女同志が口をゆがめ、脂汗をしぼり出しながら鎖を引き合っていたが、やがて均衡が崩れ、片方が

簡単に白線を越えてしまった。

負けた女囚は直ちに木馬に乗せられ、鎖におもりをつけられ、苦痛にわめきはじめた。

そして勝った女囚は、勝利のしるしとしてそのふら下げている鎖の先端に、白い造花の花をつけてもらった。それは誇らしやかに、鎖と共に揺れ動き、可憐な美しさをそえた。

やがて女囚は、總統のいる鏡の部屋に向かって膝まづかせられ、土下座を命令された。そしてそれが済むとやっと、広間の片隅に

しつらえられてある小さい檻の中で休憩をとることを許された。女囚は立っているのがやっとらしく、檻に入れられると、へたへたにくずれてしまった。

しかし一方、木馬はその残酷な動きをとめようとはしなかった。眼をむき出し、泡をふき、よだれを流してのたうつ負けた女囚の姿は悲惨だった。

しかしそうして苦悶の叫びをあげる気力のある者は、未だ選ばれた者だった。半数以上の女囚は、幾度か失神し、そのたびに薬液を注射され、もうろうとした意識をよみがえらせられていた。

もうそれらの女囚には、のたうち、わめきもだえる気力も体力も残されてはいないらしかった。いくら木馬が荒々しく上下運動をく

りかえそうとも、ぐったりとなり、白いうつろな眼をしてよだれを流しつづけていた。

かの女たちにあるのは、ただ苦痛のみだった。骨が鋸で引かれ、金槌でうちたたかれるような、とてつもない、苦痛のみが残っていた。そして注射の薬液が、失神という唯一つの救いをも拒みつづけていた。

光子もまた失神の寸前にあった。

とてつもない苦痛にうちのめされ、わめく気力などとうになくしていた。うめきが口から洩れるのが、わずかに残る気力の所在を告げていた。

それでも木馬の運動は停止しなかった。

いつまでも、いつまでも、果てしなくつづくのかと思われるほど長い時間、寸刻の休みもなく正確に、そして非情に。

4

おそろしく長い時間の経過の後に木馬はやつと停止した。

光子にはそれが、なん年もの長い歳年に思われた。実際には、それは一時間とちよつとのあいだであつたにもかかわらず。

そして足の拘束を解かれ、鎖のおもりをはずされても、自分の力で降りることの出来る女囚は一人だっていなかった。

そればかりでなく、カポーに助けおろされた女囚は、立つ気力もなく、みな一様にその場にへたり込んでしまった。

中には手足をけいれん的に動かしている女囚すらいた。まるでてんかん病みか、精神病患者の一種のようにして、うづくまり、のびてしまった女囚のからだは、みな一様に油汗によって異様に光り輝いていた。

しかしカポーはいつまでもそんな状態を許してはおかなかった。

鞭と棒が女囚のからだに打撃をあたえはじめた。

「いつまで、のらのらとねそべっているんだい、仕事はこれだけじゃないよ。これだけぐらいじゃあ、お客さまはちつとも満足していらっしやらないよ」

光子は立ち上がろうとして、苦痛に顔をしかめてまたうづくまってしまった。

やつと明子が姿をあらわした。

かの女は他の女囚を、荒々しく鞭で打ち、口汚なくのしりながら、光子のそばへやってきた。

「ごめんなさい。どうしても、手がはなせなくて」

明子は早口に、光子の耳に小さくいった。そして急に荒々しい態度に戻ると、声色ま

で変えてののしりはじめた。

「なんだいそのさまは。めす豚よりもだらしがないじゃないか。さっさと起きるんだよ」鞭が光子の背中にはじけた。「起きてちょうだい。起きなきゃ、ひどいめにあわされるのよ」

明子はまた小声でいった。

光子はかろうじて起き上がった。

鎖の埋めてある個所が激しくうづき、からだ全体に、けだるいような疲労感があった。他の女囚たちも、必死の思いでやつと立ち上がった。

しかし十人ばかりの女囚は、どのように鞭をあてられ、ののしられ、足蹴にされても起き上がれないでいた。

それらは鎖引きに負け、最初から木馬に乗せられ、いためつけられていた女囚に違いなかった。

やがて電気こてが持ち出されてきた。

起き上れぬ女囚の腰に、赤く焼けたこてが押しつけられた。

ジュツという音とともに、肉を焼くいやな匂いが漂った。

それでも、女囚は口を大きく開け、眼を見開き、逃れようとする瞬間的なあがきを見せたが起き上れなかった。

電気こては倒れ伏している女囚の腰に次々と当てられた。

木馬のために、すっかり気力と体力を使い果たしてしまったかの女たちは、ついに起き上がれなかった。

カポ一の一人がなにかを合図した。

すると天井から、太い鎖が一本するすると降りてきた。

起き上れぬ女囚の鎖が一つにまとめられ、その鎖に連結され、再び天井へたくさんな女

囚をかかえたまま上昇しはじめた。

断末魔のうめきが女囚の口から洩れ、激しいけいれんが、吊り下げられた女囚ぜんぶのからだに走った。

しかし鎖は容赦しなかった。広間の天井近くまで、一つにまとめた女囚のからだを持ち上げると、やっと鎖は停止した。

そのだらりとたれた多くの手や足や頭は、左右にかすかにゆれながら、広間に異様な彩りをそえていた。

「いつまでもぼやぼや見ているんじゃないよ」

恐怖とおどろきから、口を開け、呆然として見上げている女囚に、カポ一の罵声がとんできた。

光子たちは整列させられ、再び広間の中央にまで追い立てられた。

よろめいて、ぐずぐずしている女囚には容赦のない鞭がとんだ。

そこで女囚たちは、鋭い角のついた皮の帽子をかぶせられた。

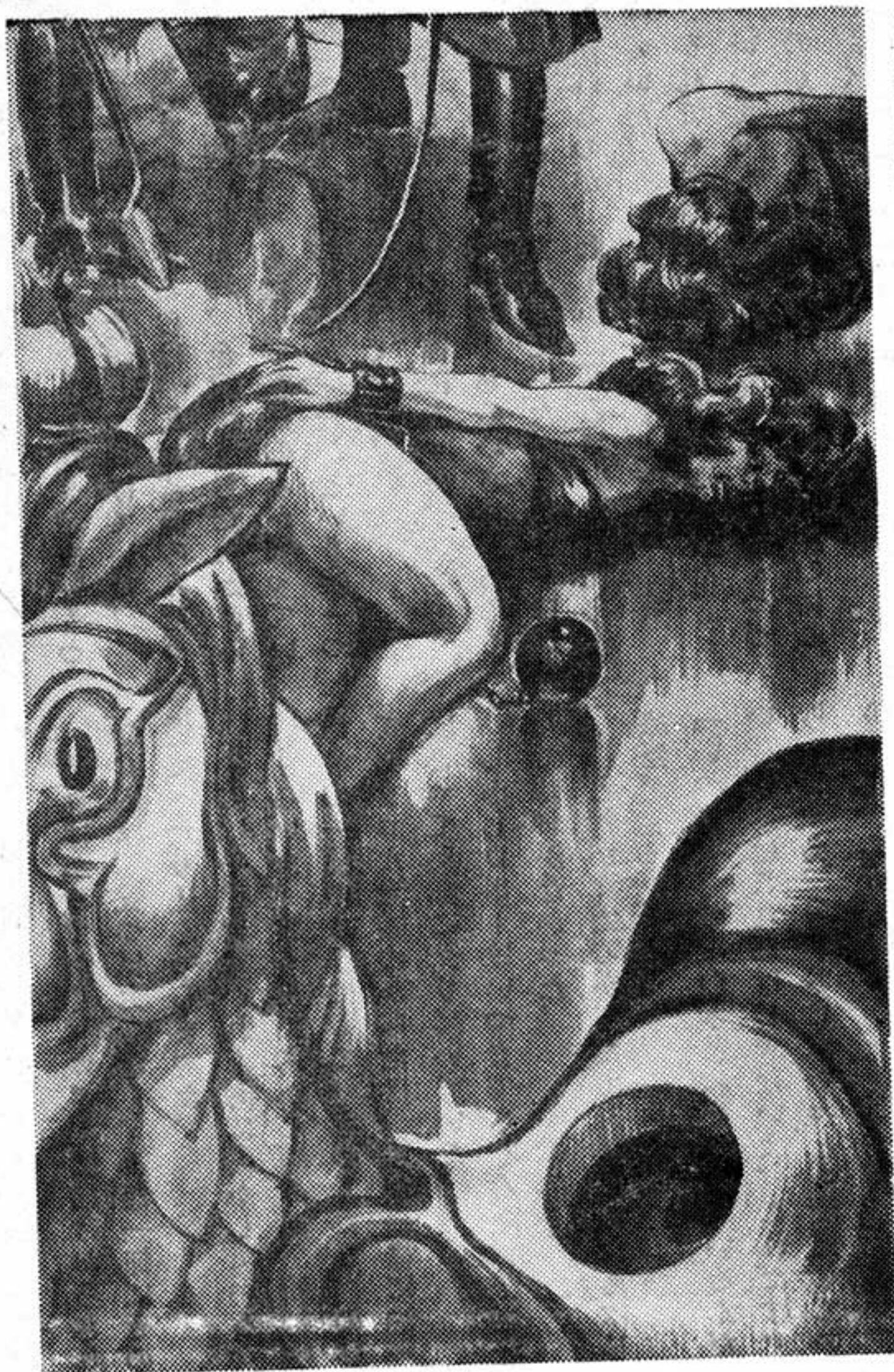
それはいく本ものバンドで、顎や後頭部にとめられ、すこしくらいの衝撃では決してぬげないように出来ていた。

「斗牛をやらせられるのよ」

明子は光子に、その角の生えた帽子をかぶせてやりながらささやいた。

「相手の肩か胸をねらうのよ。すこしくらい突かれてもひるんではいけないの。頭を思い切り振って、角を相手のからだに深くめりこませるのよ。そうして突いた角を直ぐ抜かずに、角を押し込み相手を倒そうと努めるの。そうして相手が、はっきり死んだとわかるまでは、決して油断してはならないのよ」

任意に相手を選ばれ、鎖が結ばれた。合図のドラムが重々しく鳴り響いた。



もう寸刻の油断も許されなかった。

鎖一杯のところまで離れ、相手を倒すスキをねらって身構えねばならない。

同情や憐憫が、ほんの少しでも芽生えたりしたら、即座にいのちをうしなわなければならぬのである。

突然、鎖がゆるみ相手が突進してきた。

光子は、とっさに身をかわした。

しかし相手の角が、光子の腕のつけ根にふれ、瞬間的な痛みを感じた。光子の心に憎悪が湧いた。殺さなければ殺される。

血が、傷口から冷たく流れるのが感じられた。

光子は身を躍らせた。相手の恐怖の憎悪に血走った大きな眼が迫ってきた。

つき当りそうになる寸前に、光子は頭を激しく振った。

角のつきささるたしかな応えがあった。

光子は明子に教えられた通り、それをすぐ抜こうとはせず、押し込むように頭に力を入れた。荒い、苦しい相手の息づかいが感じられた。

腹が波うっていた。そしてそこを、きれいな血が溢れるように流れていた。

しかし相手はなかなか倒れなかった。

長い均衡状態がつづいた。

光子は首がだるくなり、ずきずき痛みはじめたのを感じた。

時間をかけてはならなかった。

光子は全力をあげて、相手のからだを手前に引きよせた。それにつれて、相手のからだはよろめき、やがて足許に倒れ伏した。

首のつけ根のところに、角でつくられた大きい穴があいており、そこからたえ間なく赤い血が溢れ出していた。

光子は両手を腰枷に拘束されている不自由さもいとわず、素早くひざまづくと、相手の心臓めがけて深々と角を突きさした。

すべての競技が終わった時、生き残った女囚は光子を加えて三人になっていた。

しかもかの女たちは、大なり小なり傷を受け、辛うじて生きているという、ていらくだった。

このことは、競技の示すむごさ、残忍さ、そして、血なまぐささをはっきり物語っていた。この競技に生き残れたことは奇跡に近いことだった。

死んだ女囚は、そのからだに鉤を打ち込まれ、床を引きずられて、どこへともなく処置されていった。

光子たち生き残った三人が、そのおのこの鎖の先端に、勝利のしるしの赤い造花の花

をつけてもらい、再び檻に閉じ込められ、牢獄の天井に吊り下げられたところには、広間はたくさん奴隷の手によって、水が流され、拭い清められ、いままでの殺りくのとなどとうてい想像できないほどに美しくかたづけられていた。

そうして宴のフィナーレは幕を閉じた。

客たちは満足し、あらたな奉仕と援助を総統に固く約束して、海底王国から去っていった。

光子たちは、檻の中で傷が癒え、体力の回復するのをじっと待った。競技に勝利しても犯した罪は決して許されなかった。

ただ死をまぬがれたことを幸運と感じ、それを感謝しなければならぬ身の上だった。埋めこまれた鎖がはずされるのは、死んだとき以外に期待できなかった。

檻を出されて、他の仕事にまわされるようなことがあっても、埋め込まれた鎖は一生ぶら下げていなければならないだろう。

たとえばその先端につけられている白い可憐な造花がすり切れ、千切れ、すっかり消滅してしまっただとしても、あいかわらず、鎖と別れることは出来ないのだった。

ゆえなく与えられたものだとしても、反逆の罪は、それほどに重く、おそろしいものな

のだ。そうして全く暗澹とした毎日を送りながら、光子はなお生にしがみついていた。

死ぬことはおそろしく、けがらわしいことだった。せっかく、競技を生きぬいてきたのである。あらゆる努力を惜しまず、犠牲を払い、苦痛や恐怖とたたかってきたのである。それかあらぬか、光子のからだの傷は、いえ、おとろえた体力はすこしずつ回復しはじめてきた。

やがて見回りのカポーは、光子のからだのあちこちをつねったり、押したりしながらつぶやくようになった。

「もうそろそろ、仕事をやってもよいころだね。檻の中でじっとしていちや退屈だろうしね。からだにやくないからね。上の部屋では、鞭や鎖で泣かせる女囚がすくなくなつて、物足りなく、淋しがっていらつしやるドイツの主人さまたちがたくさんいらつしやるのだからね」

そのころには、あたらしく鎖を埋め込まれた女囚たちが、すこしずつ空いている檻にいられたはじめていた。

そして鎖は活動を開始し、かなしげな表情をした女囚をいれた檻は、かすかにゆれながら天井に吸い上げられていた。

しかし不思議なことに、競技の日以来、明

子は一度も姿を見せなくなっていた。

せっかくわたしが助かったのに、一度くらい見舞いにきてくれても、よさそうなものなのに――。

光子は明子の冷たい行為をうらみながら考えた。しかしやがて忘れていった。

体力の回復した光子には、あたらしい仕事待ちうけており、なんの予告もなく檻もろとも上の部屋へ吊り上げられ、そこに待ちうけているドイツ人の男女に、いたぶられ、しいたげられ、またしても悲鳴をしほり出させられ、かれらのよろこびに奉仕しなければならなかったからである。

そうして日課の苦痛にうめき、恐怖に顫える幾日かを光子は送った。

そんなある日、光子は、埋め込まれた鎖をカポーに引っぱられ、よろめきながら歩いてくる女囚に注意を集めた。

立派なカポーの服装から、みじめな、うじ虫のような女囚の姿に変えられてはいるが、それが明子であることに間違いはなかった。おどろきから光子は大声で叫んだ。

「明子さん」

明子は立ち停ろうとしてカポーに鎖を激しく引かれ、たえいるような悲鳴をあげた。

「おまえたち仲間だね」

カポーは意地悪い表情で言った。

「隣の檻に入れてやろう。しかしおしゃべりはひどい懲戒だよ、わかっているだろうね」檻に閉じ込められた明子を見て、懲戒を覚悟でも、光子はしゃべりかけずにはいられなかった。

「わたしのためのね。わたしを助けたためにそんな姿にされてしまったのね」

明子はかすかにうなずいた。

「ごめんなさいね。でもおかげでわたしはやつと生きのびられたのよ」

「わたしのことは良いのよ。いずれはわかってしまふだろうと覚悟してたんですもの。むごい拷問にかけられ、とうとう白状してしまったのよ。刑罰はわたしの予測していた通りだったね。鉄の衣服を着せられ、装飾品だけではなく、耐寒試験や耐熱試験の実験材料にされてしまったの。そしてあげくの果ては鎖を埋め込まれ、ここへ連れられてきたのよ。もうおしまいだね。どうあがいても助かる見込みなんてないんですもの、それに死体のスーブをのまされるでしょうし」

「え？ 死体のスーブ？」

「あら、知らなかったのね。言って悪かったかしら」

「おねがい。おしえて、死体のスーブってな

になの？」

明子は口をつぐんだ。しかし再度光子にせがまれると、やっと口を開いた。

「檻の中の女囚に与えられるスープは、他の女囚の死体が原料なのよ。前の競技でたくさん死んだ女囚が死んでいるから、きつとわたしたちは死ぬまでそのスープをのませられるわ」急に光子は眼の前が暗くなった。

あれほど美味しいと思ってのんでいたスープが、死体でつくられていようとは。

生きようとする意欲がなぜかあっけなくなっていくおとろえてゆくを感じた。いままで一度だって考えようとせず、常にそこから

一步でも遠ざかろうとしていた死が、妖しい魅力をそなえはじめてきた。

吐気がしてきた。

「明子さんはそれを知っていて、わたしに飲ませていたのね」

光子の声が陰しくなった。

「ひどいわ。残酷だわ。わたしの生きるのぞみの一つだったのに」

「でも仕方なかったのですもの」

明子は檻の中でおどおどしながらいった。

「あなたを助けようとするれば、そうするよりなかったのですもの」

「そんなことなら……そんなことなら助かり

たくはなかったわ。いっそ、殺されたほうが……」

そういつて、光子は自分の言葉のおそろしさに身顫いした。

死を本能的に怖れさせる薬液の残酷な効果は、なおはっきり光子の肉体に残っていた。

「でも……」と明子はためらいながらいった。

「簡単には殺さないわ。わたしもいっそ、死んでしまえばといくども考えるけど、やっぱり死ぬのは怖いわ。それに死ねばミンチにかけてこなごなにされ、スープにして女囚の餌にされてしまうのですもの。そんなことならどんなにいいじめられてもいいから、やっぱり



生きていたいと思うのよ。たとえ死体のスー
ブをのまされても……」

光子は、とつぜん気が狂ったように笑いは
じめた。

それはそうしなければ、どうにもならず
わだかまっている心の底のしこりを、すっか
り吐き出してしまえない、とでもいったよう
な、けたたましい笑い声だった。

カポーが近づいてきた。

「うるさいよ」

鞭がうなり、床にはじけた。

しかし光子の眼に涙を浮かべた虚ろな笑い
はとまらなかった。

「懲戒するよ。さっきからわたしの眼を盗ん
で、隣り同志にかべちゃくちやしやべって
いたのだからね」

カポーは檻の中に手をさ入れ、光子の鎖を
荒々しく引っぱった。

光子は悲鳴をあげ、やっと沈黙した。

「これは、なまやさしい懲戒じゃあすまない
よ。二人とも、わたしの親切を利用して、勝
手にしゃべりちらし、牢獄の静けさを乱した
のだからね。身のほどをわきまえておればこ
んなことにはならないはずだよ。はじめに鉄
の頭布が必要なようだね。喋ることはおろそ
か、音も聞こえず、眼も見えず、首から上を

すっぱり鉄にかこまれて、ただ呼吸をする
というだけの鉄の頭布をね。それから鉄の靴も
穿かせてやろう、内側にとげの一杯植えてあ
るスマートな靴をね、更に乳をしっかり締め
つけ、しょっちゅう、いじめる乳枷もはめて
やろう。腰枷も鋼鉄製のもっと太くて重いも
のにとりかえて、鉄のパンツもはかせてあげ
よう。それに鉄のストッキングも必要なよう
だね。両手は鉄の手袋をはめ、鎖で首枷に吊
るしといてやろう。それに身動きすれば電撃
がおこるように、首枷にコードをつけといて
やろう。今の檻では、あんまり空間が多すぎ
て、つい身動きしたくなるだろうからね。そ
うして背中に、冷たい水が一滴一滴したたり
落ちる装置を檻の上に、とりつけといてやろ
うね。それはそれはよい気持だよ。わたしの
こんな親切をむだにして、もしおまえたちが
気狂いになってもなったら、仕方がないから屠殺
してスープにしてしまうよ。どうだい？ わ
たしのこの慈悲深い処置は、友達同志を隣り
あわせの檻にいてゆっくり心ゆくまでしゃ
べらせてやったのだからね。お礼をいっても
raithたいくらいだよ。おや、うれしいのか
い。涙を流してよろこんでいるじゃないか」

そのころ、日本の近海にまで出撃したボー

グ艦長は、熱心に潜望鏡をのぞいていた。

レンズには、ふたりの男女をのせたヨット
が、帆一杯に風をはらみ、なめらかな速度で
航行している様子が映っていた。

空は晴れ、海は風いでいた。

すべては平和と、限りないしあわせにつ
まれているようだった。ヨット上の男女は、
愛し合い、信じ合っていた。

太陽は、ふたりの愛情を、よりたかめ、よ
り燃えあがらせようと照り輝やいていた。

ボーグ艦長の表情に、悪魔的な満足のほく
そえみが浮かんだ。

そしてそれから何十分かの後、全身濡れね
ずみになったふたりの男女は、突如としてあ
らわれた潜水艦になんなく救助された。

やがて艦内の一室に收容された二人を前に
して、ジェーンは威厳を示しながらいった。

「わたしたちは重大な秘密の任務を持ってお
ります。あなたたちがその秘密に容喙しない
限り、任務が終れば安全に故郷へ送り返すこ
とを約束します。しかしわたしたちの秘密の
任務について、あなた達がすこしでもタッチ
するようがことがあれば、秘密保持の必要か
ら、直ちに囚徒として拘禁します」

ふたりの男女は、救助の感謝を表情にこめ
肩を抱きあいながら、はつきりうなずいた。

裏窓叢書第六集

裏窓叢書第七集

裏窓叢書第八集

地獄谷の女たち

塔婆十郎作 山田彬弘絵

縄の一本が、ことさらに強く胸のやわらかいふくらみにかかって、ひきしぼられた。白いのが、きしむような声をあげて泣いた。貧しく悲惨なひさ子の過去にも、こんなおそろしい、みじめな経験はなかった。

虎三が、縄じりをつかんで立ちあがった。

「どうだ、すこしはこたえたか」

興奮して、赤い目になっている。

ひさ子の縛られた両手首が、縄じりにひかれて、上にぐいと吊りあがった。骨が折れるような苦痛が、ひさ子の腕を襲った。手首の関節が、ポキリと鳴ったような気がした。

ひさ子は全身をねじるようにして耐えた。

「さあ、店に出ますといえ、よろしくお願いします、といえ！」

定価四五〇円 送料八〇円

大利根柔肌草紙

花巻京太郎作 鬼頭曉絵

源次と権六は汗をふきながら、

「姐さん、これでいいかね」

「ご苦労だったね。あとは政吉兄さんの仕事だから、お前たちは帰っていいよ」

とお松は、三手下二人に酒代を出してやると、こんどは政吉に目で合図し、泣きくずれているお絹のしなやかな肩に手をかけた。

「は、はなして！」

お絹はからだをふるわせて、その手から逃れようとしたが、胸をおおっていた両手を政吉によって後ろへぬじ曲げられてしまった。

縛られるのだ、とさとしたお絹は、最後の力をふりしぼるようになってしまった。

「じたばたすんねえ。こうなりやあ、観念するより仕方あるめえ」……

定価四五〇円 送料八〇円

悪魔術の塔

九十九十郎作 中川彩子絵

「うむ、アスカミオ殿のご息女とな」

デスノス城主は、眼前のブランシュ姫を頭のとっぺんからつま先まで、獲物を値ぶみするような目つきで眺めまわした。姫は汚れた旅装のままだったが、貴族の娘としての威厳を白い頬に見せて、城主の無礼な視線にたえていた。侍女クレリヤは戸口のそばに控えている。

城主は、胸に光る金のメダルをもてあそびながら、黒い両眼に好色の色をかくそうともしない。

「お美しい。いくつにおなりかな」

「十八でございます」

「まだ生娘であろかな」

娘の白い頬に、サツと血がのぼった。……

★九月上旬発売予定★

前号まで

▼わたし（阿麻哲郎）は航海士上島氏を通じ、美しい女予言者サレアを、その日本公演中に知る。上島氏はゴールドンの古文書をわたしにあずけ出航したが、航海途上で煙のように消え、またゴールドンの古文書の本当の持ち主相馬博士に会う寸前、博士は行方不明となり餓死体が発見される。

▼以前上島氏に案内された新宿のバー・エテルナに博士の怪死事件とのつながりをかぎつけ、流しの男に探りを頼んだが、男はかえってホステスのとりことなり九州の山中で変死体となり発見される。こうしてゴールドンの古文書をあずかったために、わたしは事件にまき込まれ、しかも古文書を何者かに持ち去られる。

▼その犯人とおぼしき女性と偶然に出会い尾行したところ

ろ女はアフリカ学術調査隊、西司郎の留守宅に入る。そこで有尾人とナソの女を目撃し、前二つの殺人は女性による犯行ではないかと考える坂崎警部を伴い、翌朝ふみ込んだが無人家となっている。そのころエテルナの常連小林春吾がまたまたホステスたちに拉致される。

▼事件のカギと見られるクロレラ、相馬博士の胃袋から発見されたKB物質について研究者中村教授は、恐しい反世界へ入るカギではないかと推察を下す。また上島氏夫人美美子のまわりにもナソめいたものが漂っている。九州の山奥で下半身ゴリラ男に変ぼうした小林春吾が助けだされたが記憶喪失である。そして西司郎の行方不明という新しい情報のさなかに、秘密裏に中村教授が作りだしたKB物質を飲み、阿麻哲郎は反世界へはいる。

ゴールドンの記憶

⑱

阿麻哲郎
江淵晃夫・絵



反世界

目もはるかな草原に、所々、木立ちがあつて、それをサンサンと降る陽光が、一面、実にのどかな、明るい平和な風景に染めあげていた。それは予想を全く裏切った、素晴らしい理想郷のようであつた。

わたしはこの目でそれを確かめると、すぐに皆の待ちわびる正の世界に、立ちもどるはずであつた。それをしなかつたのは、やはり好奇心と、それから、案に相違して、この世界にさしあたっての危険を感じないからであつた。

わたしは、一つは横着気から、そして少しばかりの物足りない気持ちもあつて、一足二足、草の上を歩いてみたのだつた。だが、奇怪といえは奇怪であつた。こんなに豊かな、暖かい、恵まれた土地に、まるで人の気配がないのである。これは白昼夢のように、不気味であつた。蝶が舞い、かげろうが燃えていた。

男に突如肩をたたかれたとき、白昼夢の奇怪さは頂点に達した。むしろこの時、全く見も知らぬ蜚族のような、あるいは想像もつかない異様な生物か何かであつたなら、いっそ

納得できたかもしれない。ここが反世界ならば、反世界にふさわしい、生物であつてこそふさわしい。それがこんな形で、しかも正の世界で見る、紳士然とした男が、おまけに伊達者らしいハナヒゲさえ生やして、わたしの肩に手をかけ、笑っているのである。

わたしは返すことばもなくたじろいだ。男は初めからわたしに親しみを感じているものの気楽さで、なめらかなアルトンで話しかけた。わたしの驚いたようすなど、いっさい無頓着といったふうに――

「あなたも逃げてきたのですか」

第一声はこうであつた。わたしにはその意味がわからなかつた。それで首をかしげると男は

「逃げてきたのなら、隠れなければなりませんね」

と、先を続けていった。わたしは訳もなく首をタテに振った。それは意味が通じたというより、ことばそのものが、よく通じるといふほどの、軽いうなずきのつもりであつた。男は、それを自分流に、勝手に解釈したもののように、何もかもわかつたというふうになたしの手を取って引く張つた。

この男は、ひどく洗練された物腰と、ひどく

く親切な気さくさを持つていた。どっちかといえば大柄なからだ、一見キャシャに見えて太い首筋、厚い胸幅、広い肩幅とを持つていた。何か頼もしい感じをさえ人に与えた。彼はスマートな足どりで、わたしの手首をにぎったまま歩き出した。細いズボンの線が、スッキリと通つて、細くとがった黒皮のくつを、ダンスのステップを踏むかのように、ごく軽い足取りで踏み出すのであつた。

わたしは奇異な感じに打たれたながらも、思わずズルズルと引く張られていった。彼には感触こそ柔らかだが、ある力強さがあつた。そのまま引く張られ、とある木陰にまでついてゆかされた。

ちようど三十メートルほどもあるうと思われる、ユーカリ様の、丈の高い樹木がかたまつて生えていた。遠く高い梢が先の方で静かに揺れ、その根方のほうに風を送った。それは涼しく、心地がよかった。根方には小さなきれいに澄んだ水たまりがあり、のぞくと底の砂粒が、円く光るように、コロコロとした感じに見えた。

男は、いきなり、その水たまりに、服のまははいつていった。そしてさも気持ちよさそうに、首から上を出し、君もはいつてこないか、というように笑顔で迎えるのであつた。

わたしはしかし、その場を動かず、もっぱらただその場で、見物をするだけであつた。

男は別に、しつこくそれ以上奨めることもせず、ひとりだけで短い水浴を済ませると、さつさと岸に上がってきた。洋服は濡れしよぼれて、シズクがボトボトと垂れたが、彼は平気であつた。そのまま岸边の、ちょうど岩がタナのように、平らになっているところへ仰向けになり、日光に全身をさらすのであつた。

服は驚くほどの速さで乾いて、また元の、さながらプレスしたての服のように、筋目もはつきりと乾き上がってしまった。

やおら男は立ち上がった。そしてわたしを手招きした。

「今のうちに、たらふく、水を飲んでおくんだ。この水はとってもうまいんだから」

と言いながら、自分は前かがみにかがみ込むようにして、その水たまりの水を、直接口をつけるようにして、心ゆくまで飲むのであつた。わたしも、ちょうどどがかわいていた折でもあり、彼の真似をするようにして、水を飲んだ。それは何のにおいもおきもなく、味気なくのど元を流れ落ちた。

人間だって

「君はこの人間なの」

ぼくは男と同じ岩ダナの上に腰をおろすとそう問いかけた。いろんな質問が、いっぱいありすぎて、何から何を聞いてよいやら、わかりかねるのであつた。でも、何を聞いても彼のようない見非のうしろもないうような紳士が、こういう反世界の住人であろうとは思えなかつたので、それをただしたかつた。

「人間だって？」

男はおうむ返しにいつて笑つた。そして、まぶしそうに、空を見上げながら、

「人間ってものは、何ですか、話にだけはきいたことがある。君は人間の存在を信じるんですか」

と逆に聞き返すように、こちらを見た。高い格好のいいハナの両翼に、笑うとしわがよつた。

「ぼくに、人間を信じさせようとしてもダメだ。だからこうして、ぼくは一匹狼のようにひとりで暮らしているんだ。ぼくには宗教なんかないんでね」

「何を言ってるんだ」

ぼくは訳がわからぬものだから、こちらの頭が困乱したのではないかと思つたほどだつた。が、あえて切り返すようにたずねた。

「ぼくも人間、君も人間——じゃないか。見

ればわかるとおりだろ。ぼくが聞きたいのはそんなことじゃなく。君は、もともとこの世界の住人なのか、どうかということなんだ」

「君のほうこそおかしいことをいうね」

男はいぶかしげに顔を曇らせて言つた。

「ぼくらが人間だって？ とんでもないことを言うんだね。人間は、遠い天上界に存在すると信じる者も多いようだが、そんなおとぎ話みたいな宗教論はやめにして、君は逃げだしてきたんだろ」

男はさつきと同じようなことを聞いた。

「だったら、隠れなきゃならんだろ」

男はまた同じようなことを言つて、目は注意深く水たまりの中のものをのぞきこんだ。

彼はさつきから水の中のものに気を奪われているようすであつた。

「ちよつと待ってくれ。今ちよつとごちそうが泳いでいるところで、君にもとつてあげるからな」

男の視線のかたに、ゆっくりとした動作で、ガマが浮かんでいた。水の上に、頭上部を出して、眠っているように目をとじていた。まさか、とは思つた。しかし次の瞬間、男は手を延ばして、ものすごいすばやさでそのガマをつかんだ。

ガマは、片手にあまる大物だった。黒かっ色の粒々を、からだ一面によろっているといったふうの、堂々たるかっぶくに見えた。ガマも一見かんまんに見えて、いざとなるとすばやいものだ。敏しように男の手の中であがき回って、すり抜けようとしたが、男の力のほうが強かった。

「よし、捕まえた。それじゃ今からご案内しよう。何とかかくまってやるからな」

こちらのいろんな疑問を、万事呑みこんだといったふうに、男は心得顔に胸を張り、肩を振って歩き出した。わたしは、まるで磁石に引かれるように、男の後に従った。

かなり大きな木であった。筋くれだった根が四方に張っていた。その根方に穴があいていて、男はその穴に頭からもぐっていった。その後から続いていったところ、穴は次第に奥のほうで下降し、広がった。行き止まりが八畳敷ほどの広さであろうか、全く暗闇であるべきはずのところ、非常にはつきりと見えるのには驚いた。

どこからか明りがさしているというのではなかった。おかしなことに、暗闇でもまるで動物のように、物を見ることができる能力をわたし自身が持ったためであった。

「ただ今帰りました」

男は奥のほうに向かって声をかけた。すると、それで行止まりかと思えた八畳のさらに奥から、こたえる気配があつて、ほどなく、現われたのは、驚いたことに、一頭の白ブタであった。まるまると太り、つやつやしい白い皮膚を持っていた。それが何やらシナをつくるように、身をくねらせながら、近づいてきた。

「今、この者が逃げてきたところで、できればかくまってやろうと、連れてきました」
ブタに向かって男は丁寧にものを言った。ブタは鼻をならしながら、おうようにうなずいた。

白ブタ

「ちゃんと、丁寧にこあいさつ申し上げるんだ」

あまりのことに、ぼう然とたたずんだままでいたわたしの様子に、男は礼儀を知らぬ奴だとばかり、手をひっぱり頭を押しつけた。押しつけられるまま、わたしはとにかく上体をかがめた。と、不意に、とっぴようしもない、金属的な、かん高い笑い声が頭上に落ちてきた。

「ホホホ……」

それはかの白ブタのあげる笑いであった。「まあ、心配しなくても、わたしはそれほど身分にこだわるブタじゃないので、気楽に」

男が横から口を添えていった。
「この方は、ブタの身でもって、いやしいほくを妻にめとられたんだ。全くもったいない話で、こんな感激はない。そのため、この方とほくは、秩序を乱したカドで、ここまで逃げて、だれの目にも触れぬところで生活をしているんだ。ほくらは、とにかく、愛に殉じたってことでね」

男は身をかがめて、ブタの股間に口づけしこちらを見て笑顔をつくった。

ブタは目を細め、いかにも上機嫌そうに、わたしのほうにもシナを作ってみせ、それから股間を広げた。

「あいさつをなさい」

男は強引にわたしの頭をつかまえて、押しつけるので、やはり男同様、ブタの股間にくちづけさせられる羽目になった。

ともかく男は、わたしを自分らの同類だと思っているらしいことが、おぼろげにわかってきた。そうした、同類の住むところがどこか遠いところにあつて、そこでは身分関係の序列が厳しいらしく、ブタは男より、数等上の階級に属する生物であることも、どうやら

理解されてきた。

人間であると思った男は、人間ではなかった。人間と寸分たがわぬ顔形をしていながらおまけにエロール・フリンばりの意気な口ひげさえはやしておりながら、人間ではないということであつた。人間ではなく、ほとんど最下等の生物に属するといふのであつた。

人間とは、遠い神話じみた世界の中でわずかに生きている。信仰上の概念であつた。遠い天上界に人間が存在するといふ。それを信じることは、宗教上の問題のような、一つの奇蹟に類することであつた。

白ブタはその前世は人間であつたといふ。

しかも、人間の中の女性であつたといふ。それをそのまま信じられはしなかつたが、白ブタにはほこりがあつた。わたしは人間の女性の生まれかわりなのよ、——しかし、そんなことを公に言ひふらすことにははばかりがあつた。特に女性という呼び名を、みだりに口に出すことは、大変な冒瀆を意味した。

この世界の成り立ちをよく知らないわたしにとっては、女性という呼び名がなぜ大変な冒瀆を意味するのか、そのところが最初のみこめなかつたが、そのうちそれがわかるようになるのであつた。

岩室の周囲に添って、浅い溝があつた。その溝まで白ブタは歩いていって用を足した。

溝には軟泥状の糞便がたまつて、ウシがわいていた。白ブタの後からついていった男は先ほど捕えたところの、あのガマを、まだ掌中に持っていて、それをその糞便にまぶし、五、六匹のウシがそれと共にまじつて付いたところで、ガマの胸中を二つに割り、一つをいきなりムシヤムシヤ食べ始め、一つのほうをわたしのほうに差し出して言った。

「遠慮なしに食べなさい」

これにはさすがにわたしはあきれるというより手が出なかつた。押しつけられても、それだけは食べる気がしなかつた。

男はニヤニヤ笑いながら

「こんなうまいものはないのにな。それすらノドを通らんというのでは、よっぽど逃げてきたのがこわいとみえるな」

こわいも何も、ヘドが出そうであつた。

「心配しなくとも、ここは世界の秘境だ。ここまで追っかけてこられるおそれはない、安心しなよ」

男はそういつてわたしの肩をたたいた。白ブタも始終目を細め、ニコニコしながらわたしたちの様子を見守っていた。思いなしか、男よりは数等上の、高等生物と言われるだけ

あつて、白ブタの気品ある面差しには、あの見事にそこだけが赤く濡れたように光っている鼻の頭とか、その下に開いている湾曲した幽美な口の線といい、何事か艶ながら、押し出しに堂々としたところがあつた。こうして見ていると、エロール・フリンまがいの伊達男氏も、かなり品格において白ブタに劣るところがあるようであつた。

聖血

逃げてきたのだらう、とか、追っかけてこられるおそれはない、とか、と、先ほどから口走る男のことばが、気になって仕方がなかつた。いったい何から逃げて、何から追つかけられるというのか、遠いはるかな遠雷が、不意に近づいて耳もとで大きな音をたてたように、わたしは男の胸倉をつかまなばかりにその音におびえてききたてた。

「ほくは何から逃げてきたの。何がほくを追っかけてくるの、教えてくれないか。実は、ほくは今自分の置かれていた状態が何にもわからないんだ」

その語調の真剣さをやっとならしたらしい男のひとみには、それでも納得しがたい、いぶかしげな不審の色が残っていた。

「君は今さら何を言い出したんだ。まさか恐怖のために、いっさいの記憶をなくしたのでもあるまいが——でも、どうやら、君の記憶喪失は本物らしい。わかった、君の立場というやつを話してあげよう」

男は伊達者らしく身づくろいをした。口辺にへばりついていたウジの一匹を、指でつまんで口中に入れ、ゴクリとそのままのみこむと、しがみつくように彼の胸元をにぎりしめていたわたしの手指をも振り払い、姿勢を正した。

「今現在、われわれが置かれてある位置は、この世界のはずれで、あまりだれもが寄りつかない秘境さ。だから、よもやここまで追ってはこないだろうと思うけど、といつてもそれには絶対の保証はないさ。もしその気にさえなれば、来るにはすぐこれるものね。ちょうどピクニック気分で、格好な遊び場所となるとところだものね。彼女らの、要するに気まぐれ次第で、われわれの運命は、一変するよ。しかし、まずそんな心配はない。ピクニックだなんて、子どもじみた遊びは、今の彼女らには、興味が無いことだろうからね」

それでも、まだ男の言っている、ことばの意味がわからなかった。彼は、そのことを察したのか、察しがつかないのか、ともかく続

けていった。

「びくつくことはないよ。だれもここには来やしないさ。当分落ちつくんだね。同類の中で、同類的生活をするより、こうして勝手に手前好みの気ままな生活をするほうが、ずっと幸福なんだからね。中には何か妙に反抗心を燃やして、同類の開放とか何とか叫んで、次々に捕まっちゃ極刑にされたりしているがね、ぼくはそんな運動には全然無関心だね。そりゃ、こうして階級制度を無視して、恋に生きたんだから、その点じゃ同工異曲の異端者かもしれないがね。でも、それを大胆だ、偉いというんなら、そういう讃辞はこの方に呈すべきが至当だろうよ」

白ブタは、太い胴体に似ず、糸のように細い尻尾をクルクルひねりながら、いかにもうれしそうに男のいうことを聞いていた。

やがてわたしたちは、再び外に出た。白ブタのように、階級が男とは違っていくらか高い方には、そうそう物珍しがって、外を出歩いたりする趣味はないようで、ゆっくりとネグラの中にくつろいでいるほうが好みにあうので、外へ出たのは、男と、わたしのふたりだけだった。

先ほど男とめぐりあった、あの水のほとり

にさまよい出た。水は前と変わらず、澄んできれいであった。見渡すと、あの時のガマの同類らしき生き物は、一匹も見当たらなかった。なぜともしらずホッとした。

われわれが先ほどの岩の上に腰をおろしたとき、わたしはかねての疑問を男にぶつけてみた。

「見たところ、あなたはりっぱな顔形をしていて、どう見ても高等な生物としか思えないんだけど、それが話では、最下等の生物だということ、どうもわからないのですが——」

「あんたはおかしなことばかりいうんだね」男は服のチリを払い、ヒゲをなでるように手で形を整えながら、こちらにからだを向けた。

「今さらわからんこともないでしょう。わたしがりっぱな顔形をしているんだって。そりゃ皮肉ですか。つまらん当てこすりはやめてもらいたい。わたしなんか、どうあがいたってダメなんだから。あの白ブタ氏のりっぱさに比べると、段違いだからね。はつきり種の優劣が歴然と出ているんだから。わたしは、普通以上に、意識過剰なほうで、そのため、劣等感にずいぶん苦しんだものでね」

「この世界で、最高の生物というのは、いったいどんな種族をいうんだね」



めんどくさいことは切り捨て、この大事な一点に質問をしほってただしてみた。

「そりや、君。聖血をお出しになる種族の方たちだ。そんなことさえ、そう気やすく、口に出すべきことじゃないがね」

一瞬、男は困惑した表情になった。そしてその時、不意に男には、突然の驚きに打たれた者のような、畏怖のまなざしで、「ああ」と、大きなため息のような、悲鳴のような声をあげながら、立ち上がり、わたしのソデ口を強く引っ張った。

殺りく者

空は相変わらず、うららかに晴れ、平和な暖かい日差しが、見渡す野の一面に輝いていた。わたしは、その野の一面を、男の指をあげてさす一面を見た。そこには、ほがらかな女性の歌声が、一団のコーラスとなって、わくように妙なる旋律をかなで、コーラスの主である四、五人の、若い女性が、それぞれ気楽なピクニックスタイルで、さざめき、かつ歌い、歩いてくるところであった。

わたしも思わず、その一団に目を止めたとき、男と同様に声を発した。その一団の女性たちが、赤や黄の色とりどりの美しいスポー



ツ着を着けて、さながら動く花園のように目に楽しい、といった気楽なことがらではなかった。よく目をこらすと、一団の後に何やら大きな荷を負った、ちょうどサルのような者たちが、幾頭か従っているのを見たからであった。そのサルたちに見覚えがあった。それこそ、あのサレアの舞台以来おなじみの、ゴリラ男、つまり有尾人なのを見てとったからであった。

その驚きから、あげたわたしの叫びとは別に、男は、女性の出現そのものに驚いたのであった。

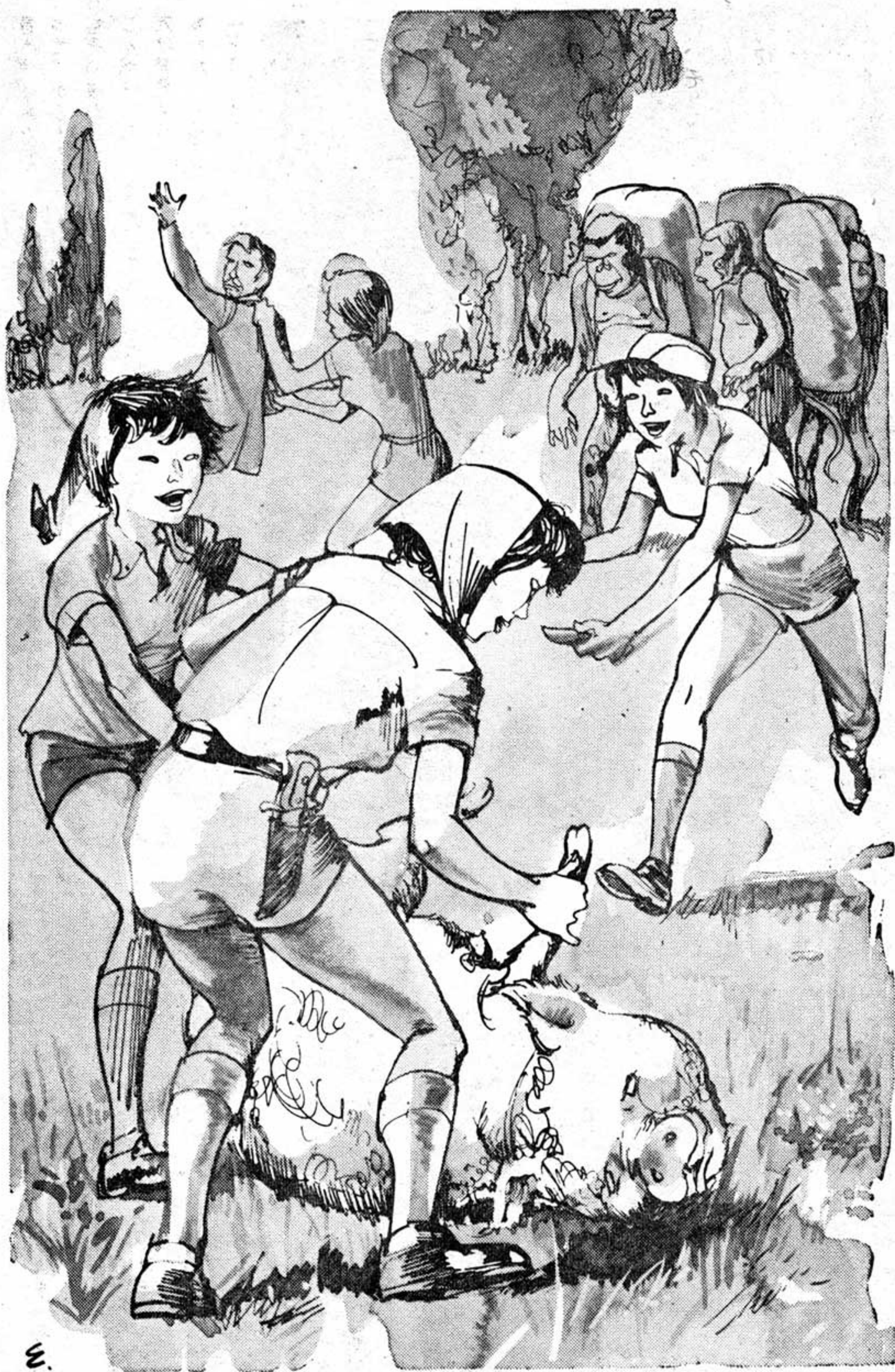
「ああ、こちらにやってくるようだ。とんでもないことだ。ほくらは狩り出されて、採集されて、とんでもないことになってしまうのだ」

「何がそんなにこわいんだ。彼女らは女性じゃないか」

ゴリラ男にならともかく、女性そのものにおびえあがってしまった男の様子が、あまりにこっけいでいぶかしかったので、わたしは男の腰をどやしつけるようにして、景気づけに言ってみた。

「何を言うんだ。あれこそ最高の、聖血をお出しになる方たちではないか——」

男は口をつぐんだきり、もう一言もモノを



2.

言うすべもなかった。いっさんにその場を走って、かの木の根の穴に逃げ帰った。わたしもその後から走って、同じく穴の中にもぐりこんだ。しかしもうすべては手遅れだった。穴は発見され、かの白ブタといっしょに、彼もわたしも捕えられた。

「どうしましょう」

女性のひとりが言った。

「ブタはうまそうだけど——」

とひとりが言った。

「その、男ふたりは不潔だわ。殺しましうよ」

それは、ピクニックに来て、野の草や、昆虫を興味本位に採集する、子どもたちのような、はしゃぎきった調子があった。

それから先のことは、全く目まぐるしく何がどうなったのか覚えていない。白ブタが屠殺され、男が引っ立てられたのを見たことだけは、それでもその場面、その場面の幻燈写真のように覚えている。その全体の流れはしかし切れ切れでつながってこない。

女性たちが、恐るべき殺りく者のグループであったとは、それでも今もって信じられない。だが、彼女らは、かわいそうな白ブタをかの優美で優しかった白ブタを、グループで

囲んで、おう殺したのであった。

鋭い悲鳴があがった。血がしぶきのように飛んだ。白ブタは四人の女性に押えつけられていた。二人が上に馬乗りになたがり、その一人は後向きに、頭の上に尻をつけていた。そうして一人が、その耳をまずナイフでそいで、鼻の頭にキリを突き立てた。白ブタの悲鳴が、彼女らの気分に活気を与えるのであった。

男は別に、ひとりの女性によって組み伏せられていた。たわいもなく、りっぱなヒゲをたてた彼は、女の腰の下で手足をばたつかせていたが、ちょうど子どもに捕まったイナゴのように、みじめなものであった。

「ここまで遊びにきたかいがあったわ。野性の動物がブタと同棲しているなんて、みんな信じないわね」

「証拠品として、生捕ったんだから、驚くわね」

そうした女たちの会話がまだ耳に残っている。女たちは、ブタと男が同棲するに至ったいきさつを知らないらしかった。

嬌声と、かん高いほがらかな笑い声が、このピクニックの女性のグループから、絶えずわき上がった。その笑いの中で、生きながら股や胸の肉をフォークやナイフで刻まれなが

ら、白ブタは悲痛と悲鳴とうめきを、あげつづけるのであった。

白昼の惨劇とでもいおうか。わたしはようやく男のいう、恐怖の情が、女性を恐れる動物の気持ち、キュウ然としてわいてくるのを感じた。女たちが、珍しい野性の動物として、わたしをも捕まえようとして近づいていた。

わたしは夢中になって、ポケットの中のK B物質を取り出して口に含んだ。一瞬の間だった。

わたしの服の端に、袖口に、女の手が触れたのを意識している。それまでだった。わたしは不意に虚空にほうり投げられ、落下した。

猛烈なスピード感を感じた。

ふっと気付いたとき、わたしはみんなのなつかしい顔々が、気づかわしげにこちらをのぞきこんでいるのを見た。中村教授、坂崎警部、箕輪祥子——頭をわずかにめぐらしてそこに箕輪祥子の姿を認めたとき、わたしは恐怖するように叫んだ。

「ああ、あなたは、聖血を出される方です
ね」

(つづく)



読

者

コ

i

ナ

1



▼拝啓、益々御清栄の段、心より御慶び申しあげます。御営業上、何かと支障多き昨今、その御心労の程、拝察致しますと共に、深く感謝の意を捧げる次第です。小生、十年この方、御誌を愛読させて頂いております。一市民として静かに生活しております故、今迄にも幾度か御誌に投稿、御誌を通じての作品の交換等、同志の方々に呼びかけようと思ったこともありましたが、ついこの頃になっておりました、御誌編集部の方々に目標とされておりますロダンの苦悩にみちたゆれ動く光りと影の人間の世界。健康な官能のよろこびをと、苦悶されている貴誌。心理と表現の静かな調和の内に

美の極致をとらえんと努力を重ねられていた御誌に、深い敬意を表して止みません。一年程前でしたか、新宿の内外ミュージックホールに、編集長自らの企画と脚本によるS劇を数回見に行かせて頂いたこともあり、明子さんとか、和子さんの名演技に接したことを、はつきりと記憶しております。あの劇場も、その後一二度行ってみましたが月並みのものを変じ、残念に思っております。今後とも編集部御一同様の御健勝を祈って止みません。(東京・織田靖)

★私は落合龍二先生がデビューされて以来の大ファンです。毎号「裏窓」の誌面を飾る一口カッターは、各ページにうるおいをもたせ、貴誌の一貫したムードを最も出し出しています。とくに最近号におけるペンのさえはすばらしく、版を重ねるごとに繊細さが増してくるのは、ファンとして頼もしい限りです。先生の作品にはピチピチした、はちきれるような若さが感じられます。七月号「あるレスピアニスム」のような作品を、これからもどしどし発表されることを願ってやみません。このところ、鬼頭暁先生の作品が少いのはどうしてでしょう。ときには「女宇宙飛行士の訓練室」のようなダイナミックなものをお願いします。写真では「黒い妖精」が最近号中の白眉。モデル、レイアウトとも申し分なく、楽しく

★このらの投稿はハガキで結構ですからご自由にお書きください。

★今月掲載しました方には、10月号および、S写真をお送りします。誌上匿名は自由ですが、住所、氏名はお書きください。(読者コーナー係)

拝見しました。その他外国の絵物語などを出来るだけ多くとり入れていただければ幸いです。(大阪市 M・N生)

★貴社のご発展、およろこび申し上げます。「裏窓」七月号拝見しました。今までも何回か貴誌を拝見しているM傾向の一人ですが、かねて阿麻先生のお作品にとっても興味を覚え、いつも胸を躍らせながら読ませていただいています。連載中の「ゴルドンの記憶」七月号の分はともすばらしく思いました。六月号より前のを読んでいないのが残念ですが……。『ゴルドンの記憶』に対する感想や、阿麻先生に対してのお願いなど述べさせていただくことをお許し下さい。七月号では何としても、芙美子がゴリラ男に与える「窒息の刑」の場合の描写および江洲先生のさし絵が特にすばらしく、何度も何度もくり返し読みまた次々と場面を想像しながら絵を拝見しています。小生元来Mですが、女性による顔面騎乗を受けること及び女性の尿に深い興味を抱いております。文面を拝見しながら、自分がゴリラ男の立ち場におきかえます。抵抗する暇もなく仰向けに押し倒

され、あつと思う間に芙美子のお尻がどつしりと顔の上にのせられる。鼻も口も芙美子のお尻の下にピッタリとはさみこまれ息も出来ません。何とか首をねじまげてこの苦痛から逃がれようとしませんが、巨大な芙美子のお尻は盤石の重みをもつてのしかかりびくともしない。反対に私がお尻に力を入れ、一層はげしく重圧を加えてくるのです。いよいよ限界にきた時、やっとお尻が浮かされます。本当に救われたというのはこんな気持ちでしょうか。やっと思いで私は息を吸い込みます。ああその時、私の鼻の奥までシーンとしみとおとる強烈な臭気、芙美子の、何とも言えぬ強い臭気、私は一瞬ぼうっと気も遠くなりかけるでしょう。こうしたお仕置は芙美子の気のむくままに何回も行なわれます。私はこんな空想にふけりながら、何度も何度も読み返します。阿麻先生のお作品ではこの前の連載もの「畜獣デリムソン」もまたすばらしい内容でした。地球上に落ちてきたイブシロンとかいう小動物が、便器の中に仰向けに寝かされ、ルミ子の裂しい尿をま

ともに顔に浴びせられる場面や生き返らせるために、何人もの女性が入れ代り立ち代り尿をじかに浴びせかける光景など、全く息をのむ思い。阿麻先生、どうか今後このようなすばらしい描写を書いて下さるよう、心からお願ひ申し上げます。最後に江洲先生のさし絵についてのお願い。まことに身勝手な望みとは思いますが、七月号二〇七ページのさし絵、もしあれがゴリラ男の顔の上にお尻がのせられ、窒息の刑を執行中の絵だったら、一層実感あふれるものではなかったかと思われまゝ。今後事情が許せば、このような絵を描いていただけることを夢みつつ、長々と思ひのまゝを述べさせていたただいた、迷文乱筆をとめます。

(京都市 S・T)

★拝啓飯田編集長様、創刊号以来の読者である私ですが、最近京阪神一帯で「裏窓」を入手するのに甚だしく苦勞しております。にもかかわらず、直接購読会員に踏み切れないのは、いづつかかつて編集長、あなたの責任であります。あなたは「地獄の乳房」をご記憶ですか？「怪異愛靈教」しかり。まさか

忘れたとは申されますまい。最近号では「クライマックス場面集」など好評のようですが、これは邪道です。そのページに、なぜあなたは作品を発表されようとなさらないのですか。偉くなつて急がしくて、などとは言わせませんぞ。試みに四時間の睡眠を二時間へらしめても、作品を発表してごらんない。その勞は報われます。なぜならS趣味である私が、作品のおもしろさ故に「ゴルドンの記憶」を欠かさず読んでいるという事実が証明します。つまり、クライマックスに到達する以前のストーリーのおもしろさこそ、小説の生命であるからです。あと半年黙って成り行きを見ています。それでも尚、あなたの作品が拝めない時こそ、十年間の交際にピリオドを打つ、夢うたがうことなかれ。それと、円城寺達氏の作品も是非欲しい。一年間十二冊の「裏窓」全部が私の好みにあう筈のないのは先刻承知、内一冊に期待して毎月購入するそんな読者もあるのです。盲言多謝。(大阪市 H・H生)

★「裏窓」五月号を見て思わず万才と叫び、六月号を見て狂気し、七月号を見て何んとも言えない幸福感到に充ちた気持ちになりました。私をこのような気持ちにしてくれたのは、沖涉二先生の復活でした。やはり最高のものではすね。女のはじらいとよろこびを、このように美しく見事に描ける人は他にいません。できることなら連続ものを思う存分に描いてもらいたいものです。ただし、現代ものに限りません。それから沖涉二先生、山田彬弘先生、豊田みのる先生、落合龍二先生等を中心とした絵と絵物語だけの特集号がほしいものです。どうか一考下さい。この特集号はグラフィ誌(A4)くらいの大型のものを望みます。さて、七月号を眺めてみて一番よかったのは「指名された女」でした。これは久しぶりに私のS的欲求を満足させてくれ、文章も実にすばらしかった上に、山田彬弘先生の絵が一段と迫力のあるものにしてくれました。ただ残念なのは文章と絵の内容が少しばかり違つていたことです。が、どこであるかは言う必要はないでしょう。できることならば、毎月少なくとも二つは、このような本格的なS小説が欲しいものと思ひます。

(福岡・扶美)

耽美芸術グラフ

第一集

定価

千円

送料とも

ついに出了！ SM芸術の真髓！
グラビア48ページに選りぬきのS写真
責め絵が満載！

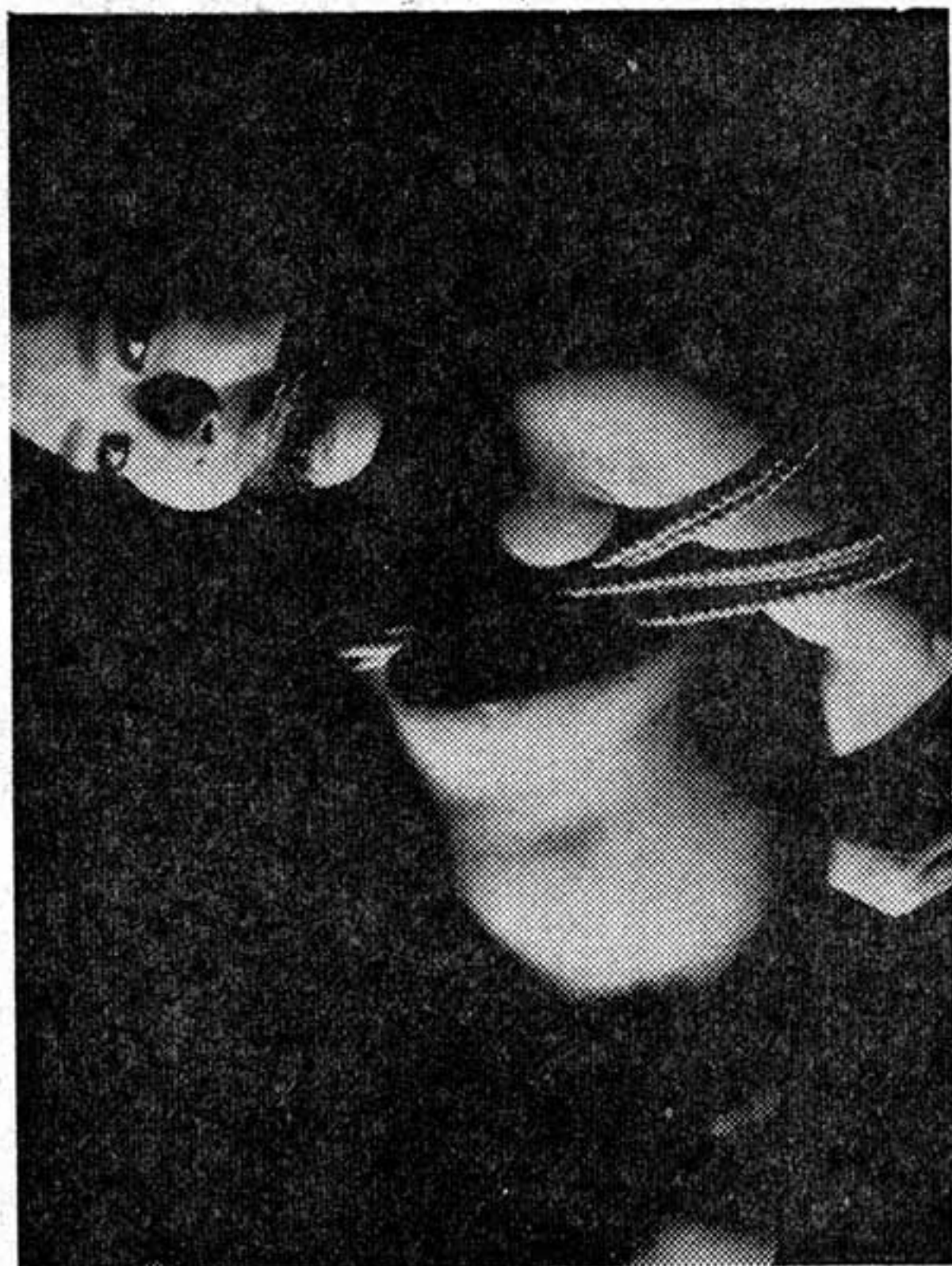
内容

■写真集■

滝の女・石の部屋
密室・絶望の風景
金井行雄作品集・
さるぐつわ・縄目
凝固

■絵画集■

落合竜二凄艶画集
沖涉二特選傑作展
中川彩子・女奴隷の檻
中川彩子・吊り蔵
鬼頭暁時代妖美画集
羽仁京志傑作選



▼ながいあいだお待たせ致しました。洗練されたセンスと伝統を誇る裏窓が、そのスタッフの総力をあげて、ここに、S写真と責め絵を豊富に掲載したグラフを発行致します。
▼このような写真絵画集の発行は、数年前より愛読者のみなさまからご要望を頂いておりましたが、このたび、ようやく刊行に至った次第であります。

▼定価は、送料とも一部千円です。

▼書店では発売いたしません。

▼厳重に密封して、個人名でお送りいたします。安心しておまかせください。

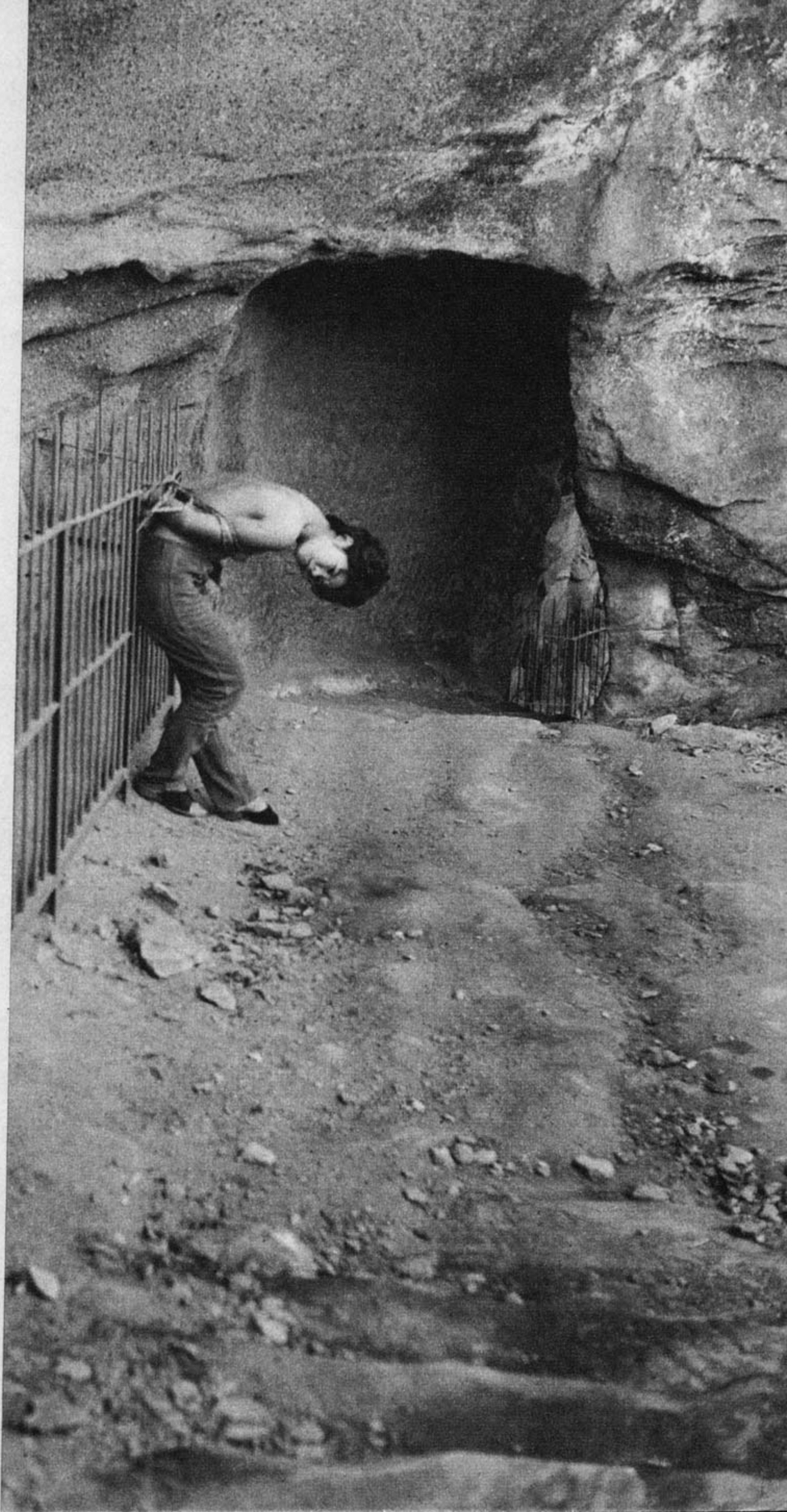
▼お申しこみには、住所とお名前のほか、かならず年令を明記してください。▼二十五才未満の方には、お売り致しません。未青年者は、絶対にお申しこみにならないで下さい。
▼お申しこみは――

東京都中野区松が丘2の21

久保方 藤見 郁

柵のある道

カメラ・吉田 久
モデル・小笠原純子



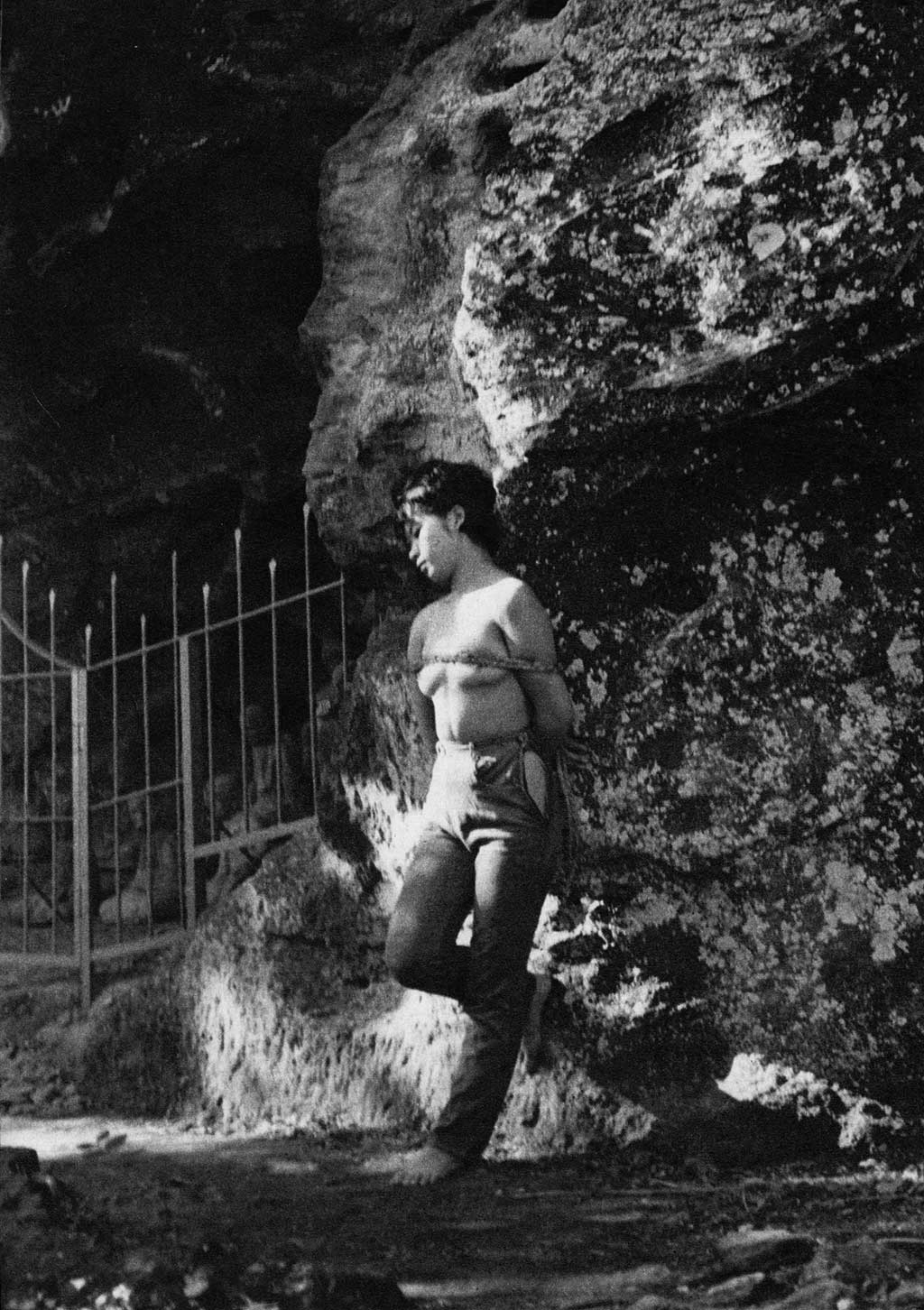






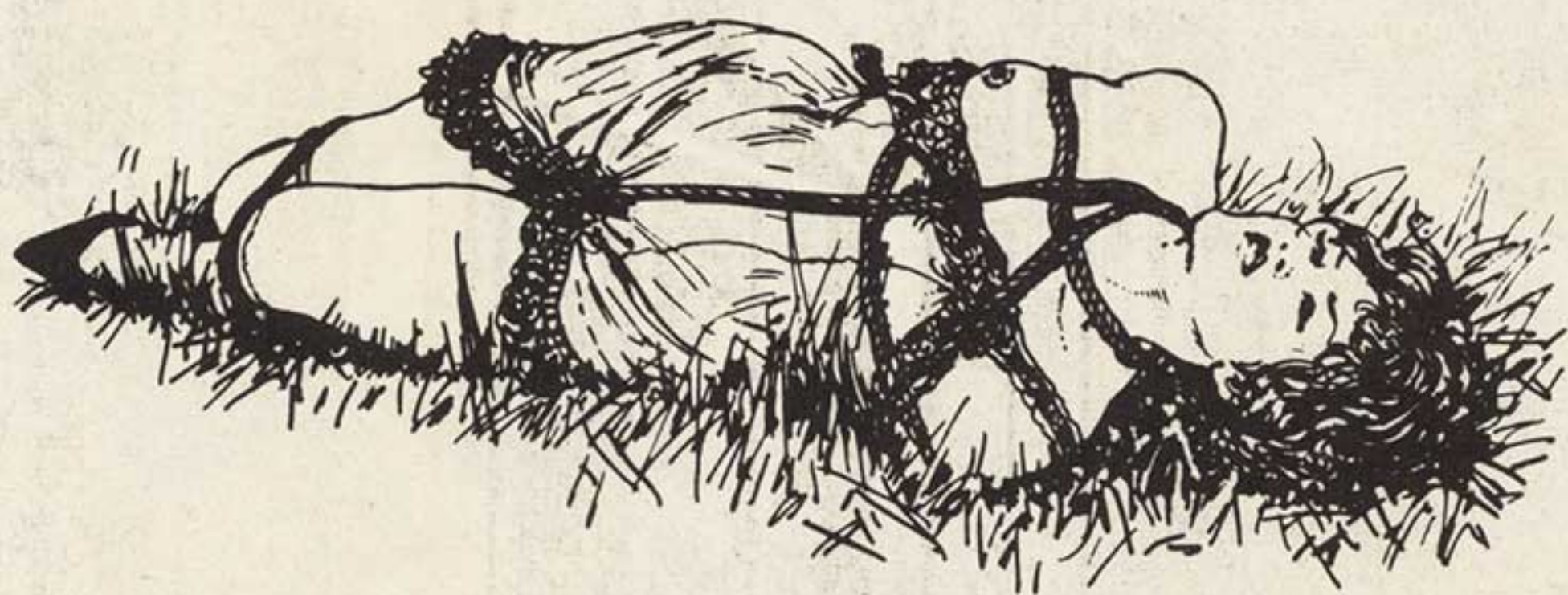


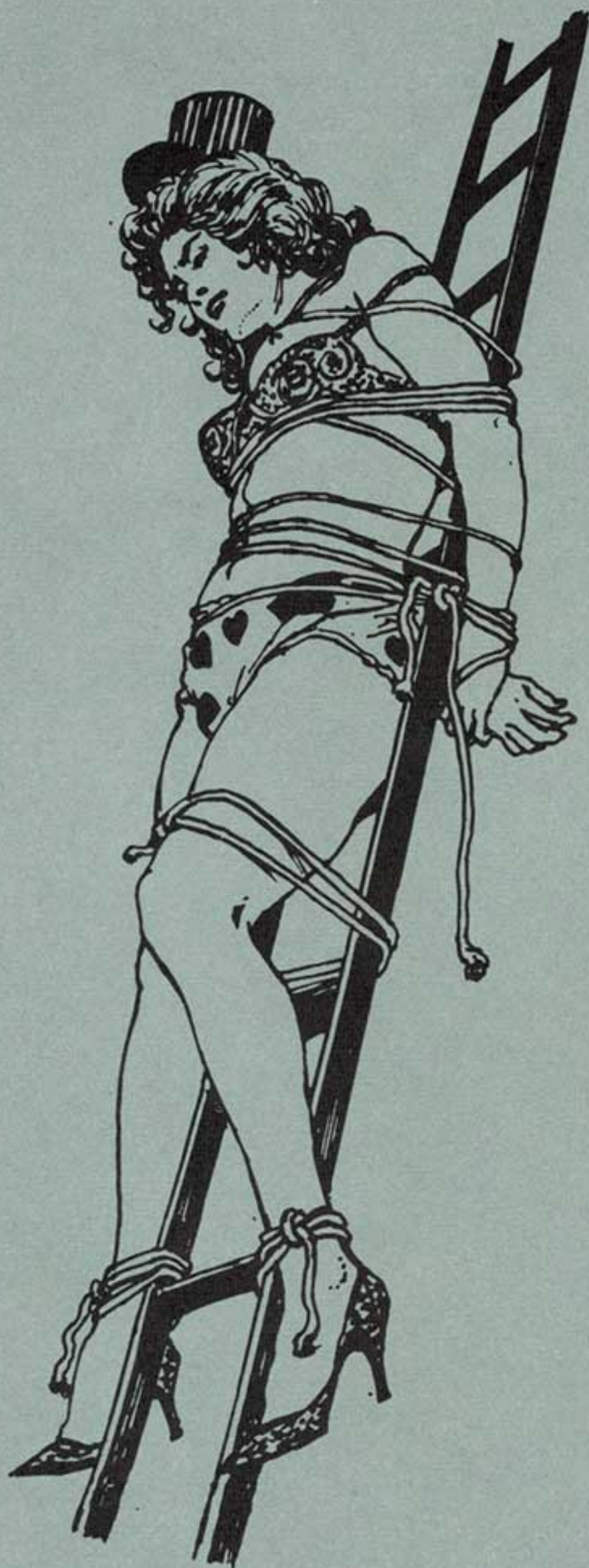


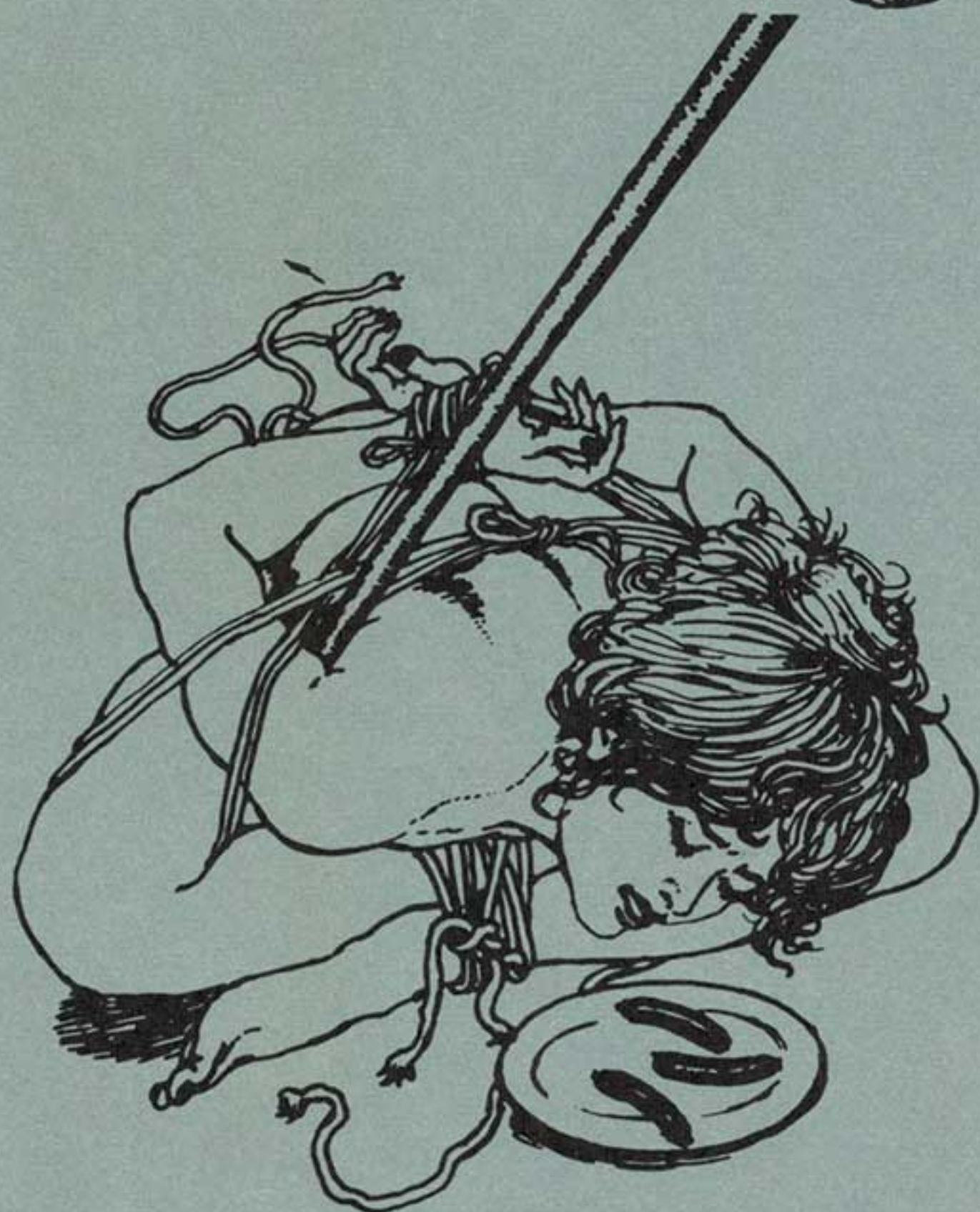




沖涉二・妖美画傑作展







●裸電球



裏窓・既刊号総目次

★既刊号をお買い洩らしになった愛読者の方々の
為にこの機会にバックナンバーをお揃えになる
ことをおすすめします。

★三冊以上御注文の際は送料は不要です。

★二冊以下の御注文は一冊につき送料12円です。

★御送金は振替か現金書留が最も確実です。

東京都中野区松が丘2丁目21番振替東京55408あまとりあ社宛

39年(八月号)三〇〇円

◎絵物語

ある幸福な
ロバの物語
文・馬場 弘二
絵・江洲 晃夫

女衞部屋

絵・羽仁 京志

華麗なる行進

絵・鬼頭 暁

悲鳴と音楽

絵・沖 涉二

フォト・夏のたそがれ

猪島 昌也

未封切り映画のなから

編集部・編

男が女になるまで

編集部・編

★グラビア・夜の踊り

吉田 久

美貌の檻

吉田 久

コルセットの微笑

北米・フェニクス

貴婦人の散歩

編集部・編

月ノ輪群盗伝(小日向一夢・絵)

潮 一樹

パノラマ島秘譚・4

北園透一朗

小品傑作集

絵・沖 涉二

高嶺の花

大垣 昌

絵物語 女体運搬人

文・祖父江 新
絵・落合 竜二

海底王国の女囚(山田彬弘・絵)

南郷 京助

体当たりマゾヒズム論・26

水尾 究

奢れる女神への祈り・6

森下 高茂

クライマックス場面集

駒井たまき・他

ゴルドンの記憶・17(江洲晃夫絵)阿麻哲郎

39年(七月号)三〇〇円

◎絵物語

不幸な娘の
ひとりごと
文・下須 畜男
絵・秋吉 恋

フォト・黒い妖精

猪島 昌也

海のあらくれ

絵・羽仁 京志

地下室二景

絵・沖 涉二

あるレスビアニズム

絵・落合 竜二

★グラビア・鎧と女

吉田 久

フォト作品集

藤沢 修

SとMのうたげ

フェニクス商会

フォト・黒い靴下

北 好夫

アメリカの公刊誌ご紹介

編集部・編

傲慢と屈従

フェニクス商会

指名された女(山田彬弘・絵)

北園透一朗

パノラマ島秘譚・2

北園透一朗

絵物語

文・祖父江 新
絵・落合 竜二

セント・レディ学院

絵・沖 涉二

小品傑作展

絵・鬼頭 暁

南北戦争画集

絵・松尾 悦三

習作小品集

老若抄(東桂史・絵)

かびや・かずひこ

奢れる女神への祈り・5

森本 愛造

ファンタジア・マゾヒスティカ・八巻

久慈たかね・他

クライマックス場面集

久慈たかね・他

ゴルドンの記憶・16(江洲晃夫絵)阿麻哲郎

39年(六月号)三〇〇円

◎オフセットページ

文・祖父江 新
絵・落合 竜二

絵物語・コンドルの楽園

吉田 久

密室の砂丘(フォト)

絵・沖 涉二

ある夜のバーで

フェニクス

ドイツ民族博物館資料より

藤沢 修

フォト作品集

洋画の中のアップ・シーン集

スチルより

★グラビア・犬の絵(フォト)

吉田 久

スクリーン・クライマックス集

編集部・編

マゾヒスティック・スチル集

編集部・編

傑作フォト集

猪島 昌也

アメリカ新着フォト集

北米・フェニクス

パノラマ島秘譚・2

北園透一朗

戦後の妖美な眺め(山田彬弘・絵)

間野 嶺

○小品傑作展

絵・沖 涉二

曲切り念者(東桂史・絵)

かびや・かずひこ

腹切り残酷史譚(鬼頭暁・絵)

夏川浩一郎

濡れ花(落合竜二・絵)

松山 省一

ゴルドンの記憶・15

阿麻 哲郎

○読者投稿・クライマックス場面集

赤い月の夜(秋吉恋・絵)

赤木 恵介

女すりお蝶(古正英生・絵)

五所 章

暗黒街の掟(豊田みのる・絵)

東島かおる

腐れ土蔵(小日向一夢・絵)

義川 源

39年(五月号)三〇〇円

◎オフセット

文・矢部 定三
絵・岩田 吉夫

和装美礼讃

吉田 久

◎沈思のひと(フォト)

鬼頭 暁

◎時代妖艶画選

古正 英生

◎姫君受難・三景

古正 英生

◎アメリカの公刊誌・ご紹介

○ジャングルの襲撃○悪魔教の女

○馬上の麗姿○密林の女奴隷

吉田 久

★グラビア・山参道

中島 喜美

★乳房を飾る男(絵物語)

文・パール・島

★時代妖艶画選

北園透一朗

パノラマ島秘譚・1

安東 泉

裏窓文芸評論

読者投稿・特集

狼火の部屋(沖涉二・絵)

多賀 満

お雪地獄(古正英生・絵)

丸亀 忠史

本郷大五郎の不満(山田彬弘・絵)

三津井弓雄

海賊船の女たち(豊田みのる・絵)

北村仙也

白い鬼(秋吉恋・絵)

三枝喜久治

竜四郎妖術(東桂史・絵)

潮 一樹

蛞(なめくじ)

村山 省一

黄金草の宿(落合竜二・絵)

豊中 夢夫

ゴルドンの記憶(江洲晃夫・絵)

阿麻 哲郎

○小品傑作展

沖涉二・落合竜二

39年(四月号) 二五〇円

◎時代絵物語
さみだれの死……………文・庄内 裕司
〔絵・小日向一夢〕

◎妖美画個展……………山田 彬弘

◎時代妖艶画選……………鬼頭 晩

◎和装の女性美・四態……………都築 峰子

◎フォト(玩具・訓練・協演)……………金井 行雄

◎グラビア・天守閣……………吉田 久

★スクリーン・クライマックスシーン集①②

★フォト集(モデル・榛名リエ)……………藤沢 修

続・スクリーンに躍る……………藤見 郁

ロマンと幻想……………藤見 郁

アラビアの城・10(鬼頭晩・絵)……………北園透一郎

翻られた稚児(東桂史・絵)……………かびや・かずひこ

四作家競作同一題小説……………田城寺 達

美女と毒薬……………志村清太郎

井村 錠

松山 省一

葬送行進曲(都築峰子・絵)……………八巻 令

背骨の曲った娘たち・2……………岐阜須三夫

地下室の檻(山田彬弘・絵)……………杉野平太郎

白蛙教のいけにえ(古正英生・絵)……………野呂 久

三人のモデル(秋吉山・絵)……………赤木 恵介

お島とお紋(豊田みのる・絵)……………九谷竜太郎

ある異色映画と異色スライド……………藤見 郁

39年(三月号) 二五〇円

幻想絵物語・奇怪な動物園……………文・志村 基治
〔絵・秋吉 密〕

絵物語……………文・祖父江 新

ある晴れた日の公園で……………絵・落合 竜二

◎妖艶女態四景(画集)……………鬼頭 晩

◎光と影の哀歌(フォト)……………吉田 久

◎和装絢爛(フォト)……………北 好夫

グラビア★榛名リエ・パレード……………藤沢 修

★奢れる女神のポーズ六態……………編集部・編

★アメリカの公刊誌ご紹介……………編集部・編

★吊り鉤(フォト)……………吉田 久

スクリーンに躍るロマンと幻想……………藤見 郁

海の復讐鬼(東桂史・絵)……………潮 一樹

背骨のまがった娘たち(中川彩子・絵)……………岐阜須三夫

多ア坊のこと(山田彬弘・絵)……………北野 竜一

体当たりM論(江淵晃夫・絵)……………水尾 究

アラビアの城⑨(鬼頭晩・絵)……………北園透一郎

マゾヒズム画廊……………フェニクス商会

手だれの死者(東桂史・絵)……………かびや・かずひこ

きつねづら(小日向一夢・絵)……………井村 錠

奢れる女神への祈り②……………森本 愛造

サド裁判・茶番劇の俳優たち……………安東 泉

ゴルドンの記憶⑫(江淵晃夫・絵)……………阿麻 哲郎

39年(二月号) 二五〇円

◎オフセットページ……………文・藤見 郁

フォト・ストーリー……………文・藤見 郁

竹の家……………写真・フェニクス

面集・女の館……………落合 竜二

ふたりのお遊戯……………西ドイツ・フェニクス

きもの線乱……………カメラ・北 好夫

★グラビアページ★……………カメラ・吉田 久

五百羅漢……………北米・フェニクス

戦慄のまなざし……………北米・フェニクス

脚立と貴婦人……………北米・フェニクス

奇怪な散歩……………西ドイツ・フェニクス

縄と鎖のコメディ……………北米・フェニクス

四作家競作同一題小説……………松山 省一

花と悪銭……………風松英之介

井村 錠

京 剣児

ご隠居のたのしみ(落合竜二・絵)……………八巻 令

犬の楽園(秋吉密・絵)……………下須 畜男

瀬沼めぐみの受難(山田彬弘・絵)……………春川 光彦

アラビアの城・8……………北園透一郎

奢れる神への祈り・1……………森本 愛造

わが愛のうめきとさげし……………新村満美子

私本・男色大鑑・2……………かびや・かずひこ

ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)……………阿麻 哲郎

39年(一月号) 二五〇円

フォト・ストーリー……………文・藤見 郁

魔女狩りパターソン……………フェニクス商会

絵物語・女戦士のレポート……………文・祖父江 新

ミノーの貞操……………文・井村 錠

◎装身具とふたりの美女(フォト)……………絵・中川 彩子

◎アメリカSM絵物語……………西ドイツ・フェニクス

★グラビア・かわい妖怪①②……………北米・フェニクス

★グラビア・海外SMフォトご紹介……………北米・フェニクス

鬼神丸秘帖(小日向一夢・絵)……………潮 一樹

アラビアの城⑦(鬼頭晩・絵)……………北園透一郎

男色大鑑・若道のほりたかく(東桂史・絵)……………かびや・かずひこ

おつかれさま(山田彬弘・絵)……………春川 光彦

■女宇宙士訓練室……………絵・鬼頭 晩

空想と狂想のあいだ……………森下 高茂

地図にない村(都築峰子・絵)……………九十九 郎

体当たりマゾヒズム論・19……………水尾 究

「馬狂いの女たち」における……………森本 愛造

マゾヒズム描写……………阿麻 哲郎

ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)……………阿麻 哲郎

38年(十二月号) 二五〇円

フォト・ストーリー……………文・吉永百合夫

深夜のひとりごと……………カメラ・吉田 久

絵物語・破魔姫受難……………文・島本 春雄

◎フォト・白い炎……………絵・山田 彬弘

◎アメリカSM絵物語……………吉田 久

グラビア・まるい嵌口具……………フェニクス商会

カーテンのある風景……………吉田 久

海外SMフォト……………フェニクス商会

★特集・マゾヒズム画廊……………フェニクス商会

崖の上の墓標(豊田みのる・絵)……………佐藤達四郎

ピンアップだけはやめて……………ADグラナムール

FとMの行き戻り(落合竜二・絵)……………光谷東穂

奇妙な実験(都築峰子・絵)……………八巻 令

アラビアの城・6(鬼頭晩・絵)……………北園透一郎

私のSM論……………重森 東

体当たりマゾヒズム論・15……………水尾 究

恋人たちのオリ(山田彬弘・絵)……………九十九 郎

ほも紳士録⑫……………かびや・かずひこ

体当たりマゾヒズム論……………エダ・キリコ

灰色の夜(カット・エダキリコ)……………水尾 究

現代マゾヒズム文化時評……………森下 高茂

ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)……………阿麻 哲郎

38年(十一月号) 二五〇円

- 犬吠岬の太陽……………文・エダ・キリコ
 カメラ・吉田 久
 ○暗い画廊……………吉田 久
 ○フォト作品集……………金井 行雄
 ○アメリカSM絵物語……………フェニクス商会
 ウィナスの誕生……………森下 高茂
 ねむれぬ夜の追憶(鬼頭暁・絵) 北海 道雄
 悪党半九郎(小日向一夢・絵)……………潮 一樹
 ★グラビア・時代妖美術集……………中島 喜美
 ★グラビア・海外の公刊誌より……………フェニクス商会
 ★グラビア・犬吠岬……………吉田 久
 ビルマの首枷族……………春川 光彦
 ある女装者の夜々……………かびや・かずひこ
 ■画集・黒い皮の響宴……………鬼頭 暁
 大都会の夜の底で(江淵晃夫・絵) 九十九 郎
 青雲崩れるとき(古正英生・絵) 井村 錠
 現代マゾヒズム文化時評(19)……………森下 高茂
 体当たりマゾヒズム論(14)……………水尾 究
 ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)……………阿麻 哲郎
 ○絵物語・鉾山町の女たち……………文・宗方 八郎
 絵・都築 峰子
 ○絵物語・武士道無残……………文・島本 春雄
 絵・東 桂史

38年(十月号) 二五〇円

- 絵物語 龍宮城の反乱……………文・祖父江 新
 絵・落合 竜二
 ○時代 妖説朽木女忍伝……………文・島本 春雄
 絵・鬼頭 暁
 ○サト 異端の城……………文・三鬼 俊
 絵・中川 彩子
 ○戦国 本能寺炎上……………文・井村 錠
 絵・小日向一夢
 ○絵物語 本能寺炎上……………文・井村 錠
 絵・小日向一夢
 ★グラビア・ミッドナイト……………吉田 久
 ★グラビア・海外の公刊誌より……………フェニクス商会
 ○雁形城落城図……………小日向一夢
 ○時代妖美術集……………中島 喜美
 伊賀の闇の葉(古正英生・絵)……………佐藤達四郎
 裏切り(秋吉樹・絵)……………九十九 郎
 ミッドナイト撮影記……………エダ・キリコ
 蛇縛女切支丹(東桂史・絵)……………義川 源
 アラビアの城・5 毒ぐもに巻かれる弓子……………北園透一郎
 (鬼頭暁・絵)……………郷 保夫
 お転婆学園奇襲作戦……………郷 保夫
 ゴルドンの記憶⑥(江淵晃夫・絵)……………阿麻 哲郎
 現代マゾヒズム文化時評(18)……………森下 高茂
 体当たりマゾヒズム論(13)……………水尾 究
 寄稿作品ご紹介と短評……………編集部・編
 裏窓叢書名場面集……………編集部・編

38年(九月号) 二五〇円

- 裏窓草紙「絵本いろはうた」……………うた・宮古志満夫
 絵・小日向一夢
 ○絵物語 海賊虹姫伝奇……………文・島本 春雄
 絵・春日 章
 ○絵物語 変幻白だぬき……………文・井村 錠
 絵・古正 英生
 ○アメリカ絵物語 男爵夫人の拷問博物館……………文・井村 錠
 ★グラビア・洋画のSMシーン・スチル集……………吉田 久
 ★グラビア・海辺のうた……………吉田 久
 夜のなげき……………吉田 久
 ★グラビア・海外SM絵物語・ご紹介……………潮 一樹
 小笹姫受難(小日向一夢・絵)……………潮 一樹
 特製マゾキン(山田彬弘・絵)……………嶋岡 晨
 魔女アクリリカ(中川彩子・絵)……………春川光彦
 ■鬼頭暁画集「美しきけもの檻」……………北園透一郎
 絵物語 必殺のデリンジャー……………落合竜二
 体当たりマゾヒズム論・14……………水尾 究
 現代マゾヒズム文化時評・18……………森下高茂
 穴(あな)……………(都築峰子・絵)……………石山省一
 お化粧される弓子(鬼頭暁・絵)……………北園透一郎
 ★裏窓叢書名場面集(中島喜美ほか絵画集……………中島 喜美
 ゴルドンの記憶⑥(江淵晃夫・絵)……………阿麻哲郎

38年(八月号) 二五〇円

- 絵物語 東京——神戸十六時間……………文・祖父江 新
 絵・山田 彬弘
 ○絵物語 めめ肌女郎……………文・矢桐 重八
 絵・春日 章
 ○絵物語 密林の美女……………文・黒部 恭治
 絵・中川 彩子
 ○西部 紅のライフル……………文・祖父江 新
 絵・落合 竜二
 ★グラビア・砂の上の船……………吉田 久
 漁師宿にて……………吉田 久
 ★グラビア・海外サド写真特選集……………井村 錠
 残念なり猿飛佐助(小日向一夢・絵)……………井村 錠
 妖異水底に沈む(秋吉樹・絵)……………信夫 澄夫
 お仕置きにぬれる弓子(鬼頭暁・絵)……………北園透一郎
 お転婆学園秘密作戦(江淵晃夫・絵)……………郷 保夫
 女の争い(都築峰子・絵)……………五所 章
 フィギュア・トレーニング……………春川 光彦
 切支丹散華(東桂史・絵)……………北村 仙也
 現代マゾヒズム文化時評(17)……………森下 高茂
 体当たりマゾヒズム論(13)……………水尾 究
 ゴルドンの記憶⑤(江淵晃夫・絵)……………阿麻 哲郎

38年(七月号) 二五〇円

- 絵物語 無明怨念記……………文・矢桐 重八
 絵・春日 章
 鞭のニコラス……………文・春川 光彦
 絵・中川 彩子
 続・アラビアの城……………文・北園透一郎
 泣きじゃくる弓子……………文・鬼頭 暁
 グラビア・静かな山林の午後……………吉田 久
 ・闇に光る……………吉田 久
 ○絵画集・サデイスチンの微笑……………江淵 晃夫
 ・切支丹女牢……………喜多 玲子
 ・南北戦争以前……………鬼頭 暁
 ・海外SM絵物語……………フェニクス商会
 切腹殉教記(小日向一夢・絵)……………黒部 恭治
 しのび遠い刺青情話(都築峰子・絵)……………北野 竜一
 くだばれっ淑女学院……………郷 保夫
 西鶴におけるマゾヒズム……………安東 泉
 血染め白百合(古正英生・絵)……………佐藤達四郎
 体当たりマゾヒズム論(12)……………水尾 究
 墓場からの命令(山田彬弘・絵)……………祖父江 新
 わが愛の渴望(落合竜二・絵)……………白木ゆりこ
 虐げられた女たち(東桂史・絵)……………野方 伸
 ゴルドンの記憶④(江淵晃夫・絵)……………阿麻哲郎

38年(六月号) 1100E

●鬼頭晩時代妖美画集	鬼頭 晩
●中島喜美時代妖美画集	中島 喜美
グラビア・幽囚の部屋	吉田 久
●絵画集	
・続・美しき海賊船 フェニクス商会	
・西部の女	落合 竜二
七つの大罪(中川彩子・絵)	九十九 十郎
続・異端の終末	芦田 奈貴
おどろ記珍化論	左 次郎
「ロリータ」における	
ニンフェッティズム	安東 泉
「夜と霧」	黒田 史朗
放浪と自己恋着の画家	かびや・かずひこ
月光の道で	河村 童八
鬼婦長	丸亀 恵子
夜の妖蝶	立原 道夫
ボスには乳房がある	五所 章
体当たりマゾヒズム論(11)	水尾 究
さんざれ不動(小日向一夢・絵)	庄内 裕治
復讐黒髪秘聞(中島喜美・絵)	黒部 恭治
忍法「乳影」(鬼頭晩・絵)	島本 春雄
妄執侍(古正英生・絵)	潮 一樹
霧姫変化(鬼頭晩・絵)	佐藤 達四郎
ゴルドンの記憶③(江淵晃夫・絵)	阿麻 哲郎

38年(五月号) 1100E

絵物語・白蠟闇若衆	文・島本 春雄
・流刑星の美女たち	文・豊田 一狼
江淵晃夫耽美画集	江淵 晃夫
グラビア・夢幻のへや	藤沢 修
・美しき海賊船	フェニクス
・くさりと美少女	商会・提供
海外SM画傑作選	井村 錠
茅女物語	潮 一樹
会津の女兵	飯田 豊吉
その夜	阿麻 哲郎
ゴルドンの記憶(2)	村山 省
椎名夫人の足	かびや・かずひこ
ほも紳士録	森下 高茂
現代マゾヒズム文化時評(14)	水尾 究
体当たりM論(10)	北野 竜一
私の愛した女優	北園 透一郎
アラビアの城	祖父江 新
孤島の復讐鬼	葦田 奈貴
異端の終末	豊中 夢夫
背後の脅迫者	郷 保夫
ばんざいッお転婆学園	

38年(四月号) 1100E

絵物語・冥府海賊伝奇	文・島本 春雄
・マドリーナと黄金の靴	文・松平 荘司
・白狐のお新いろざんげ	絵・中川 彩子
小日向一夢妖美画個展	絵・東 桂史
グラビア・黒猫といふ	小日向一夢
・黒いタイツ	毛 卓三
・鏡と女	猪島 昌也
・パウリーネ夫人のピクニック	藤沢 修
海外SM画傑作選	フェニクス
ゴルドンの記録①	ス商会・提供
処刑の囚	阿麻 哲郎
無分別な夜	三鬼 俊
大阪非情地帯	海老沢 七郎
内外ミュージックホール・スナップ集	豊中 夢夫
「虹川画伯のアトリエ」演出ウラ話	北野 竜一
文芸評論「醜いコメディ」について	安東 泉
ほも紳士録④	かびや・かずひこ
A子の話	南 ゆり
体当たりマゾヒズム論⑨	水尾 究
舞踏会の贅	春川 光彦
のぞきの大スケ捕物帖	飯田 豊吉

38年(三月号) 1100E

絵物語・スリーベット号	文・豊田 一狼
不時着す	絵・鬼頭 晩
・銭姫党伝奇	文・島本 春雄
・白蜂の女忍者	文・矢桐 重八
グラビア・けんらんたる商品	絵・小日向一夢
・黒猫を捕えた①②	藤沢 修
海外SMフォト・画傑作選	泰西出版資料
醜いコメディ	淡路 周五
大利根無頼	祖父江 新
和装恋慕	宮古志 満夫
ほも紳士録(3)	かびや・かずひこ
体当たりマゾヒズム論(8)	水尾 究
猫	村山 省
犬とギブスと搾衣	春川 光彦
不死身の女	海老沢 七郎
「蠍たち」にみる	安東 泉
あるサティスチンのタイプ	鬼頭 晩
鬼頭晩時代妖美画展	左 次郎
うら八捕物帳	飯田 豊吉
虹川画伯のアトリエ	
「裏窓」湯河原へ行く	編集部

38年(二月号) 1100E

絵物語・姫法師呪文	文・島本 春雄
・変化黒髪小僧	文・京 剣児
秋吉樹妖美画個展	絵・古正 英生
グラビア・黒い皮のスタジオ	秋吉 樹
・美の凝結	金井 行雄
・美の模像	金井 行雄
海外SM画傑作展	泰西出版
島原の子守唄	春川 光彦
金色の胸毛	立原 道夫
郡氏の応接室	豊中 夢夫
代用品じゃつまらない	九十九 十郎
フォルリ城の花嫁	三鬼 俊
おれの名はタニエル	祖父江 新
愛の戦慄と充実	白木 ゆりこ
体当たりマゾヒズム論(7)	水尾 究
ほも紳士録(2)	かびや・かずひこ
新・森栄利論	間野 嶺
新・安岡章太郎論	安東 泉
女因お蓮の死	小田 桐 爽
浪人夢想日記	市原 砂夫
カブー家の第三夫人	加木 れい子